

横光利一

文學讀本

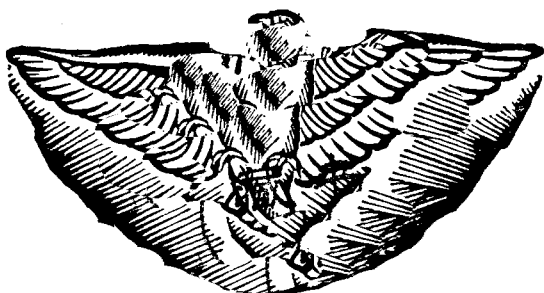
春夏の巻



一 利 光 横

# 本 讀 學 文

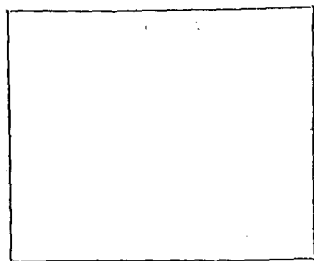
卷 の 夏 春



一利光横  
本讀學文

卷の夏春

部千三刷初



昭和十二年三月十五日印刷  
昭和十二年三月二十日發行

定價一圓五十錢

著作者 横光利一

編纂者 石塚友二

刊行者 長谷川巳之吉  
東京市麹町區三番町一

刊行所 第一書房  
東京市麹町區三番町一

振替東京六四二二三  
電話九段三三四四

牛込區山吹町三ノ一九八  
印刷者 萩原芳雄

目次 春夏の巻

春

三月

木瓜	一五
春は馬車に乗つて	一九
ナポレオンと田蟲	二〇
没落への進軍	二四
あきらめ	二五
産院	二六
産婦	三〇

丹毒	三二
幸福への意志	三四
青春	三八
急所	四二
作家と家	四三
運	四六
南無阿彌陀佛	四七
鍍金	四八
無常の風	四九
鍵	五二
捨子	五四
信仰	五五
詩と小説	五六
思想と現實	五八

婦人の言葉	五九
上海よりコロンボまで	六二
コロンボより巴里	八一

## 四月

酔モロコ	九九
孫	一〇三
父	一〇四
死線	一一二
花の部屋	一一四
花園の掟	一一六
マアガレット	一一八
受難者	一二一
高い精神	一二五

賞 驗	一二七
童心の科學者	一三〇
百貨店點描	一三三
作品が出来るまで	一三七
まづ長さを	一三七
最初の五枚	一三八
年齢の關係	一三八
經 路	一三九
變 化	一三九
春の眺め	一四〇
轉換について	一四一
煙草を吸ふ文學と吸はない文學	一四三
子路の質問	一四六
巴里の四月	一四九



# 五月

泉	一六一
染衣	一六二
惹菫	一六五
街の底	一六八
判事の心理	一七四
悪魔	一七八
チエホフ「記念祭」の演出	一八一
天才と象徴について	一八六
沈黙と饒舌	一八九
父の愛情	一九一
鬼	一九二
武藏山	一九五

# 夏

文人墓地・・・・・・・・・・・・・一九七  
ヴンセンヌの森・・・・・・・・・・・・・二〇六

# 六月

赤い色・・・・・・・・・・・・・二一九  
幸福の撤布・・・・・・・・・・・・・二二九  
ガルタンの太陽・・・・・・・・・・・・・二三一  
川・・・・・・・・・・・・・二三三  
竹の花・・・・・・・・・・・・・二三七  
鯉・・・・・・・・・・・・・二三八

水晶	二二九
花嫁	二四一
蟲	二四二
黄色な街	二四三
手の上で鳴る父	二四六
債鬼	二四七
鮭が薔薇のやうに	二五〇
洞の中	二五一
うどんげの花	二五三
大罷業の中	二五四
トリスツアン・ツアラアのサロン	二六三
頭ならびに腹	二六五

# 七月

草の中	二七三
露	二七九
色褪せた風景	二八五
蛾になつた妻	二八六
火の點いた煙草	二八八
泥坊と乞食	二九一
批評	二九二
母と娘	二九四
芭蕉の生家	二九九
控へ目な感想(一)	三〇二
地 點	三〇二
能動精神	三〇二
自虐の難	三〇三
虚 無	三〇三

虚無主義者	三〇四
意識の穴	三〇四
敗北	三〇四
氣取り	三〇四
見えざる敵	三〇五
埋没された主観	三〇五
控へ目な感想(二)	三〇六
行き詰りについて	三〇六
邪道について	三〇六
泥沼について	三〇七
退屈について	三〇七
沈滞について	三〇八
心の住家	三〇九
労働の記録	三一

# 八月

博士	蠅	日盛	機械	博士	野原	ジイドの轉向	眞理の短縮	灘にゐたころ	琵琶湖	ハンガリア行	イタリ行	スミス行
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
三五二	三三九	三四八	三五〇	三五二	三一六	三一九	三二〇	三二一	三二三	三二九	三三二	三三六

ステッキ	三五六
榛名	三五七
湖畔の女(一)	三五八
湖畔の女(二)	三五九
湖畔の女(三)	三六〇
花魁草の花の中	三六一
死地を求める心理	三六二
花 花	三六四
休息の静けさ	三六五
流水の感想	三六六
名 勝	三六八
言 葉	三七〇
旅	三七一
戦争と平和	三七三

富ノ澤麟太郎	三七六
下界のこと	三七九
震災	三八〇
捨子(二)	三八二
漫畫	三八二
批評と鑑賞	三八三
嘉村磯多氏のこと	三八八
巴里から歸つて(一)	三八九
巴里から歸つて(二)	三九二
巴里から歸つて(三)	三九四
あとがき	三九九



横光利一

文學讀本

春夏の巻



# 三月

## 木瓜

晴れた日、彼は山を越して姉のおりかの家へ行つた。赤子のことを訊くのは羞しかつたので黙つて、時々氣附かれぬやうに姉の帯の下を見た。しかし彼の眼では分らなかつた。ただなんとなく姉は生々としてゐた。姉は間もなく裏の山へ行かうと云ひ出した。二人は山へ來ると蘚の上へ足を投げ出して坐つた。眞下に湖が見えた。錆色の帆が一點水平線の上にちつとしてゐた。深い下の谷間からは木を挽く音が聞えて來た。

「ボケを一本ひいて歸ろ。もう直き花が咲くえ。」

姉はさう云ひながら立つて雌松林の方へ登つていつた。彼はひとり長々と仰向きに寝て空を見てゐた。長い間姉と二人でかう云ふ所へ來てかう云ふ風に遊んだことはなかつた。彼は姉がたいへん好きであつた。

「こいつ、堅いわア。」と姉の聲が頭の上でした。

彼が振り返つて姉の方を見ると、姉は丁度躑躅をひき抜かうとしてゐる兩脇を下腹にあてがつて後へ反り返らうとしてゐる所であつた。彼は姉の大切な腹の子供に氣がついて跳ね起きた。

「よせ。」

彼は駈けていつて姉を押しのけると自分でその躑躅をひいてみた。根はなかなか堅かつた。

「堅いやろ。二人かかるとええわ。」

さう姉は云つてまた躑躅に手をかけようとした。

「行かう行かう。」

彼が姉の手を持つてもとの所へ戻らうとすると、姉は未練さうに後を見返りながら、

「もうぢき綺麗な花が咲くえ。あれ餅躑躅え、葉がねばねばするわ。ああしんど。」と云つた。彼は姉の下腹を窺つた。躑躅をひくときの姉の様子を浮かべると、脇で子供が潰されてゐさうに思へてならなかつた。しかし、それをどうして吟味してよいものか分らなかつた。姉に訊いてみることも羞しくて出来ないし、これは困つたことになつたと彼は思つた。

姉は足もとの處でまた一本小さな躑躅を見つけると、

「末つちやん、これなら引けるえ。」と云つてその方へ寄りかけた。

「うるさう。」と彼は叱つた。

「たまに來たのに一本ぐらゐ引いて歸らにやもつたない。」

「もう歸るんだ。」

「もう歸るん？」姉は彼の顔を見ると、

「なアんぢや。」と云つて笑ひ出した。

彼は黙つてさきになつて歩いた。實際彼には姉の腹のことがひどく氣になり出した。もうそれ以上遊ぶ氣がしなくなつた。

「お腹おなすかないか。」

と彼は不意に姉に訊いてみた。空すいてゐると答へれば、幾分か肱で腹の子供を押し潰したそれだけ空すいてゐるのだとそんな他愛もない考へから訊いたのだが、姉は空すかないと答へた。しかし、無論その答へだけでは承知が出來なかつた。

「俺は一寸腹が痛いんだ。姉さん處の晝の肴が悪かつたんぢやないかね。姉さんは？」と彼は訊ねた。

姉は顔を擧めるやうにして彼を見ながら、

「私わたしどうもないえ、ひどう痛むの？」と訊き返した。

姉も痛むと云へばまた姉の腹部くわぶの子供に觸ふりが出來てゐるにちがひないと云ふ考へから、彼はさう云ふかけひきで訊いたのだつた。所が姉の腹は痛んでゐなかつた。少し安心が出來かけ

るとまた親の腹部の感覺と子供の感覺とは全く別物だと氣がついた。親の腹が痛くなくとも子の身體は痛んでゐるかも知らなかつた。もう醫者に姉の腹を見せるより仕方がないと彼は思つた。しかし、見せるとすればどうしても一度は彼の心配の仕方を姉に話さなければならなかつた。これが彼には羞しくて厄介だつた。正式な結婚で姉は人妻になつてゐるとは云へ、とにかくいづれ不行儀な結果から子供が産れて來たにちがひない以上、それをお互に感じ合ふ瞬間が彼にはいやであつた。彼が黙つてゐるので姉も黙つてゐた。

「まだ痛い？」と姉は暫くして訊いた。

「もういいんだ。」

「下りたら藥屋があるわ。小寺さんなら近いし、痛い？」

小寺さんとは近くの醫者の名であつた。

「もう癒つたよ。」と彼は云ふと、

「それでも診てもらうておく方がいいやないの。」と、今度は姉から彼に醫者をすすめ出した。彼は聞かぬ振りをしてどしどし山を下つた。

## 春は馬車に乗つて

彼と妻とは、もう萎れた一對の莖のやうに、日々黙つて並んでゐた。しかし、今は二人は完全に死の準備をして了つた。もう何事が起らうとも恐がるものはなくなつた。さうして、彼の暗く落ちついた家の中では、山から運ばれて來る水甕の水が、いつも靜まつた心のやうに清らかに満ちてゐた。

彼の妻の眠つてゐる朝は、朝毎に、彼は海面から頭を擡げる新しい陸地の上を素足で歩いた。前夜滿潮に打ち上げられた海草は冷たく彼の足にからまりついた。時には、風に吹かれたやうにさ迷ひ出て來た海邊の童兒が、生々しい緑の海苔に迂りながら岩角を攀上つてゐた。

海面にはだんだん白帆が増していつた。海際の白い道が日増しに賑やかになつて來た。或る日、彼の所へ、知人から思はぬスキトピーの花束が岬を廻つて届けられた。

長らく寒風にさびれ續けた彼の家の中に、初めて早春が匂やかに訪れて來たのである。

彼は花粉にまみれた手で花束を捧げるやうに持ちながら、妻の部屋へ遣入つていつた。

「たうとう、春がやつて来た。」

「まア、綺麗だわね。」と妻は云ふと、微笑みながら瘦せ衰へた手を花の方へ差し出した。

「これは實に綺麗ぢやないか。」

「どこから来たの。」

「この花は馬車に乗つて、海の岸を眞つ先に春を撒き撒きやつて来たのさ。」

妻は彼から花束を受けると兩手で胸いつばいに抱きしめた。さうして、彼女はその明るい花束の中へ蒼ざめた顔を埋めると、恍惚として眼を閉じた。

\* 「春は馬車に乗つて」大正十五年（全集九）

## ナポレオンと田蟲

その日のナポレオンの奇怪な哄笑に驚いたネー將軍の感覺は正當であつた。ナポレオンの腹の上では、徑五寸の田蟲たむしが地圖のやうに猖獗しょうけつを極めてゐた。この事實を知つてゐたものは貞淑



無二な彼の前皇后ジョセフィヌただ一人であつた。

彼の肉體にこの植物の繁茂し始めた歴史の最初は、彼の雄圖を確證した伊太利征伐のロヂの戦の時である。彼の眼前で彼の率ゐた一兵卒が、彈丸に撃ち抜かれて顛倒した。彼はその銃を拾ひ上げると、先頭を切つて敵陣の中へ突入した。彼に續いて一隊の兵卒は動き出した。それに續いて一大隊が、一聯隊が、さうして敵軍は崩れ出した。ナポレオンの燦然たる榮光はその時から始まつた。だが、彼の生涯を通じて、アングロサクソンのやうに彼を苦しめた田蟲もまた、同時にそのときの一兵卒の銃から肉體へ移つて來た。

ナポレオンの田蟲は頑癬の一種であつた。それは總ゆる皮膚病の中で、最も頑強な痒さを與へて輪郭的に擴がる性質をもつてゐた。搔けば花瓣を踏みにじつたやうな汁が出た。乾けば素焼のやうな素朴な白色を現はした。だが、その表面に一度爪が當つたときは、この濕疹性の白癬は全圖を擴げて猛然と活動を開始した。

或る日、ナポレオンは侍醫を密かに呼ぶと、古い太鼓の皮のやうに光澤の消えた腹を出した。侍醫は彼の腹の傍へ、恭謙な禿頭を近寄せて咳いた。

「Trichophycia, Eczema, Marginatum.」

彼は頭を傾け變へるとポナバルトに云つた。

「閣下、これは東洋の墨をお用ひにならなければなりません。」

この時から、ナポレオンの腹の上には、東洋の墨が田蟲の輪郭に従つて、黒々と大きな地圖を描き出した。しかし、ナポレオンの田蟲は西班牙とはちがつてゐた。彼の爪が勃々たる雄圖をもつて彼の腹を引つ掻き廻せば廻すほど、田蟲はますます横に分裂した。ナポレオンの腹の上で、東洋の墨はますますその版圖を擴張した。恰もそれは、ナポレオンの軍馬が破竹のごとくオーストリアの領土を侵蝕して行く地圖の姿に相似してゐた。——この時からナポレオンの奇怪な哄笑は深夜の部屋の中で人知れず始められた。

彼の田蟲の活動はナポレオンの全身を戰慄させた。その活動の最高潮は常に深夜に定つてゐた。彼の肉體が毛布の中で自身の湿度のために膨脹する。彼の田蟲は分裂する。彼の爪は痒さに従つて活動する。すると、ますます活動するのは田蟲であつた。ナポレオンの爪は彼の強烈な意志のままに暴力を振つて對抗した。しかし、田蟲には意志がなかつた。ナポレオンの爪に猛烈な征服慾があればあるほど、田蟲の戰鬥力は紫色を呈して強まつた。全世界を震撼させたナポレオンの一個の意志は、全力を舉げて、一枚の紙のごとき田蟲と共に格闘した。しかし、最後にのた打ちながら征服しなければならなかつたものは、ナポレオン・ボナパルトであつた。彼は高價な寢臺の彫刻に腹を當てて、打ちひしがれた獅子のやうに腹這ひながら奇怪な哄笑を洩らすのだ。

「余はナポレオン・ボナパルトだ。余は何者をも恐れぬぞ。余はナポレオン・ボナパルトだ。」

かうしてボナパルトの知られざる夜はいつも長く明けていつた。その翌日になると彼の政務の執行力は論理のままに異常な果斷を猛々しく現はすのが常であつた。それは丁度、彼の猛烈な活力が昨夜の頑癪に復讐してゐるかのやうであつた。

さうして彼は伊太利を征服し、西班牙を牽制し、エチプトへ突入し、オーストリアとデンマルクとスエーデンとを侵略してフランスの皇帝の位についた。

この間、彼のこの異常な果斷のために戦死したフランスの壯丁は、百七十萬人を數へられた。國內には戩兵が充滿した。禱りの聲が各戸かくこの入口から聞えて來た。行人の喪章は到る處に見受けられた。しかし、ナポレオンは、まだ密かにロシアを遠征する機會を狙つてやめなかつた。

この蓋世不拔がいせいかくばつの一代の英雄は、またナポレオンの腹の田蟲をいつまでも癒す暇を與へなかつた。さうして彼の田蟲は彼の腹へ癩がんのやうにますます深刻に根を張つていつた。この腹に田蟲を繁茂させながら、なほ且つヨーロッパの天地を攪亂させてゐるナポレオンの姿を見てゐると、それは丁度、彼の腹の上の奇怪な田蟲が、黙々としてヨーロッパの天地を攪亂してゐるかのやうであつた。

## 没落への進軍

ナポレオンの腹の上では、今や田蟲の版圖は徑六寸を越して擴がつてゐた。その圭角をなくした圓やかな地圖の輪郭は、長閑な雲のやうに微妙な線を張つて歪んでゐた。侵略された内部の皮膚は乾燥した白い細粉を全面に漲らせ、荒された茫々たる沙漠のやうな色の中で、縞かに貧しい細毛がところどころ昔の激烈な争ひを物語りながら枯れかかつて生えてゐた。だが、その版圖の前線一圓に互つては數千萬の田蟲の列が紫色の塹壕を築いてゐた。塹壕の中には膿を浮かべた分泌物が溜つてゐた。そこで田蟲の群團は、鞭毛を振りながら、雜然と縦横に重なり合ひ、各々横に分裂しつゝ二倍の群團となつて、脂の漲つた細毛の森林の中を食ひ破つていつた。

フリードランドの平原では、朝日が昇ると、ナポレオンの主力の大軍がニエメン河を横斷してロシアの陣營へ向つていつた。しかし、今や彼らは連戰連勝の榮光の頂點で、盡く彼らの過去の殺戮した血色のために氣が狂つてゐた。

ナポレオンは河岸の丘の上からそれらの軍兵を眺めてゐた。騎兵と歩兵と砲兵と、服色燦然

たる數十萬の狂人の大軍が林の中から、三色の雲となつて層々と進軍した。砲車の轍の連続は響を立てた河原のやうであつた。朝日に輝いた劍銃の波頭は空中に虹を撒いた。栗毛の馬の平原は狂人を載せてうねりながら、黒い地平線を造つて、潮のやうに没落へと溢れていつた。

\* 「ナゴレオンと田蟲」

## あきらめ

考へごとをしてゐるときは働いてゐるときだといふ。私は四六時ちゆう何をするともなくぼんやりとしてゐる。何か考へついたと思つてはつとすると、かつて心に受けた痛みをあれこれとほじくり返してみただけである。たまたに動いた人間の心を感じても考へればもうどれが正確なものだつたのか分らない。どこかで私の云つたといふことを書いてあつたり話したりしてゐたのをふと思つて見ても、ほとんど八分はまことしやかな嘘ばかりだ。嘆かうと思つても

まづあきらめが出て来るだけで、このあきらめといふ奴こそ先祖傳來の曲者だと、俄に身構へて見ようとするのだが、もういつの間にかやらおのれの正體もなくなつて、ああさうだ、もうすぐ子供が生れるのだとまた思ふ。あきらめとはなんのことやら、誤謬偏見さへそのまま正しいと見なければならぬふてぶてしい覺悟を云ふのであらう。

＊「日記」昭和九年（全集九）

## 産院

漆喰しつこの中から出て來た鐵管が湯氣を立てながらまた土の中へささり込んでゐる。まだ暫もつけない櫻の枝が私の窓の上から這ひ降りてゐるが、櫻の時節になればこの病室は定めし眺めは良いことであらうと思ふ。しかし、この部屋から二十間と離れてゐない分曉室で、いま妻が陣痛に悩んでゐるといふのに、私はひとり櫻の時機を考へてゐるのだからをかしなものだ。緊張はすぬぶんさきから、人に負けずにしてゐるつもりではゐるのだが、緊張などといふものは、考へればつまりはかういふ風な考への連続なのに變りはなからう。私は革張りのベンチにもた

れたり、スチームの暖かさを験べたり、首を龜のやうに延ばしてみても首筋に觸れる空氣の濁りを吟味してみたりしながら、もう今となれば生れるものが男でも女でもかまはない、早く出来てしまつてくれれば良いとただそればかりを願つてゐる。二人づれらしい看護婦が廊下の外を話しながら通る。一人が「ポール・ヴァレレイつて、それなによ。」といふ。「ヴァレレイよ。ポール・ヴァレレイ。」とうるささうに他の一人が返事をしてゐる。日本の國の看護婦の口に至までのぼるやうにヴァレレイもなつたのかと驚きながらまた耳を澄してゐると、隣室からどこかの産婦の呻うなき聲が「ああ痛い痛い痛い。早く殺して。どうしてこんなに痛い目にあはせるのかしら。ああ、痛い痛い。お母アさん。」とさう云つたかと思ふと、ぶつりと黙つてしまふ。私の妻も今ごろはあんなに苦しんでゐるのかもしれないと思ふ。それにもかかはらず、肉體が恢復すればまたたちまちに母にならうとする本能のために心を奪はれてしまふ婦人の理性は、理性の一番の敵になる忘却といふ本能を同時にこの上もなく尊重しなければならなくなるのだから、奇怪なことこれに優るものはさうあるまい。私の知人達の多くのものは私に、産院ほど朗らかな空氣の満ちてゐるところはそんなにはあるまいといふ感想で一致してゐたのを思ひ出す。さういへば、廊下の移動に漂つてゐるあわただしい空氣はこれは喜びの前のしどろもどろの浮き足なのであらう。多分今の私のやうに何をして良いのか分らない多くの良人たちは、及落の判明する試験をこの年になつてもまだ何者かのためにさせられてゐるびくびくした

胸のとどろきを感じてひそかに苦笑を禁ずることが出来ないであらう。

いつまで待つても報せがないので待ちくたびれ、ひとり廊下をあららちら歩いてゐると、ふと擦れ違つた看護婦が、「もう赤ちやん御覧になりました。」と訊ねる。それではもうとつて出来てゐたのかとがつかりしながら、「いつです？」と訊き返すと、「あら、ぢや、まだ御存知なかつたんですか。男のお子さんですの。」と云つてばたばたと駈けていつて姿を消す。やがて、共同室の産婦の満ち竝んでゐる中から赤兒を一人抱いて来て、「このお子さんですよ。お可愛らしいでせう。一日こちらへお預りすることになつてゐますから、明日お返ししますわ。」といふ。ときどき産院では他人の子供と間違へられて生涯どちらも知らずにゐることがあるとの話が聞かされてあつたから、これが自分にさづけられた子供かと心を澄ませて眼、耳、口、顎、と見詰めていつてから、どうも有り難うと禮を云つて子供と別れる。すぐその足で分娩室へ還入つていくと、妻は穩かな笑顔で子供を見たかと訊ねる。見たと私が答へると彼女はまた自分は苦しくて見てゐないのだが、どんな子供かと訊き返す。他人と父親とがも早や生れた子供を知つてゐるのに、その子を産んだ本人の母親だけがまだ自分の子供を知らないとは、自然の手ぬかりがここ一ヶ所にあるのを忘れてはならぬと云ひたくなる。しかし、やがてはここに大きな自然の企みが潛んでゐたのに氣附くときもあるかもしれない。なにせよ迂濶に全く喜ばされてしまつてゐるときのことなのだ。浮ぶ感想も所詮間違ひだらけのことにちがひなから



う。分娩室を出ようとしてカーテンを拂ひ除けると、誰もゐない部屋の中で産婦が一人時機が迫つてゐるらしく、土色をして苦しみ悶えながらごろごろしてゐる。出口が見つからぬので仕方なく一寸お辭儀をしてその傍を通らうとすると、怨恨まんこんを含んだ眼でちつと私を睨みつけながら身體からだを左右にくねらせてゐるだけである。主人でも傍にゐたならどんなに私に怒るであらうと思つたが、通りついででもう引つ込みがつかないので、そのまま部屋を通りぬけて外へ出る。突きあたりの看護婦室をついでにふと覗いてみると私の鼻さきの電流を通じたガラスの箱の中に、口だけかすかに動かしてゐる赤子がひとり水族館の魚のやうに寝かせてある。私はふと赤子の目方を聞くのを忘れてゐたのに氣づいたが、向ふが教へてくれなかつたところをみると定めし小さい目方の子だつたにちがひないと思はれたので、それではこのままもう訊くまいと決心して部屋へ戻る。するとまた隣室から産婦の絶え入るやうな呻き聲が壁を響かせて一語一語聞えて来る。あの産婦の良人はこの産院で一番罪が深いと思ふ。一人の人間をあのやうに苦しませてまだ幸運を得ようとする男性の欲望こそ人間の祕密の極みであらう。考へれば罪は同じ男性の私にもあるのだが、かういふときには男の感傷といふものは、なかなか馬鹿に出来難い立派なものだと思ふ。女性を苦しめることは、つまりなんといつても子供を苦しめることにな

るのだから、恐れを感じる男の方が筋道すぢみちが通つてゐるのである。

「ああ痛い痛いお母アさん。どうしてこんなに痛いんだろ。お母アさん、お母アさんよう。」

かういふ聲を聞かされる母親もまた、女性としては一番重大なことを感じさせられてゐるにちがひあるまい。(實は後で聞いたのであるが、この隣室の産婦は子供を産み落してから最早や二ヶ月にもなつてゐるのに退院も出來ず、今は關節炎となつて生命危篤とのことであつた。)

\* 「日記」

## 産婦

私の妻が分娩室から病室へ戻つてから二日目に隣室の産婦は死んでしまつた。私の部屋の附添看護婦は看護婦室から聞いて來たらしく、産婦の死の原因は主人の不品行からだと言つて、彼を憎むことしきりである。すると、その日の午後に来た新來の産婦がもうその後を受けて隣室へ這入つて來る。分娩室も同様に次から次へと間斷なく塞りつづけであるが、さうしてみれば私の子供もいつの間にかもう古參になつてしまつてゐるのだから、時間の経過の分るのはこれが一番明瞭なところと云つても良いであらう。午前のうちには廣い廊下一面、街から診察室へ押し

寄せて来る妊婦の群れで溢れてゐる。彼女たちは、自分の番の廻つてくるまで、靜かにぢつと鈍い眠たげな眼ざしをして廊下の西側に並んでゐるのだが、分曉を終へたばかりの産婦が一人でも寢臺に乗せられて彼女たちの前を運ばれて通ると、一樣に太い溜息の波が口から口へと嵐のやうに流れ渡つていくのである。私の妻もかつてはこの一人となつてその中にぢつと混つてゐたこともあつたのであるが、彼女に云はせると、そのときのことを思へば、地獄の底にながれて並んでゐるやうで身の毛がぞつと立ち上つて來るとのことである。この感情だけは男性はいかに苦心しようとも分らないのだ。分らないと云へば、もう一つ妻の言葉で私には呑み込みかねたことがあつた。妻は子供に乳を飲ませてゐながら、「なんとなくかうしてゐると悲しくなつてくる。」と云ふので、どうしてそんなに悲しいのかと訊ねると、自分のお母さんがかうして自分に乳を飲ませ、また自分がかうして同じやうに子供に乳を飲ませて、それがまた代々と同じことをくり返していつて、いつ果てるとも人間はきりが無いのだと思ふと、なんとも云へなくもの悲しくなつてくると云ふのである。この感情は理解こそ出来るが實感としてはたうてい男性には感じる事が出来ない深さを持つてゐる。出来ることなら私も一度子供を産んでみたいと思ふ。さうでなくして、この人間としてのもつとも本質的な深さを感じることなくして書いた小説や批評など、どこか必ず嘘なところがあつてにちがひあるまい。私の男の知人でもう子供を産む可能性の全くなくなつてしまつた健康な若者があるが、彼がひとりで街を歩

いてゐるのをふと見ると、なんとなく私には滑稽な感じがしてならぬときがある。神さまはなんのためにその人物を生かしてゐるのか、こつそり従<sup>つ</sup>いて歩いてみたくなるやうなをかしさであるが、本人に意見を訊いてみてもあれで案外に何も知らずに歩いてゐるのであらう。私がつし神であつたなら彼には極刑を興へるにちがひないところなのに、彼がのどかに生涯を終へるであらうと思はれる善良な紳士であるのを考へると、神は私などの思ひ及ばぬはるかに寛大な慈悲心を持つてゐる萬能であると思ふより仕方がない。しかし、彼から云はせると最早や子供を生めない男の悲しみなど、お前たちに分る道理がないと云ふかもしれぬ。知ると知らざるとはいつたいどこが違ふのであらう。

「日記」

## 丹毒

母子ともに安全にわが家へ歸つて来る。産としては看護婦たちも驚いたほど軽すぎたので、こんなことで、長い間の準備も全くすんでしまつたのかと思ふと残つた力のやり場がなくなつ

てなんとなく不安な氣持がしたほどであつたが、歸つて三日目から急に子供は乳を飲まなくな  
り、高熱で眼を瞑つぱつたまま泣き聲一つ出さなくなつた。醫者に見せると排尿器の口の赤く脹はれ  
てゐるのを見て、丹毒だと云ふ。子供の丹毒は百パーセント助かりませんから、よほどのこれ  
は重態ですと云ひ足した。なるほど丹毒ならもう赤ん坊は助かる見込みもなからうと思ふ。そ  
れからの家の中はたいへんな騒ぎになつてしまつた。二日ほど前に義父ちちから毎夜悪い夢見がつ  
づくが何かそちらに變つたことがないかと訊ねて來たのに、一向無事といふ返事を出しておい  
たすぐ後でこれである。いよいよそれでは赤子は助からないと思ふ方へますます想像力が加は  
つていくばかりである。私の知人の阿佐ヶ谷のピノチオの主人が長男が六つになつたとき次男  
が生れ、次男の産湯を湧かしてゐるとき長男がその湯の上へひつくり返つて焼け死んでしまつ  
たことがあつた。それをふと思ひ出すと、私の悲しさが幾らか薄らぐのを私は感じた。ひどい  
悲劇といふものはどこかで誰かを必ず救つてゐるものなのだ。全く現金なことにも私は自分の  
子供の死を中心にして今ごろピノチオの主人の悲しさが胸の中をのた打ち廻つて來た。私の長  
男も丁度六つだが彼は泣いてゐる母親を障子のガラス越しにきよんとして眺めてゐる。私は  
彼が風をひいてゐることを良いことにして、今日からしばらく彼を蒲團の中へ寝かせたまま動  
かさないやうにしようと思つてそのやうにすぐ命じた。

\* 「日記」

## 幸福への意志

次の日の朝は、朝から氷雨が降つてゐる。そのせむかまたは本當にもう赤子の見込みがなくなつたのか、顔色は土色に變つてゐて唇のあたりを突いてみても動きもしない。私は巴里から歸つて來た皮膚科の醫師の宮田氏を思ひ出し、同じ死なすものなら氏に一度みてもらつてからあきらめようと思ひ、すぐ氏の勤務してゐる聖路加病院へ自動車を駆けさせた。出るときにもうこの子もこれで見納めになるかもしれないと思つたので、顔をしばらく眺めてゐてから外へ出た。外は身體が慄へるほどひどく寒い。築地まで四五十分でやうやく病院へ着くとさういふ名の先生はゐないといふことであつた。それで袖へ押し込んで來た宮田氏からの年賀狀をもう一度出して住所を見ると、なるほど、聖路加ではなくて下落合の聖母病院である。私はこんな間違ひを今ごろするやうならこれはもう赤子も助からぬ證據だと思つた。自動車を拾ひ直してそれからまた下落合まで行つたが、今度は運轉手が道を間違へて上落合へ出てしまつた。さうして二三度交番で道を訊ねて病院を捜しあてると、宮田氏は今までゐたのだが自宅へお歸りにな

つたばかりだとのことであつた。自宅へまた待たせてあつた自動車で馳せつけると、今しがたまでゐたのだが近所の友人の畫家のところへ出かけて留守だとのことである。しかし、待つてゐられるやうならず女中を呼びにやるからとのことゆゑ待つてゐると、丁度いままで家にゐたのだが今さき芝の傳研の方へ研究に出かけたばかりだとの報せであつた。それでは傳研へすぐこれから行きたいから電話をかけておいて戴きたいと頼み、すぐまた同じ自動車で雨の中を芝の方へ走らせた。芝の傳研の事務所へ駆けつけると、そんな方はこちらにはいらつしやらないが、病院の方ではないかと云ふので庭を挟んで建つてゐる病院の方へ行くと、そんな方はこちらにはゐないとまた同じ返事である。それで事務所へまた戻つて来て、やはり向ふにもゐないと云ふ故こちらにちがひないからもう一度調べてくれるやう頼むと、病院を間違へてゐるのではないかと云つてもう相手にしようとしな。しかし、たしかに傳研だと聞いて來ただからと頑強に云ひ張ると、ここは傳研ではありません。北里研究所だと云ふ。これには私もなんとも云ふことが出來ず、鄭重に詫<sup>わ</sup>びを云つてまた待たせてあつた自動車に乗つた。運転手も間違へてばかりゐるため困惑の仕方もう私と同じになつて來てゐるので、私も怒るよりむしろ氣の毒になつて見捨ててしまふわけにもいかず、そのままやうやく傳研へまで乗りつけた。ところが、傳研の事務所でもまたそんな先生はここには見えませんと云ふ。いや、それは確かだ。家を出るときもう電話をかけて貰つてあるのだからと云ひ張つても、やはりゐないと云ひつづ

ける。私は今度こそは間違ひはなからうと思つたがさきのこともあるのでここは傳研かと訊ねるとさうだと云ふ。それならもう一度調へてみてくれるやう、八號の研究室だと重ねて頼むと、電話も八號へかけてくれたが、その人はゐるにはゐるがまだ本人は來てゐないとの答へだつた。私は宮田氏の來るのを待つのは當然だと思つたが、急にまた赤子のことが氣になつて來たので部屋だけ見つけておいて一度家へ子供を見に歸らうと思ひ、それではすぐまた來るからそのやうに宮田氏に傳へておいてくれるやうと頼んで、家へ同じ車で戻つて來た。家へ着いたときはいつのまにかもう夕暮になつてゐる。赤子は思つたほど悪くなつてもゐずに血色もいくらか朝よりはよくなつてゐるので、これならもう二三日は保ち直すにちがひないと思はれて俄に元氣になると、私は羽織をもう一枚着込んですぐまた傳研へ引き返した。すると、宮田氏はゐたにはゐたが、ここへは研究に來てゐるだけなので診察の用意がないとのことである。しかし、今から自宅まで道具をとりに戻つてゐては遅くなるから先づそれより容態を見ようといふので、また朝からの同じ車で一緒に私たちは家の方へ駈け始めた。

宮田氏の言によると一應はともかく病院へ入院させるが良からうとのことなので、氏の紹介でK病院へその夜行くことになつた。病院で病室を決めて貰ひ、また家へ歸つて來て、支度をして待つてゐる妻と赤子をつけてまた病院へ行く。ところが、病室は皮膚科のため赤子を寢せ



るベッドがない。傍のベンチで産後まだ自由に動けない妻と附添二人で寝るわけにもいかず、それでは子供用のベッドを買ひに行かうと思つて新宿までタクシーを拾ふ。しかし、もうよほど遅くなつてゐると見えて店はおよそ寝てしまつてゐてどこにも寢臺は見あたらない。すると一軒の荒物屋がまだ起きてゐたのでそこへよるとふと柳行李やなぎかばんが眼についた。これを蓋と身と二つに割つて伏せ、その上へ子供の蒲團を敷けば一夜の寢臺なら間に合ふだらうと考へつく。行李を買つてから病院の方へタクシーを走らせると、この夜更けてからの彌次喜多のやうな活動がわれながらをかしくなる。しかし、今日一日の手違ひや間違ひだらけの連続を考へると、こちらも周章あわててゐたのは勿論のことであるが、それ以外に向うにも悪い意志が多分に立ち働いてゐたと思へてならない。向うとはそれは何ものだか私にも分らぬが、不幸なときには、何かしら眼に見えない悪魔のやうなものを向うに廻して絶えず自分が立ち廻りをしてゐるやうな氣になるものだ。だが、なんと云つてもこんなひどい間違ひのつづきの中でも今日子供が死ななかつたといふことは、醫師の方でなんと云はうとも、逆さかにこれは子供が助かるといふ報せだと強く思はれて來た、疲勞もそのため次第になくなつて來るのを感じた。全く何が幸ひなことになるか分らない。よくよく考へてみれば多分何事もかういふやうなものなのであらう。この幸せな感想を得たことをもつてひとまづこの日記をここで終らうと思ふ。

## 青春

このときから、山中老人は老いの最後の線を突き破つてだんだん青春に返つて來た。老人は書や繪を描くことをやめてしまふと、別家の全部に裏書きさせて羅紗の買ひ占めをやり出した。この老人の相場は向う意氣が強く、先を見すぎるのが缺點であつたが、ほどよく見えが利いたときには誰よりも大きく當るのが特長であつた。このときの羅紗の買ひ占めも充分に先の動きを調べてかかつた上に、別家親戚の中には取引所關係の者が多かつたから、時機に應じてどつと切り放したときには、一舉に老人は二百萬圓を手に入れた。老人はその金で直ちにむかしやつた綿糸問屋をまた始めた。別家たちは老人の突如としたこの活動に驚きあきれた。よると觸ると老人を靜かにさせようと皆は相談したが、とにかく没落した本家を獨力で盛り返した老人の壯觀さには、一同なんとも云ふことが出来なかつた。さうなると別家たちは、すでにあり餘つた各自の財力を融通させて老人の問屋を支へることに共同の助力を惜まなかつた。老人の店は今は膨脹するばかりとなつて來た。資本は各別家を鎖として擴がり、販賣網の完備に應じて

品物を生産する工場まで買ひとつた老人は、新しい資本の運轉の方法をさらに次から次へと考へ續けていくのだつた。

しかし、老人はふとある日、自分の周圍を見廻したとき、自分の店を渡すべき人物のゐないのに気がついた。むかしは自分の使用した番頭たちに暖簾を別けて別家をさせ、それらの成長發展する様子を見るのが楽しみであつたが、今は前とはよほど時代が變つてゐた。どこの老舗も番頭に別家をさせて店を出させると、厩大な周圍の資本に壓迫されて却つて潰滅を早からしめるやうな有様になつて來てゐるので、番頭丁稚をかかへたのは良いがいつまでも獨立出來ぬ彼らの生活を背負ひ込まねばならぬ。それなら別家をさせずに一生家で番頭として置いては、だんだん増加して來る知識あるサラリーマンに抑へられて、店の一隅で生涯縮んでゐなければならぬといふ、丁稚番頭のなんとも手のつけられぬ物悲しい運命を老人は知つたのである。ところが、これは見渡したどこの別家たちも共通の新しい惱みの種であつた。

前には老人の番頭であつた別家たちへの惱みの種は、隆々と競ひ榮えて行く途上の彼らの争ひであつたが、それが三十年後の今は全く反對になつて來てゐるのだつた。別家たちはより集まつて何か話をするときには、各自の店にゐる丁稚番頭の行末の始末に話が落ちた。しかし、各自も前には番頭であつたから、自分たちの番頭の楽しみも思ひやられて憐れに感じはするもの、さうかと云つてさてこの新しい問題には誰も良い智慧が浮ばなかつた。そこであるとき

皆は老人に番頭たちの始末の方法を訊ねてみた。

「さあ、それだけは、わたしより皆さんの方が良く知つてなさるやう、何しろわたしは新参の青年だから、皆さんに一つ、わたしから伺ひたいとかねがね思うてゐたのですよ。」

とかう老人は巧みな返事をして皆を笑はせた。一同の者は老人の眞意には誰も氣附いたものはなかつたが、それでも笑ひとまつた後からそれぞれ老人の言葉にひやりと痛烈なもののあるのを感じて黙るのであつた。すると、その中の一人のものが云つた。

「われわれは御主人から皆それぞれ、一人前にさせてもらつた癖に、今度はわれわれの番になつて、自分の番頭の始末に困るといふのは、叱られても仕様がありませんな。」

なるほど、老人の云つたのはその事かと一同はツと思ひ直した。

「そんならもう一度われわれは御主人の番頭になつてみるか。」

と自嘲と卑下とを混せて笑ふものもあつた。

「わたしは皆さんの御蔭で、今度新しくまたやる事が出来ましたが、そんなら皆さんは、自分が潰れたときには、どうなさるおつもりぢや。」

と老人は云ひ放つた。この老人の言葉はたしかに強く一同の胸に命中した。けれども、老人は誰にも分らぬ危い言葉を投げつけたそれだけに、その言葉の責任を自分が引き受けねばならぬことをすぐ感じた。しかし、どうしてそれが出来ようか。

老人は今まで世の中の一切の事が分つてゐたと思つてゐたのに、それは大きな間違ひだつたと悟るやうになつて來た。見るもの聞くもの考へれば盡く自分の分らないことばかりのやうに思へて來た。それにつれて彼は自分の死後に莫大な自分の財産が、誰の手に遣入りどうして分配されるかももう考へようとはしなくなつた。

ある日老人は、いままで忘れてゐた者の中で、金錢を與へるべき筋合の人を思ひ浮べて順次にその者の所を訪ねて行かうと計畫した。さうして最初に浮んで來た人は、誰でもない自分の最初の戀人であつた。女はすでに八十にもなつてひどい貧苦の中に暮してゐたが、それでも老人同様まだ健在であるのが分ると、山中老人はいつの何時に迎ひに行くから一度自分と逢つて昔のことを話し合つてもらひたいと手紙に書いた。老婦人からも喜びの返事が來た。山中老人はその日になると五千圓の小切手を懐中に入れ、誰も件をつれずにここにこ上機嫌で出かけていつた。若いころ老人はその婦人と、雪の降りつもつた藏と藏との間の路地で逢つたものであるが、黒襦子の襟から噴き出るやうに露はれた赤い鹿の子の半襟の娘姿が、傘をつぼめようとして思はずばさりと雪で兩手を濡らすところが浮んで來ると、そのころの日の光が今もなほ街に輝いてゐるのが老人には不思議に深い神祕のやうに思はれて、突然、あはあはと譯もなく笑ふのであつた。

## 〇 急 所

いかなるものと雖も、必ず急所を持つものだ。急所を見別け得るものは成功する。私は近頃、銀座のある一流の理髪店へ這入つてみた。どこが田舎の理髪店と違ふかと思つてみると、一流のものは急所を押す。例へば客の濡れた顔を拭き上げて了つてから、指先にタオルを冠せ、小鼻の横の小さな窪みと唇の兩端を鍵盤を打つ指のやうに速かに、軽々と壓へてから「はい。」と云ふ。その急所を叩く手捌きの鮮かさにいたつては流石であつた。急所を打たれると、それが僅かな部分でも、身體の髓まで血が躍る。急所と云つても、それが誰の眼からでも急所と思はれ得る所は、最早やそれは急所ではない。急所とは、窺ひ知れざる所にある。例へば、理髪店の場合に於ては、唇の兩端とか、頭の痒き部分とか。これは藝術の場合に於ても同じである。私は急所を壓へること、最も巧妙な藝術家を、キーランドとルナルとに見出した。チェホフにあつては、まだほかに「ここが急所だ。」と口の中で呟いてゐる所が見えてならない。その點、キーランドやルナルにいたつては、急所を壓へたために汚れた手巾を、何食はぬ顔を

してサッサと捨てて了つてゐる。

\* 「急所について」昭和二年（全集十）

## 作家と家

物の書けないときは、光線を背後に受けると良い。と近頃私は考へ出した、光を前方に眺めては意識が散逸して、ともすれば、「文藝は男子一生の仕事ではない。」などとうつつをぬかずやうになる。多分、二葉亭の書齋は彩光が非藝術的に出来てゐたのに相違ない。

私は佐藤春夫氏の文章を読んで、感ぜ的な要素を殆んど見たことがない。あれは情感的な文章で意識の先端を這ひ廻つてゐる。あの人は恐らく人が幾人ゐようとも意識を散逸さすなと云ふ不恰好な真似はしないだらう。素晴らしく私の強い文章だ。同じ私の強い文章でも志賀直哉氏の私の強さは常に感ぜ的である。飛躍ばかりだ。その點佐藤氏にいたつては、翩翩としたかと思ふと、早くも、「ここで一つ」といふ意識が見える。この意味でも佐藤春夫氏は飽

くまでも構成派で、志賀直哉氏は徹底的に感覺派だ。無論、この場合どちらが優れてゐるかと言つてゐるのではない。谷崎潤一郎氏のもので、まだ私は感覺的な作物を殆んど見たことがない。室生犀星氏には時に感覺的なものを散見するが、様式が氏の感覺を殺して了つていまだに私は氏の輝いたものを眺める機会を失つてゐる。これは多分佐藤春夫氏の様式に氏は封塞されてゐるが故にちがひない。近時室生氏の様式には芥川氏の様式が加味されて來たのを發見する。がとにかく室生氏にはそれ自らの感覺から割り出された独自の様式がないと云ふことは不幸である。優れた家財道具はありながらいまだに借家だと云ふことは、不運を物語る證據である。この作家はいつまで佐藤春夫氏と芥川氏との家の間で攻められてゐるのか私には好箇の注目點だ。しかしながら、家財道具を持ちながら、いつまでもだらしない借家住ひをしてゐる人々の多いことを思ふとき、氏のごとき傑れた作家には一日も早く立派な家を持たしたい。傑れた作家で家のない人には宮地嘉六氏がある。宇野浩二氏の家は古怪極まる。女流作家で家のある作家にはまだ逢はない。どうして女流作家にはいつまでも様式がないのであらうか。これは心理學的な問題である。様式とはその作者の個性の最も特徴である一點が、その時代の最も特徴である一點と合するとき現れるものである。してみれば独自の様式がないと云ふことは、その時代に對してその者が鈍感であつたか、若しくはその者の個性に獨自性がなかつたか、或ひはその者自身が薄弱で他の個性に對して壓倒されてゐるかのどちらかに違ひない。が、そのいつ



れにしても、もしその者が他個よりも別して強烈な個性の所有者であるならば、必ずどこかにその者自らの様式が現れるに違ひないのだ。それがないと云ふことはその者の存在價值さへ疑はれるのは當然なことである。ただ單にこの點から見ても、優れた教導者は必ずその子弟に對して、自分の様式に叛逆させる子弟を造る。自分の中に子弟を入れようと努力する教師はやくざ者にちがひない。夏目漱石の豪かつた第一の原因は子弟の特長を明確に判別した所にある。氏の子弟で氏の作風に似つかはしい作家は一人もない。それは氏が本當の教師であつたからだ。自分の出店を造ると云ふことは自分を殺し子弟を殺す最も最良の方法である。師とは飽くまで子弟のための師でなければならぬ。この意味からしても、師は眼光紙背に徹するの師以外に、師とは殺人機以外の何者でもないのであらう。

様式にはその作者が生れながらにして備へたものと、不斷の努力から生れたものとの二つがあるが、不斷の努力から生れたものは、その作者の聰明さを物語る。そのどちらがより天才の所有者かと云ふ判別は出來難いが、不斷の努力をなし得られるものは自己の缺點についてそれだけ敏感でなければならぬ素質をより多分に持つものであるが故に、天才の量に於ては多分である可き筈である。努力はこの故にでも、努力出來得るものをして天才の價値を與へしめる。

ここまで書いたとき、芥川氏が自殺した。原色が一つ無くなつた感じがする。然も赤だ。佐藤春夫氏が青なら里見弴氏は黄色である。赤、青、黄、この三原色が鼎立して既成文壇を様式

的に安定せしめてゐた感があつたが、今は芥川氏に代るべき赤がない。然もそれは殆んど絶對的にないと云つてもよいであらう。赤のない構成は活動力の衰へることが必然だ。この見方からしても、芥川氏の死は重大な影響を與へるに相違ない。

\* 「作家と家について」昭和三年（全集十）

## 運

われわれの知性では、現實は絶對に飛躍しないと主張する。しかし、われわれの感性は、現實は常に飛躍の連続と感覺する。この絶對に飛躍することなきわれわれの世界と、この不斷に飛躍して止まざるわれわれの世界との二つの間に、われわれには決して姿を見せぬ「差」があるのだ。

それゆゑあらゆるものの「差」とは、絶對にこれまでの本質を持つたためしのない第三の現實の世界である。これを稱してわれわれは、運と云ふ。運とは即ち「差」以外の何物でもない。

\* 「運について」昭和五年（全集十）

## 南無阿彌陀佛

どう云ふ風に文學が進展しなければならぬか、どう云ふ風に自分が伸びていかなければならないか、と云ふことについて確信をもつて云へるものがあるなら、その者は、その確信に等しくやくざな者か、それ自身のやうに劣弱なものか、また甚だ優れたものかのどちらかであらう。われわれはよく甚だ軒昂げんかうに、文學はかくかくであらねばならぬ、と啖呵を切つて反り返るもののあるのを見受けるが、多くはそのものはそれだけの認識程度で反り返つたので、よくよく見ると、誰も彼もが云つて了つたことを威張りながら、安全な顔をして云つてゐるにすぎないのだ。

私は元來この安全と云ふ奴が嫌ひである。私は横車を押すのが好きだ。だが横車と云ふ奴は、押せば押せると思ふときのみ押さなければ車の興味はない。車が横に動き出すと、これは面白くて新鮮で藝術的で華やかで結構だ。

私は前から地味ぢみなものが好きであつた。が、この若さで今頃から地味ではのびた先が知れて

ゐると思ひ出した。たかだか行きついて芭蕉の一步手前ではないか。あの奥には何があるのか。ただ、「南無阿彌陀佛」となるだけだ。

私は先人の教へによく耳を傾ける風習を持つてゐる。が、傾けて了ふと、その相手の心境が分つて了ふ。われわれはその人のごとくやがては死ぬにちがひないと私は思ひながら、よしそれならひとつ逆に歩いて死んでやらうと思ひ出す。多くの人の方向へ歩いて行つては絶えず念佛を稱へてゐるやうで死にたくなるのだから、私はただもう無理に横車を押す方法を考へるのだ。

「控へ目な感想三」昭和五年（全集十）

## 鍍金

眞鍮をメッキにして金になし得ると云ふ法則を、直ちに藝術へ當て嵌めた男がある。この男

は定めし周章者あせの相貌を備へてゐるにちがひない。なぜかと云へば、彼は次のやうなことを吹き廻したからである。「眞鍮をメッキにして金となした藝術であるが故に、その藝術は剥げるであらう。」と。

藝術とメッキ術とを同一に考へてゐる彼は、藝術の上へ金をメッキさせるが良い。

メッキ術と藝術との相違は眞鍮に金をメッキして眞鍮をまで金にすること、金のみを金とすることの相違にある。

金のみを金とすることは何人にも不可能なことではない。だが、眞鍮をまで金にするには藝術家でなければ不可能なことである。常に比喻は得意になればなるほど判げるものである。恰もそれはメッキせる金の如きか。われわれは既にこの比喻をさへ吟味するべき必要を感じる。

## 無常の風

幼い頃、「無常の風が吹いて來ると人が死ぬ。」と母は云つた。それから私は風が吹く度に無常の風ではないかと恐れ出した。私の家からは葬式が長い間出なかつた。それに、近頃にな

つて無常の風が私の中を吹き始めた。まづ、父が吹かれて死んだ。すると、母が死んだ。私は字が讀める頃になると「無常」の風とは「無情」の風にちがひないと思ひ出した。所が無情は「無常」だと分ると、無常とは梵語ブッダで輪廻リンネの意味だと云ふことも知り始めた。すれぱいづれ佛教の迷信的な説話にすぎないと高を括つて納まり出したのもその頃だ。その平安な期間が十年も續いて來た。もう私は無常の風が梵語であらうがなからうが全く恐くはなくなつてゐた。すると、父が急に骨になつた。それから私は母を引きとつて郊外に住まつてゐた。母は隣家の主婦と垣根越しに新しい友情を結び出した。暇さへあれば彼女は額に手をあてて樹の間から故郷の方を眺めてゐた。ある日、母は「アッ。」と云つたまま死んでしまつた。一ヶ月たつた。隣家の主婦はもう垣根の傍に立たなくなつた。すると、彼女の家の人が來て、「母は今朝、アッ」と云ふと鍋を下けたまま死にました。」と云つた。全く私の母と隣家の母とは同じ死しな様をしたのである。それから私はまた無常の風が氣になり出した。確かにある。無常の風に吹きつけられると人の血管が破れるのにちがひないと思つた。私は中學時代から地貌と云ふことに興味を持つてゐた。私は旅行をするといつてもその土地の岩質に眼をつけた。河原を歩いても砂礫の質の相違によつて河の支流の擴がりを感じるのが面白かつた。しかし今は地貌の隆起に心がひかれる。隆起の相違によつて氣流に變化があるのは當然だからである。この氣流と生活と云ふことは餘程親密な相關性を持つてゐる。殊に人間の運命とは特にいちじるしい關係があると私

は思ふやうになつて來た。人間の意志は氣流の爲に屈折する。意志は直線形に進行する性情があるが、途中で方向を變化さすのは氣流の力が多大である。この法則は私の獨斷だとは思はない。アメリカの或る地方では東風こちかが吹くと殺人犯が激増するといふ。フェリオの犯罪學には殺人者が殺人をする際、氣流の溫度の相違によつて忽ち狂人に變化し、殺人が不可能になつて逃亡する實例を上げてある。私の家でも窓の相違で部屋むまの空氣の中に一定の通路が生じ、通路を外れた箇所箇所で碁を打つと後が長く續かずに直ぐ頭が疲れて來る。だが通路の中で碁を打つと客觀性が無くなつて喧嘩碁ばかり打ち始める。その代りに頭がいつまでも續いて行く。家相學では家の東南に桃の木があると淫風いんぷうが吹くと書いてあるが、淫風は風の吹く所には起らない風である。風の吹きまくる所で性慾は起りはしない。それはともかくとして無常の風は日本の地貌ではどのあたりから吹いて來る風かと考へると、もうここから獨斷にならざるを得なくなる。とにかく乾燥した風だ。乾燥した風は窒素ちつきの加減かへんで靈魂が放散し易いものらしい。鹽分を含んだ風の中では人はさう容易たやすく死ぬものではないと見える。それに乾燥した風は太陽のコロナと多大の關係を持つてゐる。コロナがまた太陽の黒點と著しい關係を持つてゐる。私は社會主義の布衍される地域がまたこの風の密度によつて非常に相違して行くものといつも思ふ。この主義は風のやうに地貌の運動作用、特に準平原の輪廻作用を思ふと私は社會主義者にならざるを得なくなる。ボルシェビキの現状を見てゐても伊太利及び日本、英國、獨逸の社會現象を見

てゐてもその作用は地質學の造山運動と異る所がない。私は小説を書く男であるが小説の中で人間の運命を發展さす場合、いつもこの風と光線とが氣にかかる。確かに此の風と光線とは人間の意志と感情の發生及び發展に重大な必然的影響があると思ふ。この風と光線とエヂプト、アッシリア、ペルー、印度、支那の文化の發達とを關聯させて考へて見た場合、誰とてひそかな私のこのあられもない獨斷の樂しみを嗜ひはすまい。

\* 「無常の風」大正十三年（全集十）

## 鍵

ポール・ヴァレリーの妻はヴァレリーに勉強の時間が來ると外から彼の部屋に鍵をかけてしまふと云ふ。これはヴァレリーがかけさせるのか妻がかけるのか、そこがはつきりと私に分らぬが、私にはこの情景がバルザックの無妻の状態と竝んだままに浮び上つて來て面白い。鍵と



いふものの祕密な存在について、一番通じてゐるのは恐らくフランスに於てはヴァレリーにちがひないであらう。それを鍵を外からかけられて一定の時間を明確に己れのものと感じようとする意識の計量の仕方——それは彼自身がいつたい何と闘ふことを意味するのか。そんなことは勿論ヴァレリーは知つてゐるであらう。しかし、鍵を部屋にかけるやいなや、彼の時間はそのまま直ちに空間そのものに變じてしまふといふ意識の變化の仕方については、ここではそれがヴァレリーであるが故に私は考へたくなるのである。鍵と意識——もし鍵が意識の流動となんらの關聯のないものなら、鍵が鍵である理由のもつとも祕密となる意識の區劃を、ヴァレリーだつてことさらに鍵までかけて行はないであらう。すなはち、この世をあの世にするこの工夫を、——私は今強ひて鍵に關する語呂ことばをもてあそんでゐるのではない。鍵は鍵といふ言葉それ自身ですでに、存在と意識の關聯の祕密をヴァレリーに見破られてゐることを、彼のその行爲によつて私達は一層明瞭に知り得ることが出来るといひたいためであるが、しかし、それより、そんなにまで奇怪な性格を持つ鍵を、彼は彼の思想とは凡そ似合はしからぬ異性に常にあづけてあるといふことが、最後の私の興味である。ただそれは彼女が彼の妻であるが故にといふ理由のもとに、彼は鍵を彼女にあづけたのであらう。だが、それがそれほど單純になされたものなら、それはそれだけでも私には面白い。しかし、もしそれがさうでなくして鍵に關するあらゆる暗示を知り盡しての後に彼がその行爲を行つてゐるのなら、彼の妻はいつたいなん

の役目をしてゐるのであらうか。愛とはあの世のものだと云つたのは、彼なのだ。バルザックの「知られざる傑作」の秘密はここにもある。ヴァレリイとバルザックの認識の頂點は、人間の最高の頭腦が常に一致してゐるやうに、ここでもまた自らその一致の好例を示してゐる。

\* 「鍵について」昭和六年（全集十）

## 捨子

春なれば見よ彼の波は群れ來る赤子  
磯に額づく祈願の女立ちて望めば  
朗々と群れ寄る波の波頭

\* 大正七年（全集十）

## 信仰

私たちがもし何かを書く場合に何を書いたつて誰かがもうすでに云つてしまつてゐることばかりだと思つてみると、何を書いたつて鬱々としてばかりよりゐられない。そんなら書く楽しみなんか有り得ようとは思へない。誰かが優れたことを云つてゐるとき私たちは感心をする。しかし、よく考へてみるとそれもどつかで誰かが考へて云つてしまつたことのやうに思はれて、そんなことに氣がついたりする自分に、顔を赧らめることがあるが、ときどきは葛西善藏のやうに「南無、信仰なくてはかなふまじ。」と云ふのが一番正しいやうにも思はれる。もうただ常に作者は何よりも信仰だと思ふと助かつて来るのだが、なかなかさうは思ふ壺へ信仰なんか落ち込んで来てくれるものではない。しかし、作物といふものは今まで自分が考へてゐたやうに、失敗したとか成功したとかいふほどの確つかりしたものではなく、初めからそれは失敗ばかりをしてゐる一つの新しい現實だと思ふやうになつて來た。つまり作品には成功とか失敗とかいふ種類はないのだ。つまりなければつまらないで、そんなにもつまらない役目をどこかで

必ずその作物は果してゐるのである。

\* 「詩と小説」昭和六年（全集十）

## 詩と小説

ポール・ヴァレリーの『ダビンチ方法論序説』を讀んで、お前はかう云ふ頭を知らぬかとヴァレリーに云はれてから、凡そ二年になる。しかし、もう良い。あれはああいふ一人の男だと漸くこの頃思へるやうになつた。それにしても二年の間ヴァレリーは私を神出鬼没な方法をもつて惱ました。その前にはマルクスであつた。彼は凡そ私の文學的半生を虐めに虐めた。私の十九のときから、三十一まで、十二年間マルクスは私の頭から放れたことがなかつた。それが漸く放れたと思ふとヴァレリーだ。この頃の私の楽しみは良い詩を讀むことだが、なかなか良い詩は見つからない。一つの良い詩を見つけるのには百のつまりらぬ詩にぶつつかる。しかし、

詩といふものはそれが詩であるから良いといふのではない。その詩に潜んでゐる長いそれまでの生活の匂ひが良いのである。優れた詩人といはれてゐる人々の詩集を私は多く読んで来てみたが、それらの優れた詩人の詩集の中で、この詩はと思はれて巻を置いて暫く楽しみに顔をほてらしてゐられるのは、たまに一つあるかなしだ。他は皆自身の汚なさを歌つてゐるばかりで、この汚なさがあるためにこのたつた一つの美しさが出たのであらうと思はれるほどに美しさは稀である。そこへいくとヴァレリイは心の汚なさも美しさも狙はない。彼の恐るべき資質は心の美しさと汚なさを計る秤を狙ふのだ。つまり彼は法則の権化である。かういふ人物はわれわれには一時は手も足も出ない鬼人と等しく見えるものだが、なに、別にそんなに思はなくとも良いのである。それはさういふ一人の人物だと思ふところに、そこから小説が始まるのだ。詩と小説との相違はそこにある。だから小説家といふものは、藝術家であるよりはない方がよい。偉大なものは必ず俗化すると云つたアンドレ・ジイドの喝破は、ここからも一度考へてみなければならぬと思ふ。

## 思想と現實

私たちにとつてマルクスの恐るべきは、マルクスそれ自身ではない。マルクスを圍む凡俗が恐るべき標的なのだ。思想とは凡俗の頭腦に食ひ込んで彼らを殺してゐる惡をいふのだ。私たちは思想と闘つて來たのか現實と闘つて來たのであらうか。考へれば同じく現實も思想も現實には相違ないであらうが、それでも思想は現實そのものとは異つた新しい現實である。作家、殊に近來の作家の困難は、思想と現實とのこの不可解な實物の混合が、自身の頭のどの部分に向つて攻めたてて來てゐるかを見究めることにあつた。

\* 「詩と小説」

## 婦人の言葉

私は婦人の書いたものを見たり、婦人の話したりしてゐるところを見たりするのが好きな方である。たいていの婦人は羞かしがつて自分の思つたことをそのまま云つたり書いたりしないのが、また私には面白い。嘘を云ひたくもないのに、筆の都合でどうしても嘘になつてしまつたり、言葉の前後の關係で嘘を云はなければならなくなつたり、どうせ嘘より云へないのだからと、しやしやと嘘を云つて本當のことを云つたと同じ顔をしてみたり、さうかと思ふと、あんまり本當のことを云ひすぎたから少うし嘘で誤魔化さなければやりきれないと思つたりしながら、あきらめてしまつてゐる顔がなんとなく面白い。男でもさうであるが、嘘をついた人の後の顔が、どことなく一層眞面目くさつたり、照れてまごまごしながらなほまた新しい嘘を云つて誤魔化したりしてゐる顔に興味がある。私は人が嘘を云つたり書いたりするのをあまり嫌はない方である。よく人があの女は嘘をついたとか、あの男は嘘つきだとか云つて憤慨してゐるのを見るが、私はどうもそれと調子を合せて怒る氣にはなれない。どうせ人は嘘より云へ

ないものだと思ひあきらめてゐるからではない。人は出来る限りは正直にならねばならぬと思つてゐる方であるが、それでも嘘をついてしまつてほつと安心してゐる平和な顔や心には、なかなか捨てられないものがあると思ふ。私は人の行爲よりも意志や情意を一段と高きにおくものであるが、人の行ひがそのまますべて言葉や意志と一致して現れていくものだとは、どうしても思へないのである。

オットウ・イーエスベルセンといふ言語學者のいふには、男女の學生に向つてある短い一定の時間内に、出来る限り多くの違つた單語を書き連ねてみよといふ試みをしてみたところが、女性の方が、多くを書いたが、言葉は皆オリジナリテイがなくて他人のよく平常に使ふ平凡な言葉ばかりを書き連ねたといふ。それに較べて男子は鋭く新しい平面を造らうとする角度をもつた言葉を選んで書いたといつてゐるところを見ても、女性は男性よりも他人の一度通つた常識に住んで、安全にゐたいと思ふ心が盛んなのであらう。言葉を選択して用ひる場合女性のやうに平凡な類型的な言葉をそのまま使ふといふことは、それだけ女性が嘘をつくことを嫌ふからだと思はれる一方に、またそれだけ嘘を常識といふ安全瓣の下に隠してしまひたいと願ふが故だとも思はれる。嘘をつきたくないと思ふ心と、嘘を隠したいと願ふ心は、同じである。しかし、女性のやうに嘘を隠したいと願ふ心の多いのはそれだけどうしても嘘を常に多く含んでゐるからだと思はれ勝ちになることはこれは不便なことにはちがひない。



しかし、男性と女性との性質や機能については、何人と雖も男女兩性に絶對になり得られないといふ理由のもとに、全然人間には確然たる正確さをもつてそれらを比較してみることが赦されてゐないといふ現象は、私には何よりも興味のあることである。私たちが何かを考へたり比較したりしてゐるときに、どんなに公平にならうと努力したところで、それは結局女が見たり考へたりしたことか、もしくは男が考へたり比較したりしたことに過ぎない。同時に一人のものが兩方の感覺の中に這入つて知覺を働かせるなどといふことは、それはただ想像してみる以外に出来ることではない。想像といふのは、つまり「それはそんなものであらう。」と思ふ心にすぎない。ところが、萬事男女の間では、どちらがなんといはうとも、およそ「そんなものであらう。」と思ふ心によつて何事も決定せられていくのである。運命もしたがつて、「そんなものであらう。」と思ふあやふやな男女の心のために、びしびし僭越至極に首切られてすんでいく。だがこれ以外にはわれわれの男女の運命は昔からどうしやうもなかつたのだ。それ故に想像力の貧しいものは、他人に不幸を與へておびただしい害惡を世間に流しながら、知らぬ顔ですまして來た。

私たちは男女の間に横たはつてゐるその比較を赦されないとはいふ不思議なもののためにいつも泣いたり笑つたり、また嘘だとか本當だとかを探り合つたり疑つたり、どれほど徒勞な努力をさせられ續けて來たかもしれなかつた。——この男女の間にあるもの、それはただ何の形も

ない、内に嘘をいくらでも含め得られる言葉といふものだけよりないのだが、その重大な言葉について、いつも人の用ひて来た安全な言葉ばかりを選択するといふ女性の特別な機能は、いつたい女性の優れた機能を示してゐるのだらうか、それとも男子より劣つた機能を示してゐるのであらうか。勿論、これは私にもいづれとも判断することは出来ないが、この間の男女の秘密を考へるためには、なんとなくこの現象は油断のならぬ何事かを物思はせげに隠してゐるかのやうに思はれる。全く、安全な言葉ばかりを云つてゐる婦人を見ると、私はいつもその婦人が嘘つきなのか、正直者なのか正體がはつきりしなくなるばかりか、この婦人は嘘だとか、本當だとかそんなぐづぐづしたことなんか考へたこととてない強者つはもののやうに見えて来て、自然にぼんやりと遠望してゐるより仕様のなくなることが多くある。

\* 「婦人の言葉」昭和七年（全集十）

## 上海よりコロソボまで

三月一日。昨日までオーバーを着てゐるものがあつたが、今日は幾らか暑くなつた。入梅ごろだ。印度支那の沖合である。上海シヤンハイ以來、ほとんど日光を見ない。雲もよくこれほどあるものと思ふ。海も大きいと思ふが雲も大きい。来る日も来る日も海ばかりつづく旅行をしてゐる感じが起らない。姿を變へない海上ばかりにゐるものは、冒險なくしては生き甲斐を感じないのだ。揺れない大きな船の乗組員は、小さな船の船員よりも、暈ふふとの事だ。つまりたまにより大揺れに逢はないからである。

歐洲航路のマルセイユまで行く船中生活ほど、この世の樂土はまたとないと、人々はよく口にする。なるほどさうかもしれない。しかし、なんと退屈なことだらう。私は船客や船員達と殆んど友達になつてしまつたが、船の中には何か足りないものがある。私はいろいろ考へてみたが、それは孤獨といふものだ。人間は限りもなく贅澤に出來てゐる。

\* 『文藝春秋』昭和十一年五月號より八月號迄連載したもの。二月十八日東京發、二十日神戸より箱根丸に乗船、二十四日上海、二十八日香港、二十九日香港を出發してゐる。

三月二日。晴天、初めて太陽を見る。印度支那の高い山々が四哩ほど彼方に見える。船中は

夏服に變つた。もうすぐ赤道にかかるとは涼しい。私はまだ間着だ。ある練習艦隊が赤道近くまで来たときに仕官が下士卒に望遠鏡を渡し、どうだ向ふに赤い線が見えるだらう。あれが赤道だからかふと、はい見えます、と答へたと云ふ話がある。水平線までは船から六哩マイルだといふこと。マラッカ海峡の不思議さを、いろいろ聞いたが、早くそこを見たいと思ふ。佐藤次郎の飛び込んだのもそこなら、あのときの船も、この船だ。

シャリアピンの乗つて来た船もこの船である。事務長はシャリアピンからウオッカの上等の残りを貰つたのがまだあるがこれだと云つて一杯ついでくれる。ふと唇にあてると、獣の匂ひがする。

歐洲航路の船客といふものは、どこかの學校へ入學したやうなものだ。二度目の者を、われわれの先輩と呼ぶ。老若貴賤の區別なく一年生は一年生の感動をもつて、先輩の意見に耳を傾ける。ところが先輩諸君の訓戒は、何人も興味を感じるに相違ない話ばかりを選んでいく。一度、これらの話中に巻き込まれたが最後、その警戒はなくなつてしまふ。夫婦の船客だけは自らノック・アウトされていく。筆には書けぬ話といふものは、いかにこの世の中に豊富に存在してゐるか、計り知れぬものだ。

上海に前に行つたのは昭和三年である。この年で八年になるが、前には白系露人が殆んど乞食と賣春婦であつた。それが八年の間に、フランスタウンの一角へ堂々たる街を建設した。それらは總て獨力で妻や子供を賣春婦にして得た金だ。

オリオン星が殆んど眞上まへに来る。この星が眞上まへに来れば、赤道にかかつた標しるしとのこと。明日は三月三日の雛祭だ。オリオンを眞上まへに指す雛祭。日本へ電報を打つてみる。船中は港へ這入らぬ限りどこへでも八十錢均一なり。本日返電あつて無事とのこと。初めて夏服を着る。私は夏服に着替へた最後の船客である。

### 古里の便りは無事と衣更

この箱根丸の機関長は、ときどき新聞で見た上ノ畑純一氏である。この人は郵船全社員の三分の二の支持者のある人。私とは食卓が同じである。俳號を楠窓たなまと云ひ虚子氏の弟子だ。會話は常に機械的だが、聞くうちに機械の面白さと深さを感じる。歐洲へ渡ること二十六回。横濱よりマルセイユまでの航行中の心理の動搖をときどき私に説明してくれる。東京を立つときの送別會攻めの疲勞はシンガポールまで續くと統計が出てゐるさうだ。まだ私の身體も尋常で

はないのだ。

上海からシンガポールまで随分長いと思ふが、この間ほとんど野蠻國である。まだまだこの三倍の長さの未開地がマルセイユまで続くのだと思ふと、戦争の起るのも無理もないと思ふ。誰がこのまま捨てて置く筈があらう。

三月三日。雛祭。洋上句會あり、詠題は雛と衣更こもがへ。私の句は三つ虚子氏の選に入つた。

カムランの島 淺葱なる衣更  
古里の便りは無事と衣更  
衣更はるかには椰子の傾ける

他に四句作つたが、それぞれ他の人の選にだけ入ることが出来た。

桃の芽の更けしを忘る雛祭

總點十七點で二番になる。出席者十五人、俳句は私が一番初年生なので、この日の句會は成績拔群と云ふべきだ。この夜風邪をひく。

\* 同じ船で高濱虚子氏が同様渡佛した。

三月四日。朝八時、シンガポールに着く。一見港の風景は平凡だ。われわれの想像は全く見當外れで、街へ降りる氣もしない。しかし、一度降りるや、熱帯の特徴は急激に官感を襲ふ。花の襲撃、香の交響。文化の錯雜。植物の豊饒。こんな暑い日は近來にないと、シンガポールの住民が云ふ。今日は馬來人の正月で公休日とのこと。土民の衣は新しく、色とりどりだ。あの樹はと問ふと雨の樹といふ。

雨の樹の下には紅の花衣。

あの紅の花はと訊ねると、佛桑華と答へる。

水牛の車入りけり佛桑華

眞紅の花、黄なる花つけたる街路樹の間をジエホール王宮へ向ふ。椰子はここでは日本の松の木だ。椰子には八十種あるといふが、どれも皆違ふ。われわれの内地で眼にする植物といへば、羊齒だけである。焰のごとき花の群團、焰樹といふ驟雨のやうな椰子林あり。

椰子 亂るあたかも雨に似たるかな

回教の寺院へ参り、それより護謨園を見に行く。四十哩の速力で三十分の間、兩側は護謨林ばかりだ。紅葉季らしく、護謨は紅葉。突如として香料の匂ひが林中から吹き襲ふ。

護謨 林を香吹き抜けし士乃道

士乃に着く。奥田氏支配の護謨園（奥田氏とは船中の友なり）椰子と護謨の林の中の一軒家が事務所であつた。ここで休息する。鰐がある。花咲く下で番人がこれを捧切れて突く。

鰐 怒る上には紅の花鬘

椰子酒を飲む。椰子の梢の新芽を切り、そこから流れ出た酒だ。味と色はカルピスに似てゐるが、生温く臭氣が強い。酒を取るため馬來人は猿のやうに大椰子の梢に乗つた。椰子に昇るときには土人は齋戒沐浴することのこと。

士乃の護謨林より引き返し、ジョホール王宮のサルタン墓を見る。印度素馨の花の匂ひが門に匂ふ。梔子の強い匂ひだ。王妃の墓の上には、匂ひの強烈な花ばかり撒いてある。



サルタンの妃きさいの墓に薔薇もあり

シンガポールの市街を通り、郊外の玉川園にて晝食。各國人の服装の中、支那婦人の服装最も美し。季節に變化のないことは文語體のやうに經濟的なことだと今さら思ふ。

花の名は書ききれぬ。シンガポールから花を取り除けば、その倦怠は地獄であらう。内地の渡航者は、ただ花にびつくりして人生の樂園ここにありと思ふらしい。しかし、長い居住者にとつて、花はいつたい何もの代りとなるのか。馬來は流諺地りゅうたつちといふ意味ださうだ。

シンガポールの内地人は、親に勘當されたものか、あるひは失意したものばかりの集合だとのことである。馬來の文化は護謨を中心として進展しつつあることは何人も知つてゐる。しかし、そのために土人の苦痛は奇妙な所から増して來た。自然物の利用から衣食住に心配のなかつた土人に文化が侵入すると、靴、服、帽子等を買はねばならぬ。ところが護謨の値段の下つたこのごろでは、値段の低下に従つて同時に文化をも下げるわけにはいかぬ。しかし生活力の膨脹してゐたときと同様、用ひるものがそのままあつては、たしかに土人は苦痛であらう。物質的な苦痛は精神に影響しない筈はない。ここの土人の最大の理想は、メッカへ参り、最早

や物慾に執着のなくなつたといふ證明書を貰つて來ることである。

衣食住に配慮を要せぬ未開地の土人にとつて、無慾の證明を得ることは、さほど困難なことではない。用はメツカへ參る費用を貯蓄することだ。貯蓄した金銭で無慾の證明を貰ひ、歸つて無慾を終生の誇りとして終る。人生甚だ簡單だ。ところが文化の侵入は、靴と帽子から這入つて來た。メツカへ參つても、靴と帽子は彼らからは放れない。イギリス製の靴一足買ふ金で日本製の靴と帽子と服まで買へる。即ち日本が彼らの物質慾を刺戟し始め、文化を支へてゐるといふ現象になつてゐる。

イギリス政府は、通貨制度を新しく改革したときには、先づ最初に必ず印度にこれを應用して實驗してみるさうだ。未開地の土人に適用してみることは、一番反對が明確に現れるからだ。現今のイギリスに於ける經濟學者の最も優秀な人々は、夫々印度に存在した人たちばかりだといふことである。日本ではこれが滿洲。

夜になつて句會がある。出席者はすべてシガポールにゐる虚子氏の門下ばかり二十人、私も混入する。私の句は十二點入り、第四番目なり。虚子氏は私の句中から次の二句を選せんさる。

水牛の車入りけり佛桑華  
鰐怒る上には紅の花鬘

最高點は上ノ畑楠窓氏、機關長なり。十一時に終る。船までの歸りを『日日新聞』の特派員柳重徳氏が自身自動車を運轉して送つてくれる。柳氏は少し酔つて手もと危険と見えたが感じの良い青年なので、生命を託す氣になつた。月が沖天に昇り、まさに爽涼、椰子の幹高く連なる中を疾驅する。

三月五日。正午、シンガポール出帆。マラッカ海峽に入る。夜の九時より十一時ごろまで佐藤次郎の話がサロンを賑はす。丁度佐藤の飛び込んだ時間だからだ。船長はそのときの苦心を話した。乗客の中にも、そのときの乗客のイギリス人が、今もこの船に一人ゐるとのボーイの話。

後より來たイギリス船は佐藤の死體の浮いてゐるのを見たと言ふ。私は佐藤次郎と語つたこととはないが、資生堂でときどき黙つてゐる氏の横のテーブルに坐り合せて、見てゐた事がある。それも氏の出發幾日前のことだ。ポートの金具二つ（重量十貫）を身體に巻いたと見えて無くなつてゐたとのこと。原因は誰にも分らない。このあたりから後一日の間の海峽を魔の海と

云つて、飛び込む者が一番多いといふ。海面は鏡の如く坦々としてゐる。蒸し暑い。

三月六日。朝、晴天、いよいよ魔の海に入る。全く波無し。折から海豚の群舷側に現る。横轉逆轉、飛び上るもの、振ぢれるもの。次から次へと現れる。中には巨大な鱧の腹もある。

同日午後四時、ペナンに入港す。この地は恐らく船客の何人も、眼中に入れてゐなかつた所であらう。しかし、私にとつては上海、香港、シンガポールと來た土地の中では、最も氣に入つた所である。夕立の後であらう。空氣は清澄で、街は閑雅、靜寂、全市が一つの公園だ。樹木が繁茂し、建築物が優雅であり花の種類がシンガポールに劣らない。まことに雅致掬すべき街だ。名所として殆んどないが、どこを見ても私には名所である。

ペナンの事は、あまり書く氣が起らない。好きな所といふものは、こんなものだ。ここには問題が何もない。作者が自分の家庭内の出來事を小説に書くことは、罰のあたつた事と同様である。

私の着てゐる夏服は、東京で三人より着てゐない。印度のセメントを入れる荒い麻袋で造つ

たものだが、これを見破つたものは、シンガポールの兩替屋の馬來人が最初である。彼は眼を丸くし、指で私の服を掴み、感歎久しうするので、仲間がだんだんよつて來た。誰も彼もびつくり仰天して、ベリー・ナイスと叫ぶ。ところが、ペナンへ來て私たちを案内した馬來人が、突然また叫び聲を發して私の洋服に感歎した。ベリー・ナイス、ベリー・ナイスの連發だ。ところが船中でイギリス人の夫婦が、一組私の後に立ち、私の服を見ながら、おおホームズパンと感心した。服の材料は一圓五十錢で、仕立賃は八圓である。本場のコロμποへ着けば、印度人がなんといふか見ものだ、今から楽しみが一つ増す。

三月七日、晴天。初めて印度洋にかかる。海はもう見飽きてしまつたので、前から見たいと望んでゐた印度洋へさしかかつてなんの感じも起らない。しかし、疲労は漸く恢復して來た。廣田内閣の出現をきく。

ヨーロッパへ行く道順として、アメリカを廻ると、印度洋を通ると、シベリア通過とどちらにしようかと迷つたが、今ここを廻り、良いことをしたと思ふ。

印度洋を廻れば、未開の地から漸次にヨーロッパの文化の頂上へ行くのである。つまり彼らの長い歴史を通じて現代へ現れるやうなものだ。これに増した豊富な實驗は、まづこの世ではあるまい。これがもしヨーロッパ人であるなら、倒逆の歴史を移動することになるから、幸福

はアジアにはどこにもないなどと、云はねばならなくなるのである。すべて實驗といふものは方法が肝要だ。ヨーロッパ人は位置の關係から、何人も方法を誤らなければならぬものに、出来てゐるのだ。この事は、渡航してみて初めて感じる最も重要なことの一つだと思ふ。

ベンガル灣に這入る。本當の魔の海はここ一兩日中の洋上である。人間の心理はここで奇妙になり、飛び込む必要あるものは飛び込んでしまふとの事だ。二葉亭の死んだのもここだ。航海中一番船員の間に喧嘩の起るのもこの事。これを過ぎれば各自まあ無事で何よりだつたと、祝杯を上げるさうだ。

夜中、人の寢靜まつたとき、起きて甲板に出て見る。人影誰もなし。浮雲が船の方向と同方向に同速力で走つてゐる。月光皎々たり、人間が最も單純になるのはこのときだ。大海を二週間餘りも渡つて來ると、海は海に見えなくなつて來るものだ。安全の上もない平坦溫和な地上に見える。

私は何を信賴してこの甲板に立つてゐるのか。ただ足の下でごとごと鳴つてゐる機關の音だけだ。これほど單純なことがあらうか。このとき人は誰だつてそれぞれ哲學者になつてしまふのだ。波、月、雲——私は長谷川の机の隅で、おでんを突ついてゐる人々の顔をもと思ひ出し

た。今これらの友人たちの顔の前へ現れたら、恐らくこんな人もゐたのかとぼんやりすることだらう。歸らうにも行かうにも、丁度今は半ばのところだ。どつちに轉んでも同じものなら、一つこの海へと思ふものは思ふにちがひない。海上の不思議さは地上の不思議さと反対な錯覺に満ちてゐるものだ。海上の理智といふものは、地上の理智を應用して出來てゐる不安定なものにすぎない。後は茫々たる雲のやうな眞實ばかりだ。これに觸れば死ぬ決心など容易なことだ。

洋上ばかりから押し襲つて來てゐる感覺は、纔かに持ち込んで來た荷物みたいな地上の理智といふものを、ときどき批判するものだ。ここでは理智が感覺を批判するのぢやない。さかさまだ。こんな目に毎日出會してをれば、少しは氣狂ひじみて來る。夫人をつれたり友達と來たりしては内地を引き摺つて來てゐるみたいで、私のこの感情はわかるまいと思ふ。

正確だから狂人になるのだ、とニイチエは『この人を見よ』の中で云つてゐる。しかし、私は單純だから狂人になるのだと思ふ。いつたい複雑なものが狂人か、單純なものが狂人か、制動機といふものは、優れた機械ほど幾つもあるものだ。

私は今は、自分の意識を明瞭に意識してゐる。恐らく地上の人々とそんなに變つてはをらぬつもりだが、もしかすると、或ひは酔つぱらひが自分を正確だと思つてゐるのと違はないのかもしれないものではない。しかし、地上で毎日毎日、新聞雜誌で喧嘩してゐる人々のことを思ふと、あれも正氣の沙汰とは思へない。たしかに狂つたところがある。

家を出てみなければ、家に關する批判は正當ぢやない。陸を放れてみなければ、陸上の批判は正當たるを得ない。かうなると海上の心理の批判は、陸にゐるものの方が正當だ。

私はふと、私が今まで考へてもみなかつたことに頭が觸れたが、人々の世界觀といふものは、陸上の世界觀ばかりだつたといふことだ。しかも、人間鬭争の原因は海陸いづれの心理から襲つて來てゐるものか、誰も知らぬのだ。海運國はいつも世界では強大な國に變つてゐる。これは陸上の理智では統整のとれぬ海上の情熱のしからしめたことではなからうか。海と陸とは、人々の眼をくらすやうに、神様がうまい工合に造つてくれてあるのだ。

朝起きると、挨拶を交した船客たちも、だんだん黙つてふくれて來る。



外人の獨身者の男女は、もう無茶苦茶だ。島國根性といふのは、他人のすることが氣にかかつてならぬことだ。

三月八日。晴。連日の暑氣のところへ天ぶらを食べたので、胃が痛む。一日中不快。魔の海なり。

三月九日、今朝は少し胃は良かったが、朝持つて来たコーヒーを一杯飲むと、またすぐいけない。これちや、フランスにも長くはゐられないと思ふ。二三ヶ月して歸るかもしれない。船の左舷と右舷の部屋の暑さは非常な相違があるものだ。私の左舷の暑さは言語道斷だ。夜など眠れたものぢやない。

午後四時、第三回洋上俳句會がある。私は胃痛のため、良い句も出來ず投げた。盧子氏の選に入つた私の句一點。

京に似しペナンは月の眞下にて

私の好きな句は左の句

雨晴れにパンの樹のある夏木立

三月十日、今日の午後二時にコロンボに着く筈。漸く胃は恢復した。魔の海も無事通過だ。紅海の暑さはこれ以上との事だが、もう良い加減にしてもらひたいと思ふ。ヨーロッパへ行くにも、こんな苦勞があるのだ。しかも、まだこの倍の長さを行かねばならぬ。三等の客室を覗きに行かうと思ふが、向うの客に同情してしまつては今は困る。なるだけ極樂にゐるつもりでゐたい。ところが、四等ともいふべきデッキパッセンジャーに印度人五六十名がゐる。これは金を澤山持つてゐる連中ださうだが、デッキで自炊をやり、天幕の下で寝起きをしてゐる。各等羨望の的まはこれだ。

セイロン島が船と共に走つてゐる。間もなくコロンボだ。見たところ印度は九州の端みたいなもの。

午後四時、コロンボ着。

ここまで来ると椰子はもう珍らしくはなくなつた。日本の藪を見てゐるやうなものだ。街に咲いた花々も、シンガポール、ペナンの方がはるかに美しい。象でものつそり歩いてゐるのか

と思へば、それさへ一疋もぬない。雨が降りかかつては上るので、自動車もホロを外したり懸けたりしてゐるばかりだ。スコールでも来てくれれば良いと思ふがそれも來ない。煙草を買ひたいと思つても、ここではびつくりするほど高い。寶石でも一つと店を覗いても、贗物ばかり。街は狭くて貧しく、商人は狡さうで、うるさい。物價が高いと、こんなになるのだらう。關稅といふものは、人間の心理にこれほど影響を及ぼすものであらうか。それなら、英國も考へる筈だ。

しかし、私は美しい光景を見た。空は暗く、樹木の多い街に瓦斯燈が點き始めたとき、突然夢のやうな光が空にはつと煌いた。何とそれは見事な夕映えであらう。御佛のゐる極樂淨土の繪は、まさに嘘ではない。空一面、朱と紫と金色の亂舞だ。樹木も人の肌も、家も屋敷も、光り輝き啞然としてゐるうちに闇が來た。いろいろな所が、地上にはあるものだ。

イギリスのランカシャーが、印度へ自國品を賣りつけるのが目的であつたところへ、日本品が瀧のやうに落ちこんだ。これを稅關が喰ひとめる。土人がこれに反對する。ところが、このごたごたの間に、印度自身の機械が發達して、自國品が急激に膨れて來た。そこで英國の計算が面倒になつて來たのである。誰にも分らぬ新しい問題が、續々發生しつつあるのだ。かうい

ふ場合に、頭の良いといふ事は、なんの役にも立つものぢやない。どこの國も、分らなくなる  
と、

「押しだ。押しの一手で行くより、仕様がなす。」

とかうである。いつたい押しとはなんだらう。私はかういふのを考へるのが、何より面白い。

英國は頭の良さに、今さら苦しんで來たのである。

コロンボでは私の夏服は忽ち見破られた。印度人たちは、ぼそぼそ囁き合つては私の服を見てゐたが、そのうちに、突然一人の男が私の服を握つてみた。そして、やつぱりさうだと他の者に教へたらしい。一同にやにやしなから私を見てゐるうちに、一人の者は何かしきりに私に云つてゐる。多分、それはここぢや、一番悪いものを入れる袋だぞと云ふらしい顔つきだ。けれども、私が歩くと、後からついて來て服に觸つてみるものが、だんだん増して來た。あんな袋が洋服になるなら、何も印度は困りやしない、と云ひたさうだ。私はあるひは爆彈を投げつけながら、歩いてゐたのかもしれない。この私の印度のセメント袋が、立派な洋服になつたのなら、たしかにランカシアも日本の紡績も、問題ぢやなくなるかもしれない。

## コロンボより巴里

三月十一日、正午コロンボ出帆。

このあたり一帯の海の色の美しさは、紺碧色。波の先を削り落したやうに滑かだ。

太陽の眞下のため、風波が起らぬと見える。人心もこれに準じるものらしい。人々の眼の黒く大きいのは、強い光線と闘つて來たからだ、たうとう自然に負けて、今では眼だけがざりと自然の眼のやうになつてゐる。このやうな眼でこそ、色即是空といふやうな虚無的な思想が生れたのであらう。日本は長い間、これを眞似して來たのである。得たものは、無だ。生命を鴻毛の輕きにするのもここからだ、印度人の自然への執着の強さに比して、日本のはなんと變つた獲物であらうか。

三月十二日

季節に變化のない熱帯や、日本の季感季語の通用せぬ外國で、俳句を作る困難と矛盾——こ

れには説が種々あるやうだ。私は俳句には、季感季語がなければ、俳句ではないと思ふ。しかし熱帯へ来て、實相を歪めてまで強ひて季語季感を盛る必要は、今のところあるまい。分らなくなれば、理論といふものは一息ついてほつておく方が、延びる先の面白さがあるものだ。理論を實相に従へるべき期間を知ることが、何事も肝要だ。

三月十三日、晴。

船客たちはそれぞれますます親しくなつてしまつた。科學者あり、軍人あり、領事あり、社長あり、重役あり、官吏あり、經濟學者あり、裁判官あり、これら異つた職業の人物ばかりが、一家團欒して、階級を去り、年齢を忘れ、互に心事を語つて生活する。このやうな美しく、利益ある生活することは、陸上では恐らく不可能なことだらう。なるほど人生の樂園は、歐洲航路の船上にあると云はれるのは、この事だと初めて氣がついた。私はヨーロッパ見學から何物も得ずしても、もう良いと思ふ。

子供たちも子供たちだ。日本人もイギリス人も、フランス人も三つの言葉が互に通じないにも拘らず、それぞれ勝手に何事か饒舌つて、朝から一緒に遊んでゐる。見てゐると、まごまごすることなんか、一度もない。うまい工合に喧嘩もせずして遊ぶものだ。子供の世界にあんな

自然な機構が存在してゐるものなら、いつの日か戦争のないときが来るのかもしれない。

三月十四日、晴。アラビア海の真中。

洋上句會第四回があつた。俳句はだんだん下手まづくなつて來た。定石ぢやうせきを覺えると下手まづくなるさうだ。昨日二千米の海中に珊瑚島がぼつりと見える。ミニコイ島といふ。樹本一面に繁茂して白い鷗が群れてゐる。燈臺がある。大海の中の燈臺守の生活は、むかしはわれわれに夢想的な思考力を與へたものだが、もう長い間あんな考へは忘れてゐた。藏の中から土用干に取り出した古着を見る思ひで、なんとなく懐しい。あれこれと想ひをいぢくつてみるが、そつとむかしのままにしておく方が良ささうだ。無事に過せる考へは、無事にしとくに限る。今に巴里へつければ私の今までの考へなど無事にはすむまい。

三月十五日、晴。

一日毎に時計を二十分から五十分づつ遅らせて來た。今日で日本より五時間ばかり、私の時計は遅れてゐるだらう。

今日は一番海が暴あれる。ときどき甲板へ波が上る。このくらゐの事がないと、航海は面白くなくなるものだ。アフリカから吹く風と、アラビアから吹く風と打ち合つてゐるから、波は三

角で突き上る。食欲は旺盛だが足に硬直が来る。しかし、頭はだんだんリアリステックに戻つて来た。マラッカ海峡通過のときを振り返ると、たしかにあのときは、船客の頭は同様にロマンティックになつてゐたのだ。人間の心理といふものは、どんなに自分を確かだと思つてゐても、始終どつかに狂ひがあるものだ。

三月十六日、晴。

午前九時すぎにアフリカの東端、サマリランドの一角が左に現れる。初めは雲の如く、次には雪を頂いた山の如く、次には樹木のない岩山になつて来た。いかにもアフリカらしい。断崖の上には燈臺一つあるきりだ。この壯觀さは九時から十二時まで間断なく左舷に續いた。けれども、最初見たときに歎聲を發した人々も、十分とは見てゐない。すぐ將棋にかかる。やはり政治の方が面白いのだ。その癖、あの山々の向うで、エチオピアの戦ひのあるのを、誰一人口にしない。

下の機關室から油だらけになつた火夫らしい若者が上つて来たのに、サマリランドを指差して、あれはなんといふ島ですかと船客の一人が訊ねた。「いつも通つてゐるが、なんだか私ら知らんね。ここの偉い人に訊くと分ります。」と云ふ。



夜の九時から十時まで、一番上のブリッジへ登り、日本から見ることの出来ぬ星ばかりを探す北斗と反對にある南十字星は、まだ水平線の上僅かに登つてゐるきりだ。時間とともに、水平線はこれら天界の星座を、左方に擴げて廻つていく。星は滴たらんばかりだ。半時間も天上を仰ぎつづけてゐると、太古の憂鬱と新鮮さとが身に沁み込んで来る。ふと下を見ると、私はほのかに灯をつけた羅針盤に眩をついてゐる。眞西を指した針の先が、ときどき波とともに五分ほど揺れつつ進んでゐる。そのとき天上では、南極の方向を指差す南十字星の柄が、左方の水平線から登つていく。地球が圓いといふイメージを人間が獲得したといふことは、驚くべきことだが、別にわれわれは、何の驚きも感じない鈍感な時代に棲んでゐるのだ。それより愚かな事にも、私はこの大海の水が盡く鹽辛いといふ事の方が、驚くべきことに見えて來てゐる。この鹽かな水にいつばいの鹽を與へてゐるといふ現象——これに理由のない筈がないではないか。

軍艦では海水から眞水をとる機械があるさうだが、この水を飲むと、皆下痢ひりを起し、植物にこの水を與へると枯れるといふ。それだから人間だけが下痢を我慢してこれを飲み、植物には眞水をやつてゐるさうだ。優しく美しい。私はこの話を聞いて、他のどんな話よりも海軍を信頼する氣になつた。

三月十七日、晴。

今日の午後一時にアデンへ着く筈。ここまで書いて、ふと窓から外を見ると、アデンが見えて来た。峨々たる淡褐色の岩山だ。樹木が一本もない。なんとなくムハメットがゐさうな空の色と岩の色だ。夢中で夢を見てゐるやうな感じである。

アデン着。銅版色の横皺のある巨大な岩が、アデンそのもの。峻峰奇峰の間に、崩れかかった古代の城壁が見える。

全く不毛ぶもうの地らしい。千五百尺の深さまで掘つて、やうやく水を得た井戸が、城郭の中の一つあるきりだ。草木の生えよう筈もない。井戸の傍で土人が白い花を折つて私にくれる。

「ジャスミン。」といふ。

匂ひを嗅ぐと、なるほどジャスミンだ。近ごろ植えたもので、アラビアの土人には何より珍しい見世物だらう。小屋のやうな博物館がある。紀元前、二千年の發掘物や化石が竝べてある。この地はアフリカとの交通の要路であり、印度へ廻るアラビアの先端であるから、昔から争奪が激しかつたにちがひない。岩山を向ふへ抜けると、そこから沙漠だ。

沙漠の中には物々交換時代の隊商の屯所がある。行く路には白い天幕の連つた屋根が見えたので、隊商の宿泊所かと思つたら、一面の鹽の山だ。大きな風車が鹽の上で廻つてゐる。風が激しい。上陸時間を急がねば、船が出るので、駱駝の匂ひばかりを嗅ぎ廻つてゐるやうなものだ。暑い。

ほとんど草木さへ植ゑる事の不可能な土地、水なく、暑氣激しく、熱風吹き暴れる。このやうな土地でなければ生活出来ぬ人種もあるのだ。莊嚴なものは、岩の峻峰と、空と太陽である。しかも、それらは極めて壯麗で、ここに生活してゐる人種とは、比較を絶して美しい。かうなれば、も早や人間は、この自然を利用するわけにはいかなくなる。ただ自身の衰へを待つばかりだ。

私はふと氣がついたが、旅行といふのは、行く先の自然と人間とを、比較することだと思ふ。それだけが作用だ。ところが、こんなに遠い紅海の真ん中で、突然、東京音頭や、長唄のレコードを聴かされると、首を絞められたやうな氣持ちになり、これは俺は、刑罰を受けに、誰かに流されたのだと氣がつく。喜びなんかどこにもない。洋行などとの洒落は、あれは曳かれもこの小唄である。しかし、こんな眞綿で首を絞められるやうな刑罰を受ければ、誰だつて自慢

でもしなければ、やりきれたものではあるまい。「あちらでは。」と云ひたがるのも、實はあれは苦痛の表現にすぎぬのだ。しかし、今日は私の誕生日だ。

三月十八日。

今ごろは東京の真中で、退屈でなんとも仕方のない人間は、大往生をしてゐるやうなものだ。

自分の行爲が分らなくなり、自意識過多に落ち込んでゐるものは、一番やくざな蠻人と同じだ。巨大な太陽と、限らない碧空とを見なければ、頭が下らぬのである。

私もしコロンプスの水夫だつたら、彼を海中へ抛り込んだらう。

三月十九日、晴。

外人たちは本國が近づいて來たので、皆嬉しさうだ。日本人の乗客は、せめて船中でなり我儘でもしなくちや、するときがないと、やうやく實行にうつしかけたところだ。神經衰弱の徴候は、そろそろこのあたりから、現れ出すと見える。夫人同伴の人々は、皆元氣が良い。若い役人たちは、外國へやられる事は、受難だと思つてあきらめてゐる、と云つてゐる。ある人は

外國へ行くのはいいが、歸つてから自分の夫人が有難くなつて、大切にするやうになるから、それに注意せよ、役所の勤めがおろそかになる、と訓戒を與へたさうだ。

われわれは毎日毎日かうして遊んでばかりゐるけれども、これで船は動いてゐるんだから、まア、われわれは働いてゐるやうなものだ、とある船客。

人間は地球にわざわざ生れたのに、それを一廻りもせず、話せるか、とかう云ふ船客もある。ところが、突然、アラビアとは、いつたい、どこの國だ、と云ひ出すものもある。誰もこれにはなんとも云へない。綿布の仕事に従事して、世界をごろごろ廻つて來た客は、「ああ、もう世界は、ユダヤ人と印度人と支那人とで、廻つてゐますよ。これには、とても敵はん。」と投げ出したやうなことを云ふ。誰も彼も、ノルウェーが良いと云ふから行つてみたが、あそここの駐在官の月給を減らしても良い。全く良い所だ、と云ふものもある。トルコへ行つたところが、あそこは、旅客が自分の金を、自分で使へない。つまり、五磅以上は、持つて出ることが許されぬのだといふ。

ヨーロッパといふから、どんなところかと思つて行つたら、小さい小さい。あれぢや、東洋

が問題になるのは當然だと云ふものもある。長く外國にゐる者で、ヨーロッパ人を、頭から馬鹿にしてゐるものもある。理由は、頭が悪いと云ふのだ。

三月二十日、晴。

紅海は今日で終り。明日はピラミッド見物だ。

ヨーロッパから日本へ歸る榛名丸と擦れ違ふ。船はこの箱根丸と寸分違はぬ。(と船長の言) 御安航を祈ると大きく書いた幟が垂れてゐる。兩船はだんだん接近して來る。それぞれ船客達は手に旗を持つて振つてゐる。久し振りの日本船なので、熱狂して叫び合つてゐるのだが、突然、私の横から「がん張れ。」と向ふの船に向つて叫んだものがあつた。すると、「もう駄目だ。」と、頓狂なのが答へて來た。見るまに船は遠ざかつて行く。さア、また夕暮の支度、その後にはまた寝る。榛名丸の行方を見たが、もう影も形も見えぬ。

三月二十一日、晴。

毎日、日を忘れてばかりだ。今日は幾日ですかと他人に訊ねても、いつも、さア、といふ返事が多い。日といふものは眼に見えぬから、どこを掴まへて記憶して良いのか、かういふ進行してゐる船の中では、分り難い。

スエズに近づいてゐる。右にシナイ山が見え、左にエジプトが見える。このあたりを通りつゝあるときには、頭は聖書の匂ひで満ちて来る。樹木のない乳褐色の山々が、蜿々えんげんと兩岸に連つてゐるきりだ。

スエズを通る税金は一船片道五萬圓。船客の全部の船賃が、つまりこの税金で消える。

少し細かいことを書かうとすると、頭が痛んで来て駄目だ。よほど變調を來してゐることが、ペンを持つてはつきりする。

午後三時、スエズ着。ここで途中下船してカイロへピラミッドを見に行く。一行十四五人。自動車で百哩ほど沙漠の中を疾驅する。道路は京濱より完全だ。五六十哩の速力をつづける。この速力なら石ころ一つあつても、車は顛覆するのだ。樹木のない荒涼たる淡褐色の沙漠だが、こんなに茫々ぼやとした風景は、も早や風景とは言ひ難い。眞赤な夕陽が眞正面にかかつてゐる。沙漠に陽が落ちると云ふ歌があるが、太陽は沙漠に落ちるよりも、どうしやうもないのだ。まるで槍でも突き刺しに行くやうに、太陽に向つて霧進する。海ばかり見つけた眼に、沙漠は一

種の興奮を興へるが、しかし、今度はまたあんまり沙漠ばかりだ。私は初めは驚きつづけた。しかし、だんだんなんらの興奮もなくなり、疲勞がうまい工合に救つてくれることに氣がついた。

ところが、全く夜になつて、沙漠の端に突然、想像もしなかつた大都會が現れた。それがカイロだ。いつたい、砂ばかりの中に、どうしてこのやうな近代的な大都會が必要であり、維持されてゐるのか。大膽なものほどがある。——初めの私の疑問はそれだ。ナイルのデルタの肥沃なことは、聞いてゐた。しかし、それにしてもなほ不思議だ。物貨の集散地にしても、一國の首府にしても、世界最古の都會だとしても、なほ疑問は残る。思ふに、われわれの想像を超して、はるかにこの地への旅行者が多いからにちがひあるまい。

物價の高いことと、勘定を誤魔化すことを考へるのが巧いこととは、またこれも想像以上だ。紅茶一杯が八十五錢もする。小さな蜜柑五つが一圓五十錢だ。マッチ一つが六錢。スエズから百哩自動車を飛ばし、一泊して翌日ポートサイドに我々を待つてゐる船まで歸つて來る旅費が、一人百圓以上の割あてである。しかし、こんな高價な遠足にも拘らず、このカイロへ來た事だけは、後悔をさせぬものが確かにあるのだから、この地の大都會になることは、恐らくこのへ



んに原因してゐるのだらう。エチプト國でありながら、われわれがエチプトの貨幣を出して物を買ふといやがつて賣つてくれぬ。ホテルの女中がこつそり團體一人の旅費を訊ねたので、六磅<sup>ポンド</sup>五志<sup>シリング</sup>だと答へると、びつくりして云ふには、六磅あればカイロから巴里まで行つて、自分たちは歸つて來るのが習慣だと云つてゐたから、萬事はこの調子だらう。

ピラミッドや、スフィンクスや、博物館にある無数の古代の發掘物を見た。しかし、これには私は大して興味を覺えない。ごろごろしてゐる豊富な遺物が、どれもこれも、五六千年前の物ばかりだ。こんな風になれば、われわれの知覺は通じなく、却つて興ざめてしまふものだ。それより、ツタンカアメンを發掘した英國の伯爵が、發掘するとすぐ狂人になつて死んでしまつた事の方が面白い。王の墓を掘ると神經病になつて死ぬと云ふ言ひ傳へが、この地には昔から流れてゐるのだ。古代の王は、墓を尊重したあまり、何か古代獨特の藥品で、死ぬ仕かけがしてないとも限らぬ。科學でこれを證明出來ぬところが、近代の負けとも云へるやうな、何物かがないとは斷言出來ぬ。なぜかと云ふなら、これらの古代文明を眼前に目撃して、先づ感じ第一の事は、疑ひもなく、われわれの近代文化を支配してゐる根幹の知識とは、全く別種の豊かな知識がここにあつたといふ事だ。つまり法則の性質が違ふのだ。

絶えず頭の上にピラミッドを眺め暮してゐるエヂプト王の現代の虚栄心は、古代の王と競榮せんとすることにあるにちがひあるまい。この王の夢は、カイロをかくも必要以上に裝飾せずにはをれぬのにちがひない。これが、寝ても醒めても、ピラミッドに輕蔑せられてやまぬ現代の王の苦痛だらう。

三月二十四日、晴。

ギリシヤのクリート島が右方に長く連つてゐる。二日前から地中海に這入つて來た。夏服はそれぞれまた冬服に變つた。クリート島の山の頂上には雪がある。雲の棚曳きなんとなく日本の春景色だ。

地中海に這入れば、定めし一種の興奮を感じるに違ひないと思つてゐた。ところが別になんらの感動も起つて來ない。海は海だ。實は私はこのあたりで、さつぱりと少年のやうな空想にふけりたいと願つてやまなかつたのだが、エヂプトの疲れが未だに喰ひついて放れない。地圖を見て他愛もなく地中海だと思ふばかりだ。紅海の前にマルセーユでも見えて出してくれたなら、私はどんなに喜びを感じたことだらう。惜しいことをしたものだ。喜びたいときに喜びを感じなければ、喜びといふものは、役には立たぬ。遅すぎた戀人のやうなものだ。

地中海へ這入つて來ると、旅客の心理は、いかに隠しても複雑になつて來る。このあたりから今まで英語の上手うまかつたものが、引つ張り風の歓迎を受けたのに、そろそろフランスの巧みな者が歓迎され始めて來る。小さくなつてゐたフランス語が、妙に大きくふくれて來るのだ。一般人心の中で、英語と、佛語の鬭争も、地中海のやうなものだ。ところが、奇妙なことにも今まで少しも氣づかなかつた事だが、われわれの心底の中には、「ふん、何が地中海だ。」と云ふ肚はらが、不意に出始めて來るのである。これは壓へに壓へてもどこからか、隙間風のやうに出て來るものだ。

こんな心理がもぞもぞし始めたら、もう旅行記といふものは、安全に書けるもんぢやない。恐らく、私は幾多の無益な鬭争を、これからしつづけねばならぬことだらう。困つたものだ。

三月二十五日、曇。

初めてヨーロッパの市街を見た。イタリーの先端せんたん、メッシナ海峡にさしかかつて、左岸にシリイ島のメッシナ、右岸にレヂア、門司、下關といふ距離だ。海峡には渦が巻き、ひどい急流である。海峡を渡りつつあるときには、オーバアを着たが、渡り終ると、また温かになる。つい二三日前までは夏服でも暑い暑いと云つてゐたものが、急に煽風機が停り、今日からはス

チームが部屋に通つてゐる。

レヂアといふ街は、熱海に似てゐる。海軍の根據地だが、聖フランシスのゐさうな感じだ。段丘に橄欖の林、赤い屋根、白い砂ばかりの川。右のメッシナの横にエトナ火山が見える筈なのに、雲の中に隠れてゐる。

夜の九時、海中にストロンボリの噴火山が五哩の所に見える。ときどき噴出する火がぼうと頂上で明るい。櫻島のやうに、全島が富士形の火山だ。ナポリへこの船の寄らぬ事が惜しい。後二日目にマルセイユへ着くので、誰も彼も上陸の準備ばかりで急がしい。

三月二十六日、晴。

夕暮だ。右にコルシカ島、左にサルジニア。二島の距離は無きが如きものだ。この間を船は割り込んで進んで行く。夕陽がコルシカ島の上に落ちる。妙義山を連ねたやうなサルジニアには、波が荒い。ガリバルデイの生れた島と、ナポレオンの生れた島との間であるこの海峡には、夕陽といふものは、刺身のつまのやうなものだ。

三月二十七日。

マルセイユ見ゆ。——灰白色の陸地に松色の樹木が苔のやうに喰ひついてゐる。地質は石灰岩のために、風浪に浸蝕されて佚宕たる趣きだ。上陸直後税關だが、われわれ船客の一番年長者が、一人税金をとられた。この人の荷物だけは底から見ても無慚にひつき廻された。そして次のやうなことを云ふ。

「見たところ、あなたはここで一番年上だから、皆に代つてあなたの荷物を嚴重に檢べたが、悪く思はないで貰ひたい。これからいろいろの國境を通過されることだから、こんなに不用な土産物を澤山持たれてはいかん。どうかあなた一人あきらめて税金を拂つていただきたい。」  
かう云ふ事を云つてから、後は私の番だつたが、殆んど何も見ない。他も同様である。

マルセイユの街を廻る。街路樹は皆揃ひも揃つた大木ばかりだ。家は古びて灰白色。ノートルダムの頂上へ上る。私の足は硬直して片方が動かない。再び街を自動車で廻り歩いた。ところが、不思議なことに、マルセイユの群衆は、誰一人笑つてゐるものがない。どうもをかしいと思つて、同行のものに、笑つてゐるものを見つけたら教へてくれるやうと頼んだ。

午後の五時近くで、いつばいの群衆がぞろぞろ街に溢れてゐるのだが、疲れて、青ざめて、沈み込んで、むつつりしてゐるものばかりだ。そこへ夕陽があたつてゐる。これがヨーロッパ

か。——これは想像したより、はるかに地獄だ。本國を捻ぢ倒してゐる植民地の勃興は、現代の一大事實になつてゐるのだ。

三月二十八日、晴。

マルセイユ出發。巴里へ。

汽車の進行にしたがつて繰り擴つて來る田園。私は冷やかに眺めることばかりに努力した。けれども、どうにも美しい。桃杏たうきやう一時に開く春の木の芽の柔らかさ。連り下るなだらかな牧場、點在する風雅な農家。杏の花に包まれたローヌのゆるやかな流れ。——私はかういふ恍惚とした風景を見ながら、ふと氣がつくと、なほ植民地の勃興を考へてゐるのである。

夕暮の六時、巴里着。

\* 昭和十一年五月（文藝春秋）

## 四月

### 酔モロコ

京の娘は美しいとしきりに從弟が賞めた。それに歸るとき、

「この雨があがると祇園の櫻も宜しおすえ。」

そんなことを云つたので金六は京都へ行つてみたくなつた。

縁側で彼の義兄が官服を着たまま魚釣り用の浮子を拵へてゐる。金六は義兄の傍に蹲んだ。義兄はあら削りの浮子を一寸掌の上に載せてみて、

「酔モロコを食はしてやるぞ、五十疋も釣つて來てなア。」と云つた。

「おいしいのですか。」

「うまいのなんのつて、東京にゐちや金さんにや食へんわ。」

それも一度食べたいと彼は思つた。ふと眼を庭のぎばしの芽に移した。芽は刺さつたやうに

筒形をして黒い土の上から二寸程延びてゐた。東京からここへ来て初めて庭の隅でその生々とした芽を捜しあてたとき、毎日これを見ようと思つた。それに三日も忘れてゐる。彼は三日分のを取り戻さうと云ふ氣になると立ち上つた。すると身體の奥底で何か融けてするする崩れ出すやうに感じた。毎年春さきになると彼はこんなのを感ずる。それが近頃殊にひどかつた。危険になつてゐるなと彼は思つた。そのまま暫く兩手を帶へ差して少し前へ傾くやうな姿勢をとつて立つてゐると、足を踏み變へなければ身體が前へ自然にのめつて倒れさうに思はれた。

「こりやをかしい。どうしても妻が欲しいんだ。」

そんなことを思ふと、彼は妻でなくとも好い、せめて戀人なり一人欲しいと思つた。彼はまだ戀を知らない。しかし、こんなものだらう位は知つてゐた。

「ほんによろ降るな、モロコは沖へいつとるであかんぞ、こりや。」義兄はいつた。

「雨があがるといいんですか。」

「さうやな、磯へ餌さが集まるで來よるわけやな。」

なぜ雨が降りやめば餌が磯へ集まるのか彼は考へてみた。分らなかつた。

奥の間で娘の三重子の眠つてゐる暇を偷んで縫物をしてゐる金六の姉が、

「義兄さんたら、金さんが來たら酢モロコを食べさすのやつて、こなひだからやいやい云ふてやはるのえ。そんな物食べたりないわなア金さん！」



と聲をひそめるやうにして云つた。

「なアに。うまいのなんのつて。」

と義兄が云ふと、

「アレ、自分が好きやつたら他人まで好きやと思つて。」と姉は笑つた。

「きまつてら、どうれ。」

義兄は立ち上ると膝に溜つた削り屑をぼんぼんと音高く叩いた。姉は顔を擧めた。

「そんな大きな音さして、三重子が起きますやないの。」

「お前はなんぢや。大ッきな聲出して。」

金六の義兄は内庭へ廻つて行つた。姉も立つてその方へ廻つた。

金六は蹲み込むと庭の芽を見乍ら、矢張り自分を一番幸福にするのは戀だと思つた。しかし、  
なぜに公平な分け前物である筈のその幸福が、自分を許り避けるのか。これは機會がなかつた  
からだ。世の中の總ての幸福者は適宜にこの機會を捕へて放さなかつた。いや何よりも自分は  
臆病なんだ、これが一番いけない。さう思ふと、これまで數多くの機會が間斷なく自分に向つ  
て進んで來てゐたやうに思はれた。が、次には是非鏡を覗いて見たくなつた。鏡臺は縁側の隅  
にあつたので、彼は立ちさへすれば好かつた。そこへ姉が戻つて來て又縫物をし始めた。

「金さん。今夜活動へ行かう。今やつてゐるのは片思ひつて云ふのえ。知つてる？」

知つてゐると答へて彼は立つた。傾斜した鏡の面には彼の帯と胸とが映つてゐるだけだつた。

「酔モロコつてどんな物？」

彼は思ひついたままのことを訊いておいて鏡の傍へ行くと顔がうまく鏡に映るやうに鏡の頭の處を少し突いた。姉は酔とかお味噌とか何か云つてゐる。彼は元の位置へ戻つて鏡を見ると棚の上の番傘が三本映つてゐた。矢張り顔は見えなかつた。

「酔モロコつてそんな物か。」

「さうおいしゆないけど、珍らしいものえ。金さん好きかもしれんわ。あ、そやそや金さんの物は好きやつたな。」

「酔モロコより戀だ。」と彼は思つて又鏡を見ると、今度は鏡の傾斜の度合がうまく合つて顔が映つた。少し色が黒いと思つた。眼と眼の間が離れ過ぎてゐる。それに空を見てゐる鼻の頭が何か食べたさうで苦しく見えた。彼は暫く姉に用心しながらも寫眞を撮る時のやうな氣になつて顔を引き締めて見てゐると、ふと自分の顔から丸木舟が聯想された。この顔で水を汲めば五勺は汲める。そんなことを考へるとなんとなく世の中が頼りなくなつて來た。

「鏡ばかり見て。」と姉は云つた。

金六は少し羞しい氣がしたが頬を撫でながら姉の傍へ行くと、

「瘦せたね、近頃俺は。」とこまかした。

## 孫

二三日にして前に日向ひらがへ行つてゐる彼の父から母に早く来いと云つて來た。母は孫の傍から離れてゆくのを厭がつたがたうとう行くことになつた。

出發の時、汽車の窓から首を出してゐる彼女の前には、久吉とおりかと、おりかの肩から顔を出してゐる幸子とそれから彼とが並んで立つてゐた。彼も皆も今別れば何日又會へるか解らなかつた。

汽車が動き出した。

「バーア、ゆうちやん、バーア、行つて來るえ。バーア。」

彼の母は孫の顔ばかりを見てゐた。彼はもう母が自分の方を向くか向くかと待つてゐた。

おりかは片肩を歪めて幸子を前へ突き出すやうにしたが、幸子は口を開けて汽車の動くのを眺めてゐた。

「バーア、ゆうちやんゆうちやん、バーア、行つて来るえ。バーア。」  
遂に母は彼の方を一度も見なかつた。汽車が見えなくなると、彼は姉夫婦から離れて前に急いで改札口から外へ出た。子よりも孫の方が可愛らしい、さう思ふと、その日一日彼は塞いでゐた。

\* 「御身」大正十年（全集六）

## 父

雨が降りさうである。庭の櫻の花が少し凋しぼれて見えた。父は夕飯を済ませると両手を頭の下へ敷いて、仰向きに長くなつて空を見てゐた。その傍で十九になる子と母がまだ御飯を食べてゐる。

「踊を見に行かうか三人で。」と出しぬけに父は云つた。

「都踊さ、入場券を貰うて來てあるのやが、今夜で終ひやつたな。」

母は黙つてゐた。

「これから行かうか、お前等見たことがなからうが。」

「私らそんなもの見たうない。それだけ早う寝る方がええわ。」

「光お前行かんか。」

父は子の顔を見た。子は父の笑顔からある底意を感じたので、直ぐ眼を外らすと、

「どうでも宜しい。」と答へた。

併し子はまだ遊興を知らなかつたし都踊も見たことがないので綺麗な祇園の藝妓が踊るのだと思ふと、實は行きなかつたのだが、父や母と一緒に見に行つてからの窮屈さが眼についた。

「行くなら早い方がええし。」と又父は云つた。

「行きなうないわな、光。」と母は横から口を入れた。

子は眞面目な顔をして、「うむ。」と低く答へると母の方へ茶碗を差し出した。が、もう食べるのでなかつたのに、と氣が附いたが又思ひ切つて箸をとつた。

「光ひとりで行つて來い。」と父は云つた。すると、

「あんた一人でお行きなはれ。」と直ぐ母は父に云つた。

父は笑顔を空に向けた。それぎり三人は黙つて了つた。

子は御飯を濟ますと縁側へ出て、兩手を首の後で組んで庭の敷石の上をぼんやり見詰めてゐ

た。兩足がしつかりと身體を支へて呉れてゐないやうに思はれた。

鶏小屋の繩を巻きつけた丸梯子の中程を雌鶏が一羽靜かに昇つてゆく。そのとき石敷いしぢきの上に二つ三つ斑點が急に浮かんだ。雨だなど子は思った。母は元氣の良い聲で、

「そうら降つて來た。」と云つて笑つた。

父も笑つた。そして、

「なアに止むさ。光ひとりで行つて來んか、あんな札を遊ばしておいても仕様がななし。」

子は父のさう云ふ言葉の底意に懐しさを感じて來た。

「光らあんな所へ行き度うはないわなア。光？」と母は云つた。

子はそれに答へずに直ぐ二階へ昇らうとして父の前を通ると、父は體を少し起した。

「よ光、一人で見て來いや。もう今夜で終ひやぞ。」

「もう雨が降るしよしませう。」

子はさう云つて二階へ來ると窓の敷居に腰をかけた。下腹から力が脱けてゐた。

空はそれなり雨を落さずにいつの間にか薄明るくなつて來た。その下に東山がある。その向うに京都の街がある。

二十分程して、他所行きの着物を着た母が腰帶のまま二階へ來た。行くんだなど子は思ふと、氣が浮いて、

「どこへ行くの？」と訊いた。

母は黙つて押入を開けると、下唇を咬んで蒲團の載つてゐるまま長持の蓋を上げた。

「行くの？」と子はまた聞いた。

母は黒く光つた丸帯を出して、

「お父さんて雨が降つてるのに。」と呟くと、子の顔を一目も見ずに下へ降りて行つて階段の中程の中から、

「用意おしや。」と強く云つた。

子は腹を立てた。「行くものか。」と思つた。

暫くしてから、母は帯をしめて又二階へ來た。

「まだ用意おしやないの。」

「行きたかないよ。」

母は黙つて子の顔を眺めてゐた。

「お母さんとお父さんと行くといい、俺は留守をしてゐるよ。」

「今頃そんなことを云うて……。」

「やめだつてば。」

「可笑しい子。」

母は薄笑ひをしながら押入から子の着物と帯とを出した。子は東山の輪郭に沿うて幾度も自分の顔を動かしてゐた。

「早う。」と母は云つた。

子は母の出して呉れた着物を一寸見て又眼を東山に向けた。母はそのまま立つて子の顔を見てゐたが「可笑しい子やないか。」と呟くと下へ降りて行つた。

子はソツと着物を弄つて見た。が、下へ降りた母の手前を考へて呼ばれる迄着替へずにゐてやらうと思つた。すると、直ぐ母が呼んだ。子は強ひて落ちつくために返事をせず又敷居へ腰を据ゑた。下から聲がする。

「お父さんが待つてゐやはるのえ。」

子は父を思ふとそのままの容なり子で下へ降りた。

「まだ着替へてやないの。」と母は顔を顰めた。

「これでいよ。」

「ああそれで好えとも。」さう云つて父は煙草入に敷島を詰めた。

子は父の前で拗すねる氣がしなかつた。三人は外へ出た。

母が空を見上げて「降るに定つてるのに。」と云ふと、父は、「なに。」と云つて停留所の方へ歩いた。



祇園へ着いた時にはもう眞暗であつた。歌舞練場と書かれた門の中へ父は這入つていつた。そこに踊がある。二人はその後に従つた。踊のひとときまりがまだついてゐなかつたので三人は光つた廣い板間の控へに坐つて次のを待つた。

子は父が蓆を口に銜へたのを見ると自分のマツチでそれに火を點けた。が、父に媚びてゐる自分の氣持を兩親に見ぬかれてゐるやうな氣がしたので、父の蓆入から自分も一本ぬきとつてすつた。

周囲の群衆がつまつてゐるため三人は黙つてゐた。間もなく踊のきりがついた。群衆は控へから棧敷の方へ動いて行つた。

三人が土間の中程へ場をとつた時、母は父と子との間へ二人より少し退き加減に坐つた。

幕が上ると同時に左手の雜壇から鼓の音がして、兩側の花道から背の順に並んで踊子の群が駈けるやうに足並揃へて進んで來た。夫々手に花開いた櫻の枝を持つてゐる。最初には踊子らの顔がどれも同じやうに綺麗に見えた。

母は不意に子の肩を叩くと後を向いて啼いた。

「光、それそれ、あの西洋人の顔をお見いな、面白さうな顔をしてゐる。」

子は舞臺の反對の棧敷に居る二三の外國人の顔を見た。が、別に彼等の顔から母の云ふ程な表情を感じなかつた。で、又急いで踊子達の顔に見入らうとした時、ふと自分の眼を後へ向け

ささうと努める母の氣持を意識した。

「なア、をかしい顔をしてゐるやらう。日本人は奇妙な踊をするもんやと思つて見てゐるのやらうな。」

子はただ「ふむ、ふむ。」と答へておいた。が、母が正面に向き返るまで自分からさきに舞臺の方を見ることが出来なかつた。

「あれきつと自分の國へ歸つてから、日本で面白いものを見て來たつて云ふのやな。」

さう云つてから母は漸く踊子の方を向いた。子はまた故意に後を向いてゐた。が、見るものが無かつたので、その時間を利用して群がる人々の中から目立つた綺麗な顔を摸索した。

一度舞臺から消えた踊子の群は再び手拭を持つて、ゆるゆると踊り乍ら兩側の花道から現れた。

すると母は子の方へ顔を寄せて又囁いた。

「あの子お見、可愛らしいことなア、人形さんのやうな。」

子は母が胸の上で指差してゐる踊子に見當をつけてよく見ると、最後から二番目のまだ小さい杓子顔の雛妓であつた。子はその顔からどこか良い所を捜さうとつとめてみた。そして時々眠さうな眼をすることが可愛いと強ひて思つた。

「後から二番目？」

「そやそや、可愛らしいやらう。」

「うむ。」と子は云つて見附けておいた美しいいま一人の踊子を見ようとしたが、母の看視を思ふと圖太くその方許り見續けることが出来なくなつた。彼は母に知れるやうにあちらこちら眼を置き變へた。そして、右手の舞壇の隅で長唄を謡つてゐる年増の醜い女を見あてたとき、ここならよからうと思つて、眼の置き場をそれに定めた。直ぐ頸筋に疲れを感じたが耐へてゐた。彼の横に彼の年頃の學生が一人自由に踊を眺めてゐる。彼は羨ましく思つた。

父は初めから絶えず舞臺の方を向いてゐた。子は父を有りがたく思つた。

間もなく踊は濟んだ。まだ早かつたので電車通りに出てから三人は街を見て歩いた。子は下駄を引摺るやうにして黙つて親らの後に従いた。歩きながら、戀人を抱いた時の自分の姿を思ひ浮べた。今母の眼の前で、傍を通る一人一人攫へてキスしてやらうかと考へた。

「もうし、光がね萬年筆が欲しいんですつて。」と母は不意に良人に云つた。

「いりませんよ。」と子は強く云つて母を睨んだ。

父は黙つてゐた。

母は子の方を振り向いて、「お前欲しいつて云うてたやないの。」と笑ひながら云つた。

「そんなこと云はない。」

が、實は云うたと子は思つた。

ある文房具店の前まで来た時、父は黙つてその中へ這入つていつた。子は萬年筆を手にとつてゐる父を見ると、急に父が恐ろしくなつて来た。

\* 「父」大正十年（全集六）

## 死線

丘の先端の花の中で、透明な日光室が輝いてゐた。バルコオンの梯子は白い脊骨のやうに突き出てゐた。

彼は海から登る坂道を肺療院の方へ歸つて来た。彼はかうして時々妻の傍から離れると外を歩き、また、妻の顔を新しく見に歸つた。見る度に妻の顔は、明確なテンポをとつて段階を描きながら、克明に死線の方へ近寄つてゐた。——山上の煉瓦の中から、不意に一群の看護婦達が崩れ出した。

「さやうなら。」

「さやうなら。」

退院者の後を追つて、彼女達は陽に輝いた坂道を白いマントのやうに駆けて來た。彼女達は薔薇の花壇の中を旋回すると、門の廣場で一輪の花のやうに輪を造つた。

「さやうなら。」

「さやうなら。」

芝生の上では、日光浴をしてゐる白い新鮮な患者達が、坂に成つた果實のやうに累々として横たはつてゐた。

彼は患者達の幻想の中を柔かく廊下へ來た。長い廊下に添つた部屋部屋の窓から、絶望に光つた一列の眼光が冷たく彼に迫つて來た。

彼は妻の病室のドアを開けた。妻の顔は、花瓣に纏はりついた空氣のやうに、哀れな朗かさをたたへて靜まつてゐた。

——恐らく、妻は死ぬだらう。

彼は妻を寢臺の横から透かしてみた。罪と罰とは何もなかつた。彼女は處女を彼に與へた満足な結婚の夜の美しさを回想してゐるかのやうに、端整な青い線をその横顔プロファイルの上に浮かべてゐた。

\* 「花園の思想」昭和二年（全集九）

## 花の部屋

今は、彼の妻は、ただ生死の間を轉がつてゐる一疋の怪物だつた。あの激しい熱情をもつて彼を愛した妻は、いつの間にか盡く彼の前から消え失せて了つてゐた。さうして、彼は？ あゝの激しい情熱をもつて妻を愛した彼は、今は感情の擦り切れた一箇の機械となつてゐるにすぎなかつた。實際、この二人は、その互に受けた長い時間の苦痛のために、もう夫婦でもなければ人間でもなかつた。二人の眼と眼をへだててゐる空間の距離には、ただ透明な空氣だけが柔順に伸縮してゐるだけである。その二人の間の空間は死が現はれて妻の眼を奪ふまで、恐らく陽が輝けば明るくなり、陽が没すれば暗くなるに相違ない。二人にとつて、時間は最早や愛情では伸縮せず、ただ二人の眼と眼の空間に明暗を與へる太陽の光線の變化となつて、露骨に現はれてゐるだけにすぎなかつた。それは靜かな真空のやうな虚無であつた。彼には横たはつてゐる妻の顔が、その傍の藥臺や盆のやうに、一箇の見事な靜物に見え始めた。

彼は二人の空間をかつての生き生きとした愛情のやうに美しくするために、花壇の中からマ

「ガレットや雛鬘粟をとつて來た。その白いマーガレットは虚無の中で、ほのかに妻の動かぬ表情に笑を與へた。またあの柔かな雛鬘粟が壺にささつて微風に赤々と揺らめくと、妻はかすかな歎聲を洩らして眺めてゐた。この四角な部屋に並べられた壺や寢臺や壁や横顔ヨコガほや花々の静まつた静物の線の中から、かすかな一條の歎聲が洩れるとは。彼は彼女のその歎聲の秘められたやうな美しさを聴くために、戸外から手に入る花と云ふ花を部屋の中へ集め出した。

薔薇は朝毎に水に濡れたまま揺られて來た。紫陽花と矢車花と野苺と芍薬と菊と、カンナは絶えず三方の壁の上で咲いてゐた。それは華やかな花屋のやうな部屋であつた。彼は夜毎に燭臺に火を點けると、もしかしたらこつそりこの青ざめた花屋の中へ、死の客人が訪れてゐはしまいかと妻の寝顔を覗き込んだ。すると、或る夜不意に妻は眼を開けて彼に云つた。

「あなた、私が死んだら、幸福になるわね。」

彼は黙つて妻の顔を眺めてゐた。そして彼は自分の寢床へ歸つて來ると憂鬱に蠟燭の火を吹き消した。

## 花園の掟

この花園の中では、新鮮な空氣と日光と愛と豊富な食物と安眠とが最も必要とされてゐた。ここでは夜と雲とが現はれない限り、病室に影を投げかけるものは屋根だけだつた。食物は海と山との調味豊かな品々が時に従つて華やかな色彩で食欲を増進させた。空氣は晴れ渡つた空と海と山との三色の緑の色素の中から湧き上つた。物音としてはしんと耳の痛む静けさと、時には娛樂室からかすかに上るミュエットと、患者の咳と、花壇の中で花瓣の上に降りかかる忍びやかな噴水の音ぐらゐにすぎなかつた。さうして、愛は？ 愛は都會の優れた醫院から抜擢された看護婦達の清淨な白衣の中に、五月の微風のやうに流れてゐた。

しかし、愛はいつのときでも曲者である。この花園の中でただ無爲に空と海と花とを眺めながら、傍近く寄るものが、もしも五月の微風のやうに爽かであつたなら、そこに柔かな愛慾の實のなることは明かな物理である。しかし、この花園では愛戀は毒藥であつた。もしも戀慕が花に交つて花開くなら、やがてそのものは花のやうに散るであらう。なぜなら、この丘の空



と花との明るさは、巷の戀に代つた安らかさを病人に與へるために他ならない。もしも彼らの間に戀の花が咲いたら、間もなく彼らを取り巻く花と空との明るさはその綿々とした異曲のために曇るであらう。だが、この空と花との美しき情趣の中で、華やかな女のさざめきが微笑のやうに迫るなら、愛慾に落ちないものは石であつた。このためこの白い看護婦達は、患者の脈を調べる巧妙な手つきと同様に、微笑と秋波を名優のやうに整頓しなければならなかつた。しかし、彼女達といへども一對の大きな乳房をもつてゐた。病舎の燈火が一齊に消えて、彼女達の就寢の時間が來ると、彼女らはその嚴格な白い衣を脱ぎ捨て、化粧をすませ、腰に色づいた帯を巻きつけ、いつの間にかしなやかな寢卷姿の娘になつた。だが娘になつた彼女らは、皆ことごとく疲れと眠さのために物憂げに黙つてゐた。それは戀に破れた娘らがどことなく人目を憚るあの靜かな惱ましさをたたへてゐるかのやうに。或るものはその日の祈りをするためにひま跪き、或るものは手紙を書き、或るものは物思ひに沈み込み、また、ときとしては或るものは、盛装をこらして火の消えた廊下の眞中にぼんやりと立つてゐた。恐らく彼女らにはその最も好む美しき着物を着る時間が、眠るとき以外にはないのであらう。

或る夜、彼女らの一人は、夜更けてから愛する男の病室へ忍び込んで發見された。その翌日、彼女は病院から解雇された。出て行くとき彼女は長い廊下を見送る看護婦達にとりまかれながら、いささかの羞かしさのために顔を染めてはゐたものの、傲然とした足つきで出ていつた。

それは丁度、長い酷使と粗食との生活に對して反抗した模範を示すかのやうに。その出て行くときの彼女の禮節を無視した様子には、確かに長らく彼女達を虐めた病人と病院とに復讐したかのやうな快感が、悠々と彼女の肩に現れてゐた。

\* 「花園の思想」

## マアガレット

その夜、満潮になると、彼の妻は激しく苦しみ出した。醫者が來た。カンフルと食鹽とリンゲルが交代に彼女の體内に火を點けた。しかし、もう、彼女は昨日の彼女のやうにはならなかつた。ただ最後に酸素吸入器だけが、彼女の枕元で、ぶくぶく泡を立てながら必死の活動をした。始めた。

彼は妻の上へ蔽ひ冠さるやうにして、吸入器の口を妻の口へあててゐた。——逃がしはせぬぞ、と云ふかのやうに。妻の母は娘の苦しむ一息ごとに、顔を擧めて一緒に息を吐き出した。

彼は時々、吸入器の口を妻の口の上から外してみた。すると彼女は絶えだえな呼吸をして苦しんだ。

——いよいよだ、と彼は思った。

もし吸入が永久に妻の苦痛を救ふものなら、彼は永久にその口を持ち続けてゐたかつた。だが、この眼前の事實のやうに、吸入がただ彼女の苦しみを續けるためばかりに役立つてゐるのだと思ふと、彼は彼女の生命を引きとめようとしてゐる藥劑やうざいよりも、今は、彼女の生命を縮めた漁場の魚に、初めて好意を持ちたくなつた。しかし、醫師は法醫學に従つて、冷然としてなほ一本の注射を打たうと云ひ始めた。ただ、生残つてゐるもののためだけに。

「いや。いや。」と彼の妻は彼より先に醫師の言葉を遮つた。

「よしよし、ぢや、もう打つのは止さう。」

「あなた、もうあたし、駄目なんだから。」と妻はいつた。

「いや、まだ、まだ。」

「あたし、苦しい。」

「うむ、もう直ぐ、癒る。大丈夫だ。」

「どうして、あたしを、死なしてくれないんだらう。」

「そんなことは、言ふもんぢやない。」

「こんなに苦しいのに、まだあたしを、苦しめるつもりかしら。」

今は、彼には彼女の死を希<sup>ねが</sup>ふ意味が怨めしかつた。

「もうちよつとの辛抱さ。直き苦しくなくなるよ。」

「あ、もう、あなたの顔が、見えなくなつた。」と妻は云つた。

彼は暴風のやうに眼がくらんだ。妻は部屋の中を見廻しながら、彼の方へ手を出した。彼は激しい愛情を、彼女の一本の手の中に殺到させた。

「しつかりしろ。ここにゐるぞ。」

「うむ。」と彼女は答へた。

彼女の把握力が、生涯の力を籠めて、彼の手の中へ入り込んで来た。

「あなた、あたし、もう死んでよ。」と妻は云つた。

「もう<sup>もう</sup>よつと、待てないか。」と彼は云つた。

「あたし、苦しいの。あなたより、さきに死んで、済まないわね。」

彼は答へる代りに、聲を上げて泣き出した。

「あなた、長い間、ほんとに済まなかつたわ。御免してね。」

「俺も、お前に、長い間世話になつて、すまなかつた。」と彼は漸く云つた。

妻は顎をひいてしつかりと頷いた。

「あたしほど、幸福なものは、なかつたわ。あなたは、ひとりぼつちに、なるんだわね。あたしが、死んだら、もうあなたのことを、するものが、誰もゐなくなるんだわ。」  
萎れたマーガレットの花の傍から、彼女の母の泣き聲が、歎聲のやうに起つた。

\* 「花園の思想」

## 受難者

芝が来たのは宮仲と私が逢つた日から半月もしてからであらう。やはり芝の顔はひどく消耗してゐて、脂肪けのなくなつた皮膚がすすけて動かすにぼくぼくしてゐるのが、どこか秋になると毛の抜けて来る番犬のやうにしよんぼりとして見えて、一見してなんとなく哀れな感じが私の胸を打つた。

「君はいつたい今どこにゐるのだ。」と私は芝を見るなり訊いてみた。

芝はまた私のところへ何か流言がさき廻りして來てゐると思ひこんでゐるらしく、ちらりと

私を見ると「え？ ええ。」といつもの口癖で呟いてから、

「下宿はこのごろ變つてばかりゐるものですから、お報らせしようと思つても、もうそのひまに下宿を追ひ出されてしまひますので。」

「どうしてそんなに追ひ出されるのだ。」

「それがまた不愉快でして、私の知らぬ間にいけない男がやつて來まして、私の悪口を云ひふらすもんですから、變つたと思ふともう下宿屋は置いてくれないのです。」

「しかし、君が思つてゐるほど誰もさうひどいことをしてゐるんぢやないんぢやないかね。何もその男がこつそり來たのを君がいちいち見たといふわけでもないんだし。」

私がさういふと芝は眼をしよぼしよぼさせながらも、私のいふことなどはほとんど聞いてゐないかのやうな調子で、顔色一つさへ動かさずに云つた。

「それはさうですけれども、それはちやんと分つてゐますんで。下宿屋が何も知らぬ私の前のことまで云ひ出すんでなんと云ひわけをしても訊いてくれやしません。」

「そんなにしつこく來るのかね。どうも話がをかしいぞ。」

「ええ、それはもう、お話にも何もなりやしません。こつそり私が下宿を變ると、今度は前の下宿屋で聞いて來てまた同じことを云ふのです。それでまた變ると、また來る。」

「だけど、どうしてまたさういふ深刻なことを君はされるんだ。何か怨みでもあるのかね。」

と私は訊いた。

「いえ、別に怨まれる覚えはありませんけれど。」

「女と君がどうしたとか、その女の子供を自分の子供ぢやないとかどうとかと君が云つてゐるので、君のところへその女がねち込んで来るといふ噂だが、さういふことはあるんかね。」

「ええ、それがなんです。それで實は私は困つてゐるんで、それはその女といふのが子供を産んだのは産んだんですけれど、一年八月もたつて産れた子供を私の子供だといつてきませんので、私もうるさいので逃げ歩いてゐますと、またいつの間にやら女がやつて来まして、まるで子供の鼻さきへ玩具を出してはとり上げるやうなことばかりしますので、私も頭がもうだんだん變になるばかりなんです。」

「それぢや、その女を動かして君のところへ來させるのが、つまり川崎だといふんだね。」

「ええ、もうそれはちやんとさうなんです。」

いかにも自信ありげにさう芝のいふところや、また前からの彼の話を聞いてゐると、彼の頭は健康からそれについて悪くなりながらも、妄想の中ではまたおのづからそれとして別箇に細かい廻轉をさせ續けてゐることが私には感じられた。

「しかし、君、川崎は僕は一度より見ないけれども、君のいふほど僕には悪い男には見えな  
いがね。」と私は云つた。

「いえ、それはあの男は決して悪い男ぢやありませんが、その後ろにまた悪い奴がいくたりもをりますので、それで川崎は正直なものですから、その男らのいふとほりになつて動いて來ますので。」

「ぢや、君にはそれがはつきり分つてゐるんだな。」

「ええ、もうそれや、何もかも分つてゐますんです。私がちよつと錢湯へでも行かうと思つて出ますと、もうその錢湯へ私より先廻りをしてあつて、もうぢきにかういふ風體ふうていのかういふ風な男が來るが、そ奴やつは怪しい奴だから注意するやうに持つてことを番臺のものに云つてあるんで、それで番臺のものは客のみなにすぐ知らせるもんですから、私が何も知らずにそこへいくと、もうみなうさん臭くささうにきよろきよろして私を見ますので、湯なんかにおちおち入つてゐられずに私が出て來たことなんか何回もありました。」

「馬鹿な、それや君の妄想だよ。」

私もあまり芝の考へ方が途方もないとこころへいつてゐるのでさういふと、芝は私の注意なんかでんで相手にしようと思はずに、

「いえ、それはもう間違ひないので、もうそんなことぐらゐなんでもないことなんで。」

強くさういはれると、私も川崎の後ろにゐる宮仲を疑つてゐるときとて、もしかしたら考へやうによつては宮仲も、面白半分にそんな計畫を暇にまかせて立ててみたかも知れないとふと



思つた。殊にただ事では絶対に参らぬ芝のことである。さうでもしなければなるほど芝を苦しめる法はないにちがひない。それに、女がしつこく芝の後を追つていつて玩具を見せては取り上げるといふやうな方法にしたつて、たしかに金が全くなくなつてどこへも出られぬ芝を苦しめるには何よりの方法であるのだから、これもあるひは細かい官仲の計算書の中に編入せられであるのかも分らない。さう思ふと、私は官仲のにやにやひそかに笑つてゐる樂しさうな顔が急に生き生きと眼に映つて來てならなかつた。

\* 「受難者」昭和七年（全集九）

### ゝ 高い精神

私は久内のやうな知識の深みに達してゐるものにとつては、雁金のやうな行者の世界で實行を主として困難に身を突きあて、貧窮をもともせず立ち働く人物といふものは、限りなく尊敬に價ひする對象となつて咲いて來てゐることなどは、さほど理解するに困難なことだとは思

はなかつたが、一つは久内の氣品のある謙虚な人品のせりでもあらうか、ひどく彼も雁金に興味をもち始めたことが明瞭に分つたことは何より私には頼もしく感じられた。私はさらにまた彼に、昨夜敦子と逢つて歸つてからの雁金の恬淡な態度や、彼が久内の父と同様な新しい發明に苦心し始めてゐる有様を話してみた。すると、久内はしばらく上衣のボタンをもちもちと摘まみながら黙つてゐてから、一度自分に雁金を紹介してくれることは出来ないものかと云ひ出した。私は逢ふことなどは造作はないと答へたが、しかし、雁金のやうな自身の妻の對象物となつてゐる人間に逢ひたいと願ふ物好きな久内の氣持ちにだけは、初めは私も信じてゐることが出来なかつた。けれども、久内のやうな知識の倒錯状態に落ち込んでゐる優れた人物といふものは、自分のもつとも困難と感じる事柄に、好んで接觸しようとする強い精神の發動のままに動かすにはゐられぬことがあるにちがひない。このやうな思想の頂上にゐる男性といふものは、ときどき、自分の敵對的な人物に屈從してみるによつて、もつておのれのひそかな内心の高さを誇りとする高貴な忍從の精神を持つてゐるのを見受けることがあるが、恐らく久内の場合はそれとは似て非なるものがあるに相違なかつた。

\* 『紋章』昭和九年（全集四）

『改造』昭和九年一月號から九月號まで連載した長篇である。これが第一回の文藝懇話會賞作品

となつたことは周知の通り。

○ 作中の雁金八郎なる人物のモデルは菊池寛氏の「水産ソース」といふ隨筆の主人公長山正太郎氏であるといはれる。

## × 實 験

雁金は研究所の附近にある大きな百姓の日雇人ひやまにんとなつて、その日の食事だけは受ける手筈てびまを定め、二日隔あひだきに研究所へ出て醬油の試験をすることになつた。彼はそこで先づその地の蒲鉾かまぼこの屑を念入りに調査し始めたが、調査の進むにしたがつてまた思ひがけない困難に出くはした。といふのは、その地の蒲鉾の原料は、朝鮮海峽でとれるトロール船の魚を下關に陸上げして、汽車輸送をして來るため、氷詰めとは云へ、魚の腸はらわただけはほとんど腐敗してゐることを發見したからであつた。もしこれを使ってその腸の酵素を利用するとすれば、同時に腐敗も併發する缺陷が生じるので、手間のかかる鑛酸分解をして殺菌した後、酵素利用をするといふ面倒なことになつて來たのである。もしこの魚屑が山下博士のやうに近海で獲れる鱈であれば、成功

疑ひなしたと、幾度このとき思つたかしれないと雁金は私に話したが、その地の廢物を利用しない限り、その地の事業家は金を提供する筈がないので、彼も今はそのやうな贅澤は云つてゐられるときではなかつたのだ。先づ何はともあれ、成功し得られる範圍の不便の中で原料を求めて、彼は早速實驗の用意にかからなければならなかつた。それといふのは、役所はその試験の成績如何によつて迫つてゐる次年度の豫算を計上し、不足分を本省に申請し、國庫に補助を仰がねばならぬからだつたが、しかし、實驗を急ぐには、彼は何より炭火で夏と常溫の設備を一ヶ月間しなければならぬのである。彼は早坂達の好意あるすすめに従つて、幸ひに空いてゐた彼の實驗室を借して貰つた。この入口には、硫酸銅で染めた網が天井近くまで積み上つてゐて、うす暗く日光を遮り、井戸のやうに床に深く掘られたコンクリートの殺菌釜の傍に、電熱をかけるボイラーや蒲鉾を擦る石の大きな擦鉢や、潜水用のポンプ、鐵製の潜水服などが錆びた重い具足を亂して轉がつてゐた。

雁金は實驗用のタンクの代りに間に合せの桶にして、原料の魚屑を入れてから、鹽水をかけ、さらに麴菌カウヂキンを加へ、溫度に氣をつけながら一ヶ月も待つてゐるうちに、やうやく望みの鹽辛しほからに似たものが熟成して來た。一般に醬油の實驗を知らぬものには、醬油を造るといふと大量生産の醬油のことを考へて、ばたばたと日々を働き詰めねばならぬ大勞働のやうに考へるものであるが、試験用の雁金の醬油などはただ腕を掛こまいてちつと見てをれば良いのであつた。しかし、

彼はあるときもうこれで頃合ひも良からうと思つて、試しに桶の中の液汁を舐めてみると、滋味のために舌が絡みつきさうにもつれて來た。

「さあ、しまつた。」

雁金は全くこれは豫想外の事であつたので、日ごろの自信はたちまち崩れかかつて來た。そのとき彼は、ふと野村直三氏が苦味を抜く方法として焼火箸を鏗鹽辛の中へ突き込むといふ山下久内の話を思ひ出して、鐵の火箸を數本眞赤に焼いたのを突き込んでみた。しかし、滋味は以前と何ら變るところはなかつた。その間にも所長の多多羅はときどき實驗室を覗きに來た。「どうです、上手くいけますか。」さう訊ねるのに、「大丈夫です。もうすぐお目にかけますから。」とだけは云つてゐるもの、今は全く彼も途方にくれてしまひ、一思ひに誰にも分らぬ今の中こつそり逃げてしまふのが一番だと決心した。彼は實驗室を出ると手を拭きながら隣室の化學室を覗いてみた。顯微鏡やフラスコ、試験管などのガラスの器具ばかり澤山並んでゐる白々と透明なその部屋の中には、まだほのかに酸の匂ひが漂つてゐるだけで、人影のないのを幸ひに彼は中へ這入るとぼんやりと立つてゐた。

## × 童心の科學者

雁金八郎とは私はその後長らく逢ふ機会を失つてゐた。するとある日、彼から書留が届いたので中を見ると、大學の學會刊行になつてゐる醸酵雜誌に多くの博士たちの中に混つて、「餽の醸造的利用に就いて」といふ雁金の論文が掲載されてあつた。そして、今一つの手紙には、自分の長びいた訴訟もいよいよ特許の決定を見たから安心せられたといふことがあり、終りには全く意外にも、明十六日の午後五時から約三十分ばかり、餽に就いて自分が放送するから聽いてゐて貰ひたいと書いてあつた。私はその日の時間が來るとラヂオをかけさせて聞いてゐたが、早口な彼のことであるから、定めし聞き難いことであらうと思つてゐると、どうしたものでかいよいよ始まつてみると、さつぱり雁金のやうではなく、全く落ちつき拂つてゐて聲までが別人のやうであつた。

「世の中にはさほど値打ちの無いものでも、その数が少なければ珍重されますが、これに反しまして、大へん値打ちのあるものでも、多量であるがために賣ばれないといふ氣の毒なもの

もありません。すなはち、鰯のごときはこの一つで、その栄養價値は蛋白質脂肪性食品としては世界的絶好の物であります。」

かういふところから始まつて、雁金の話は酵素を説き、他の食物と鰯との比較を話し、經濟とを關聯させ、鰯こそ米と同様日本人の珍重すべき最も重要なものだといふことを悠々と話していつた。私はふと彼の話の途中に、久内や敦子は今この話を聞いてゐるのであらうかどうだらうと考へたが、必ず久内だけは街のどこかの一角で聞いてゐるにちがひないと思つた。ところが、その夜雁金の放送がすんで四五時間もしたころであらう。ぼろぼろのうす汚れた浴衣を着て、兵兒帯も繩のやうになつてゐるのを締めた雁金が帽子も冠らずに這入つて來た。私はさきに聞いた彼の放送の落ちつきを賞讃すると、いや放送は一度大阪でもしたのでもう馴れてしまつたと笑つて云つたが、どうしたのか彼はどこか浮かない顔つきをしてゐるので、悦ばしい夜であるにもかかはらず心配さうではないかと私は訊ねてみた。

「それが實は少々困つてゐるんですけれども、放送局はお金をくれないので、明日大阪へ歸る旅費がありませんのですから。」と雁金は白狀した。それでは旅費の都合をつけようと私がいふと、

「いえ、それはさうしていただければ結構ですが、大阪のときはすぐくれたものですから、東京のはどんなになつてゐるのか教へていただきたいと思ひましてね。」

私はそれは君の貧乏してゐることを放送局は知らないから、爲替でもう富山の方へ送つたの  
にちがひないと話してから、

「しかし、まだあなたはそんなに貧乏してゐるんですか。」と私は無遠慮に訊ねてみた。

「それや、貧乏ですよ。どういふものですか、私は一つの發明を完成さすと、それをどうし  
ようといふより、もう次の發明をしたくて仕様がありませんですがね。今度また新しいのが二  
つばかり出来かかつてゐるんですよ。」

かう雁金はいつてどこか羅漢のやうな無邪氣な顔をしながら早口にもう次の發明を説明して  
きかせた。私は抗告審判で特許になつた彼の干物のことを訊いてみた。すると、あれはもう物  
産研究所のある所へ解放してしまつたといふ答へだつた。

\* 『紋章』



## 百貨店點描

松坂屋——品物と柱とどつちが多いか競争しながら、結局柱の方が脊が高い。

柱、曰く「萬引をするならここですよ。」

ここの番頭は美人と品物の配合に關して頭を使用することを、不經濟だと考へてゐるらしい。  
缺點——休みたくないこと。

特長——用を足せば用のないこと。(但し、柱に鏡が多いので、美人は空手すゝてで水すましのやうに柱ばかりを廻つてゐる。これは近代的運動法。その代り、醜婦は豫定より一つ餘計に化粧品を買はされる。)

屋上庭園では犬を賣つてゐる。人間の赤子もここで賣られるやうになる頃には、ロンドンから一時間で買物に來られるにちがひない。

松屋——良人が休憩室でしびれを切らす所。しびれが切れて了ふと、そろそろ良人は勝手に放蕩する所。放蕩にも欠呻をし出すと、やつと細君が反物の中からごそごそ嬉しさうに出て来る所。

缺點——萬引の出来ないこと。

特長——(一)活動寫眞の眞似のしたくなる所。(二)人の振り見てわが振り直せと云ふ所。この階段ではこんな會話が交されるにちがひない。

「あらもう歸るの。」

「今頃から歸つてどうするの。」

「さうよ。だから。」

「ちや、どうしませう。」

「さうね、あたし、なんにも欲しいものはないんだけど。」

「あたしもよ。」

そこで、二人は譚記してゐる値段の札所をもう一度巡禮して、結局、出口で憂鬱を買ふ所。

「彼女らは、幾人ここの階段で、密かに自分の戀人を輕蔑したであらうか。」

これはこの百貨店の字幕である。

三越——自家用車の競争場。(但し速力不用)小賣店を食ふ怪物。見給へ、二匹の獅子が門前に立つてゐる。反抗なんか、病氣の一種さ、と澄し込んでゐる面構へ、先づ満點。小鳥あり花あり、有る物より無き物を探すべしといふ懸賞でも出さうな所。

缺點——品物を買はずよりも、人の腰を抜かすことに考慮し過ぎること。

——番人の分らぬこと。

特長——通路が家の中まで這入つた感じ(表通り歓迎)

——感想を許さぬ所、もし感想が浮んだら、自分の周圍に拘摸が何人ゐるかを考へると云ふことは一體自分が馬鹿なのだらうか、どうだらうかと考へさせられる程度のもの。

——二十五世紀を見たいもんだと溜息をつく所。

——損をしてゐるのか得をしてゐるのか見當のつかない所。勿論、こつちが損をしてゐるのか得をしてゐるのかそれさへも。

——萬引をする者に同情したくなる癖を植ゑつけるに充分なり。ここの犯罪人は必ず好人物が多いにちがひない。ここの萬引者を妻にするものは幸福になりさうな感じのする所。

——連れを捜すことばかりに氣を使はせて結局空手で抛り出す所。

——以上の特長を缺點に入れるべきに拘らず、特長に編入させて了ふ所がこの長所。

——絶えずそこらに仕事着の土工でもゐさうな感じのするのは注意を要す。

——エレベーターは船室のやうで上海あたりまで昇りさうな所。

——疲れて了つてどこへも行けなくして了ふのは確實な缺點。但し食堂で食物の來るのが遅いのは疲れを休めさすためなら、これは特長に變質する。

——ボーイが自店の大きさを誇れば誇るほど客に頭を低めてゐること、これは優美に近い最上の特長なり。歴史の古さがボーイの頭に長所を出してゐる最上の見本。但し番頭の頭をそれだけ高くするためなら、これは缺點に變質する。

丸ビル——疲れて了つて一同何も見えず。纔かに廊下の堅いコンクリートが、こんな所で生活する奴は蒲團が何より戀しいのさ、と辯解してゐるのが見えたのみ。

\* 昭和二年

「東京・アレグロ」と云ふ題で『文藝春秋』十二月號に片岡鐵兵氏等と共に執筆したものである。

松坂屋、松屋、三越が擔當であつた。松坂屋、松屋共に銀座店、三越は日本橋の本店であること入口の獅子像に依つて知れる。

## 作品が出来るまで

### まづ長さを

雑誌や新聞から頼まれると、先づ最初に幾枚を書かうかと長さを定める。何を書かうかではなくて、長さである。三十枚なら、三十枚の中で、それなら、どう云ふことを書けば、最も適當であらうかを決定する。それが定まると、それでは次に、その材料を、どう云ふ形式に書かうかと考へる。それには、材料の關係と、その材料を盛り得る枚數即ち長さを考へて、それからその形式を考へなければ、その作は必ず失敗するに定まつてゐるからである。

次には、私はいつもその全體の色調と、書き出しの一行との關係について考へる。この書き出しが悪ければ、また、この書き出しが氣に入らなければ、筆は幾日たつても進まないのが癖である。それにまた、この書き出しの一行が、その日の天候と、その日の時間とに非常に關係を保つて有機的に働いて來るのが常である。

## 最初の五枚

私がかうして最初の先づ五枚を書けば、後はどんどん運んで行く。この五枚で、私は、その作が失敗したかしないか大體の見當がついて来る。それ故、私には最初の五枚を書く間が、一番神経質になる時間であり、この時間がまた一番その作を仕上げる全體の時間の中の、大部分の時間である。一ヶ月かかるものなら、二十日間はこの五枚に費して了ふ場合がいつもである。

## 年齢の關係

しかし、作を仕上げる時間は私一個の經驗では、年齢としによつて違つてゐた。二十一二の時には八枚ほどのものに、一ヶ月もかかつた。二十五のときには二十枚ほどのものに、一ヶ月は費した。二十七八の頃には、四十枚のものに、一週間。この頃は、また書けなくなり、一ヶ月かかつて最初の五枚さへなかなか書けなくなつて了つた。

私は一番最初は詩を書いた。次には戯曲を書いた。次には象徴的な小説を書き出した。次には、小説を純正な寫生で押してみた。その次には寫實的に高める工夫をやつてみた。それから、再び象徴へ舞ひ戻つた。この頃が私の新感覺派時代である。その次には再び寫實へ戻つて來た。私はここで暫く落ちつきたいと思つてゐる。

變化

この間に、物の見方にまた自ら變化があつた。最初は幻想的に物を眺めたかつた。それから普通一般的な平凡な見方をしたいと心掛けた。それがだんだんいやになり、物を個性的に、自己本位に眺めようと企てた。<sup>くは</sup>それのもいやになると、感覺的に見てみようと思ひ出した。所が途中で、構成的に見る癖がつき始めた。それが、またこの頃はだんだんいやになつて來た。

\* 「まづ長さを」昭和三年（全集十）

## 春の眺め

桃の花に迷はされて妊婦は高い所へ手を伸ばす。

「春は嬉しや」……

一座にはやつつけられる番の奴が一人ゐて、いつもにやにや笑つてゐてくれなければしつかりしない。

女はときどきゆらゆら揺れて茶碗を落し、子供はちよこなんと坐つて馬鹿な口でも開けて欲し。

分別臭い男には魚を食はせ、

犬には石鹼を食はしてやらう。

わしは昔からむつつりして、馬鹿なことを考へる癖がある。

「笑ひは天の美祿びやく」、と云つた男には褒美はうびをやらう。

老人にはいろはがるたを書いて貰ひ、



花嫁には帯を持たせてばたばたさせ、  
わしは朝寝をしてやらう。

\* 「詩十篇」昭和三年（全集十）

## 轉換について

轉換出來得るものは、常に幸ひである。私は私の知人達に、何事に於ても轉換出來得る限り、  
轉換することをすすめて來た。

マルクス主義への轉換——

この轉換は轉換するものの中、賞むべき轉換の一つである。そのどこに、不正なことがある  
であらう。最早や轉換なし得ないものが、轉換なし得たものより多く不正を持つ場合にさへ立  
ちいたつた。しかし、それにも拘らず、私はどうしても轉換することが出來ないか、これには

理由がある。

「それは、藝術が悪いのだ。」

「それなら、その悪い藝術を叩き潰せば良いではないか。」

ところが、悪くても、藝術には溢るるばかりの愛嬌がある。女性に戀愛を感じたものは、受難者であるやうに、藝術に戀愛を感じたものは、最早や、今後ならずとも受難者だ。

しかしながら、藝術家でありながら、マルクス主義に轉換したものは、これまた同様に受難者であるにちがひない。なぜなら、マルクス主義と云ふものは、藝術家にとつては、どのやうな見方をしようとも素朴實在論にすぎないのだ。

「それなら、他にわれわれを救ふ何があるのか。」

何物もないのである。われわれは、或る時期が来るまでは、この素朴實在論に満足してゐなければならぬのだ。

「それなら、それで良いではないか。」

ところが、それで良いなら、誰もわざわざこの世の中に生れて来る筈がないのである。

「それなら、何故にわれわれは生れて來たのか。」

——それは、人間に愛嬌があるからだ。

「何故に人間に愛嬌があるのか。」

もう、ここからは私たちは黙つてゐなければならぬ。誰がなんと云はうとも、シイザーの母が何故に帝王を切開せられねばならなかつたかと云ふ疑問については、シイザーをおのれの腹から出すために、と云ふ解答以外にはないのである。

\* 「愛嬌とマルキシズム」昭和三年（全集十）

「良心的な人間はすべて左傾する」と云はれた時代であつた。轉向とはマルキシズムより非マルキシズムへのそれを意味する現代に於てこの一文は特に感慨深いものがあらう。

## 煙草を吸ふ文學と吸はない文學

私はこの一ヶ月間煙草を吸はない。今迄一日にチェリーを五箇のんでゐたのに、ばつたり煙草を吸はなくなつてから頭の廻轉も變化して來た。人と言葉を交へるのがいやになり、思はぬときに思ひがけない表情が顔の上で擴がつてゐたり、注意力が對象を忘れて霧散むさんしたり、夜が來ると睡氣ねむりに抵抗するのが第一の務めとなつたり、とに角勝手がひどくいつもと變つて來た。

ペンを持つても一字を書くのにまごまごした骨折を感じる。意識と意識との繼目から身體を支配しさうな無意識の運動が間斷なく行はれてゐるのを感じるやうになつた。煙草を吸ふ肉體と、煙草を吸はない肉體との感覺の落差らくあの中で、私はそのどちらが實體を計量する上に於てより正しい肉體であるのかを考へる。

一昔前、私が教會へ通つてゐる頃、牧師が私の下宿へ日曜になるとやつて来て、私が煙草を吸ふかどうかをひそかに調べて歸つたことがある。その頃、もう私は煙草を吸つてゐたが、なぜ神を信じる上に於て煙草を吸つてはならぬのか分らなかつた。しかし、禁煙を説いたキリスト教の最初の牧師は、確かに煙草は人間の幻想を自由に見抜いてゐたにちがひなからう。幻想が自由になれば、神なんかなくとも救はれるのだ。神を征服するものは煙草だと云ふことを見通したその男は、人間としては傑物だつたに相違ない。

文學も煙草を吸ふ文學と吸はない文學——と云ふよりも、現實よりも幻想そのものを重んじる文學と、現實から遊離したがる幻想を極度に排斥するメカニズムの文學とが昔から並びながら進んで来た。この考へ方はあられもない方向からの考へ方だが、こんなことはどうでもよい。要はただメカニズムの文學についてである。メカニズムの文學とは最も平凡な云ひ方をすれば、「眞理まことを探る文學」と云ふ意味である。もし和譯すれば「眞理主義」とでも譯すべきであらう。機械主義とか、力學主義とかの譯はメカニズムの眞意からは遠ざかるばかりである。

自然主義の文學はメカニズムの文學であつた。それは眞理を探る方法に於て本能に重心を置きすぎた。マルキシズムの文學もメカニズムの文學であつた。しかし、マルキシズム文學は眞理を探る方法に於て、階級に重心を置き過ぎた。さうして新しい發生を餘儀なくせしめられた藝術派の眞理主義者たちは、當然、その眞理を探る方法に於て、方法そのものに重心を置き始めなければならなくなつた。いかに掘りあてた眞理そのものが古くとも、それは良いのだ。ただ方法そのことが新しければ。そこで、新しい藝術派の眞理主義者達の一團は、彼ら自身を、出來得る限り科學者に近づけなければならなくなつたのだ。いや、寧ろ反對に、科學者を彼ら自身の中へ産み出し始めたのである。人生に對して、藝術派ほど科學者でなければならぬものはない。

譬へば、今、私のこの體内に於ける禁煙からの變化とその運命を最も確實に示し得るものは、藝術家以外にはないのである。科學者そのものよりも、藝術家の方が正しいのだ。

\* 「藝術派の眞理主義について」昭和五年（全集十）

## 子路の質問

私は孔子を豪いと漸くこの頃になつて思ふやうになつた。しかし、孔子の門人十哲の中で面白のはなんといつても子路が一番である。初め孔子に逢つたときには、ひとつ孔子といふ奴をひやかしてやらうと思つて出かけていつたところといひ、死際しきはいといひ、農山の山上で、眼下を見下ろして孔子に希望を述べるとき、息せきながら何よりも戦ひ抜いて敵を斬りまくりたいといふところといひ、キリストに於けるユダのやうな愛嬌にみちたところもあれば、文覺もんかくのやうに竹を割つたやうな一徹いつてつなところもあり、芭蕉ばせまの弟子の路通ろつうにも似た不敵なところもあつて興味が多い。それもとりました十哲の中に竝んでゐるときの子路の顔が、ひとり精悍な氣に満ちあふれ、常に孔子の青い額の前で生き生きとしてゐるところ、どことなくシェフアードのやうな感じがある。悶えもだがあると思ふと遠慮會釋もなく孔子に、「あなたもまた人の己を譽むるを好むか。」と問ひつめてみたりするところを見れば、少し人から賞められて嬉しまぎれに飛び上つたあと、日頃の教へを思ひ浮べて口惜くきしくなり、さつそくつかつかと孔子の前へ出ていつて聞

きただしてみたのであらう。また勇氣に於ては誰よりも優れてゐると自惚れてゐた彼が、「君子は勇を尙ぶか。」と孔子に訊ね、「君子は義を以て上とす。」と突かれたり、「子三軍を行らば誰と與にせん」と訊ねて、「暴虎馮河死して悔ゆることなきものは吾與にせざる也。必ずや事に臨んで懼れ、謀を好んで而して成るものなり。」と云はれたりすると、急に自分の蠻勇を直さうと思ひ立ち、自分は教へられたばかりでまだこれを實行したことがないのだから、それならもう教へられるのは恐くなるばかりだとて、飲食を絶ち、黙つて坐りつづけて瘦せ衰へてしまつたりするところを見ると、あの男は壘の上で死ねないと日頃孔子に云はれたりしたのももつとものことと思はれる。殊になんとも云へず面白いのはその死である。子路は晩年衛の大夫の孔悝といふ人に仕へ、孔悝の領地を預つてゐたのだがそのときたまたま主の孔悝がクーデターにあつて、全城沸騰して人々が逃げ去つた。子路は急を聞きつけて城の傍まで行くと、もう人々が逃げるばかりで子路の行くのを危いからとひきとめて放さない。それでも無理に振り切つて主を救ひにひとり城内に這入ると、早や孔悝は敵に追ひつめられて危険になつてゐた。子路は後から敵に向ひ、主人を放してくれ、放さなければ高臺を焼くぞと大聲でいふと、敵の壯士は直ぐ戈を執つて子路の腦天からうち下ろした。すると、ぶつくり子路の冠の紐が切れたので子路は「おい、ちよつと待てよ、君子は死すとも冠を脱せず。」といつて、切れた紐を結び直して従容として死んでいく。それが子路の六十三のときであるが、子路のやうな徑行直情

の勇士が六十三年も自分の勇を壓へようとして格闘したのを考へると、いかにも彼の死のその滑稽なゆとりはさもあらうと思はれて襟を正せしめるものがある。孔子も子路の死を訊くと嘆き悲しみ、死骸が鹽辛しほからにされたと訊くに及んで自分の貯藏してゐた澤山の鹽辛をみな捨てさせてしまつた。

しかし、子路の何よりの功績は他の十哲が懼れて孔子に訊くことの出来なかつたことを、遠慮もなく訊いたことだ。聖人君子といふと神のやうに人よりもかけ放れて偉大なものだとなんかの定めてかかつてゐるとき、その孔子に、「夫子も亦已を譽むるを好むか。」と訊いて、孔子をして「是れあるかな子の迂なるや。」と答へさせたり、「君子も亦窮するか。」と訊いて、「夫子未だ仁ならざるか。」ときはどく笑つて逃げを打たせたりさせてゐるところは、子路のならばなき心の美しさからにちがひない。さういふことはいつも衆人から馬鹿だと思はれてゐるものでなければ訊かれるものではなく、またさういふことを孔子ともあらう人物に、訊きだしたことは、他の十哲から輕蔑されるに定まつてゐるのに、それを敢てした子路の直情さはそのために、後世の人間を、どれほど慰め力づける結果になつてゐることか知れないと思ふ。

實は十哲も子路がそんなことを云ひ出したときは、内心これこそ誰も彼もそつと訊きたいと思つてゐた唯一のことだと、顔を赭くさせてはらはらしながらも、何とも云へない興味で孔子の第一聲を待ち構へたことにちがひないのである。孔子も孔子で子路からそんな風につけづ



けと訊かれるといままで弟子たちを壓へるために自身の中に隠して來た數々の汚なさを思ひ上げては、今こそ生涯の難關にぶつかつたと思つて、さぞひやりとしたことであらう。しかし、そのためにすつかり自分の汚なさを白狀してしまつた孔子は一層前より偉大になり、自身の偉大さも最早やそれ以後は持ち扱ひに窮することもなくなつたにちがひない。眞の偉大さといふものはさういふきつかけから與へられていくものであらうと思ふ。

\* 「子路の質問」昭和七年（全集十）

## 巴里の四月

四月四日、雨。——

巴里へ着いてから今日で一週間も経つ。見るべき所は、皆見てしまつた。しかし、私はこの事は書く氣が起らぬ。早く歸らうと思ふ。こんな所は人間の住む所ぢやない。中には長くゐることを競争するものもあるが、愚かなことだ。

巴里について、いろいろの人が、いろんな事を云つたり書いたりした。しかし、それらの人が、自分の顔がどんなに變つたか誰も云ひもしなければ、知りもしない。

四月六日、晴。

巴里へ來てから初めての晴天だ。しかし、私の頭の中では、渦がいくつも巻きつづけ、衝突し、崩れ、巻き込み合ひ、不斷に變化をつづけていく。私がひとり部屋に歸り、夜更けて思ひ浮ぶ風景は、通つて來たアラビアの沙漠である。

人間の資本は金だといふこと——この簡単なことが、この巴里へ來て初めて分る。われわれは資本を金だと容易に思へるものぢやない。文化の頂上といふものは至極透明なものだ。洞察などといふ厄介なもの、不用で經濟の割に合はぬ。ここでは何もかも向ふが透いて見える。こんなガラス製の家の中では、人間の心はどこへ置いて良いものか、誰だつて迷ふのだ。恐らく、道徳もわれわれの想像したものとは、よほど縁遠いものにちがひあるまい。

第一自由といふものが、たしかにわれわれの考へてゐたものとは違つてゐる。縦横無盡の格

律の上に、滑かに<sup>ス</sup>たる厳格な法規の活用が自由である、しかし、整然とした威儀を正した食卓で、紳士淑女が何一つ非の打ち所のない典雅さでフォークを使つてゐる眞最中に於てでも、いきなりパンだけは手掴みだ。パンだけは別だ、といふ心遣ひがまだまだヨーロッパの文化を支配してゐるのである。それともこれだけは忘れてゐるのかもしれない。しかし、日本は、もうこんなところは清算した時代がわれわれの知らぬ昔にあつたのではないか。

誰も彼もドイツとの戦争がいつ起るかを問題にしてゐる。しかも、この次の戦争では、傳統などといふ誇りは、吹き飛んでしまふのだ。思想家の準備は、どこの國でも出来てゐない。植民地を輕蔑して、まだ思想があり得ると思つてゐるのである。夢のごときものだ。

出逢ふ日本人は、私に巴里はどうかと質問する。私は答へに窮してしまふ。實は、パリから受ける私の印象は、廻るカットグラスの面のやうに、日々變化してやまぬ。その日の結論は、前日の結論と反對になり、次の日は、また前日とは趣を異にしてしまふ。ぐるぐる廻る結論に絞め上げられると、思ひ惱んで黙る以外に能はなくなる。

ドストエフスキイが多年あこがれてゐた巴里へ来て、たつた二ヶ月でフロレンスへ逃げ出し、ほとんど巴里の事に關して書かなかつたといふことは、もつともだと思ふ。

私もどういふものだから、早くフロレンスへ行きたくてならぬ。

巴里に長くゐる外國人は、誰も彼も、一樣に巴里を尊敬し、熱愛して暮してゐる。そこへドストエフスキイが飛び込んだのだ。當時巴里のロシア人たちは、本國を輕蔑する代りに、新米しんまいの彼を、事毎に輕蔑したのは、火を見るよりも明らかだ。こんなことに氣づかぬドストエフスキイではあるまい。つまり、ロシア本國を、何故にロシア人が互に輕蔑し合つて暮さねばならぬのか。その残念な、云ひ知れぬ口惜しさといふものは、我慢出來るものではなかつたのだ。

「ロシア精神を守れ。新しいロシア文學を起せ。」かういふことをドストエフスキイがどうしても云ひ出さずにはゐられなかつたものが、この巴里には潜んでゐるのである。

巴里の憂鬱といふ言葉がある。私もこの年まで、度々憂鬱は經驗したが、こんな憂鬱な思ひに迫られたことは、まだなかつた。身が粉々に碎けたやうに思はれ、ふと取りすがつたものを見ると、いづれも壞れた破片だ。殊に雨にでも降り込められれば、建物の黒さが、身の除けや

うもなく心に沁み渡つて来る。立ち騒ぐ人もなく、雨の中で、悠々と傘もささずに立話をしてゐる人々の風景は、のどかどころではない。

いら立たしい感情はどこへかき消え、うんとも聲の出ない憂鬱さが、腰かけてゐる椅子の下から、這はひ上つて来る。

巴里にはリリシズムといふものが、どこにもない。なんとかかとか、旅人を喜ばす工夫に熱中して、うつとりする物ばかりふんだんに並べ立ててはくれるのだが、そんな物には、ひつくりも出来ず、向うの下心ばかりがいやに眼につく。雲形くもがた定規ぢやうぎの面白さも、何となく物足りぬ。私は巴里へ来てから、一層上海の面白さが分つて来たやうな気がする。上海には定規がない。リリシズムは上海だけに残つてゐるのだ。フランス庭園の樹木の植込みを見れば分る。規矩きく整然としてゐて、首を動かすにも角度が要るのだ。自然を變形すること、この町人ほど巧みなものはあるまい。カソリックの精神といふのも、恐らくこのやうな第二の自然を云ふのであらう。

四月八日。

ホテルを變らうと思ひ、街を歩いてゐると、ストリンドベルヒのゐたと書いてあるホテルがある。中へ這入つてどの部屋にストリンドベルヒがゐたのかと訊ねると、三階へ連れて行き、

ここだと云ふ。細長い八疊で窓から隣家の屋根ばかりが見える。ルクサンブル公園のすぐ傍なので、「地獄」に出て来る公園も、この公園であらう。私は一時ストリンドベルヒに心酔したこともあり、殊に地獄は私の心の糧だつたから、この部屋を借りようかと思つたが、千五百フランもする。それに年代から考へると彼の狂人になりかけた部屋だ。空気も息詰るやうだし、細長いのが第一嫌ひだつたので、思ひとまることにした。

夜の公園のベンチで、誰だか俺のベンチに電氣をかけて、殺さうと思つてゐるなどと、書いてゐたのを思ひ出すと、この部屋なら狂人になりかねないと思つた。

文學者の彫像の多いのはルクサンブルの公園である。ここにはベルレーヌの他に、スタンダール、フローベル、ジョルジ・サンドがある。しかし、私の好きだつたのは、公園を出て、ソルボンヌの前にあるモンテーニの像だ。これは去年の三百年祭に出来たものだからまだ新しいが、この像を見て初めてモンテーニの精神に觸れた思ひがした。彼の寛容、彼の自由さ、底を割つた老獺の徳、他人のいかなる策謀も功を奏せぬ不思議な微笑。たしかに男性の底知れぬ柔らかな寛仁大度な風姿が、よくこの像に現れてゐると思つた。

四月二十一日。

總選舉が近づいて來たので、街頭は緊張してゐる。タクシイは朝から全市一齊に罷業だ。雨。ラスパイクのホテルの六階が私の部屋だ。廣い墓場が眼下に見える。ポードレールもこの墓場にゐる。栗の若葉でいつばいになつた墓場に、雨は毎日降りつづけてゐる。ときどき、濡れた白い花が、日々咲き増していくのがよく分る。

パリの建物は高さが同じで六階だが、どの建物も煉けて黒い。道路を歩いてゐると、峡谷の底にゐるやうだ。道路以外に脱け路はないから、廣場に出ない限り、一丈ほどの厚さで押し流されてゐるガソリンの底を、歩いてゐるやうなものだ。

建物の彫像も、大理石に似た石灰岩であるから、風雨を受ける突出した部分は、白く雪を頂いたやうに美しい。つまり、街のうす黒く煉けてゐるのは、反對に白い部分を明瞭に浮き立たせるバックの役をしてゐるのだ。そこへ例のマロニエであるが、これは花より葉の方が美しい。この葉の群生ぐんせいの仕方は、重厚な建物の線ちゆうこうせんといかにもよく調和してゐる。このマロニエの葉が、他のどんな街路樹でも早や駄目だ。マロニエに似た街路樹は、東京では、警視廳の横から海軍省の前まで竝んでゐる栃の木がよく似てゐる。しかし、栃より少し葉が小さく、密生してゐて

光澤がある。

どの街も美しさは均衡してゐる。どこもかしこも、つまりはるかに立派にした銀座ばかりのやうなものだ。ふと上を仰ぐと、建物の線や彫像の微妙な精緻さ。ふと下を向くと、装飾窓の中の絶好極まる数々の品物。通りかかる人の美しさ。——かうして廿日ばかり、ぼんやりと暮してゐるうちに、はてどこから書くべきか、絲口が見つからなくなつてしまつた。

かういふ話がある。——フランスでは、金を銀行に預けずに、現金で持つてゐると、税金がかからない。それ故、銀行に預けぬ金がどれほどあるか分らないといふこと。

喧嘩は手を先に出した方が、いかなる場合でも、負けだといふこと。——貯金をすればするほど、他人から尊敬を受けるといふこと。——隣の部屋で死んでゐても、知らぬ顔をしてゐること。——親の許さぬ男は、絶對に結婚出来ぬといふこと。——車夫は車夫以外に、ポリーはポリー以外に出世を望まないといふこと。——婦人は金がなければ、結婚出来ぬこと。——親は子供に平等に財産を頒けねばならぬから、従つて子供を生まぬ工夫をするといふこと。誰も彼も、自分の國が世界で一番尊敬すべき國だと確信してゐること。

以上を考へても、どことなくフランスは支那に似てゐる。



四月二十三日。

サンジエルマンへ行く。途中に椿姫がアルマンと一緒に棲んでゐたといふブーシバルを通つた。ここはセーヌ河の上流であるから、木の根も水に洗はれた静かな村だ。ここでは雲の影さへ水に映り、樹木に取り包まれた古い屋敷が散在して、ニンジンに現れたがごとき風景は到る處にある。

サンジエルマンは高臺で、六里彼方にある巴里の街のゆるやかな起伏が、一望の中に見渡せる。林檎の花盛りだ。遠くモンマルトルの頂上のサクレクールがかすかに春霞の中に浮かんでゐる。林檎の花の下を蛇行してゐるセーヌ河は、古城の銃眼を高く一方に聳えさせ、艇々と巴里に向つて流れてゐる。風はうすら寒い。

フランソワ一世の宮廷の中を突きぬけて行くと、小梅櫻が早くも満開を過ぎてゐる。庭園の中に、イギリス風の庭がある。フランスの王朝時代には、イギリス風の庭は、當時いかにもハイカラに思はれたにちがひない。

四月二十六日、雨。

今日は總選舉の日だ。結果は夕方になると、ほぼ分るさうだが、左翼が絶對多數で勝つことは、決定的だと云はれてゐる。

街頭のポスターには、左翼が勝てば戦争が起るぞと右翼が書き、左翼は、右翼が勝てば戦争が起るぞと書いてゐる。

フランスの左翼は日本の右翼のやうに、勢力を政府の中に持つてゐるので、壓迫を受けつづけてゐるのは右翼である。左翼への轉向のときは、ここでは日本で右傾するがときやさしさだと云ふことに、初めて氣がついた。

四月二十八日。

まだ明瞭ではないが、極右と極左が競り合つてゐるとの事だ。

樋口、岡本太郎君と三人で、ブロウニエへ午後から行く。市中に五里四方の大きな森を残しておいた市民は、この森のために、心が絶えず洗はれてゐるのだ。森の中はマロニエの花盛りだ。コーヒーを飲んでゐる茶碗の中へ、花が舞ひ落ちて来る。花陰からも日光にあたつてゐると、物云ふのもいやになり、自分がなぜこんな所へ來てゐるのか、をかしなこともあつたも

んだと、不意に疑問を持つのである。私は自分で來たくて、巴里へ來たのでは決してない。私の友人たちが、行け行け、行け行けと、たうとう押し出してしまつたのだ。さて來て見ると、この通りで、どつちを向いても白い花と青葉ばかりだ。ひどい目に遭はせやがつたと、毎日不服が絶えずあるので、せめてプロウニユの森へ來たときでも、堪能しようと、頭は馬鹿みたいにぼうとなる。

さて夕暮になつて立ち上つた。

若い男女の二人が、喧嘩をしてゐると見えて、黙つて立つてゐるその上に、白い蠟燭を立て連ねたやうなマロニエの花叢はなむらが、風に重々しく揺れ動く。岡本君は「巴里の屋根の下」を唄ひながら、その前を行き過ぎる。すると、若い男女の二人は、前からの争ひのまま、どちらからともなく、不機嫌さうに接吻した。鶯が衰へた聲で、濃密な葉の中で啼いてゐるのを聞きつつ、私はこれをこの日の終りとした。

\* 昭和十一年六月（文藝春秋）

岡本太郎氏は岡本一平氏の息。數年前渡佛し現在も滯留中。



## 五月

### 泉

乙女達の一團は水甕を頭に載せて、小丘の中腹にある泉の傍から、唄ひながら合歡木の林の中に隠れて行つた。後の泉を包んだ岩の上には、まだ萎れぬ太藺の花が水甕の破片とともに踏みじられて残つてゐた。さうして西に傾きかかつた太陽は、この小丘の裾遠くが擴つた有明の入江の上に、長く曲折しつゝ、適か水平線の西端に消え入る白い砂丘の上に今は力なくその光を投げてゐた。乙女達の合唱は華やかな酒樂の歌に變つて來た。さうして、林をぬけると再び、人家を包む圓やかな濃綠色の團塊となつた森の中に吸はれて行つた。眼界の風物、何一つとして動くものは見えなかつた。

そのとき、今迄、泉の上の小丘を蔽つて靜まつてゐた蒼の穂波の一點が二つに割れてざわめいた。すると、割れ目は數羽の雉と隼とを飛び立たせつゝ、次第に泉の方へ眞直に延びて來た。

さうして、間もなく、泉の水面に映つてゐる白茅ちがやの一行が裂かれたとき、そこには弦の切れた短弓を握つた一人の若者が立つてゐた。彼の大きな窪んだ眼窠や、その突起した顎や、その影のやうな暗鬱な顔の色には、道に迷うた者の、極度の疲労と饑餓の苦痛が現れてゐた。彼は這ひながら岩の上に降りて來ると、弓杖ゆんづえついて崩れた角髪みづらをかき上げながら、渦巻く蔓の刺青はりもを描いた脛を泉につけた。彼の首から垂れ下つた一連の白瑪瑙めたうの勾玉まがたまは、音も立てずに水に浸つて、靜かに藻を食ふ魚のやうに光つてゐた。

\* 『日輪』序章（全集四）

最初の長篇にして出世作。二十四歳にして稿を脱し二十六歳の折菊池寛、芥川龍之介兩氏の推輓を得て『新小説』へ掲載した。

染しよ  
衣ころも

太陽は入江の水平線へ朱の一點となつて没して行つた。不彌ふみの宮の高殿たかどのでは、垂木たるきの木舞こまがに

吊り下げられた鳥籠の中で、櫃が習ひ覺えた卑彌呼の名を一聲呼んで眠りに落ちた。磯からは、満潮のさざめき寄せる波の音が刻々に高まりながら、濱藻の匂ひを籠めた微風に送られて響いて來た。卑彌呼は薄桃色の染衣に身を包んで聽て彼女の良人となるべき卑狗の大兄と向ひ合ひながら、鹿の毛皮の上で管玉と勾玉とを選り分けてゐた。卑狗の大兄は、砂濱に輝き始めた漁夫の明りを振り向いて眺めてゐた。

「見よ、大兄、爾の勾玉は亥猪の爪のやうに穢れてゐる。」

と卑彌呼は云つて、大兄の勾玉を彼の方へ差し出した。

「やめよ、爾の管玉は病める蠶のやうに曇つてゐる。」

卑彌呼のめでたきまでに玲瓏とした顔は、暫く大兄を睨んで黙つてゐた。

「大兄、以後我は玉の代りに眞砂を爾に見せるであらう。」

「爾の玉は爾の小指のやうに穢れてゐる。」と、大兄は云ふと、その皮肉な微笑を浮べた顔を、再び砂濱の松明の方へ振り向けた。「見よ、松明は輝き出した。」

「ここを去れ、ここは爾のごとき男の入る可き處ではない。」

「我は歸るであらう。我は爾の管玉を奪へば爾を置いて歸るであらう。」

「我の玉は、爾に穢された吾身のやうに穢れてゐる。行け。」

「待て、爾の玉は爾の靈よりも光つてゐる。玉を與へよ。爾は玉を與へると我に云つた。」

「行け。」

卑狗の大兄は笑ひながら、自分の勾玉をさらさらと小壺に入れて立ち上つた。

「今宵はどこで逢はう？」

「行け。」

「丸屋で待たう。」

「行け。」

大兄は遺戸の外へ出て行つた。卑彌呼は残つた管玉を引きたれた裳裾の端で掃き散らしながら、彼の方へ走り寄つた。

「大兄、我は高倉の傍で爾を待たう。」

「我はひとり月を待たう。今宵の月は満月である。」

「待て、大兄、我は玉を與へよう。」

「爾の玉は、我に穢された爾のやうに穢れてゐる。」

大兄の哄笑は忍竹を連ねた瑞垣の横で起ると、夕闇の微風に揺れてゐる柏の根の傍まで續いていつた。卑彌呼は染衣の袖を噛みながら、速く松の茂みの中へ消えて行く大兄の姿を見詰めてゐた。



薏苡

夜は暗かつた。卑彌呼は鹿の毛皮に身を包んで宮殿からぬけ出ると、高倉の藁戸に添つて大兄を待つた。栗鼠は頭の上で、栗の梢の枝を撓めて音を立てた。

野兎は苘麻の茂みの中で、晝に狙はれた青鷹の夢を見た。さうして、彼は飛び跳ねると、苘麻の幹に突きあたりながら、零餘子の葉叢の中へ駈けこんだ。

「大兄。」

梟は木樓樹の梢を降りて來た。そして嫁菜を踏みながら群がる薏苡の下を潜つて青蛙に飛びついた。

「大兄。」

併し、卑狗の大兄はまだ來なかつた。卑彌呼は藁戸の下へ蹲踞ると、ひとり菘を引いては投げ引いては投げた。月は高倉の千木を浮かべて現れた。森の柏の静まつた葉波は一齊に濡れた銀の鱗のやうに輝き出した。そのとき、軽い口笛が草玉の茂みの上から聞えて來た。卑彌呼は

藁戸から身を起すと、草玉の穂波の上に半身を浮かべて立つてゐる卑狗の大兄の方へ歩いていった。

「大兄、大兄。」彼女は鹿の毛皮を後に跳ねて彼の方へちか寄つた。「夜は間もなく明けらう。」

併し、大兄は輝く月から眼を放さずに立つてゐた。

「大兄よ、我は管玉を持つて來た。爾は受けよ。」と卑彌呼は云つて大兄の前へ差し出した。

「爾はなぜにここへ來た？ 我はひとり月を眺めにここに來た。」

「我は爾に玉を與へにここへ來た。受けよ、我は玉を與へると爾に云つた。」

大兄は卑彌呼の管玉を掴んでとつた。

「我は爾に逢はんがためにここへ來た。爾は我に玉を與へにここへ來た。爾は歸れ。」と大兄は云つて再び空の月へ眼を向けた。

卑彌呼は黙つて草玉の實をしごき取ると大兄の横顔へ投げつけた。大兄は笑ひながら急に卑彌呼の方へ振り向いた。さうして、彼女の肩へ兩手をかけて、抱き寄せようとする、彼女は大兄の胸を突いて身を放した。

「我は歸るであらう。我は爾に玉を與へた。我は歸るであらう。」

「よし、爾は歸れ、爾は歸れ。」と、大兄は云ひながら、彼女の振り放さうとする兩手を持

つた。さうして、彼女を引き寄せた。

「放せ、放せ。」

「歸れ、歸れ。」

大兄は腕うでく卑彌呼を横に軽々抱き上げると、どつと草玉の中へ落した。さらさらと揺らめいた草玉は、その實を擦つて二人の上で鳴つてゐた。

「卑彌呼、見よ、爾は彼方の月のやうに美しい。」

彼女は大兄の腕の中に抱かれたまま、今は靜かに眼を瞑とちて彼の胸の上へ頬をつけた。

「卑彌呼、もし爾が我が子を産めば姫を産め。我は爾のごとき姫を欲する。もし爾が彦を産めば、我のごとき彦を産め。我は爾を愛してゐる。爾は我を愛するか。」

しかし、卑彌呼は大兄を見上げて黙つたまま片手で彼の頬を撫でてゐた。

「ああ、爾は月のやうに黙つてゐる。冷たき月は缺けるであらう。爾は歸れ。」

大兄は卑彌呼を揺つて睨にらまへた。が彼女は微笑しながら靜かに大兄の顔を見上げて黙つてゐた。

「歸れ、歸れ。」

と大兄は云ひつつ、彼女を抱いた兩腕に力を籠めた。卑彌呼は大兄の首へ手を卷いた。さうして、二人は黙つてゐた。月は青い光りを二人の上へ投げながら、彼方の森からだんだん高く昇

つていつた。

\* 『日輪』

## 街の底

その街角には靴屋があつた。家の中は壁から床まで黒靴で詰つてゐた。その重い扉のやうな黒靴の壁の中では娘がいつも萎れてゐた。その横は時計屋で、時計が模様はのやうに茂つてゐた。またその横の卵屋では、無数の卵の泡の中で禿はげた老爺が頭に手拭を戴せて坐つてゐた。その横は瀬戸物屋だ。冷淡な醫院のやうな白さの中でこれは又若々しい主婦が生き生きと皿の柱を蹴飛ばしさうだ。

その横は花屋である。花屋の娘は花よりも穢れてゐた。だが、その花の中からは時々馬鹿げた小僧の顔がうつとりと現れる。その横の洋服店では首のない人間がぶらりと下がり、主人は貧血の指先で耳を掘りながら向ひの料亭の匂ひを嗅いでゐた。その横には鎧のやうな本屋が口

を開けてゐた。本屋の横には呉服屋が並んでゐる。その暗い海底のやうなメリンスの山の隅では、瘦せた妊婦が青ざめた鱗かたはのやうに眼を光らせて潛んでゐた。

その横は女學校の門である。午後の三時になると彩色された處女の波が溢れ出した。その横は風呂屋である。ここではガラスの中で人魚が茹ゆりながら新鮮な裸體を板の上へ投げ出してゐた。その横は果物屋だ。息子はペダルを踏み馴らした逞たくましい片足で果物を蹴つてゐた。果物屋の横には外科醫があつた。そこの白い窓では腫はれ上つた首がけだるさうに成熟してゐるのが常だつた。

彼はこれらの店々の前を黙つて通り、毎日その裏の青い丘の上へ登つていつた。丘は街の三條の直線に押し包まれた圓錐形の濃密な草原で氣流に従つて草は柔かに曲つてゐた。彼はこの草の中で光に打たれ、街々の望色から希望を吸ひ込まうとして動かかなかつた。

彼は働くことが出来なかつた。働くに適した思考力は彼の頭腦を痛めるのだつた。それ故彼は食ふことが出来なかつた。彼はただ無爲の貴さを日毎のこの丘かみの上で習はねばならなかつた。ここでは街々の客觀物は彼の二つの視野の中で競争した。

北方の高臺には廣々とした貴族の邸宅が並んでゐた。そこでは最も風と光が自由に出入を蔽おほされた。時には顯官や淑女がその邸宅の石門に與へる自身の重力を考へながら自動車を駈け込ませた。時には華やかな踊子達が花束のやうに詰め込まれて贈られた。時には磨かれたシルク

・ハットが、時には烏のやうなフロックが。しかし、彼は何事も考へはしなかつた。

彼は南方の狭い谷底のやうな街を見下ろした。そこでは吐き出された炭酸瓦斯が氣壓を造り、塵埃を吹き込む東風とチプスと工廠の煙ばかりが自由であつた。そこには植物がなかつた。集まるものは瓦と黴菌と空壕と、市場の賣れ残つた品物と労働者と賣春婦と鼠とだ。

「俺は何事を考へねばならぬか。」と彼は考へた。

彼は十錢の金が欲しいのだ。それさへあれば、彼は一日何事も考へなくて済むのである。考へなければ、彼の病は癒なほるのだ。動けば彼の腹は空すき始めた。腹が空けば一日十錢では不足である。そこで、彼は青ざめた顔をして保護色を求め、蟲のやうに、一日丘の青草の中へ坐つてゐた。日が暮れかかると彼は丘を降りて街の中へ這入つて行つた。時には彼は工廠の門から疲勞のやうに雪崩なだれて来る青黒い職工達の群につつまれて押し流された。彼らは長蛇を造つて連なつて来るにも拘らず、葬列のやうに俯向いて静々と低い街の中を流れていつた。

時に彼は空腹な彼らの一團に包まれたままこつそりと肉飯屋へ這入つた。その調理場では皮をひき割かれた豚と牛の頭が眠つた支那人の首のやうに轉んでゐた。職工達は狭い机の前にすらりと並んで黙つてゐた。だが、盛り飯の廻りが遅れると彼らは箸で茶碗を叩き出した。湯氣が満ちると、彼らの顔は赤くなつて伸縮した。

牛の頭で腹を満たすと彼は十錢を投げ出してひとり路地裏の自分の家へ歸つて來た。彼は他

人の家の表の三疊を借りてゐた。部屋にはトゲの刺さる傾いた柱がある。壁は焼けた竈のやうで、雨の描いた地圖の上に蠅の糞が點々と着いてゐた。そこで彼は柱にもたれながら紙屑を押し除け、うすばんやりと自殺の光景を考へるのだ。外では子供達が垣を揺つて動物園の眞似をしてゐた。狭い路を按摩おんまが呼びながら歩いて来る。子供達は按摩の後からぞろぞろついてまた按摩の眞似をし始める。彼は横に轉がつて靜かになつた。外を見ると、向ひの破れた裏塀の隙から脹ふくられた乳房が一房見えた。それはいつも定つて横はつてゐる青ざめた病人の乳房であつた。彼が部屋へ歸つて親しめる唯一のものはその不行儀な乳房である。その乳房は肉親のやうに見えた。彼はその女の顔を一度見たいと願ひ出した。が、いつ見ても乳房は破れた塀の隙間**い**つばいに垂れ擴がつて動かなかつた。いつまでもそれを見てゐると、彼の世界はただ擴大された乳房ばかりとなつて薄明はくめいが迫つて来る。やがて乳房の山は電光の照明に應じて空間に絢爛な像を引き垂れ、重々しい重量を示しながら崩れた砲塔のやうに影像を蓄たくはへてのめり出した。

彼は夜になると家を出た。掃溜はきだめのやうなくぼんだ表の街も夜になると祭のやうに輝いた。その低い屋根の下には露店が續き、軽い玩具や金物が溢れ返つて光つてゐた。群衆は高い街の圓錐すうすいの縁から下つて來て集まつた。彼はきよきよしなながら新鮮な空氣を吸ひに泥濘どろの岸に擴がつてゐる露店の青物市場へ行くのである。そこでは時ならぬ菜園がアセチリンの光を吸ひながら青々と街底の道路の上で開いてゐた。水を打たれた青菜の列が畑のやうに連なつて、青い

微風の源のやうに絶えずそよそよと冷たい匂ひを群衆の中へ流し込んだ。

彼は漸く浮き上つた心を靜かに愛しながら、筵の上に積つてゐる銅貨の山を親しげに覗くのだ。そのべたべたと押し重なつた鈍重な銅色の堆積から奇怪な塔のやうな氣品を彼は感じた。またその市街の底で鎮まつてゐる銅貨の力學的な堆積は、それを中心に擴がつてゐる街々の壮大な圓錐の傾斜線を一心に支へてゐる釘のやうに見え始めた。

「さうだ。その釘を引き抜いて！」

彼はばらばらに碎けて横たはつてゐる市街の幻想を感じると満足してまた人々の肩の中へ這入つていつた。しかし、彼は人々の體臭の中で、なぜともなく不意に悲しさうに壓倒されて立ち停つた。それは鈍つた船の切斷面のやうにきらりと一瞬生活の悲しさが光るのだ。だが忽ち彼はにやりと笑つて歩き出した。彼は空場（空）の積つた倉庫の間を通つて來るとそのまま蒲團の中へもぐり込んで圓くなつた。

彼は雜誌を三冊賣れば十錢の金になることを知つてゐた。此の法則を知つてゐる限り、彼は生活の恐怖を感じなかつた。或る日彼はその三冊の雜誌を賣つて得た金を握りながら表へ出ようとした。すると、戸口へ盲目の見馴れぬ汚ない老婆がひとり素足で立つてゐた。彼女は手（て）にタハシを下げてしきりに彼に頭を下げながら哀願した。

「私は七十にもなりました、連合（つれあひ）ひも七十で死んで了ひまして、息子も一人をりましたが死



んで了ひました。乞食をしますと警察が許してくれませんし、どうぞ一つのタハシをお買ひなすつて下さいませ。私は金を持つてをりましたが、連合ひの葬式が十八圓もかかりましてもう一文もございません。どうぞこのタハシをお買ひ下さいませ。宿料を一晚に三十八錢もとられますので、それだけ戴けないとどうすることも出来ません。どうぞ一つこれをお買ひなすつて下さいませ。」

彼はその十錢の金を老婆の乾いた手に握らせて外へ出て行つた。彼は青い丘の草の中へ坐りに行くのである。

彼は何事を考へても頭が痛むのだ。彼は晴れた通りへ立つた。街は彼を中心にして展開した。街の角には靴屋があつた。靴屋の娘は靴の中で黙つてゐた。その横は幾何學的な時計屋だ。無数の稜の時計の中で、動いてゐる時計は三時であつた。彼は女學校の前で立ち停つた。華やかな處女の波が校門から彼を眼がけて溢れ出した。彼は急流に洗はれた枕のやうに突き立つて眺めてゐた。處女の波は彼の胸の前で二つに割れると、揺らめく花園のやうに駭蕩として流れてゐた。

## 判事の心理

その夜判事は床へ這入るとまたその日の審問を思ひ廻らした。——事實、被告は醉漢を突き飛ばしたものであらうか、それとも醉漢の死は被告の云つたやうに偶然の死であつたか、——それにしても被告は自身に危険な言葉に對して、なぜあれほど敏感であつたか、それにも拘らずなぜあれほど白々しく先手を打つて出て來たか。この二つの反した態度を審問に應じて巧みに變化さし得た被告を思ふと判事の疑ひは又深まりかけた。しかし、一方は落されまいとし、一方は落さうと努めなければならぬ場合があるだけに、それを感じた以上、守らうとすることに専念する被告の氣持はいづれ正當なものに違ひなかつた。所詮判事は晝の迷ひを迷ひ續ける以外になんの得る所もなくなつた。しかし、それかと云つて一度は判決を下さなければならぬ以上そのまま捨てて置くわけにもいかなかつた。これは判事を苦しめた。が、ここまで來れば、判事として最も正しい判決を下す方法は、逆に自ら自身の心理に向つて審問してみることでありと氣がついた。一體何故に自分は自分の疑ひを疑ひとして持ち始めたか。

何故自分は疑ひを疑ひとして深めてゆくことに努めたか。何故に自分は自分の疑ひの正當である可きことを確信したか。と、さう彼は考へ始めたとき、彼は自分が近年ひどく疑ひ深くなつて來てゐることを發見した。それには永年の判事生活から來る習慣が手傳つてゐることは勿論であるとしても、しかしただそれだけではなく自分の洞察力に對する深い自信と、それになほ油をかける神經衰弱とが原因してゐた。この外にまだ大きな原因が一つあつた。それは彼が前に現下の最も人心の歸趨に多く關係を持つ思想と犯罪との接觸點を檢討しようとして、社會主義思想の書物を選んだ時、彼の手に入つたものは「マルクスの思想と評傳」と云ふ書物であつた。これを見ると、彼は世界の人心が目下の所、資産家階級を撲滅しようとしてゐる無産階級の團流とそれに對抗して無産階級の力を壓殺しようとしてゐる資産家階級、絶えず争つてゐるのを知つた。そのときから、十數萬圓の家産を持つてゐる判事の感情は、彼の理智がマルクスの理論の堂々とした正しさを肯定すればするほど、その系統に屬する一切の社會思想に反感と恐怖と敵意を持つにいたつた。この彼の感情は頻々として起る様々な社會運動の勃發する度に、極めて敏感に恐怖をもつて激しく搖れた。このため彼の正しくあらねばならなかつた審問と判決との上に、どれほど多くの影響を與へてゐたかと云ふことを考へたことはまだ彼には曾てなかつた。しかし、今判事の理智はその方へと向つて來た。彼は前に被告が傭員の時間短縮を鐵道局へ迫つた事件に關してゐたと云ふことを知つたとき、直ちに自分の社會運動を防衛

したがる習慣的な恐怖が、審問の最初から自然被告を敵の立場に置いてかかつてゐたことに氣がついた。勿論役目の立場として被告に疑ひを向けてかからなければならぬのは分つてゐるとしても、しかし事實自分の疑ひはただ單にそのためばかりに深められてゐたとは判事にも思へなかつた。それを知ると、被告の貧しい上に勞働が激しければ激しいほど、他人から時間短縮の訴へに誘はれば教養のない程度に比例して、それだけ被告のその運動に熱情の出ることは別になんの不思議もないやうに思はれ出した。それに被告が無智であればあるほど富貴な蕩兒に反感を持つたに違ひないとの前の自分の推斷は、論理に於て一見正しさうではあるが、その實、それは逆に無智であればあるほど相手の富貴が直接に影響を被告に與へてゐない限り、なほそれだけ相手に反感を持ち得なさうに思へば思ふことが出来て來た。無論被告と醉漢とが争つた以上、そこに何かの反感のあつたことは疑へない事實ではあつた。だがそれとて、自分が被告に向けてゐた敵のやうな反感とはちがつて、被告の反感はただ自由な蕩兒を羨むありふれたものであつたにちがひないと思はれ出すと、今迄自分にしつこくつき纏つてゐた被告に對する疑ひも、故意に醉漢を突き飛ばしてまで殺すにいたる種類の反感であつたとは、どうしても思はれなくなつて來た。すると、ただ勝手に自分が被告を危険思想を抱いてゐる者として、ただ勝手に被告を敵の立場に置いてかかつた自分の恐怖心が判事には急に馬鹿らしく羞かしくなつて來た。それに判事は自分のために悲しみを投げつけられたそのときの被告のいかにも悲

しさうな顔つきを思ひ出した。これは判事の氣持を被告の孤獨な氣持の中へまづたく職權から離れて入り込ませるのに力があつた。それはいかに考へても淋しいものにちがひなかつた。總ての生活の樂しみを運命的に奪はれてゐる男、その運命をつき抜けて行けない男、それが絶えず最も樂しみの焦點である街の入口で、絶えずそれらの歡樂を眺め続け、そこへ入り込む者達のために危険を教へ續けてゐなければならぬと云ふ事は、とにかく想像しても最も苦痛な生活の一つであるのは分つてゐた。然し、判事は自分のただ一片の不純な恐怖のために、無罪で濟まされる可きその哀れな男を今にも重罪に落し込まうとしてゐた。自分のことを考へた彼は自分の罪を感じてひやりとなつた。

「無罪にしよう。無罪だ。」

さう彼はひとり決定すると、決定したと云ふことで俄に却つてマルクスの脅威から解放された。と、彼は急に掌を返すやうに爽快な氣持になつた。

「こりや俺の罪ぢやないぞ。マルクスの罪だ！」

彼は突然に大聲で笑ひ出した。

\* 「マルクスの審判」大正十二年（全集六）

## 悪魔

悪魔といふものは一見人に悪感を感じせしめるやうな馬鹿なものではない。これを狙つたものの最も急所を見抜いて飄然と近よつて來るが早いともう袖を靜かにひいて何となくなだらかに笑つてゐるものであるが、ポーラも確かに私に近よつて來たときもさうであつた。彼女とは私は彼女の直ぐ近所にゐた關係から附近の野や森や丘陵のあたりを歩いてゐるときをりに出逢つて顔だけは私ひとり早くから知つてゐたのである。ポーラは私と出逢ふ度に一度も私の方を見たくともなければ勿論私に注意したことなどあらうとは私は思はなかつたが、そこが私のやうにうすぽんやりしたものには分らぬポーラの悪魔らしいところで、悪魔といふものはこちらの氣附かないはるか前からもうちやんと愚かな餌食の周圍をぐるぐる廻つて十分に匂ひを嗅ぎ溜めてしまつてあるものだ。それがこちらが一度向うに氣附いたと知るや否やもう斷然と背中を向けて游泳し出すといふやうな手法にかかつては、——とにかく私とてもポーラを五月の若芽の煙つた襟くぬぎの林の中で初めて日没の最後の光を斜に受けて眺めた時は、彼女の水色のローブ

と金髪とが全く私とは關係がなく自由に歩行し續けてゐると云ふ事を眼にただけで、もう私はこの世に生を享けた喜びを感じて幾度となく、遠巻きにポーラのゐる林の周圍をなるたけ彼女には氣附かれない工夫をして廻り出した。それが滑稽なことにも全然私がそんなことをしてゐるといふことをポーラが知らないであらうと思つて私はしてゐるのだから、私だつて餌食を狙つてぐるぐるしてゐる悪魔の仕業とどこも變つたところはないのであるが、ポーラが異國の美しい少女だといふ事が昨夜見た夢でも思ひ出すやうでその時のぼつと田舎から出て來たばかりの私にとつてはなかなか捨て去り難い光景であつたのだ。私はそれからといふものその襟くもまの林の間を日没になるとポーラの匂ひがまだそこらの樹の幹や丘陵の草の葉の間に漂つてゐるやうな氣がして歩き廻つたが、もうそこでは彼女の姿を再びとは見かけずじまつて私が想像さへしなかつた狭い路地になつた坂の曲り角で突然ポーラの後姿を一瞬の間見かけてびつくりしたり、雑沓してゐる驕おごの昇降口で彼女にちがひない姿を眺めたりしたきりで、暫くの間はもう彼女と逢ふことなどは奇蹟のやうな氣もされてゐたのである。ところが或る朝のこと、私が井戸の傍で顔を洗つておもむろに身體を真直ぐに伸ばし、タオルを顔にあてて水氣を拭きとりながら、だんだんと眼をタオルの中から出していくと、ふと急に私はそのままぼんやりとしてしまつた。私の丁度さうして上げた眼の前方の教會の二階から、ポーラがちつと私のすることごとを見詰めてゐたのである。それも彼女はまだ閉つてゐるカーテンの隅を五寸ほど開けた隙から

顔だけ出して見てゐるのだから、私が偶然その日のやうな方面を向いてさうしてその日のやうな朝日の中で自然にとつた私の姿勢のときでなければポーラの顔なんて見附けられるものではない。彼女は私がポーラを見附けて動かなくなつたのを見てとると、驚いたことには彼女は自分の握つてゐるカーテンをじりじりせばめていつて最後のほんの僅かのひと隙からまた暫く私を覗いてゐるのである。昨日まではあれほど遠方のもののやうに見えてゐたポーラが忽然として私の目の前に現れたばかりではない、あんなにも異國のものとはばかり思つてゐた幻のやうな女が實にありありと私を見詰めてこつそりと物思はしげな動作をしてゐるのではないか。私がポーラにそのときから心を奪はれてしまつたことなんか平凡至極なことなのだ。しかし、それにしたつてポーラは私を見たのはそのときが初めてなのだらうかどうだらうかと私は考へたが、初めて私を見附けて初めてその場でそんなことなんかする女ならそれは悪魔だと思つたり、いや私がここから彼女を見たのは初めてなだけなので彼女は前から私をそこから見てゐたのだと思つたり、もし彼女がそんなに前から見てゐたくせにそれに今迄私が氣附かなかつたりしたのは一層私をびつくりさせていきなり神が私を神の方へ導き給ふためなのかと思つたり、およそその日は若者にとつてもしそんな日がなかつたら何のために青春があるのであらうかと思はせたりするに好個の日和で、太陽は五月の空に輝き、かつてポーラを見た野の櫟の林の中からはかげろふが立ち昇つて、ふと私とその野の中でその日急に立ち停つて考へたことには、深い夢



中な喜びといふものにはどこか薄氷を踏むがとき一沫の鋭い恐怖が潜んでゐるものだといふことであつたりしたのは、なるほど私もなみなみなならぬ喜びをその日一日中激しく感じ續けてゐたのにちがひない。その夜私はもうポーラが教會の牧師の娘だと知ると彼女に近づくことになんかして困難なことではなく、神さへいくらか信じるやうに見せかけて平然と嘘さへついてゐられたなら喜びを一層深めることは容易なことだと考へたので、もうくよくよと若者らしくないことなどは考へないことに決心して、ぬツとポーラの前へ現れてやらうと謀んで教會の門を潜らうと決心したのである。

\* 「悪魔」昭和六年（全集七）

### チエホフ「記念祭」の演出

私は前から自分の貧しい能力の中で、特に演出能力に最も信用を置いてゐた。今もさうである。なぜかと云ふと、私は自分の感覺の中、空間に對する感覺が最も敏感であるやうに思はれる。

たからである。私は何よりも建築を愛する。しかし、あの「記念祭」のデザインを見たときは、沈黙せざるを得なかつた。「これでは駄目だ。」と。もう初日までに時間が無い。

よしそれなら、クライマックスへ墜落する言葉の速力に、劇的感覚を出してやらうと私は一人前に考へた。

役者の「うまいまづい」はさう大きな問題ではない。そんなことは五年前の演劇だ、と日頃ひそかに思つてゐたこともあつたのだ。

しかし、俳優は映畫の白い幕ではなかつた。彼らは意志を持つてゐた。いよいよ開幕となつて、觀衆の眼光が海のやうに輝き出すと、俳優は個性のために分裂した。私はこの避く可らざる心理を發見すると、もう二日目から舞臺を見るのがいやになり、尾を巻き上げて返子へ去つた。

私はこの「記念祭」なるものを自ら選び出したものではない。時間がないので私にひつ附けられただけである。この故演出に對する計畫は初めから持つことが出来なかつた。

私は保瀬氏からは、最も身體の線の美しさを出すことに努めてみた。生方氏うぶかたには唐突の美を與へた。花柳氏には言葉の速度を、そして伊澤氏には熱の力を。此の四つの異つた力と美とを同方向に戰慄させて一つの力點へ落し込む。これが私のこの劇の時間と空間とに對する計畫であり、關心であつた。さうして、これら四つの美と力とは、四人に應じそれ相當の適役でもあ

つたのだ。

無論ロシアの風俗と習慣と情勢とは最初から抹殺した。私はチエホフの劇をやりながら、チエホフをやらうとは思はなかつた。なぜなら、チエホフは、決して彼自らが日本語でこの劇を書いたとは思へなかつたからである。この故もし私のこの演出のこの部面を、攻撃するものがあつたとすれば、私はそのものに向つて次のやうに反問する。

「それなら、露西亞人は、總てみんなに下手な日本語を用ひるであらうか。」と。

しかし、果してこの反問が詭辯であるなら、私はその者に向つて再び詭辯を弄うつするより仕様がなない。

「そんなら君は露西亞語を使ふが良い。」と。

しかしこの戯曲そのものが、露西亞の生活を表現せんとした意志を最も明らかに現はしたものであると云ふなら、私はこの「記念祭」を悪作だと主張する。すでに私がそんなに悪作だと見たとしたなら、チエホフのために、チエホフの拙劣さを私の拙劣さに變へんと努力した私の演出的態度は、先づ、謙遜以外の何物でもないであらう。さうして、私はこの謙遜の美のもとに勇敢に俳優と戦つた。負けたものは私である。勝つたものは俳優だ。さうして、俳優をして勝たせたものはなんであつたか。それは觀衆に他ならない。なぜかと云へば、俳優は觀衆の眼光の前では、嘘をつかずに、「地」を出すからだ。

それでいいのであらうか。しかし、それより仕方がないではないか。私がなほ俳優と戦ふためには、少くとも、私が戦ひ得られるまで、彼らが私の失敗をさへも彼らの成功に變へんと努力し、私が彼らの成功を彼らの成功と思ひ得られることを、私をして希はしめる俳優の出現を待つてでなければ、希望がない。

保瀬氏と生方氏とは、「記念祭」には失敗した。なぜかと云へば、彼らは男であつたからだ。男はいつも獨立性を持つてゐる。一つの劇の舞臺に於て、その全體の調子から獨立性を持つものは拙劣である。獨立性は、特質を意味しない。特質とは、その全體の調子を、より完全ならしめんがための特質である。劇に於ける俳優の特質は、獨立性をより充分に壓へることだ。自己の獨立性を壓へ得る能力の所有者でなければ、名優とはなり得ない。

劇道に於て、稽古と云ふ言葉がある。稽古とは、俳優の獨立性を封塞する慣性を、より強めんとする一つの運動に他ならない。この運動を最もよく心得てゐた俳優は伊澤氏だ。

劇場に於て、觀衆と云ふ存在がある。この存在を、最も愛したものは生方氏だ。  
保瀬氏は舞臺の眞中で、絶えず、「私は日頃の練習も忘れまして。」と叫んでゐた。

自信と云ふ心理がある。この心理を利用するために、私は花柳氏をただ舞臺の上へ赤い着物を着せて抛り出しておいただけである。

私の最も困つたのは、畑中氏だ。この人は自身の役を輕蔑した。自身を輕蔑するほどの、利

用の仕方の少ないものはない。私はこの人と戦ふ戦法として、頭から零點をつけてかかつた。

しかし、さて、劇場は、と見ると、あの奥行のない舞臺である。活動出來得る舞臺の奥行は、尺で計つて一間だ。一間で何が出來るか。赤い着物を抛り出したとて、動けば花瓶の花をひつくり返す位が美しさだ。

「人々よ、もう眼を皿のやうにすることだけは、やめてくれ。」と云ひたくなつた。そこで、私は觀衆の眼をくらすために、電氣を點けたり消したりやつてみた。すると、批評はかうである。

「あんなチエホフはあるものか。」と。

なるほど、あんなチエホフはどこにもない。だが、チエホフとて聰明なことは確かである。

あの狭いホテルの舞臺に立てば、「舞臺の狭さに就いて」と云ふ講演位はやつてくれるに定つてゐる。

\* 「あんなチエホフ」より。大正十五年（全集十）

「記念祭」は一八九二年の作で一幕物の喜劇である。

これは帝國ホテルの演藝場で新劇協會が上演した際の演出手記。畑中翠坡、伊澤爾若（物故）、花柳はるみ、生方賢一郎、保瀨薫の諸優の出演であつた。

「舞臺の狭さに就いて」云々はチエホフに「煙草の害について」といふモノローグの喜劇のあるところから轉用した洒落。

## 天才と象徴について

先づ、どんなことが面白いか、と私はこの人生について考へる。が、何も無い。しかし、喜ばしき作品に出逢つたとき、私はこの生活が有難くなつて來る。私は膝を叩いて賞讃せざるを得なくなるのだ。しかし、それならいかなる作品が私の心を喜ばせてくれるのであらうかと云ふことになるのだが、目下の所美い作品以外に多くはない。大いなる精神、そんなものは、この地上には有り得ない。ただ有るものは、藝術の象徴性だけに限られる。技巧だ。ここでのみ精神は不可思議な光を發して來る。技巧の拙劣な所に何故に高貴な藝術的人格が働き得るか。もし、拙劣な技巧の作品に涙を流し得るものがあつたなら、それはそのもの下劣さを物語ることになるだけだ。だが、下劣な心情はいかなるものと雖も所有してゐる。この故にわれわれは、われわれ一個の中に於て、常にわれわれ自身を批評すべきだ。しかしながら、われわれは、

一つの優れた象徴に出逢ふと、われわれ自身の心性に向けられた批評心を紛失する。ここに象徴の有難さがある。このみでわれわれは、恍惚たり得る幸福な生活を感じる。それなら象徴とはなにか。象徴とは、批評及び説明能力の以外に遠くあるものだ。曾て、象徴を説明し得たものは、誰もない。ここに不可思議な藝術的獨特の世界がある。凡そ世の美學は、この象徴を説明せんがために、「無限の美の段階」を與へたのみで沈黙した。しかし、「無限の美の段階」とは何か。これは、知識とは有限であると云ふ反語でしかあり得ない。もし人々にして自己が天才であるかないかを反問しなければ、自己が象徴を感じ得られるか否かを試みてみれば良い。象徴を感じ得られれば、その人は天才にちがひない。もしこの説明が間違つてゐるとするならば、それなら、天才とはいかなるものを云ふのであらうか。私は文學に興味を起し得る人は、多くの場合、天才の所有者だと常に思つてゐる。なぜなら、理論で感じ得られない多くのものを、感じ得られると云ふ人々は、とにかく凡人ではないからだ。かくの如きものを天才と呼ばずして、どんなものを天才と呼び得るのであらう。この一點を明瞭にしようとするれば、所詮「無限の段階」を造つて誤魔化さざるを得なくなる。プロレタリア文學と云ふものが、近時理論を先陣として現れた。これは、その理論に従へば、最早や文學ではない。そこに、彼らは彼らの誇りを持つべきだ。だが、文學に興味を起し得るものは、多くの場合、象徴を解し得る天才者だ。この現象の味を解し得るものの集合體である文學人に取つては、いかに堂々たる理論と雖も、

それは、ただ領き得る理論たるに過ぎなくなる。一度び象徴の味を解したならば、最早やそのものは、いかなる理論にも動かされ得なくなる。なぜなら、象徴とは、理論以外の詩であるからだ。この詩と云ふ不可解な魅力を感じたが最後、彼は、アナキスト以外の何者でもなくなる筈だ。彼にとつては、そのとき、詩が、象徴が、主客合一の神になる。この絶對境に入り得られるものこそ、眞の世界主義者にして無政府主義者であり、貴族主義者にして、段階を有せず、一切の規範は自ら圓轉たる調和の階音となつて來るであらう。もし、これを偽りに思ふ者があるなら、それなら問ふ。一體、詩とは何か。この問ひに完全に答へ得るものがあつたなら、そのものは初めて、美學の創始者であり、完成者にちがひない。しかし、幸ひにして、そんな不都合極まるものは、まだ曾て一人もなかつたことは確かである。しかし、この朦朧たる象徴の世界の中に、確然と現れたのが社會主義文學だ。だが、これはどんなに大呼すると雖も、要するに理論である。理論は象徴の歩手前のもので、しばしば人々の言葉はそこまで歩いて來た。だが象徴とは、彼らの歩いたそれから向うに光り輝き渡つてゐる怪物である。



## 沈黙と饒舌

よく饒舌<sup>しゃべ</sup>る年頃の男と女が今日はどちらも黙つてゐた。二人は戀人同志でもなんでもない。

男——なぜ、さうあなたは今日黙つてゐるんです？

女——あら、あなたが黙つていらつしやるんぢやないの。

男——いや、あなたは、僕が他の女と結婚すると云ふのを聞いて黙つてゐるんでせう。

女——私はまた、あなたに、もうお話するより、しない方が女の方にいいと思つて黙つてゐますのよ。

男——さうですか。僕はまた、あなたに話しかけるより、こんなときは話しかけない方がいいと思つて黙つてゐたんです。

この二人の男と女の場合、そのいづれの會話が本當の氣持を傳へたか、これはいかなるものと雖も云へなからう。それなら、こんな場合の男と女の本當の氣持は、いつたいどうすれば知ることが出来るのだらう。これまた、恐らくどのやうな方法をもつても、何人と雖も知ることが不可能なことになりがひない。——ただこれだけの簡単な沈黙の原因を。それなら、われ

われは、この人生に於ける山のごとき沈黙と饒舌を、どうして裁かなければならないか。もうそこまで来れば仕方がない。ただ、臍<sup>ホソ</sup>ろげな感覚があるだけだ。だが、われわれは、どうしてこれほど分裂した代物なのであらうか。——心——どうもこの怪物だけは、いつまでたつても分らない。この分らない所につけ込んで、得體の知れない色男が這入つて来る。

——俺は、マルキストだ。

——俺は、アナーキストだ。

——俺は、リアリストだ。

——俺は、ロマンチストだ。

——俺は、ダダだ。

——俺は、ニヒリストだ。

——俺は、フェミニストだ。

——俺は、

——俺は、

まあ、勝手に演説をやつてくれ給へ、その中にたつた一つ、死ぬことだけは、絶対に明瞭なことだ。

## 父の愛情

朝は早くて八時起床。たいていの日は寢床の中で、眼を醒ましてから一時間程はちつとしてゐなければ、もうその日は氣持の整つた仕事が出来ない。一ばん頭の活動してゐるのは、だから私は朝の床の中の一時間である。書き物をしてゐるのもその朝の一時間にくらべれば運動してゐるみたいなのだ。その後は、私は馬鹿同様だ。ところが、この馬鹿の時間は世の中で絶えず使はなければならぬ大切なもので、たいへん私は都合悪く出来てゐると、いつも思ふ。このため私は初對面の人に逢ふことか、會合に出るなどといふことは嫌ひである。私は旅行に出たり犬を飼つたり競技をしたり、人の喜ぶことがどうにも喜べない。そのくせ、私はやはり人中に混つてゐることが好きである。ひと頃、麻雀がたいへん好きになつたことがある。あれは利用の仕様によつては精神の修養になることもこの上もないと思つた。しかし、この頃はあまりやらない。子供のこと、これは考へれば考へるほど私にはむづかしい。これこそ考へ出したらきりのないことだと恐く思ふ。考へる部分が深い。私は未だに子供をどんな風に育てよう

とは考へたことがない。たださきの見通しを子供につけて教育するといふことはなかなか危険なことだと思ふので、その危険をなくするためにも、父は父らしい愛情をもととして、そのときばつたり、叱つてやつたり賞めてやつたり自然にしようと思つてゐる。それ以外には私は極力スパルタ式をとらうとも考へる。私は子供が外で泣かされてゐる聲を聞くと、思はずそれに耳を立ててゐる自分に迫害を加へる。男の子供は少々の負傷もして泣かされて來なければ、それは素質が良くない限り、つまらぬ人物になるのは分つてゐる。いつそつまらない素質なら、どしどし外からきたへなければと、私はいつも思ふ。父親の愛情は、先づ何より世間のやうに厳しく激越でなければ駄目だと思ふ習慣である。子供が大きくなつて他人を恨むそれだけ、小さいときから父親を恨んでおく方が、子供には良いことにちがひないのだ。

＊「日記」昭和六年（全集十）

## 鬼

婦人に於てもさうであるが、大人にならうとし、もしくは自身が大人だと感じるときは何ものにも勝つた楽しみを身に覺えるときなのであらう。男でも酒を飲み、酔ひの廻り加減になつた人物の陶然たる面貌には、ああ、俺はたうとう大人になつてしまつたぞといふ、凄じい悪鬼に似せた朦朧たる幻影に浮かれてゐる喜ばしさが感じられる。自意識の過剰に苦しむ高い心理も、そのわづらはしい心を住まはさねばならぬ態度の決定を強ひて酒に藉りる樂しさは、この悪鬼に似た作業の失敗からか着服からか。私は酒飲みにつくざらざらした赤鬼の攻撃の刃やじばをこのとき眼光から感じたことが度々であるが、いつも心はその度に成長するのを覺えた。酒席にあつてはデモンといふ奴は酔ひの廻つたものと廻らざるものとの差の中で、方向を定めずに糊のやうにべたべたとところかまはずひつついて音を立てるものである。

鬼を廻避するところくなことはない。良道はこの憎々しい困難以外のところにはないとさう思ふやうになつてからは、私はスランプに落ちる不安さがなくなつてしまつた。ただ不安さは、おのれの定めてしまつた日々の創作態度を實行に移していくことによつて生じる自身の未來が、はたして自身の未來であらうかどうかといふことである。私は自身の極限を見たとき錯覺したときその錯覺もしくは幻影を正しいものと信頼するよりも、私は自分のそこまで行きつき得るにもつと適當したその場の一段階を登るまでだ。これが私の終始一貫して來た決心である。それゆゑ、自分の現在の作物と行爲とについては私は少しも誇りをもつてゐない。自然の攝理とそ

れを巡つて進行する自身の作物との焦點の合ふときは、五年に一度の割合ひでめぐつて來てゐるやうに思はれるが、しかし、この稀な會合の一點を外れると再び亂脈の調子をとりつづける。個人の進行と自然の進行の度合ひは、常に一致してゐるものと思へない以上は、個人の能力の窮極といふやうなものは、そのものがその窮極を狙つたときに於てすでに自身の能力の死を意味してゐるのではなからうか。私の不安といふのはこのことを云ふのであるが。——もしさうでないなら、作家にスランプといふ曖昧模糊とした現象は起らない筈である。

素質といふやうな有難い有益なものはあるものだと思はない。結極は努力ではないかと思ふ。私たちの豫期するがやうにそんな素質が有益なものなら、誰が考へるといふ苦しみを忍耐するであらうか。考へないところに素質の種を蒔くといふやうな無益なことを、自然がする筈はないのである。感覺といふものは賭博みたいなもので、當るか當らぬかの二つの中のどちらかであるから、脱れば脱れたで感覺は早やその次の仕事に従事し、二度と同じ失敗は繰り返さない急ぎ足で次ぎの新しい失敗か成功にとりかかるのである。素質といふものは多くの場合、この危険な賭博者に與へられた名前である。われわれ讀者は作者の感覺が正確であらうとなからうとかまひはしない。次の感覺が失敗したか成功したかを見れば、後は自分の感覺の賭博に歸つていくだけなのだ。

傑作といふものは自分が企畫したのではなく偶然の參與を受け入れる寛大にして誠實な精

神の發露した場合に限られるものである。それに反して愚作は誠實の寛容さを突つばねた作家的エゴイズムの勝利を博した場合である。フローベルの作品はすべてが傑作にもかかはらずまた考へやうによつては總てが愚作である。ジイドの作品は傑作であらうと愚作であらうと同じことだ。作品に上下がないのではない。愚作には傑作を書き得た頭腦の規定をなすところのもつとも融通のきかぬ力がそのまま出てしまつたのである。このやうな場合は他人を動かす必要は作者には少しもない。ただ自分を動かせば事すでに足りてゐる。前進を望み、結果よりも過程に重要さを認めるものは愚作を書かねば前進することは不可能なのだ。それでなければ跳躍に踏切る刹那の踏み場所が見つからないのである。

\* 「覺書（三）」昭和九年（全集十）

## 武藏山

昨日と今日、私はふと氣がつくと、武藏山のことばかりを考へてゐるのだ、一昨日の武藏山

The very omission is  
always deeply rooted in  
my mind. I am quite for him.

は初めて横綱になり、その土俵入も太刀持を従へ、露拂ひ凜々しく、堂々として、各新聞紙上の賞讃の的になつた。ところが、蓋を開けて三日とたたぬうちに、もう黒星が二つもつづけさまに點いてゐる。私は武藏を特に最良とはしてゐない。けれども榮光を得た最初の運命には、榮光を得させたく思ふ。新聞も戦ふ前の武藏を批評して武藏莞爾たりと書いてあつたが、三日後の今は何も書かぬ。恐らく記者とて私の今の彼に對する同情と同じであらう。しかしもしこれが武藏が十年も横綱を續けた後の、衰弱の一步前の敗北であつたならどうであらう。各新聞の筆法は鋭く彼を叩きつけるにちがひあるまい。ところが横綱になり立ての彼の敗北には人心不思議と武藏を倒した者を憎むのである。

相撲通の話によると、昔から横綱に成り立てには、不思議と誰も負けるものと云ふ。各力士の敵愾心を柔げるために、最初に負けることが、自然の與へた横綱への力であらうか。緊張のために敗北するといふ理由は、ただ單に物理的な力の法則の顯現したためばかりとは思へない。戦ひといふものは、三度目は敗けてこそ強くなるのだ。



## 文人墓地

五月一日。曇つてゐる。風邪氣味だ。

午後初めて前の廣い墓場の中へ這入つてみた。モウパッサンの墓がある。花の落ちた薔薇が墓石に延び上つてゐる他に、光澤のない名の知れぬ汚ない花が咲いてゐる。死ねばかうかと思ふ以外に、急に作家の苦しさ<sup>が</sup>身に滲んで、急いでその傍から遠ざかつた。

次には、行くまいと思つたポードレルの墓の前へ、出てしまつた。このポードレルの石像は、よく出来てゐるので有名だが、私はこのポーズが嫌ひである。顎を支へて前方を睨んでゐる恰好は、散文家ならしない。陰鬱な樹の下影に寢像もある。しかし、私には、裏の石塀に滲んでゐる鐵錆てつさびの方が、はるかに彼の詩を読む思ひがした。

微熱があるのであらうか。押し詰つた墓石の寒さが、足もとをぞくぞくさせる。落ち塊おちかたつてゐるブラタインの花の上を、足早やに通りへ出ると、街はメーデーだ。寒い。

一緒に行つた樋口君が、モウパッサンの墓にあつた花を折つて、私のポケットに押し込んで

くれたの  
で鈴蘭を

五月一

、  
經衰弱に

シャン

と、第一

んな男が

男女の婚

フラン

える。お

一度もお

てみてお

に浸つて

日本にはなくなつて來てゐるのだ。うす黄い皮膚の色の美しさは、白色の中に混つてゐると、澄い銀のやうに見えることも、たまにはある。

低い體軀にも、それに物云ふ他の高い上脊をかがませて、ねぼり強く根を張つた松に見えることもある。

五月四日。ロンドンへ來た。ドーバーを越した飛行機の中で、足が側面の立壁に觸れると、電氣にかかつたやうな振動を身に感じ、吐氣をもよほしさうだ。日本の飛行機では、こんなことは一度もなかつた。これを人に話すと、その人の云ふには、日本の旅客飛行機に使用してゐるモーターほど優秀なものは、世界にはないとの事だ。それも國産である。バイヴレイションが違ふのだ。(パリを九時出發、機上一時半、十二時にロンドンのピカデリ着)

日々の南條氏に、市中と郊外を自動車で廻つて貰ふ。前日からの睡眠の不足で、臉が垂れさうだつたのに、郊外へ出ると眼が醒めた。新緑の廣大な曠野に連り咲いた、えにしだの金色の花の群團。——旅から旅へさまよふものの、第一に眼を喜ばすものは、やはり花である。ロンドン市中の建物は、大阪の堂島に似てゐる。石柱が太く重い。テームスの景觀も丁度中之島だ。實質一點張りで、裝飾は堂々たる威嚇となり、大國の鷹揚さの裏影から、どこことなく氣ぜはし

い煙が立ち昇つて感ぜられる。

五月五日。ペン・クラブの招待日だが、招待の最中に、出席者の一員が南條氏に、これを英國のペン・クラブだと思つてくれては困ると、打ちあげたさうだ。會の計畫者がひどく不自然なことをしてゐるのだ。

五月六日。市中を一人歩いて見る。タクシイはいくら手を上げても停らず、バスに乗ると、反対の方角に乗つて降ろされたので、またてくてく歩いて宿へ歸る。宿の庭には梨と林檎の花が満開だ。私はこの庭ほど好きな庭はまだ見たことがない。トキハの別館であるが、開業してから一二ヶ月よりならぬとの事だ。屋敷は富豪の家だつたらしく、荒れてはゐるが風趣がある。庭は館の四倍ほどの廣さで、一面の草の中に衰へた噴水と、耳に囁き合ふ古びた男女の石像が一つあるきりだ。アツシャー家の没落を眼のあたりに見るやうだ。絶えず音なく散つてゐる梨の花や、木の下影に取り包まれた林檎の花の中で、山鳩はときどき重い羽音を立ててゐる。壊れかかつた煉瓦の塀に薔薇蔓が這ひ上り、樹幹を廻つて出て來た老人が、赤子を抱いたまま林檎の花の下で眠つてゐる。客は私と細菌學の博士とただ二人きりである。博士は私に晝から夜の一時まで、細菌學の話をしてくれる。

五月七日。雨かと思ふと、噴水の飛沫だ。梨の花は一夜の中に散つてしまつた。もうパリへ歸らうと思ふが、この宿にゐると、外へ出る氣にもならぬ。終日靜かに疊つてゐる。二十幾年この方水夫をして近海を廻つてゐたこの家の老爺おやぢは、ごほんごほんとかき込みながら、毎日イギリスはこの天氣でさといふ。庭に出ると、あたり一面の青葉の中に、まだ淡桃色の林檎の花が残つてゐる。スコットランド行はもう思ひとまつた。

先日パリのドウムの群衆の中で、茶を飲んでゐたとき、三つ四つ向うのテーブルにゐたアメリカの婦人と、ロンドンのピカデリの群衆の眞中で、ふと出逢つた。物も云つたこともないのに、向うも覺えてゐたらしく、につこり笑ひつつ、ハロウと聲をかけて行きすぎた。ロンドンの良い印象の一つである。

五月八日。疊つた市中を歩いてみる。どこを歩いてどこへ出たのか分らない。重いオーバーを脱いだり着たり、五六度もしただけだ。同じやうな建物の間を、歩き疲れるまで歩き、公園らしい青草が見えると立ち停るのだ。なんのために街を歩いてゐるのか分らない。今日はパリへ歸らうと、街を歩く度に思ふのだが、宿へ歸ると庭の美しさと家人の素朴さに、また一日と

日を延ばす。

五月九日。どこ一つ見る氣も起らずロンドンを立つ。十二時半。ドーバーの上は霧ばかりだ。霧は茫々ぼんぼんと際限なく續いた雪原と同じだ。太陽の輝いた青空と雪原の間を、コーヒーを飲みつつ飛ぶ。フランスの下界は整然とした方形の群團だが、イギリスの下界は雲形だ。三時にパリへ着く。なんと氣樂な都會だらう。初めて家へ歸つたやうな氣持になる。私のロンドン行は、パリを見直すために行つたやうなものだ。

一週間見ぬ間に、マロニエの花は咲き切つてしまつてゐる。グランブルヴァールからサン・マルタンまで歩きつづけ、シャンゼリゼエへ引き返し、飽かず街々を眺め廻した。六月になれば、もう一度ロンドンへ行き、イギリスを見直さうと思ふ。

五月十日。ロンシャンの競馬を見に行く。この競馬は花見遊山に行くのと同じだ。青芝の上に寝轉びながら、競馬場で小説を読み耽つてゐる婦人もある。馬券が安く、五フランからあるので、狂人沙汰にもならず、のどかに半日をすごすことが出来る。歸途、シャンゼリゼエのロンパンで休む。

一面に穂を揃へたマロニエの眞白な花の間で、霧を噴き塵かせてゐる噴水。エトワールから

下る散歩道は、日曜のこととて、流行の春着の流れ下つて来る河だ。

五月十一日。ローザンベリへマチスの展覽會を見に行く。今年の製作品が重なるものだ。またマチスは變つて來た。先日ピカソの會を見たときには、いかにしてマチスはピカソの豪宕な變化に太刀打ちするかが、ひそかに私の興味であつたが、やはりマチスも大天才だと感歎した。この二人の競ひ合つた結果は、セザンヌを第三位に落し始めて來た。ピカソの本格の追求に對して、マチスの豊かさは、いささか横に外れた傾きを感じさせるが、美しさではマチスが第一等であらう。今年のマチスの主調色は黒色である。なんとなく、日本婦人の黒襟の華美な着物を見てゐるやうだが、しかし味には落ちてゐない。

五月十二日。今日もまたマチスを見に行く。繪畫も文學と同じだと、つくづくと思ふ。日本には文學にも繪畫にも、まだ本格がないのだ。そのため、直ちに味に墮落する危険性が、何人にもあるのである。心すべきことだと思ふ。これに藝術家が足をすくはれたら最後だ。しかし、今は、こんなことを書くのはやめよう。

五月十三日。珍らしく晴だ。今日もマチスの展覽會のある前まで來る。いつたい、この街ま

で二里はあるのだが、毎日來たくなるのには理由がある。このリニウ・ラ・ボエツシイから、サントノレの、長さ十町足らずの通りは、パリの傳統の一番濃厚に出てゐる町であるからだ。人通りは少く、美しさは平凡で古く、何の目立つたものはないにも拘らず、ショウウインドウに出てゐる品物は、手袋一つにしてからが、純藝術品ばかりだからだ。恐らく世界最高の通りであらう。パリ全市でこの細長いさびれた通りばかりが、パリを私に最もよく物語るのだ。東京で云へば藥研堀やげんぼりから人形町の裏町へかけた所である。私は東京市中で、純粹の東京の品物を賣つてゐるのは恐らくここだけだと思ふが、これがパリ全市では、サントノレからボエツシイにかけて、十町足らずのこの平凡な通りだけだ。その他は外國人や大衆の愛する町である。

私にも一つ好きな通りがある。それはルクサンブル公園の外郭に沿つた、オーグスト・コント通りだ。人は殆んど通らないが、夜のこの通りの美しさは神氣美儉かえけんたるものだ。

一丈餘りの高い鐵柵に沿つて、黒々としたマロニエの太い幹が立ち並び、鬱蒼とした樹木の下を、こつこつと稀に歩く人影が黙りこくつてゐる。古い瓦斯燈が青く輝き、片側の建物は盡く窓を閉ざしてゐる中を、自分も黙々として歩く寂寥は、物凄く身慄ひのするほど美しい。ふと御影石の滑かな石垣に手を觸れると、甘酸っぱい花弁の腐りかけたのが、指先にくつついて來る。人は死ぬ前には、恐らくこの通りの寂寥たる光景と似てゐることだらう。私はここを通



る度に、パリもこんな所のある限りは、早やお終ひだと思ふ。他の町は見ずしても想像の出来る所が多いが、ここだけは末期まっごの世界だ。市中の峡谷。

パリの中で、最も俗つぽく、しかも、何人が見ても一番高雅な所は、ロンパン・ゼ・シャンゼリゼエであらうと思ふ。文化の最高に位置するものは、なんとなく俗つぽくなければ、價値を失ふものだ。私は好みを殺して、ここを最好と認める。好みは、所詮その人間の弱點から來てゐるのだ。

コンコルドの廣場も、私は人工の美の極を盡したものと思ふ。坦々たんたんとして光り輝いた廣場に、群がつた彫像から噴き上る幾多の噴水の壯麗さ。これを東洋のどこかにその比を探すなら、奉天の北陵か、日本でなら京都の東本願寺の屋根である。深夜に森林の中を一人歩く妻さより、コンコルドの廣々とした人工の極みの中を歩く物凄さは、はるかに人々を興奮させることだらう。私はここに來て眞の感傷といふものを感じた。自然といふものは要するに、自然なだけだ。

私は今日佐分眞君の自殺を聞いた。この人からは三通の紹介狀を貰つて來たが、まだ二通は残つてゐる。眞面目な字を書く人だ。牧野信一君も先日自殺したが、二人とも、最後に私の逢

つたのは、私の出發する四日ほど前だつた。それも日はそれぞれ一二日違ふのだが、逢つた場所は揃ひも揃つて、銀座のエビスビールの前である。それも夜の群衆の中で、通りすがりのこととて、互に手を上げただけである。二人とも共通に、世にも快活な笑顔をし、同じポーズをして通つていつた。

私はオーグスト・コント通りの峡谷の中を通る度に、二人の冥福を祈らうと思ふ。

## ヴンセンヌの森

五月十八日。樋口、岡本兩君とヴンセンヌの森へ行く。一昨日から續いてゐる暑さが、今日もつづく。廣い森の中は人でいつばいだ。人のゐない奥深くへ遣入つて休まうとする雑木の中には、あちらにもこちらにも、男女の二人づれが横になつてゐる。私たち男三人は、森をけがしてゐるのぢやないかと思ふほどだ。小さくより固つて、ただ梢を眺めてゐるのだが、誰も沈んで物云ふものもない。樋口君はときどき溜息をもらして、早く日本へ歸りたいと云ふ。岡本君はむつつりして、木の葉をむしり取つてゐるばかりだ。私はふとこの森を戯曲の一場面に

したくなつて、ノートを取る。パリ市民の理想は、日曜日になると、森へ男女で來ることだと云ふ説も耳にした。もうただ、野蠻になりたくて仕方がないといふパリ人の苦しみ。

第一の自然を征服し、第二の自然の技術を盡し、第三の自然である思想を、窮極へまで押し縮めたパリでは、どうかして第一の自然へ返りたく、野蠻な扮装をしてゐるのだ。これが第四の自然である。

五月十九日。立體活動寫真といふのを見に行く。ところが、これは二三日前、初めてこの地に現れたものだが、日本では、一ヶ月前に出でゐるとの事だ。發明國が他國に先に幕を切らせるところ、なかなか油斷がならぬと思ふ。

酔つばらひは、フランスにはゐない。智能の低級な者でなければ、酔つばらひはないといふ見解を持つてゐて、そんな者が現れると、直ちにカフェーから掴み出されてしまふ。ところが、居眠りをしてゐても、掴み出される。居眠りと酔つばらひは、馬鹿者の證據になつてゐる。

どちらを向いても、美人揃ひといふものは、美人が一人もゐないといふ事と、同じ事だ。

この國の運轉手や給仕には、一國の總理大臣同様な恰幅容貌の男が多い。ところが、この大臣は、日本の給仕のやうに寒げな顔をしてゐる者が多い。筋肉の量は、精神の量と反比例してゐるやうだ。

夜、夕食を終へてから街を歩き、十時ごろからブローニユの森へ行く。三方の道から、自動車<sup>自動車</sup>の群が陸續と森の中へ繰り込んで行く。その夥しい車は、どこへ向つて散つて行くのか分らない。森の一隅にある露天のカフェーの上だけは、紅の霧を流したやうにぼうと明るい。森の中の湖水へボートで出る。眞黒な水面を揺れる紅の圓い提燈、擦れ違ふボートを見ると、どれも男女の組だ。提燈のほのかな光では、顔は見えない。停つてゐるボートは、島の木蔭へ乗り捨てていつた客たちのものばかりだ。ぼんやりと待つてゐるボートの紅提燈は、カーテンを閉めた窓のやうになまめかしい。白鳥がぼとりと重く、暗い水面へ飛び込む。垂れ下つた樹の枝が顔を撫でて通り過ぎる。藻の匂ひが脂粉の匂ひと混つて来る。ときどき、男ばかりのボートが黙々として行き過ぎる。なんとなく粹なものだ。岡本君が手を上げて、敬意を表し合ふ。

湖を一周して島へ上る。木蔭を歩きたくなつたが、水鳥を驚かしてはと、やめて旗亭へ入る。

この旗亭では、先日コーヒーを飲むとき、落ちかかるマロニエの花を追ふのに忙しかつたが、今は青葉ばかりが厚く重い。レモンを割ると、強い匂ひに、日本の青葉のところが身にしんで来る。

五月二十日。ルーアンへ行く。こちらシャヴンヌヤラシーヌの生れた所。ジャンダークが火刑に處せられた町でもある。

フローベルのボヴリイ夫人が、附近の村から出て来て、愛人と馬車に乗つて通るのもここである。

パリからルーアンまでバスで三時間。沿道の田圃はノルマンデイにかかつてゐるので、フランス特有の明るい日光が漲つてゐる。マダム・ボヴリイが靴を磨き、村の牧場を歩くと、小さな草の實の靴に映るところ、弛く大きく、カーブを描いた緑の地平線、暖や畔の何も無い、茫然とした田圃には、一面の軟草が谷を造り、丘を盛り上げ、風吹けば草を割り、羊を集めて移動させ、島のやうな森を浮き上らせてゐる傍に、傾いた教會の塔が立つてゐる。滑かな道は、草の中を真直ぐにルーアンまで延びてゐる。ところどころに、五六軒の村がある。どの村もどかで、強い日光に人の聲も低く重い。

丘を越えると、谷のやうな低い平野に、セーヌ河を取り包んでルーアンの町が見える。河の兩岸は起重機ばかり。ルーアールから上つて来た船が多い。市中の中央に、數箇の高いゴシックの寺院の塔が聳えてゐる。この丘を下る道から眺めた風景は、最も良いらしく、シャヴンヌがそつくりそのまま描いてゐるといふことだ。

夜になると、數日來の暑氣とは反對に、ひどく寒くなる。オーバーなしには歩けぬほどだ。暗い町を河岸まで出る。河の上を流れる雲足早く、寒さ一層つゝのる。

純粹のフランス人を見なければ、ルーアンへ行くと云はれて出て来たのだが、寒くて外出不能である。しかし、質素な人々、人擦れせぬ娘たち、笑顔を慎しむ人々の眞面目さは、一度の往來で見受けられた。

五月二十一日。セーヌ河に沿つて汽車でパリへ歸る。パリといふ所は、戻る度に心が落ちつき、氣樂になる街だ。最も法規の完備してゐる所が、最も自由で氣樂なのは、今に始まつたことではない。

ペートルーベンがパリへ來て、私の宿の傍のブリニールへ馬車で降り、いきなり店頭にか

かつてゐた淫らな畫を見て、腹を立て、早速次の日、ウインへ歸つて行つたといふ。淫らな繪畫は到る處に、今もなほかかつてゐる。しかし、このやうな繪畫を店頭にかけるのは、あらゆる道はローマへ通じると、訓戒をしてゐるやうなものだ。佛譯になつた印度の『カーマストラ』が、堂々たる新刊屋の店頭の一線に立ててある。誰もここでは、これを猥本わだかまとは見ない。聖典と竝んだ、生理の書として扱ふ誠實さは、公衆の面前で接吻して、顔色一つ動かさぬ國民の複雑な歴史を、説明してあまりある。

つまり人間に見せて不都合なものは、も早やこの土地には、なくなつてゐるのだ。恐ろしい退屈と虚無が、襲ひかかつて來てゐるのだ。運轉手が終生運轉手のまま不平とせず、小使が終生を小使として終るリアリズムに、理由のあるわけはここにある。かうなれば、幸福とは金銭の浪費にはない。貯蓄にあるのみだ。勤勉の徳はここから出てゐる。

このフランスといふ國は、手形を現物と直接交換しなければ、受け取らぬとのことだ。信用の世の中に、この古風は、暗愚もまた甚だしい。しかし、貯蓄を終生の希望とし、唯一の幸福としてゐる人物に、現物を見せぬ紙一枚の手形が、なんの役に立つだらう。他人を信用して、生涯を棒に振る冒險は、絶對確實な幸福には、反するのだ。

現金を家に隠して持つてゐること、これほど握覺の充實してゐることはあるまい。しかし、またこれほど無慾なこともない。虚無とは、むかしは何物も放すことであつた。しかし、今は、最も確實に物を持つてみるのだ。

五月二十二日。パリにゐると俳句はつくる氣にならぬ。隙き間もなく、押し重なつて來る考へに、ぼけてしまふ。パリぼけといふ言葉が、この地の日本人間にあるが、ぼけずにここにいるには、金の音に眼を醒ます度胸がいろいろだ。

本日、水原秋櫻子氏の句集、『葛飾』が着く。開卷第一に、

なく雲雀松風立ちて落ちにけむ

春の大和、唐招提寺の句だ。現在の私の日々眼にしてゐるものと、これほど違つてゐるのかと驚く。

コンコルド女神老けにし春の雨  
シャンゼリゼ驢馬鈴沈む花疊  
騎手落す春雨の野やみぞれをり



ここでは句にはならぬ。以上は巴里着即後の私の句であるが、外國で俳句を造るには、發明のために句を殺さねばならぬ困難さがある。

印度洋で、高嶺虚子氏は、

印度 洋 月 は 東 に 日 は 西 に

といふ句をつくられたが、この句ほど下手な句はないにも拘らず、この幼稚な平凡さに落ち込んだ所に、名手でなければ落ち込み難い、外國といふ越ゆべからざる穴がある。

小説もこの通りだと思ふ。本格といふものは、型から型を通り、自分を極度に殺し、押しつけ、突き抜け、大通俗に達したときを云ふので、この修業なくして、本格はないと思ふ。

純粹さのみをかき集め、高度の純粹さに達することは、一種の低級さだ。この考へは、今やフランス文壇畫壇劇壇共通の問題である。新現實主義の起つて來た所以である。

五月二十六日。フランスといふ所は、無錢飲食のうち、食だけは罪が重い。飲に至つては問題にならぬ。

この裁判では、陪審制度が強力な判決権を持つてゐるために、美人が殺人を犯しても、多くの場合、無罪となる。美人は存在してゐるのみで、國家に貢獻してゐるといふ理由が、暗黙の諧謔となつて現れたのだ。

フランス人は笑ふことが非常に少い。笑ふ必要を感じぬだけの、言葉があるからだ。まだ日本は、笑はねばならぬ。笑ふ間は福が來ないのだ。

喧嘩けんかを見たことがほとんどない。突き衝つても、衝られたものから、「御免なさい。」を云ふ。

大道の四辻よっしで、盲人が來ると、あらゆる通行を斷ち、警官が一町ほど手を曳きつつ、ゆつくりと安全な所へつれていつたのを、私は見たことがある。

フランスの畫家の制作品が、海外に賣れる金額の量は、日本全部の絹物の輸出額よりも、はるかに大きい。ここでは藝術が實業以上だ。

スペインへ入る海外からの旅客の大部分は、博物館の繪を見に行くものだとの事である。この旅客の落す金額は、國庫の最も重要な収入となつてゐる。グレコ、ピカソ、ベラスケス、ゴヤ、この四人の天才の出たために、國民は永久に遊べるのだ。

徳川家康の最も日本に貢獻した事は、日光に自身の廟を建てた事かもしれない。

歌舞伎を國營とし、新劇を松竹と東寶に任すべきと思ふ。これ以外に、劇藝術發展の法はない。文學については、政府が新銳の批評家に、留學費を與へるべきと思ふ。それも、一人に長期の必要はない。三ヶ月で結構だ。半年以上この地にゐる者は、必ず何らかの意味で馬鹿になるからだ。ここには麻醉劑が、いたる所から噴出してゐる。これに氣附かぬものは、つまり眠つてしまつた者ばかりだ。

五月二十七日。日本製の物差ものさしは、パリへ來れば二倍にしなければ底へは届かぬ。私はパリに來て、底を見たものは、そんなに澤山あるとは思へない。長くこの地におなければ、フランス

は分り難いといふものは、フランスの傳統と競争しようと思ふものだ。この者は、死ぬ以外に方法はあるまい。

到着一日目に街を歩き、興味のある珍奇な品物に眼が觸れると、すぐこれを買ひたいと思ふ。しかし、一ヶ月後には、よくあれを買ひたいと思つたものと、後悔する。けれども、到着の日に眼についたものこそ、日本人には必要なものだと思つてゐるのである。

本日、セザンヌの展覽會を見に行く。三十年祭のこととて、各國からセザンヌの逸品ばかりが集まつて來てゐるので、長らくフランスにゐる者も、これだけは見られぬとのことだ。チュレリイの畫館には、總數百四十點と手紙類だ。外庭の噴水が青葉の間で輝いてゐる。

セザンヌの初期から晩年にかけての變化は、文學の變化と等しいと思つた。この人は眞似から眞似を追ひ、變貌に變貌を重ね、寫實を追求し、象徴に達して死んだ。旅に寢て夢は枯野をかけめぐる。この境地に到達した後は、畫壇は分裂の續出である。ピカソの内面描寫の變轉痛苦を才人と呼ぶ人が多いが、盲人の哀れさと思ふ。

五月三十一日。日本の小説を読んでみる。繊細微妙なその美しさに感歎した。私はいつの間にか、こんな感心の仕方を、自國の文學にしなければならぬやうに、なつたのであらうか。しかし、誰も彼も、無意識に、寄つてたかつて、ブルーストをやつてゐたのだ。つまり、死ぬ練習をやつてゐたのである。もう良い加減に、生きる練習をしようではないか。

何より先づ、生きる事だ。新しい文學は、つまらなくても、かまはない。



## 六月

### 赤い色

村の點燈夫は雨の中を歸つていつた。軒燈には火がついた。その下で梨の花は白々と雨に打たれてゐた。

灸は闇の中を眺めてゐた。點燈夫の雨合羽の襷が明滅しながら遠くの方へ消えていつた。

「今夜はひどい雨になりますよ。お氣をつけ遊ばして。」

玄關で灸の母は云つた。

「さうでせうかね。では、どうもいろいろ。」

客はお辭儀をしてまた旅に出ていつた。

灸は雨が降ると萎れて來た。向うの山が雲の中に隠れて了ふ。路の上には水が溜つた。

河は激しい音を立てて濁り出す。枯木は山の方から流れて來る。

「雨こんこん降るなよ。」

屋根の蟲が鳴くぞよ。」

灸は柱に頬つけて歌を歌ひ出した。簑を着た旅人が二人、家の前を通つていつた。屋根の蟲は丁度その濡れた旅人の簑のやうな形をしてゐるに相違ないと灸は考へた。

雨垂れの音が早くなつた。池の鯉はどうしてゐるか、それがまた彼には心配なことであつた。  
「雨こんこん降るなよ。」

屋根の蟲が鳴くぞよ。」

暗い外で客と話してゐる車夫の大きな聲がした。間もなく門口の重い八ツ手の葉が俵の幌で揺り動かされた。車夫の濡れた梶棒が玄關の石の上へ降ろされた。幌の中からは婦人が小さい女の子を抱いて降りて來た。

「いらつしやいませ。今晚はまあ大へんな降りでございます。さア、どうぞ。」

灸の母は玄關の時計の下へ膝をついて婦人に云つた。

「まあお嬢さんのお可愛らしうていらつしやいますこと。」

女の子は眠さうな顔をして灸の方を眺めてゐた。女の子の着物は眞赤であつた。

灸の母は婦人と女の子を連れて二階の五號の部屋へ案内した。灸は女の子を見ながらその後からついて上らうとした。



「またッ、お前はあちらへ行つていらつしやい。」と、母は叱つた。

灸は指をくはへて階段の下に立つてゐた。田舎宿の勝手元はこの二人の客で忙しさうになつて来た。

「三葉はあつて？」

「まア、卵がないわ。姉さん、もう卵がなくなつて了つたのね。」

茶の間では銅壺が湯氣を立てて鳴つてゐた。灸はまた縁側に立つて暗い外を眺めてゐた。飛脚の提燈の火が街の方から歸つて来た。

びしょ濡れになつた犬が首を垂れて影のやうに軒燈の下を通つていつた。路の水溜に映つてゐる村の灯は雨に打たれて慄へてゐた。

宿の者らの晚餐ばんさんは遅かつた。灸は御飯を食べて了ふともう眠くなつて来た。彼は姉の膝の上へ頭を載せて母のうるささうなほつれ毛を眺めてゐた。姉は頬杖をついて沈んでゐた。彼女はその日、まだ良人からなんの手紙も受けとつてゐなかつた。

暫くすると灸の頭の中へ女の子の赤い着物がぼんやりと浮んで来た。そのままいつの間にか彼は眠つて了つた。

翌朝灸はいつもより早く起きて来た。雨はまだ降つてゐた。家々の屋根は寒さうに濡れてゐた。鶏は庭に塊かたまつてゐた。灸は起きると直ぐ二階へ行つた。そして、五號の部屋の障子の破れ

目から中を覗いて見たが、蒲團の襟から出てゐる丸髻とかぶろの頭が二つ並んだまま、まだなかなか起きさうにも見えなかつた。

灸は早く女の子を起したかつた。彼は子供を遊ばすことが何よりも好きであつた。

彼はいつも子供の宿つたときに限つてするやうに、また今日も五號の部屋の前を往つたり來つたり始めた。次には小さな聲で歌を歌つた。暫くして、彼は靜かに部屋の中を覗くと、婦人がひとり起きて來て寢卷のまま障子を開けた。

「坊ちゃんはいいい子ですね。あのね、小母さんはまだこれから寢なくちやならないのよ。あちらへ行つてらつしやいな、いい子ね。」

灸は婦人を見上げたまま少し顔を赭くして背を欄干につけた。

「あの子、まだ起きないの？」

「もう直ぐ起きますよ、起きたら遊んでやつて下さいな。いい子ね、坊ちゃんは。」

灸は障子が閉まると黙つて下へ降りた。母は煙を立ててゐる竈の前で青い野菜を洗つてゐた。灸は庭の飛び石の上を渡つて泉水の鯉を見に行つた。鯉は尾だけを見せて靜かに藻の中に隠れてゐた。灸は一寸指先を水の中へつけて見た。彼の眉毛には細かい雨が溜り出した。

「灸ちゃん。雨がかかるぢやないの。灸ちゃん。雨がよう。」と姉がいつた。

二度目に灸が五號の部屋を覗いたとき、女の子はもう赤い着物を着て母親に御飯を食べさせ

て貰つてゐた。女の子が母親の差し出す箸の先へ口を寄せていくと、灸の口も障子の破れ目の外で大きく開いてゐた。

灸はふとまだ自分が御飯を食べてゐないのに気がついた。彼は直ぐ下へ降りていつた。しかし、彼の御飯はまだであつた。彼は裏の縁側へ出て落ちる雨垂れの滴を仰いでゐた。

「雨こんこん降るなよ。」

屋根の蟲が鳴くぞよ。」

河は濁つて太つてゐた。橋の上を駄馬が車を曳いて通つていつた。生徒の小さな番傘が遠くまで並んでゐた。灸は辨當を腰へぶらぶらと下げてみたかつた。早くオルガンを聴きながら唱歌を歌ひたかつた。

「灸ちゃん。御飯よ。」と姉が呼んだ。

茶の間へ行くと、彼の茶碗に盛られた御飯の上からはもう湯氣が昇つてゐた。青い野菜は霧の中に浮んでゐた。灸は自分の小さい箸をとつた。が、二階の女の子のことを思ひ出すと彼は箸を置いて口を母親の方へさし出した。

「何よ。」と母は訊いて灸の口を眺めてゐた。

「御飯。」

「まあ、この子つてば！」

「御飯よう。」

「そこにあなたのがあるぢやありませんか。」

母はひとり御飯を食べ始めた。灸は顎をひつ込めて少しふくれたが直ぐにまた黙つて箸を持つた。

彼の腕の中では青い野菜が萎れたまま細い笛のやうに泣いてゐた。

三度目に灸が五號の部屋を覗くと、女の子は座蒲團を冠つて頭を左右に振つてゐた。

「お嬢さん。」

灸は廊下の外から呼んでみた。

「お入りなさいな。」婦人は云つた。

灸は部屋の中へ這入ると暫く開けた障子に手をかけて立つてゐた。女の子は彼の傍へ寄つて来て、

「あッ、あッ。」と云ひながら座蒲團を灸の胸へ押しつけた。

灸は座蒲團を受けると女の子のしてゐたやうにそれを頭へ冠つてみた。

「エヘエヘエヘ。」と女の子は笑つた。

灸は頭を振り始めた。顔を擧めて舌を出した。それから眼をむいて頭を振つた。

女の子の笑ひ聲は高くなつた。

灸にはその笑ひ聲までがなんとなく眞赤な塊りのやうに思はれた。

灸はそのままころりと横になると女の子の足元の方へ轉がつた。女の子は手紙を書いてゐる母親の肩を引つ張つて、

「アッ、アッ。」と云つた。

婦人は灸の方を一寸見ると、

「まあ兄さんは面白いことをなさるわね。」と云つておいてまた急がしさうに、別れた愛人へ出す手紙を書き續けた。

女の子は灸の傍へ戻ると彼の頭を一つ叩いた。

灸は「ア痛ッ。」と云つた。

女の子は笑ひながらまた叩いた。

「ア痛ッ。」

さう灸は叩かれる度毎に云ひながら、自分も自分の頭を叩いてみて、

「ア痛ッ、ア痛ッ。」と云つた。

女の子が笑ふと、彼は調子づいてなほ強く自分の頭をびしやりびしやりと叩いていつた。すると、女の子も「た、た。」と云ひながら自分の頭を叩き出した。

しかし、いつまでもさう云ふ遊びをしてゐるわけにはいかなかつた。灸は突然犬の眞似をし

た。そして、高く「わん、わん。」と吠えながら女の子の足元へ突進した。女の子は恐こはさうな顔をして灸の頭をびしやりと打つた。

灸はくるとひつくり返つた。

「エヘエヘエヘ。」とまた女の子は笑ひ出した。

すると、灸はひつくり返りながら廊下へ出た。女の子はますます面白がつて灸の轉がる後からついて出た。灸は女の子が笑へば笑ふほど轉がることに夢中になつた。顔が赤く熱して來た。

「エヘエヘエヘエヘ。」

いつまでも續く女の子の笑ひ聲を聞いてゐると、灸はまだ見たこともない素暗しく華やかなものに笑はれてゐるやうに思はれた。灸はもう止まることが出來なかつた。笑ひ聲に煽あふられるやうに廊下の端までころげて來ると階段があつた。しかし、彼にはもう油がのりきつてゐた。彼はまた逆さか様になつてその階段を降り出した。裾が巻れて白い小さな尻が、「ワン、ワン。」と吠えながら少しづつ下つていつた。

「エヘエヘエヘエヘ。」

女の子は腹を波打たせて笑ひ出した。二三段ほど降りたときであつた。突然、灸の尻は撃たれた鳥のやうに階段の下まで轉がつた。

「エヘエヘエヘエヘ。」

階段の上では女の子の明るい笑ひ聲が一層高くなつた。

「エヘエヘエヘエヘ。」

その瞬間背を紙屑箱につけて仰向きに倒れてゐた灸の顔から、彼女に應じるほのかな微笑がちらりと洩れた。それは彼の遊戯が手際よく終結したことを示す満足な微笑であるかのやうな。と、忽ち、彼の微笑は苦い薬を飲まされたやうに澁つて來た。

物音を聞きつけて灸の母は駈けて來た。

「どうしたの、どうしたの？」

母は灸を抱き上げて揺つてみた。灸の顔は揺られながら青くなつてべたりと母親の胸へ崩れかかつた。

「痛いか、どこが痛いの、灸、灸。」

彼は眼を閉ぢたまま黙つてゐた。

母親は灸を抱いて直ぐ近所の醫者の所へ駈けつけた。醫者はドアを開けて灸の顔を一寸見ると、低く「アツ。」と聲を上げた。灸は死んでゐた。

その翌日もまた雨は朝から降つてゐた。街へ通ふ飛脚の荷車の上には破れた合羽がかかつてゐた。河には山から筏が流れて來た。どこかの酒庫からは酒桶の輪を叩く音が聞えてゐた。その日、婦人はまた旅へ出ていつた。

「いろいろどうもありがたうございました。」

彼女は女の子を抱いて灸の母に禮をいつた。

「では、御機嫌よろしく。」

赤い着物の女の子は俵の幌の中へ消えて了つた。幌は雨の中を揺られていつた。

山は雲の中に煙つてゐた。雨垂はいつまでも落ちてゐた。郵便脚夫は灸の姉の所へ良人の重い手紙を投げ込んだ。

夕暮になるといつものやうにまた點燈夫は灸の家の門へ來た。軒燈には新しい油が注ぎ込まれた。梨の花は濡れ光つた葉の中で白々と咲いてゐた。そして點燈夫は黙つて次の家の方へ去つていつた。

\* 「赤い色」大正十三年（全集六）



## 幸福の撒布

その電車は空<sup>す</sup>いてゐた。空<sup>す</sup>いてゐると云つても私一人が立つてゐなければならぬ程度であつた。吊り革に下つたまま、車内を見廻してゐると、私は驚いた。大男が一人ゐたのである。まことに目出度いと思はれるそれほど龐大な男である。初めこれは病氣だと思つた。がよく檢べるに従つて、これは病氣ではないと思ひ乍らもなほ病氣に違ひないと思はれるほど左様に骨まで龐大だつた。嘘ではない。確かに幅は吾々の三人分はあつたであらうが眼までさうだ。馬ほどある。これは人間ではないと思つた。もしこれが東京市でなかつたら、何か沼か無風の池の水の中からその半身を浮べてゐたとするなら、確かにわれわれは童話の世界の中に呆然として了つたに相違ない。そのうちに私は笑ひ出した。實際これほど大きな男と云ふものは、曾て想像したことがなかつたからだ。その横に坐つてゐる普通の男の顔全體が、その大男の顔ほどよりない。かくも大きいと云ふことを人々に傳へる手段として、いま一言の必要を認めるが、何故そのとき一座の人々は、この男の大きさを敢て認めまいとするかのやうに努力しながら眼

を外向けてゐたのかと考へると、實際彼らは幾分かの禮讓のためもあつたであらうが、いやそれより確かに彼らは不思議な恐怖を感じてゐたのちがひなかつた。あまりにもその現實を突破した厖大さのために、もし一同が笑ひ出しでもしたならば、その男の怒りの爆發を恐れてかくも馬鹿馬鹿しく單純に嚴肅な顔を一樣に裝つてゐたにちがひなかつた。しかし、私はもう不思議な微笑の突き上げて來るのをどうすることも出來ない苦しさで窓の外を眺めてゐた。すると、その男は私の顔をじろじろ眺め出した。この怪物が私の顔だけを眺めてゐる。この怪物の頭に今何らかの變化を私が與へてゐる。さう思ふと、いつか私がライオンに見られたときの薄氣味悪い榮光を感じ出した。その眼はやや縁が薄黒く野蠻に淫奔さを湛へた獍猛な靜けさを持ち、額は兇惡に狭く、後頭から前頭への曲線は貧しく猿のやうに急々と駆け上り、頬は偉大な宰相のやうに張りつつ顎の尖端を括つてゐる。一見傲然として、無帽敞衣。露出した胸のあたりは草でも植ゑたき感じである。間もなくその男は搖るぎながら横になつて降りていつた。すると、初めて車内の人々は顔を見合せた。一樣な微笑と嘔きがゆらめいた。各々まぢまぢ今迄利己主義の羅列のやうに牆壁を設けてゐた人々の胸の中に、不思議な友情が水のやうに流れ出し、交り出した。そこで、この見ず知らずの一座の人々は、この共通した驚異からの解放から、初めて柔和に優しく、大男について春のやうに語り出した。それは愉快な團欒であつた。微妙な幸福が都會の一隅に花開いたのだ。さうして、あの大男は、この不思議な幸福を絶えず撤

き散らしながら歩いて行くのちがひない。

\* 大正十二年（全集六）

## ガルタンの太陽

雨は降り続いた。併し、ヘルモン山上のガルタンの市民は、誰もが何日太陽を眺め得るであらうかといふ豫想は勿論、何日からこの雨が降り始めたか、それすら今は完全に思ひ出すことも出来なくなつた。人々の胃袋には水が溜つた。さうして、婦女達の乳房はすんすんと青く脹らみ、赤子や子供は水を飲まされた怒りのために母親の乳首を嘔んだ。

最早や人々は空を見飽きた。高窓から首を差し出して空を仰いでゐるのを見ると、通行人は腹立たしさに歩道の上で嘲弄した。

「ああ、高窓からガルタンの太陽が現れた。」

忽ち怒つた顔が高窓から椅子や器物を歩道の上へ投げつけた。續いて礫が高窓を狙つて飛び

こんだ。が、またそれは忽ちの間に鎮まると、後悔の標に、彼らの青ざめた顔が高窓の上と下とでげらげらと笑ひ合つた。

日に日に酒麩を冠つて横はつてゐる醉漢が、歩道や廻廊や石階の上に増して來た。

「ガルタンの空は早魃である。」

「ガルタンの市民は、レバノンの成樓のごとく干されるであらう。」

彼らは瞞着した皮肉を浮べながら、酒舗から酒舗へ蹠蹠として踰躍めいていつた。が、彼らの頭は夜が來ると一様に沓え渡つた。時々深夜に狂つた管絃樂が突發した。すると、忽ち城市の方々からは、亂雑な舞踏が一齊に爆けた彈機線のやうに噴出した。不眠に惱む者達は寢臺の上から飛び降りた。さうして、彼らは何時の間にか、見ず知らずの者と一つの集團を作りながら、歩道や廻廊の上を暴徒のやうに躍り廻つてゐる自分を知つた。が、立ち停つて顔を見合せた瞬間、彼らは不可解な憎悪を感じて互に侮蔑の視線を投げ合ふと又躍つた。

併し、雨はヘルモンの山に降り續いた。

「吾らの市民よ、ガルタンに危機が來た。ヘルモンの山に危機が來た。」

大道の四つ角で、片腕に酒麩を抱いたまま拳を振つて群衆に叫ぶ志士が現れた。すると、直ちに群衆は盡くその場で志士となつて拳を振つた。

「吾らの市民よ、ガルタンに危機が來た。ヘルモンの山に危機が來た。」

彼らは直ぐさま酒甕へその唇をあてながら、酒舗や劇場へ雪崩れ込むと、魚のやうにべたべたと大理石や白檀の上へ酔ひ潰れて又叫んだ。

＊「碑文」大正十二年（全集六）

## 川

○川はその幼年期の水勢をもつて鋭く山壁を浸蝕した。雲は濃霧となつて溪谷を蔽つてゐた。山壁の成層岩は時々濃霧の中から墨汁のやうに現れた。濃霧は川の水面に纏りながら溪から溪を蛇行した。さうして、層々と連なる岩壁の裂け目に浸潤し、空間が輝くと濃霧は水蒸氣となつて膨脹した。

○川を挟む山々は、この水勢と濃霧に動かねばならなかつた。

その山嶺の屹立した岩の上では夜毎に北斗が傲然と輝いた。だが、その豪奢を誇る北斗は、ベルセウスの星が、刻々にその王座を掠奪しようとして近づきつつあることには氣附かなかつ

た。その下で、Q川は隣接するS川と終日終夜分水界の争奪に孜々としてゐた。

Q川の浸蝕する狭隘な溪谷へは人々の集團は近づいて來なかつた。それにひきかへ、S川の穩やかな溪谷には年々村落が増加した。

その國土の時代では、久しく天下に王朝時代が繁榮した。そのため、彼らの壓制は毎日に民衆の上に加はつた。

Q川は地質時代の軟弱な地盤を食ひ破つた。さうして、その河口にひとり黙々として堆積層のデルタを築き上げてゐるとき、その國土では、遂に鬱勃としてゐた民衆の反抗心が王朝に突撃を開始した。

民衆と王朝の激烈な争闘は續けられた。王朝はその久しい遊惰のために敗北した。彼ら一黨は民衆のために虐殺された。さうして、纔かに残つた數人は人目を忍んで人跡稀な川の濃霧の中へ逃げて來た。

彼らは武裝を解いた。山々は峻嶒に彼らを守りながら季節に従つて柔かに青葉を變へた。彼らは高い山壁の傾斜層に細々とした徑をつけた。さうして、彼らは溪流を望んだ岩角でひそかに彼らの逞しい子孫を生んでいつた。

○川とS川との分水界の争奪は益々激烈になり出した。川は恐らく數回の勝利を物語りながら、その河口に壯大な砂の堆積層を築いていつた。このため、S川の浸蝕力は、○川に比べてはるかに緩慢になり出した。だが、S川はその堆積層のデルタは、徐々として海面から壯麗に浮かび上つた。新しい滑かな處女地が河口を挟んで生れて來た。人々の集團はデルタの平野の上に朴訥な巢を造つた。彼らは純然たる土民であつた。彼らはその國土の支配者に屈服しながら、耕作しなければならなかつた。だが、彼らの國土の支配者は既に民衆ではなかつた。

會て、王朝は民衆に顛覆された。しかし王朝を顛覆させた民衆は、再び彼らの野蠻な總帥のために支配されねばならなかつた。さうして、封建時代が堅實に彼らの國土の上へ君臨した。纏て、S川の造つた開析デルタの上へ一つの城が築かれた。

○川の活動は幼年期から壯年期に這入つていつた。その水勢の浸蝕力は横に第三期層の緩斜層を突き崩して擴がつた。このため、S川へ流れる分水界の水量は、その均衡を破つて次第に○川の水流に誘惑された。

○川を繞る綿々とした濃霧の中では、王朝時代の殘黨がその子孫を美しく繁殖させた。しかし、彼らは彼らの祖先が會つて民衆に顛覆された事實と怨恨とを次第に忘れていつた。さうして、彼らの繁殖力はその屈辱の忘却力に従つて溪谷を下り、濃霧の中から○川の洋々たる河口

へ向つて擴がり出した。彼らはいづれの國王にも屬さなかつた。しかし、彼らは彼らを繁殖せしめた直系の家族のために支配されねばならなかつた。そこでO川の流域には、隠然たる豪族がその團結力を延ばし出した。彼らはS川のデルタの上に生活する土民の集團に對抗するため、彼らもまたO川の河口の岩角に尖鋭な一つの城を築き上げた。

だが、彼らは豊穰なS川の住民の生活力とその貧しい力を争ふことは出来なかつた。このため、彼らは彼らの生活力の主力を武力に向けた。

O川とS川との水流の争闘が激しくなるに従つて、その各自の流域に築造された二つの城の争闘も激しくなつた。しかし、O川の豪族の城が、しばしばS川の土民の城に壓迫されつつあつたにも拘らず、川それ自身の争闘は絶えず反對の現象を示してゐた。O川の浸蝕力は白堊紀の地層を食ひ破つて益々深刻になつていつた。S川の浸蝕力は、河口の堆積デルタが確固とした地盤となるに従ひ、益々その力を弱めていつた。さうして、O川はS川の支流の水を滔々と奪ひ出した。

\* 「静かなる羅列」大正十四年（全集六）



## 竹の花

竹の花が切れ切れな霧の中から浮んでゐた。木橋は動かぬ水に枯れた足を映して蹲んでゐた。空色のボタンのやうな實をつけた草の中を、水は靜かに深く曲つてゐた。少年は母の病ひがなみであるかを知らなかつた。彼は持つてゐる藥の瓶と竹の幹とがどちらがよく光るかを比べてみた。竹馬の音が竹の花の中から、こつこつと聞えて來た。彼は首を立てて鋭く眼を光らすと、不意に逸散に花の中を駆けていつた。竹林を抜けると波を打つた藁屋根の下で重い石臼が廻つてゐた。石臼の傍では鈍豆煙管たんまうきせむの鈍い光が籠の肩を叩いてゐた。彼は道から籠を見ると、その下の灰の中からやがて圓々と轉げ出す芋の溫度を手に感じた。再び竹林が續くと、彼の草履はまた竹の皮の波の中で音をたてた。群生した竹の花は彼の首の華奢な生え際を擦りながら揺れ出した。彼は光つた竹の節に圍まれてなんの唱歌を歌はうかと考へた。が、彼は歌を選ぶ前に早や房々と下つた竹の花を抱いて足を跳ねた。花は撓たぶみながら彼の身體を吊り上げては地に落した。彼は花と格闘しながら顔を蔽らめると腹を出した。藥の水が竹の花の中で泡を立てて膨

れてゐた。彼は漸く花を放すとまた次の一叢の花へ抱きついた。跳ね上つた所の花の頭が高く彼の草履を跳ね上げた。彼は蝗のやうに竹にとまつたまま不安さうに草履の落ちて来る音を聞きつゝゐた。

\* 「古く筆」

## 鯉

春雨が續いて川は草の上へ溢れてゐた。少年は蓑を着た農夫の傍に蹲んだまま釣竿の先端を睨んでゐた。雨の滴りが農夫の蓑から少年の小さな蓑の肩へ落ちて來た。彼はやがてすつぽりと水面から抜け上る鯉の胴の端正さを感じる、身を打つ雨も忘れ出した。深く水の中へ垂れ込んだ藤の枝がぬらぬらと滑りさうに水垢をつけて溜つてゐた。赤い蟹が雨に洗はれた草の根の中から這ひ出て來ると彼の指の間で泡を吹いた。そのとき遠い野の末の綿の花の中を一系列の葬ひが續いていつた。ふと、彼は死にかかつてゐる母の青い顔を思ひ出した。間もなく母は死

ぬだらう。鉦を自分は叩くだらうと彼は思った。すると、突然、彼は聲を上げて泣き出した。が、その瞬間、釣竿から一疋の黒々と光つた鯉が躍り上つた。彼はぼつたり泣きやむと、周章まわちててその鮮烈な鯉の鱗の上へ飛びかかつた。鯉は濡れた草の若芽を濺刺と叩きながら彼の兩手の間から跳ね上つた。彼は鯉を壓へると、草を壓へた。が、また壓へると、また跳ねた。彼は胸で鯉の胸の上へ冠さると、また前の續きを泣き始めた。煙るやうに連なつた綿の花の中からは鉦が蕭條と聞えて來た。彼は胸を叩く鯉の尾の壓力を厳しく感じながら、「お母ア、お母ア。」と呼び續けた。

\* 「古く録」

## 水晶

鶯の聲が繁つた梅の葉の暗鬱な中で老け始めると、少年の母の血色は癒つて來た。彼は日々姉と一緒に搗く米が臼の中で糠を出して濕しめる重々しさが好きであつた。彼は陽が輝いてう

らうらと陽炎が立ち昇ると、裏山の小高い頂へ水晶を探しに出かけていつた。彼は谷間を向いて兩足を投げ出しながら股の間の土を掘つた。爪に搔き出される褐色の土の中から、六方體の水晶が輝きながら湧き出て來た。彼の足の間からは清らかな生殖器が曲つた蕾のやうに谷間の方を向いてとまつてゐた。その下の谷間では、泰山木の花が白い扇のやうに枝の先で崩れてゐた。草に埋もれた水車はゆるやかに羽根を慄はせて廻つてゐた。彼は着物で水晶の角面に磨きを入れると空に翳して眼を細めた。彼は兩手でざくざく水晶を振りながら、陽炎に搖られて山を降りると、その水晶を水壺の陰に埋めて少年の物思ひに耽るのだ。やがて、その壺から流れる水は水晶を大きく繁殖させるにちがひない。やがて、母の病ひはその水晶の賣價で癒つていくにちがひないと思ひながら、その夜彼は鯛を咬み切つてゐる姉の齒の傍で、山の頂から頭を並べて噴き出て來た水晶の光景を物語つた。庭の梅の葉の中へ射し込んだランプの光りの中で、彼の兩手を擴げて物語る影が伸縮しながら搖れてゐた。

\* 「古く筆」

## 花嫁

柿の臺が五月雨に打たれて落ち始めた。家の前を流れる小川の水が増して來た。釘のやうな溝貝が石と石との間で肉を延ばして膨れて來た。青みどろの鬚が小川を渡る少年の足をすくつて亡らせた。蠟が桶の底や水壺の周圍に生え始めた。彼は朝起きると雨戸を開けた。堅い梅の實が雨戸の木目を擦つてざくざくと音を立てた。彼は一夜の風で地に滿ちた柿の臺を見ると勇しさを感じて叫び出した。彼は軒へ廻ると杏の實がいくつ増したかを數へるのが楽しみであつた。杏の木肌は皺の割れ目に脂を溜めて光つてゐた。棗の幹は觸ればじくじくと皮が崩れて來て手についた。雨が上ると彼は往來に突き出たその棗の樹に登つて枝を踏みながら斥候の眞似をした。すると、彼の手で造られた双眼鏡の中へ車輪の上に浮んだ花嫁の姿が現れた。やがて花嫁を取り圍んだ一團の車が彼の股の下を通り出した。彼は俯向いて覗くと、それは彼の母の所へ通つてゐた針子の中の一美しい娘であつた。彼は口をあけたまま、棗の滑らかな葉の中で萎れ出した。白い花嫁の姿は貝をつけた溝に沿つてだんだん遠くの方へ曲つていつた。

\* 「古い筆」

## 蟲

螢が橋の花の周圍を飛び始めた。草を滑る水音が夜露の底から聞えて來た。篝火が夜毎に田圃の上で燃え始めた。農夫は風呂から夜風に吹かれながらのびのびと歸つて來た。梅雨が上ると少年は母の眼を偷んで夜遊びをし始めた。彼はだんだん煙草の煙の匂ふ大人の集まりが好きになつた。彼の母は床を疊んで家の中を子供のやうに歩き始めた。彼は道を歩くと投げ上げる手頃の石を選び出した。彼の姉は山椒の葉を噛みながら彼の夜遊びの後を捜し廻つた。彼は葉の中から一齊に光澤を増して露はれ出した果實の群れを、あちらこちらから透かして見た。つるつる滑る杏は蟲に食はれて川へ落ちた。黄色く膨れた棗は少年の指紋を浮べたまま食ひ忘られて轉げてゐた。梅は地の上に芳香を放つて堆く積つてゐた。その梅の中を梅賣りが日々籠を擔いで通つていつた。彼は玉蟲が柘榴の花影でだんだん羽根をかためていくのを知つてゐた。遠く離れた藪の中で、頬白が幾つの卵を生んでゐるのかまで知つてゐた。さうして、夏が來ると彼は瓜畑の中を蟲のやうに次から次へと瓜を食ひ荒して流れていつた。

## 黄色な街

京城は黄色かつた。そこで私は降りて日本人の綺麗な女の顔を見てみると横から私の袖を引いたものがあつた。見ると、母だつた。私は黙つてゐた。母も何も云はなかつた。二人は驛の前の黄色な廣場へ出た。母が萎れた顔をしたまま上を見たので私も見ると、飛行機が飛んでゐた。

「ここから家まで遠いの？」

「遠い。」と母は云つた。

餘程歩いてから横を向くと、ある一軒のガラス戸に「忌中」と書いてあつた。ここでも誰か死んだのだと思つた。私はその家の前を通り過ぎた。

「ここや。」と後から母が云つた。

「ここか。」

私は母の後からその忌中と書いてあるガラス許りの感じの家の中へ遣入つていつた。中には

誰もゐなくて薄明るい光の中に蠅だけが牛部屋のやうに群がつてゐた。

「もう葬式は済んだの？」私は初めて父のことについて訊いた。

「ああ。」母は一口云つた。

五寸四方の骨箱こつぱこが錦の切れに包まれたまま、粗末な机の上に載つてゐた。

「これかね。」と私は指差した。

「それや。」と母は云つた。

「なアンぢや、こんなものか。」私は笑ひながら父の骨箱を下げてみた。

母は團扇あふはを出して来て、

「ここは蠅が多うて多うて。」と云つた。

石炭酸の匂ひがしきりにした。

「こりや石炭酸の匂ひだね？」

「さうや。赤痢が隣にあつたので、どこやらの知らん人がうちまで撒いていつたのや。」

「たまらないね。」

「臭いなア。」と母は云つた。暫くすると母は鎖のついた金時計を出して來た。

「これお父さんの大事のや。お前にあげるわ。」

「金の時計だね。」私はざくりと下へ置いた。



「お腹は空いたか？」

「空いた。」

「なんにもないが。」と母は云ひながら戸棚の中から蒲鉾を出して來た。

小さい膳に向つて母と一緒に箸を持つた。すると、急に悲しみがせき上げて來た。口に入れた飯を吐き出しに行くやうに箸を投げ捨てて直ぐ便所へ行つた。「ワッッ。」と聲が出さうになつた。右の腕を横に衝へて壁を見詰めたまま息をとめた。「ウツ、ウツ。」と鼻が鳴つた。暫くすると下腹が平靜になつたのでまた母の傍へ戻つて箸をとつた。と、また駄目になつた。直ぐ今度は表の方へ飛び出した。私は聲をとめて泣きながら夕暮の街の真中を駈けて行つた。青ざめた街が涙で慄へてゐた。表通りから汚ない裏町へ廻つてみた。朝鮮人と支那人とが狭い路の上で殴り合ひをしてゐた。朝鮮人が石で頭をこづかれると路傍の塵捨場へぶつ倒された。足が高く上ると彼は赤い顔をした。傍で澤山の朝鮮人が鉢巻をしたまま靜かに黙つて見物してゐた。すると、

「親父が死んだ。親父が死んだ。」と誰か私の頭の中でしきりに歌を歌ひ出した。

\* 「青い石を拾つてから」大正十四年（全集八）

## 手の上で鳴る父

私と母とはその日から荷物を造り始めた。雑事に倦きて來ると私は骨箱こつばこを開けて父の骨を叩いてみた。骨は素焼の破片のやうな音を立てて白い粉を飛ばした。あの父が音を立てながらこんな石灰質の粉を飛ばすとは！ 私にはそれが眞實の事と愉快なことにも思へなかつた。

「チャリン、チャリン。」と父が手の上で鳴つてゐるのである。そんな馬鹿な！ だが、いくら疑つてみても、父はこれ以外にはなささうであつた。あの父の形がこの骨になつただけで、なぜかうも私の感じの上で違ふのか。父は少しも父らしくないではないか。「チャリン、チャリン。」と私に鳴らされてゐるだけではないか。ただ父が死んだと云ふことを母が私に口で云つただけではないか。もしその故に私が悲しむなら、この骨は馬の骨だと云ふが良い。私は馬の骨だと思ふだらう。もしこの骨を強ひて父だと思へと云ふなら、誰か他の男を連れて來て父だと思へと云へば良い。私は、「違ふ。」と云ふに定きまつてゐる。私のこの眼で見て來た父は、この骨でもなければ他の男の誰でもない。それならこれが父だと思ふあの私の父はどうし

たのか。「父」と言葉で云へば、父の姿は忽ち私の頭の中に浮んで来る。

「こんな父があるものか。これは石灰といふものだ。」

私は一掴みの骨を壺の中へ一片づつ投げこんでいつた。さうすることが、その骨を父だと思はなければならぬ私の悲しみを、だんだん私から切り放していつた。

\* 「青い石を拾つてから」

## 債 鬼

隣の家では赤痢にかかつた主人が死にかかつてゐた。二人家に残つてゐる小さな姉弟の所へ毎日債鬼が押しかけてゐた。私もその債鬼の一人であつた。私は押しかけては行かなかつた。が、父が貸してあるその金を返してくれなければ内地へ引き上げて行く旅費がなかつた。しかし、それはとてもこの際返済して貰ふ氣持もなかつた。が、うるさいことに隣へ押しかけて行つた見ずしらすの債鬼達は私の所へ来るのである。

「あの家にはどれ程金があるか、どんな寶があるか。どこから金の遣入る見込みがあるか。故郷の家の財産はどうか。あなたの家では幾らほど貸してあるか。返して貰へる見込みがあるか。」とかうだ。

するとまた一人が同じ債鬼の一人だと思つて私の所へやつて來た。

「あの家には九十圓のピストルがある。あれをあなたとことがとつて、刀は栗田口忠綱があるからそれを自分が取らう。」と云ふ。

また一人は隣の家の妻君を狙つてゐた。債鬼のくせに、妻君が病院から歸つて來たら遣つておいてくれと云つて反物の贈物を私の家に置いていつた。これらの債鬼達は不思議に隣の主人の日々の病狀を實に詳しく知つてゐた。私は隣家の主人も主婦も知らなかつた。母の話に依ると、その主婦は前にはこの家の女中であつて、二人の子は先妻の子だと云つた。それはともかく、その家の主婦も主人も私の家の父が頓死したと云ふこともまだ知らないのだ。隣の主人の瀕死につけ込んで押しかけた債鬼達も私の家へ流れ込んで來てべらべら饒舌つて了つた學句に、私の父も二三日前に頓死したのだと知ると、ぼんやりして了つた。來る者來る者が、「へえ。」と聲を上げた。暫くたつて家の中を見廻してゐてから眼に見えてだんだん顔を青くして行つた。中には歸るまで一口も云はずに急に立ち上ると、

「もう生きてゐるのが恐うなつた。」と云つて歸つたものがあつた。

實際私の父はびんびんとしてゐてころりと半時間もせずに死んだらしかつた。遠く故郷を離れてゐて朝鮮あたりで何事を企ててゐる悪辣な債鬼にとつて、頓死と云ふことを見せつけられるのは實に恐ろしいことであるらしかつた。

私は隣家以外にまだ五軒の債鬼とならねばならなかつた。私は朝鮮へ来たのも初めてだつた。それに知つてゐる人と云つては一人もなかつた。私は隣家を捨てておいて先づその五軒の家へ迫り出さうとした。私達は長らくそのままそこで落ちついてゐればゐるほど不用の金を費ふばかりであつた。そのため金が盡く返済されるまで内地に歸らずに待つてゐるとすれば、もし全部返つて来たとしてもそれだけ全部なくなつて了ふにちがひないのだ。だが、その事實をしかく正直に相手に話して了つては返済する期日を相手が延ばすのは定つてゐた。殊に場所が場所であつた。一度離れて了へば二度と逢ふ機會がさう容易にあるものでないと云ふ腹が向うにあるのも見えてゐた。それに私はさう云ふ掛引きが下手であつた。私は正直に一切の事情を話して了つてそれで返してくれなければもう要らないと思つた。私は五軒の家々を廻り歩いてみた。漸く三軒だけが私達の事情に同情して約束の期限内に金を返すことを承諾した。だが、その誰もは、私の父の死に對して同情するよりも、その死のためにかくも早く督促される自身に同情する不愉快さを惜しげもなく現した。

\* 「青い石を拾つてから」

## 鮭が薔薇のやうに

東京では、その時私の所へ上海から一人の古い友人が来てゐた。そのため、毎日私の所へ他の友人が押しかけて来て騒いで行つた。一人はバイオリンでラパロマばかりを弾いてゐた。一人は表現派の役者であつた。一人は活動寫眞のファンであつた。一人は社會主義者で第三インターナショナルの泡きりを絶えず、私の顔に吹き飛ばした。これらの者の一人は必ずいつも私の傍を離れなかつた。そればかりでなく、私は彼らの中の一人に引つ張られて音楽會へ行つたと思ふと、次には表現派の芝居を、活動を、社會主義の宣傳演說會をと次々に休みなく引き摺り廻されねばならなかつた。しかし、私はそれ所ではなかつた。明日の飯をどうして食はねばならないのかさへ分らなかつたのだ。間もなく友人の一人が上海へ歸つていつた。すると他の友達も來なくなつた。さて一人靜かになると、私には一ヶ月間の過度の心勞が一時に押し寄せ出した。父の死の悲しみが、初めて落ちつき拂つて悠々と迫り出した。だが、私はその隙を狙つて職業を捜し歩かねばならなかつた。私の金は全く何もなくなつた。私は一日に一度より飯が食

へなくなつた。私の歩いてゐる道路の掘り上げた穴の周囲で、工夫達は笑ひながら飯を食つてゐた。その光つた飯の上に敷つてゐる一片の鮭の肉が、私には蕎麦のやうに見え出した。

\* 「青い石を拾つてから」

## 洞の中

洞の中では、職業紹介所からあぶれて來た老人連が、だんだん多くなつて來た。しかし、浮浪人らは仲間が増しても減つても同じであつた。吹き込んで來る煤烟の中で、お酒落は手鏡を持つて笑ひながら終日自分の顔を覗いてゐた。畫家は馬の畫ばかり書いて楽しんだ。モルヒネ注射の大王はふらふらしながら、針で腕を刺しそこねてはひよろけてゐた。その間に挟まつた帽子屋の老人は冷える周囲の漆喰のために、喘息を起し出した。しかし、喘息は帽子屋だけではなかつた。後から混つて來た老人達は殆んど大半が喘息にかかつてゐた。夜中になつて、柱の隅から誰か一人が咳き始める。すると、急にあちらこちらの闇の中から、風のやうに喘息が

巻き起つた。一度起きると、老人達は朝の太陽が昇るまで、下の材木を抱きかかへて咳き続ける。さうして、漸く咳がとまつた頃になると、職業紹介所の前でひしめき合ふ労働者の逞しい群れが、鐵柱の間から見え始める。昨日あぶれた洞の中の老人達は今日こそと思つて出かけていく。すると、またはじかれて落される。落された老人達は作業場の焚火の傍で圓陣を作りながら、ぼんやり若者達の賣れる姿を眺めてゐた。かうしてそこで落ち合つた老人達は仲間となると洞の中へ日々新しく流れて來た。だんだん洞の中は老人で詰まり出した。

これらの老人達の頭の上では、進行する高架線が一日に六百樽のセメントを、呑み込み出した。五臺のコンクリート混合機が、十臺になつた。巨大な鐵塊の横腹で絞めつけられるリベットが、終日終夜火を噴いた。その下の店々では、こぼれる火層で店頭の日覆ひを焼かれて町會へ訴へた。掘り返される道路の悪さのために、商品が賣れなくなつたと云つては、また町會に膨れて來た。しかし、町會では、進行する高架線と地下線の動力を阻止することは、不可能であつた。いつも、町會は鐵道省には負け續けてゐなければならぬのだ。

\* 「高架線」昭和五年。（全集九）



## うどんげの花

私の家の天井に近頃うどんげの花が咲いた。「三千年に一度咲く想像以上の花」と辞書にあるが、その想像以上の花は、實際想像以外の花で儼かひのやうだ。白くて花粉を飾つた雄蕊せしの集まりとでも云ふべき珍物である。その下で私はいつものにここにこの頃は笑つてゐる。なぜ笑ふのか、多分ジアエンソサン・カリニームのやうに、不思議に人の笑神經を刺戟するものがあるに違ひない。この花が咲くと、この家の者は大盡になると云ふ。所が、私はうどんげの花の下で堂々と瘦せ細つてゐる。この風景も捨てがたい所があれば幸甚である。

\* 「感想と風景」

## 大罷業の中

六月一日。人はそれぞれ、心に響つんばを持つてゐる。日本にゐると、自分の響の部分には、滅多に氣附くものではない。しかし、一たびここへ踏み込むと、ひどい響の部分が、逆毛さかひ立つて、刺さり込んで來るのである。

さア、耳は聞え出したが、もう世は遅い。日が暮れかかつてゐる。今から走つても追いつかね。そこで、響の楽しさを忘れかね、無我夢中に東洋的なものにしがみつゝ。救ひはこれだ。

六月二日。私は出發前に、青年時代を長く外國で暮した吉田健一氏とよく會つた。この人は銀座の資生堂が、どこより好きな青年である。どうして君はそこが好きかと訊ねると、非常によい東洋的なものがある、との答へであつた。われわれが銀座で一番ヨーロッパ的だと信じてゐた物が、東洋的に見えるのだ。奈良、京都など、東洋的には見えぬといふ。この不思議さも、ヨーロッパへ來て見て、初めて私にもよく分つた。

資生堂どころではない。輕井澤も日比谷も、東洋的な良さである。日本の外人がすでに東洋的なのだから仕方がない。

文學に於ては、久米正雄と林房雄、この兩氏が一番東洋的に見える。

奈良、京都はすでに電池の切れた日本である。

六月三日。パリと云ふ所は、どこの國のものでもなく、パリと名付けられた、特別の國だと思ふ。ここには、豊かな知識と性があるだけだ。感情のある眞似をしたくてならぬ惱み——これがパリの憂鬱の原因である。

私のよく行くレストランの主人に、日本へ暫く行つてゐた男がある。この男は、いつも私が黙つてゐるので、傍へ來て云ふには、どうだ、パリは女が金を受け取ること、勘定することより考へてゐないから、日本人には面白くないだらう。日本の女は、そこへいくと實に宜しい。自分はここで金を儲けて、日本へ行くのが何より楽しみだと云ふ。

フランス革命のとき、自由平等の法律を實行した、その効果の惡の部分が、國民の感情を失

つてしまつた原因をなしてゐるといふ定説が、この地にある。しかも、各自がそれを意識してゐるのだ。町々に聳えてゐるカソリックの鋭い尖塔は、自由平等に對する恨めしい反抗のやうに見える。ジイドのロシア行は、感情を探しに行つたのだ。

先日から工場二百に罷業が起つてゐる。その飛火がフランス全部に擴大して、今は踊場や雜貨商にも起つて來た。昨夜で三十五萬人に達したが、政府が左翼であるから、この争ひは少しも騒がない。祭のやうにのどかだ。しかし、新聞までストライキだ。

各自が自身の金錢を失ふことなくして、左傾しようといふ精神——これが個人主義的コンミューニズムとなつて現れたのだが、フランスで一番人氣の良いのはこれだ。自身の金錢を失ふ左傾といふものは法律が許さぬ。なほそれ以上に、人々の精神が許さない。左傾とは金を奪はれぬ用心だといふ原則を、ここほど了解してゐる所は、あるまい。それ以上の複雑な理窟など、民衆には用をなさぬ。

フランスの大富豪二十家。二百數十名の住所番地を委しく書き連ねた印刷物を、街頭で賣りながら、いざ事が起れば、こいつを叩き潰せと叫んでゐるものが、隨所にゐる。警官も人々も、

平然とその前を通つて、何も云はぬ。

六月四日。——パリでは、アメリカ人であらうと、黒人であらうと、イギリス人であらうと、同じことだ。ここでは、人間など通用しない。通用するものは金だけだ。眞に經濟を學ぶには、ここに限る。それ故に金と等しい心もまた明瞭に、その運行を看取し得る。日本では、金と心を別けなければ、承知しない。つまり、フランスでは金で心を買ふのに反し、日本では心で金を買ふのだ。どちらが便利か、世の中では便利な方へ延びて行くに定つてゐる。

内閣は今夜の中に出来る。社會黨政府のときに、大ストライキが勃發したといふ事件は、未曾有のことだらう。共產黨は、自身の勢力示威にこれを使ふ。右翼は社會黨攻撃にこれを使ふ。傍で見物してゐると、人間がいつの間にか、金の塊りに見えて来る。その間に、金塊はぞろぞろ海外に血のやうに流れていく。狼狽ろうたへてガーゼを持ち廻つてゐるものの、血は滔々と音を立てる。そこで外科醫が現れて、腕一本切り落さうといふのが今夜の内閣だ。——レオンブルムの内閣出現す。

六月五日。雨に押し流された、アカシヤの白い花の群團が、道路の石の上に浮いてゐる。旅

人はこんなものにも心が休まる。

ひどい雨だ。文藝春秋社より原稿料が着く。佐佐木君の手紙が中に這入つてゐたが、日本の事が一つも書いてない。

巴里に淡徳三郎氏の出してゐる、『日佛通信』といふガリ版の一頁新聞がある。これは日本に起つた出来事の報道と批判の部分を、外國新聞と日本の新聞から抜き出したものだが、同一事件が東西かやうに、解釋を異にしてゐるものかといふ見本になり、非常に興味が深い。ヨーロッパは東洋を知らずに動き、東洋またヨーロッパを知らずに廻つてゐる。この互に知らない差が、爲替となり、戦争となる。よく知るとは、心理に入るといふ事だ。文學はここから起り、これが世界の平和を保證していく唯一の武器だ。

六月六日。罷業はますます擴大して行く一方だ。新聞も極左翼と、極右翼の二つだけだが、やうやく發行をつづけてゐる。カルチエタンを歩いてゐると、日の暮れかかつてゐる中を、極右の賣子が、胸に新聞を横にあてつつ、叫んで行く。その數間後から、極左がそれをもみ消すやうに叫んで来る。すると、今度は極右極左と、賣子同志の聲の争ひが連続して来る。砂糖も明日は買へぬと云ふ。ガソリンも賣らぬから自動車は少い。

電燈と瓦斯と水道だけは、軍隊がこれを守つてゐるとの事だ。いつたい、ここの軍隊はどつちの軍隊か、われわれには明瞭でない。

夜、レストランに休んでゐると、ガソリンが買へぬので遊んでゐる運轉手たちが、塊かたまりつて遣入つて来る。彼らは政治の話ばかりだ。

去年、われわれは一週間四十時間労働と定めた時、アメリカが賛成して來たのに、イギリスが黙つてゐた。それだから、今になつてイギリスが困つて來たのだといふ。

フランスの労働者は皆金を持つてゐるから、ストライキが続いても困らない。血を吐くやうな争ひは、どこにもないが、それだけ長く續くだらう。持久戦といふ自然力の依頼は、ここでは戦法として役に立たぬ。火つけが、消防夫を氣取つてゐる、と云ふ極右新聞の内閣攻撃法は、獨特の高等戦術を想像させる。

四百八十一の工場主が負けて來た。このため、労働者一人の賃金は、三百から四百フランの増加だ。おまけに、休日が増す上に、その日も賃金が貰へるのだ。街の大きな店は、たいてい店員の罷業で戸を降ろしてゐる。この日、グランブルヴァルから、シャンゼリゼエ一帯を廻つ

てみたが喧嘩口論一つもない。遊ぶ者は遊んでをり、散歩するものは散歩してゐる。この静謐な閑日の趣きが徐々としてパリのレヴオリュションに變つてゐるのだ。

六月七日。圓とフランが、下り合ひの競争をしかけてゐる。この二つの國には、容易ならぬ暴風が、渦巻き起らうとしてゐるらしい。——今日は雨だ。前の墓場の中に、赤旗が靡なびいてゐる。道の辻に、銃を組んだ警官隊が守つてゐる。何事かと訊ねると、レオンブルムが會合してゐるとの事だ。墓場が會場になるのは葬式ばかりぢやないのだ。

六月八日。新聞は少しづつ出始めた。その代りに、汽車の食堂とチューリストが休み出す。フランス銀行の頭取が交迭した。

大きな百貨店は、どれも大戸を降ろしてゐるが、かうなれば、一度はどの店も、罷業をして行くにちがひあるまい。長年ながね忘れてゐた大掃除をするやうに、掃除を終つた店から、また開業をやつていく。埃が通行人の顔に、少しもかからぬところは、流石にフランスだと思ふ。

六月九日。スペインかイタリーへ旅行に出ようと思ふが、パリの罷業を見終つてからにしよう



うと、また腰を据ゑる。巴里へ来た人は、この地の歡樂場の話をよくしたものだ、そんなものは、あるにはあつても、歡樂場でもなんでもない。皆ここのは仕事場だ。歡樂を仕事とする。もとより、東京とて同じであるが、ここのは眞面目な仕事であるから、一層歡樂が白熱する。考へる暇など與へては、仕事にならぬ四苦八苦の策謀が、産業のやうに着實な火花を散らす。も早やこれは、デカダンではない。殺氣漲る手術室だ。

六月十日。罷業はますます擴大してゐる。しかし、もう皆忘れてしまつたやうだ。大火が續くと、傍に燃えてゐる火の事など、誰も忘れてしまふやうなものだ。

フランスがソビエト化する事は、ヨーロッパにとつて、一大事件に相違ない。しかし、ここは容易に染色すまい。それよりむしろ、全く反對の獨逸の方が、フランスの先手を打つて、ソビエト化する多くの條件を、備へてゐるやうに思はれる。最右翼と最左翼は、紙一重の差がある許りだ。一つは感情の壯烈、一つは理智の尖鋭。自由主義は、ぶすぶす矢を突き立てられる的となり、それ自體の混濁した鍛錬をもつて、思想の母胎を守護していく。私の最も注目したいのは押し揉まれる、そのデカダンの行方である。ここには、まだ一度も吹き消されたことのない、神火が細々と燃えてゐる。

六月十一日。罷業の大火は、たうとうわれわれ見物の足もとにまで及んで来た。今日は食事  
に宿を出ると、モンバルナス一帯のレストランは、椅子の足を上向けて、どの店も森閑として  
ゐる。私同様食事に出て来た外人たちは、うろろろしながら笑つてゐるだけだ。近所に白系露  
人ばかりで經營してゐる食事場が、一つあるのを思ひ出し、そこも罷業するものかどうかと行  
つてみる。行くと果してここだけが、店を開けてゐる。しかし、窓には組合に加入してゐる證  
明書を、今日に限つて貼り付けてゐる。しばらくして一團の罷業實行委員が檢しらべに來たが、窓  
の紙を見て何も云はず通過した。ところが、店のカウンターの前には、良く見ると、白系露人  
運動の寄附金箱が、輕さうにぶらさがつて傾いてゐる。

午後、ブリニヴァールから河を越え、オベラへ出て、マデレーヌの前を、サントノレの方へ  
曲り、シャンゼリゼエから、カルチエラタンまで歩いた。ほとんど巴里の中心を廻つてみたの  
だが、ホテルとカフェーとレストランは、どこも閉ぢて罷業である。夕食をとるのに困つたあ  
げく、五六里も歩いたわけだが、頼みにして來たカルチエラタンのイタリーの食事場も、主婦  
がにつこり笑つて駄目だと云ふ。空腹だが仕方もない。ルクサンブルの公園の中へ這入り、  
冷たい鐵の椅子に腰かけ、暮れかかつていく空を見上げながら、東京のあれこれを考へてゐる

と、不意に婆さんが肩を叩いて、腰かけ料をくれと云ふ。眼の前で、フロオベルの石像が空とぼけた顔をして、明日の天氣を眺めてゐる。

### トリスツアン・ツアラアのサロン

六月十二日。食事は出来るやうになつた。夜、岡本太郎君が友人の家を訪問するから、一緒に遊びに行かうと誘つてくれたので、出かけて見る。行く先はトリスツアン・ツアラアの家だ。ツアラアはダダイズムの始祖、及び超現實派の宗家であり、山中散生氏の邦譯もある詩人。家はモンマルトルの上であり、豪華なものだ。テラスにゐると、客が十一人も集まつて来る。女流詩人が四五人と、カイヨウと云ふ作家、及び彫刻家のジャコメツテイ等である。岡本君は驚くべき流暢なフランス語でよく話す。殊に知名なフランス人その他の外人と、堂々と對等の交際をしてゐるところは、若くして異國で一家をなしてゐる、氏の力量人物を知るに餘りある。

集まるフランス人の話は、すべて罷業の話ばかりだ。殊に興味あるのは、罷業のために潰れ

る資本家を、政府が潰さぬやうに援助を與へつつ、労働者の罷業を進めていく、難事なやりくりに關しての一同の注目である。

ピカソが左傾をして、バステイユ騒動の壁畫を描くといふ話が、ひそひそ話の中に出る。これはパリ人の誰も知らぬ事だが、ピカソの友人の女流詩人が私の横にゐて、この夜ツアラアに囁いてゐた話。嘘か眞實か、私の知る限りではない。

# 七月

## 頭ならびに腹

眞晝である。特別急行列車は満員のまま全速力で駆けてゐた。沿線の小驛は石のやうに黙殺された。

とにかく、かういふ現象の中で、その詰め込まれた列車の乗客中に一人の横着さうな小僧が混つてゐた。彼は一人前の顔をして一席を占めると、手拭で鉢巻をし始めた。それから窓枠を両手で叩きながら大聲で歌ひ出した。

「うちの嬢ア

福ちやア

ヨイヨイ、

福は福ちやが

お多福ぢや

ヨイヨイ。」

人々は笑ひ出した。しかし、彼の歌ふ様子には周囲の人々の顔色には少しも頓着せぬ熱心さが大膽不敵に籠つてゐた。

「寒い寒いと

云うたとして寒い。

何が寒かる。

やれ寒い。

ヨイヨイ。」

彼は頭を振り出した。聲はだんだんと大きくなつた。彼のその意氣込みから察すると、恐らく目的地まで到着するその間に、自分の知つてゐる限りの唄をうたひ盡さうとしてゐるかのやうであつた。唄は次々と彼の口から休みなく變へられていつた。やがて、周囲の人々は早やその傍若無人な小僧の唄を相手にしなくなつて來た。さうして、車内は再びどこも退屈と眠氣のために疲れていつた。

そのとき突然列車は停車した。暫く車内の人々は黙つてゐた。と俄かに彼等は騒ぎ立つた。

「どうした！」

「なんだ！」

「どこだ！」

「衝突か！」

人々の手から新聞紙が滑り落ちた。無数の頭が位置を亂して動揺めき出した。

「どこだ！」

「なんだ！」

「どこだ！」

動かぬ列車の横腹には、野の中に名も知れぬ寒驛がぼんやりと横たはつてゐた。勿論、そこ

は止るべからざる所である。暫くすると一人の車掌が各車の口に現れた。

「皆さん、この列車はもうここより進みません。」

人々は息を抜かれたやうに黙つてゐた。

「H、K間の線路に故障が起りました。」

「車掌！」

「どうしたッ。」

「皆さん、この列車はもうここより進みません。」

「金を返せッ。」

「H、K間の線路に故障が起りました。」

「通過はいつだ？」

「皆さん、この列車はもうここより進みません。」

車掌は人形のやうに各室を平然として通り抜けた。人々は車掌を送つてプラットフォームへ溢れ出た。彼等は驛員の姿を見ると、忽ちそれを巻き包んで押し寄せた。數箇の集團が聲をあげてあちらこちらに渦巻いた。しかし、驛員らの誰もが、彼らの續出する質問に一人として答へ得るものがなかつた。ただ彼らの答へはかうであつた。

「電線さへ不通です。」

一切が不明であつた。そこで、彼ら集團の最後の不平はいかに一切が不明であるとは云へ、故障線の回復す可き時間の豫測さへ推斷し得ぬと云ふ道斷さは不埒である、と、迫り出した。けれ共一切は不明であつた。いかんともすることが出来なかつた。従つて、一切の者は不運であつた。さうして、この運命觀が宙に迷つた人々の頭の中を流れ出すと、彼等集團は初めて波のやうに崩れ出した。喧騒は呟きとなつた。苦笑となつた。間もなく彼らは呆然となつて了つた。しかし、彼らの貨銀の返済されるのは定つてゐた。畢竟彼らの一樣に受けた損失は半日の空費であつた。尙ほ引返す半日を合せて一日の空費となつた。そこで、この方針を失つた集團の各自とる可き方法は、時間と金錢との目算の上自然三つに分かれねばならなかつた。一つは



その當地で宿泊するか、一つはその車内で開通の時間を待つか、他は出發點へ引き返すべきかのいづれである。やがて、荷物は各車の入口から降ろされ出した。人波はプラットホームから野の中へ擴がり出した。動かぬ者は酒を飲んだ。菓子を食べた。女達はただ人々の顔色をぼんやりと眺めてゐた。

所がかの小僧の唄は、空虚になつた列車の中からまた勢ひ良く聞え出した。

「なんぢや

この野郎

柳の毛蟲

拂ひ落せば

またたかる、

チヨイチヨイ。」

彼はその眼前の椿事は物ともせず、恰も窓から覗いた空の雲の塊りに噛みつくやうに、口をばくばくやりながら。その時である。崩れ出した人波の中へ大きな一つの卓子が運ばれた。そこで三人の驛員は次のやうな報告をし始めた。

「皆さん。お急ぎの方はここへ切符をお出し下さい。S驛まで引き返す列車が参ります。お急ぎのお方はその列車でS驛からT驛を迂回して下さい。」

さて、切符を出すものは？ 群集は鳴りをひそめて互に人々の顔を窺ひ出した。

故障線の列車はいつ動き出すか分らなかつた。

従つて迂回線の列車とどちらが早く目的地に到着するか分らなかつた。

さて？

さて？

さて？

一人の乗客は切符きつぷを持つて卓子しやくしの前へ動き出した。驛員はその男の切符に検印を済ますと更に群衆の顔を見た。が、卓子を巻き包んでそれを見守つてゐる群衆の頭は動かなかつた。

さて？

さて？

さて？

暫くすると、また一人じくじく動き出した。だが、群衆の頭は依然として動かなかつた。そのとき、彼らの中に全身の感覚を張り詰めさせて今迄の様子を眺めてゐた肥大な一人の紳士が混つてゐた。彼の腹は巨萬の富と一世の自信とを包蔵してゐるかの如く素晴らしく大きく前に突き出てゐて、一條の金の鎖が腹の下から祭壇の幟幡のやうに光つてゐた。

彼はその不可思議な魅力を持つた腹を揺り動かしながら群衆の前へ出た。さうして彼は切符

を卓子の上へ差し出しながら、にやにや無氣味な薄笑ひを洩して云つた。

「こりや、こつちの方が人氣があるわい。」

すると、今迄鎮まつてゐた群衆の頭は、俄かに卓子をめぐけて旋風のやうに搖らぎ出した。

卓子が傾いた。「押すな！　押すな！」無数の腕が曲つた林のやうに、盡くの頭は太つた腹に巻き込まれて盛り上つた。

馳て、迂回線へ戻る列車の到着したのはそれから間もなくのことであつた。群衆はその新しい列車の中へ殺到した。満載された人の頭が太つた腹を包んで發車した。跡には、踏み躪めじられた果實の皮が。風は野の中から寒驛の柱をそよそよとかすめてゐた。

すると空虚になつて停つてゐる急行列車の窓からびよつこりと鉢巻頭が現れた。それは一人取り残されたかの小僧であつた。彼はいつの間にか鎮まり返つて閑々としてゐるブラットホームを見ると、

「をッ。」と云つた。

しかし、彼は直ぐまた頭を振り出した。

「汽車は、

出るでん出るえ、

煙は、のん残るえ。

残る煙は

しやん癪の種

癪の種。」

歌は飄々として續いて行つた。振られる鉢巻の下では白と黒との眼玉が振り子のやうに。

それから暫くしたときであつた。一人の驛員が線路を飛び越えて最初の確實な報告を齎した。

「皆さん、H、K間の土砂崩壞の故障線は開通いたしました。皆さん、H、K間の……。」

しかし、乗客の頭はただ一つ鉢巻の頭であつた。しかし、急行列車は烏合の乗合馬車のやうに停車してゐることは出来なかつた。車掌の笛は鳴り響いた。列車は目的地へ向つて空虚のまま全速力で駆け出した。

小僧は？ 意氣揚々と窓枠を叩きながら、一人白と黒との眼玉を振り子のやうに振りながら、

「ア——

梅よ、

櫻よ、

牡丹よ、

桃よ、

さうは

一人で

持ち切れぬ

ヨイヨイ。」

＊「頭ならびに腹」大正十三年（全集六）

## 草の中

村から少し離れた寺の一室を借りた。そこでその夏を送ることにした。寺の芝生の庭には鐘樓と塔とがあつた。門には鐵の鉞を打つた大きな扉が夜でも重く黙つて開いてゐた。塔の九輪の上には鳩がとまつてゐた。

靜かな山寺である。寺には和尚が死んでゐなかつた。誰もゐないその寺の中を時々私は歩いてみた。佛壇もなければ内陣もなかつた。ただ平安朝時代の貴族の廣い館やかたのやうで、裏には古い塚の傍に、これまた清らかな水を滿々と湛へた泉があつた。雑草は丈延びて枯葉の中から生

えてゐた。

私はこの寺を借りるとき番人から、

「あなたのお好きなやうに。」と云ふ答へを得た。番人は私に寺を委せて旅へ出て行つた。

私は一日に一度鐘樓に登つて釣り鐘を撞けばそれでよかつた。三つの捨て鐘を打つて、十撞の繩を引くのである。その他の時は私は陽が輝けば芝生の上に出て、高い銀杏の樹の蔭に眠つた。微風は湖の方から吹いて來た。

夕暮になると門の厚い扉の前へ村の娘らが塊かたまりつて遊びに來た。彼女らは門から中へ這入らなかつた。芭蕉の葉のゆるやかに揺れる下で彼女らは華やかに笑つてゐた。空は湖の明るさを受けて薄桃色に輝いてゐた。芝生は霧の中でいよいよ緑の色を増し始めた。行水に洗はれた娘達はそこで母親の呼び聲のするまで笑ひ合ふのである。彼女らは京の娘の美しくなやかな風を持つてゐた。浴衣ゆかたに赤い帯を締め、長い袂を微風に靡かせて若者達の話をした。私が傍を通ると彼女達は急に話をやめて黙つて了つた。

或る日、Kが海を越えて遠くからぶらりと來た。彼は戀人を亡くしてその淋しさを紛らすためにやつて來たのだと直ぐ分つた。

「鈴子さんはいい人だつたね。」と私は云つた。

彼は黙つてゐた。鈴子とは彼の戀人の名前である。

「静かで愛情が深かつた。」

私は堂を廻つてゐる高縁に蹲んで蘇の上を眺めてゐた。足の裏に板の木目を氣持よく感じながら夜の來るのを待つた。山蟻が柱を傳つて登つて來た。

「ここはいい所だね。」とKは云つた。

「僕は氣に入つてゐるんだ。それにこの家は僕の自由になるんだ。」

「いいね。」

彼は跣足のまま飛石の上へ降りて庭の奥へ奥へと歩いていつた。私も彼の後からついていつた。樹の深々と垂れ下つた繁みを幾つも潛り續けて池の傍へ出た。藤が雜草の中から這ひ出て池の上へ垂れ込んでゐた。鯉は水草の下に深く沈んでゐた。

「ここはあまり淋しすぎる。」とKは云つた。

「雉子が澤山ゐるんだよ。」

「さうだらう。」

彼は暗く繁つた周囲の樹々を眺めてゐた。苔をつけた石塔が一つ傾いて草の中に立つてゐた。笹の中を潛る猫の音がした。私は高い松の樹を仰いだ。

「松といふものはどこか淋しいものだね。なぜだらう。」

「風が渡ると松はとても淋しいよ。」

「ひとり長生きをすると云ふ感じを強く受けるからぢやないか。」

「樹を見てゐるといつもさうだが……。」

「しかし、樹になりたいね。」

二人はそこから奥へは行かずに戻つて來た。私は煙草を吸つて火を彼の方へ差し出した。彼は鐘樓へ登りたがつた。私は冷たい石段に腰を降ろして蝙蝠の飛ぶのを眺めてゐた。塔は夜の空にだんだん浮き始めた。

「君、この村に、君を愛してゐる女の子があるのかね？」と彼は鐘樓の上から訊ねた。

「ゐないよ。」

「ゐてもいいぢやないか。」

「そりやもう。」

「かう云ふ寺へ、人眼を忍んで靜かに誰か來ると云ふのはいいね。」

「うん。」

「草を分けて。」

「君が來てくれたぢやないか。」

「いいのかね？」

芝生は柔かに濕つて來た。空は澄み渡つてゐた。その日晝間暑かつたそれだけに星はきらき



らと湧えて光つてゐた。萩の叢がつた中では蟲がひそかに鳴いてゐた。夜が更けてから二人は門を脱けて裏の土手の上へ出た。彼はその深い草の中へ坐り込んだ。

「戀人を失ふと馬鹿になると云ふね。」とKは云つた。

私は彼に彼の亡くなつた愛人を追憶せしめる言葉を云つてよいかどうか分らなかつた。空気はだんだんに冷えて來た。村の火が草の中から揺れて見えた。夜鳥が二羽啼きながら塔の方へ飛んでいつた。

「君のお父さんは死んだのだね？」と彼は云つた。

「死んだ。」

「夢を見ないか？」

「見ない。」

「夢を見てゐるといいよ。」

「さうかね？」

「鈴子はそれは僕を愛するね。實に驚くほどだ。」

「夢の中でか？」

「うむ。」

「さう云ふことがいつまでも續けば一番いいね。」

「うむ。」

塔の向うに私の知人の家が見えた。窓がまだ一點明るく開いてゐて、そこから吊られた蚊帳がよく見えた。その中にはその家の子が長らく病んで寝てゐる筈であつた。醫者の俾が絶えず降ろされてゐたのを思ひ出した。風が柔かく平原の上を渡つて來た。草は葉を擦つて胸の前でさらさらと音を立てた。着物が夜氣に濕つて重く肩から垂れ下つてゐた。二人はいつまでも立たうとはしなかつた。あまり彼も話さなかつた。私は病人のゐるその家の明るい一點の窓を眺めてゐた。暫くしたとき、急にその窓の蚊帳の中で母親が起き上ると傍の誰かを覗き込んだ。

「君あそこに明るい窓が見えるだらう。」

「うむ。」

「今誰か起き上つてなんか覗いてゐるだらう。」

「うむ。」

「あそこに僕の知り合ひの子が重病で寝てゐるんだよ。死ぬんぢやないかね。」

二人は長らく黙つて草の中からその病人の部屋を覗いてゐた。草の緑の匂ひが微風に揺られてさまようて來た。時々星が斬りつけるやうに流れた。遠くの道を歸る馬子の唄が聞えて來た。村はだんだんと眠つていつた。梨畑の番小屋の中で火が赤く燃え始めた。足を延ばし變へると草は冷たかつた。さうして露は葉の上に降り始めた。

「いけない。」と急にKは叫ぶやうに云つた。

「どうした？」

「かう云ふ草の中で鈴子を抱いてやつたことがあるんだ。」

私は黙つてゐた。

「それは丁度こんな夜だ。」

彼は頭をかかへてそのとき草の匂ひを嗅ぎつけるやうに雑草の中へ倒れ込んだ。

\* 「草の中」大正十三年（全集六）

## 露

彼はとよの姿が見えなくなると、引ぬいたキャベツの最後の一束をかかへて濱へ降りた。彼はいつもの朝よりも數倍の元氣であつた。彼はキャベツを舟の中へ投げ込むと水に棹をつきさした。彼は大聲で歌を歌ひながら對岸の街を差して櫓を漕ぎ出した。そこで彼はキャベツを賣

らねばならなかつた。湖の上を渡る微風が強健な彼の胸をかすめていつた。日に焦けた彼の肩が櫓を引く度に輝いた。波は舟尻で渦を巻きながら擴がつた。魚は銀色の腹を返して舟端に突きあつて來た。

彼はキャベツを街の商人に渡すと肥料を積んで歸つて來た。午後になると湖には波が立つた。彼は早く日の暮れるのを何より待つた。彼はとよと逢ふことを思ふと午後の仕事がそはそはして出來なかつた。彼は畑の草をひいて代りに葱を植ゑなければならなかつた。彼は畑へ行くと、草の中からとよの家の方を絶えず見た。丁度、彼がさうして彼女の家をながめた十幾度目のときであつた。彼女の軒の柴の上でとよが腰をおろしてひとり編物をしてゐる所が眼についた。彼女のうちしろの棚から蒔技の實が色づいて下つてゐた。彼は遠くから彼女を見てゐると、近くで彼女を見た時よりも一層彼女の衰へてゐることに氣がついた。牛の血を飲むよりも、もし人間の血の方が彼女の身體に効目があるなら、彼は自分の健康な血を出して飲ませたかつた。彼は小石を拾ふと溝に刺さつてゐる一本の杭を目掛けて投げつけた。それは彼女が死ぬかどうかを占ふために投げつけたものである。もし石が杭にあつたら、彼女の病氣は全快するにちがひないと彼は思つた。しかし、石は杭を外れて水沫を跳ね飛ばした。

「いかん。」と彼はいつた。

彼はとよの方を見た。彼女は彼の見てゐるのを知らなかつた。彼は頬かむりをとつて草の上

から振つた。が、とよは編物から目を放さなかつた。彼は手拭をだらりと下に垂らしたまま長らく彼女の姿を眺めてゐた。

「ありや死ぬぞ！」と、彼は不意に呟いた。

彼は悲しくなつた。彼は畑の中へ蹲み込むと、草を手あたり次第にひきむしつた。彼は草の中へ倒れ込んだ。

「神様、どうぞあの娘をたすけてやつて下さりませ、どうぞあの娘をたすけてやつて下さりませ。」

彼は眼を瞑つて祈り出した。涙が彼の眼から流れて來た。彼は草の葉で涙を拭きながらごろごろ雑草の中を轉がり廻つた。

日が暮れかかつたとき、彼はひとり湖の岸へ出て行つた。波は静まつてゐた。鷺は魚を啄んで水面から翔け上つた。微風に漣が揺らめくと水中では藻の群生が一齊に濃綠色に變つて來た。帆が夕日に輝きながら沖の方から歸つて來た。

彼は裸體になつて小舟へ乗ると、藻のない沖まで出ていつた。彼はそこで水の中へ飛び込んだ。藻を積んだ船が彼の近くを漕いでいつた。彼はその舟と競争するために抜き手をきつた。

彼は泳ぎ疲れると自分の舟へ歸つて來て、仰向きに舟先へ寝轉んだ。空は雲を拂つて暮色の中に擴がつてゐた。遠くの山は峰にひとり夕日を浴びて淡紅色に映えてゐた。

日が全く暮れると彼は舟を岸の方へ近づけた。彼は棹をぐつと水底に刺し入れた。舟は叢が  
つた蘆を割つて洲の中へ入り込んだ。彼は口笛を吹きながら岸へ飛び降りた。濕つた草原が彼  
の足の重みで水を滲み出した。

彼は跣足のまま畑の中へ突つ立つてとよの来る方を眺めてゐた。しかし、彼女はなかなか来  
なかつた。彼は畝の草の中で膝を組んではまた立ち上つた。蚊が彼の遅しい足を襲つて来た。  
彼は氣がいらいらして來るととよの家の方へ歩き出した。暫く行つたとき、彼は桑の葉を擦つ  
て近づいて來る人の足音を聞きつけた。彼は立ち停つた。そして、深々と繁つた桑畑のかすか  
に揺れるのを見詰めてゐた。すると、彼の前に苦しげな息をついてとよが現れた。

「おとよさんか。」

「はア。」と答へた。

彼は躍るやうに彼女の傍へ駆け寄つた。彼女は彼を見ながら青ざめた顔に振りかかつた髪  
の毛を撫で上げた。

「苦しいぢやらう。」

彼はとよを横に抱き上げた。

「SSのよ。」と彼女は云つた。

が、靜かに彼女は彼の腕の中ですくんでゐた。

彼にはとよが軽かつた。両手で振れば苦もなく彼女の身體がばらになりさうに思はれた。彼は彼女を抱きながら小川の水をびしやびしや飛ばして渡つていつた。彼は野菊の花を蹴りつけた。

「舟に乗らう。」

とよは頷いた。彼は濱へ出ると片足で蘆を倒して舟の中へとよを降ろした。彼は喜びで呼吸が激しくなつた。舟は彼に押されて蘆の中から勢ひ良く迂り出した。とよは船先を攫んで蹲んでゐた。彼は暫く黙つて沖へ向つて櫂を漕いでいつた。對岸の街の灯が行手の水面に散つて揺れてゐた。櫂の音が靜まつた湖の上で調子をとつて響いてゐた。とよは舟端の波を小手で掬つてはじいてゐた。

「どこへ行かう。」と彼は訊いた。

「どこでも。」

「波は今晚は少いね。」

彼は櫂を捨てると、とよの傍へ寄つて行つた。彼はとよの濡れた手をとつて自分の着物で拭いてやつた。彼女の手は彼の両手の中で冷たかつた。

「あッ、失敗つた。」と彼は低く云つた。

「どうしたの。」

「あんた、夜露は毒ちやろが？」

「いいわ、いいわ。」

「毒ちや、歸ろ。」

彼は急に櫓の傍へ戻らうとして立ちあがつた。すると、とよは彼の手を持つて無理に自分の傍へ坐らせた。

「私、いづれ駄目なの。」

「何云うてるい！」

「ほんと、もう私、ここ一と月保つたらいいと思つてるの。」

彼は悲しさがどつと詰つた。彼は聲を上げて泣きたくなつた。

「おとよさん、わしの嫁になつてくれんか。」

彼はとよの腕を振つていつた。彼女は首を垂れて黙つてゐた。

「よう、よう、おとよさん。わしの嫁になつてくれよ。」

彼は泣きながら周章まわさでてとよを膝の上へかき寄せるやうに抱き上げた。

「こんな身体でもいいの。」と彼女は云つた。

「ええわ。ええわ。わし、かまふかい。」

彼は無茶苦茶に腕に力を籠めて咽喉を鳴らした。すると、とよは初めて肩を慄はせて泣き出



した。舟はゆるやかに揺らいでゐた。黙つて塊つてゐる二人の間から激しい咳が聞えて來た。

\* 「クライマックス」大正十二年（全集六）

## 色褪せた風景

彼はこの頃漸く自然の美しさが彼なりに分りかけたやうに思はれた。彼は物を見ると、なるだけその物の形だけを見るやうに心掛けた。形だけ見てゐると、いかに些細な物體にもそれ相應の品位と性格とがあつた。さう云ふ彼の物の見方に一番多く見られるのは、彼の亡くなつた妻であつた。凡そいかなる物の觀じ方があらうとも、死は形が亡くなると云ふことにちがひなかつた。彼は常に一番眼に觸れてゐた形である空と妻との二つのうち、最も微妙に動き續けて茫々たる空の倦怠を破つてゐた妻の形が、俄かに彼の眼界から無くなつたといふことは、とにかくこれから空漠たる空のみ絶えず彼の相對として眼に觸れると云ふ想像からばかりでも、彼に取つてこの生活といふ風景は全く色褪せた代物しろものであつた。

\* 「蝶はどこにでもゐる」大正十五年（全集九）

## 蛾になつた妻

その夜、彼は生れて初めての夏の多彩な海岸に眩惑されたまま、久し振りに生々としてゐた。が、さて寝ようとする、また一疋の大きな白い蛾が彼の肩さきにとまつてゐた。

「これはをかしい。」と彼は思った。

彼は暫く蛾をちつと見詰めて立つてゐた。

「これは妻だ。」

ふと彼はさう思った。すると、俄かに、前々夜から引き續いて彼の周囲を舞ひ續けて來た蛾の姿が、戀々とした妻の迷ひのやうに思はれ出した。

彼より先に床の上へ寝轉んで彼の様子を見てゐた友人のIは、急に起き上つた。

「なんだ、蛾か。」

「蛾だ。」

「よし。」とIは云ふと、いきなり蛾をひつ掴んだ。

「どうするんだ？」

「殺すんだ。」

「よしてくれ。」と彼は強く云つた。

Iは蛾を握つたまま暫く彼の峻しい顔を眺めてゐた。彼は不意に起つて來た自分の氣持を勿論知らう筈もないIの不思議さうな顔に好意を感じた。

「此奴は俺の死んだ家内なんだよ。紙で包んでそつと捨ててくれないか。」

「よしよし。」とIは穩かに云ふと、蛾を窓の外へ捨てて了つた。彼は床の上へ寢ながら、どうして妻が自分に蛾を彼女だと思はせるのかと考へた。もつとも彼自身を彼だと思ふのと、蛾を妻だと思ふのと大した變りはなからう筈なのに、しかし、それにしてもわざわざ今の場合、蛾を特に自分の妻だと思ふ自分の氣持が彼には奇怪なことに思はれてならなかつた。

\* 「蛾はどこにもゐる」

## 火の點いた煙草

三日たつと彼女から返事が來た。

「私は父に手紙を書きました。あなたのことと、私のことを子供のやうに。でも、うつかり書き過ぎまして恥しくなりました。私は家へ歸つて、綺麗な着物を染めて貰つて、賑やかな紫色のお嫁さんにならうと、しつとりと考へます。何がこんなに嬉しいのでございませう。それから私は五月蠅くなく、あなたのお傍にいつて居させていただきます。ああ、私の希望は霧のやうに深いのです。あなたのやうな好い方にお逢ひ出来るものは、いままでつゆ考へられませんでした。かうしてゐますことが、私には不思議なことで、あなたのお傍にゐることが、自然なことに考へられてなりません、などと、ああ、なんだか變でございませう。」

彼はすぐ彼女に返事を書いた。

「僕もなんだか變でなりません。もう暫く顔を隠してゐようではありませんか。僕は自棄に煙草の煙を吹かせてゐます。これは魔法だと云ふことを知りたいために、こんなふはふはした

煙の中から、矢鱈に愛が飛び出して来ようとは、今までさらさら考へたことはありません。これは確かに魔法です。でなければ少くとも煙草の害に相違ありません。僕は生涯煙草を吸はないことを誓ひました。でも、いま暫く、僕はあなたに顔を見られたくありません。あなたはこの手を、まだ僕の顔からとり放さうとしてはなりません。」

三日たつと彼女から手紙が来た。

「まだお歸りにならないのでございませうか。早くお歸り下さいませ。私はのんきに、母の黒い絞つきの裾に、ばらりと小さい花のこぼれた模様を染めて下さるやうにと、母に願ひました。私はあなたのお傍にゐましても、樂ばかりいたしたいとはつゆ思ひませんけれど、また苦しいことや悲しいことをゆめ考へたこととてございませぬ。あなたは泰山木の白い花よりも、もつと爽やかに、懐かしく、苦しくなく、私をお傍に置いて下さいませ。さうしますと私は、黒いピアノのしづまり續けた講堂のゆふべを、啼き續けた白い鳥よりも、單純な、やさしい心になつて、のびのびといたします。私は教會で袂に入れたまま押し潰してしまつたゴッホの日向葵と野茨の繪とを丁寧に擴げてお床の傍にかけて眺めてゐます。何が淋しい、何が苦しい世の中でございませう。」

「さうだ、何が淋しい、何が苦しい世の中でございませう。」と彼は一緒に呟いた。

彼は急に彼女に逢ひたくなると、直ぐ駆け込むやうに停車場へ急いでいつた。彼は汽車に乗

り込んだ。彼は煙草をぶかぶか吹かし出すと、煙草について、會心の微笑を洩らして考へた。

「こりや、確かに、煙草と云ふ奴は、有害だ。こんなものは火を點けて焼くが良い。」

彼の頭の中で、火を點けられた無数の煙草の行列が、樂譜のやうに彼女をめがけて泳ぎ出した。

——Dames.

——Opera.

——High Life.

——Da Capo.

——La Cama.

——La Rubia.

——何が淋しい、何が苦しい世の中でございませう、と踊りながら。

\* 「火の點いた煙草」昭和二年（全集九）

## 泥坊と乞食

細い路をへだてた横の層屋では、積み上げられた紙屑の隅で勝手にごそごそ鮮人達がモヒの注射をやつてゐた。彼らの一人は角の潰れたシルクハットを冠つてゐた。一人は骨の突き出た洋傘を持つてゐた。一人は跛足ちんぱで跛足の半靴を履いてゐた。

「あれはなんです。あれは？」

「あれは、お前、泥坊と乞食だよ。」と母は云つた。

乞食と泥坊の顔は叩き落された瓦のやうで、いつ見ても笑つてゐることはつひぞなかつた。いつも彼らはぶらぶらしながら煙草を吹かせては注射をした。ときには、彼らは無表情な鈍い顔のまま喧嘩をやつた。

シルクハットはお洒落であつた。彼は膝に縛りつけた手巾の中から注射器を取り出した。跛足は頭の鉢巻の中から取り出した。彼らはいつでも紙屑の中に埋まつて死にかかつた犬のやうにびりびりと慄へてゐた。

\* 「青い大尉」昭和四年（全集八）

「青い石を拾つてから」と同じく朝鮮京城の路地の描寫。

## 批評

辰子が私の留守に家出をしてから一週間もたつた頃、各新聞は一齊に私の「眼に見えた風」について批評をし始めた。

T新聞の批評家は次のやうに云つてゐる。

——「この作者の名には初めて接するが、作中の辰子なる賣笑婦はあまりに類型的にて面白くなし。しかし、私なる人物の辰子を愛してゐるや否や朦朧としながら残酷な所、男の氣持が良く分る。見るべきものなり。」

A新聞の評——「私なる人物の實驗癖に出逢ふ辰子の態度は宜し。男の方あまり自己辯護の嫌ひあるは作者の未だ社會を見てゐざる證據である。」

U新聞曰く——「辰子のことについて今少し書くべき必要がある。私なる人物が死體係りを



してゐると云ふことについて辰子がなんらかの關心を持つべきであらう。もし、私なる人物が虚榮のために祕してゐるとすれば、あまりにこの人物らしからざることではないか。」

F新聞曰く——「最初はだらだらしてゐるが私は終ひには胸を打たれた。賣春婦になつて歸つて來た辰子の中から、作者は出來得る限り、汚れざる一面を見ようとしてゐる。そこが少し古い美しさだとは思つたが、これは近來の傑作だ。」

私は新聞の批評を見ると憂鬱になつた。この程度の出世で一人の女が家出をしたといふことは、社會がいかにか微妙な轉回を、絶えず企ててゐるかと思ふことを教へただけだ。

私はテーブルから離れると箒はらきを持つて解剖室の床の上を掃き始めた。私は一人の掃除夫にすぎないと云ふことを認識するために、腸や、足や、首や、胃袋の間を渡りながら。

\* 「眼に見えた風」昭和三年（全集七）

作中の「私」はある大學の解剖學教室の掃除人であつて、勿論、作者自身のことではない。この「私」が大學教授の目に止り、雜誌社に推薦されて書いた小説の題が「眼に見えた風」といふのである。

## 母と娘

坂を上つた所で街は急に開けてばつと面かを打つて来る。それから菩提樹の繁つた影の多い坂になる。夜氣に濕つてだらりと垂れた肉屋の旗や、その下に吊り下つた肉の乾いた白い脂肪や、理髪店の鏡の中で明るく開いてゐる部屋を見ると、里枝は傍に竝んでゐる外山とかうしてここを歩くのももう長くはないと思つた。里枝は良人の毛利が死んで以來別居してゐるとはいへ、ずつと外山に身をよせて來たのだが、それがこの頃逢ふ度に外山は嫁搜しの段取りばかりを忙がしさうにしてゐるのが感じられた。擦れ違ふ若い女を見ると外山はいちいち里枝を見返つてあれはどうか、これはどうかと、意見をもとめてにやにやした。初めの間は里枝も外山のその冗談には腹を立てたが、しかし、外山にしたつて自分の死んだ友人の妻を養ふためにまだ一度も正しい妻を持つたこともなく月日を空しくすごして來たのだから、外山の希望ももう里枝はいつか一度は許してやらねばならぬと、この頃はだんだん思ふやうになつて來た。

家へ近よつて來るに従つて、街路はますます雑沓して來た。道の兩側に出てゐる夜店の間に

溜つた人流れの中を歩きながら、里枝はもしこの外山ともいよいよ別れねばならなくなれば、さしづめ毛利の古い友人の玉置のところへ話をしてみるより今のところ仕方がないと思つた。それに玉置は毛利のゐるころから里枝にとやかくと愛想を云つて、なみなみならぬ親切さを示してくれたことも忘れることは出来なかつた。すると、そのとき、人流れの中からふと外山は里枝の娘の瀧子を見つけて云つた。

「あ、あれは美人だぞ。あれを一つ貰ふかな。」

里枝は云はれたままに眼を走らせると、瀧子の傍に花島がついて歩いてゐた。

「駄目よ。あれは。」

「いや、なかなかどうして、ひとつ、あの娘を俺にくれよ。」

瀧子と花島は二人に見られてゐることに氣附かぬらしく竝んでゐたが、どちらにも不機嫌さうに周囲の波立ちとは反對に沈んでゐた。

里枝は二人が何かまた家で氣まづいことでもして來たのにちがひないと思つた。彼女は瀧子が他の青年達から放れて花島と二人でゐるのを見ると、心が自然に落ちつくのであつた。初め花島が瀧子の所へ遊びに來たとき、里枝は花島の眼の輝きから死んだ良人の眼の光を思ひ出した。するとその聲はまた一層良人の聲と似よつて低くしつかりとしてゐるのに氣がついた。彼女はそのとき、襖の蔭で外山の袖をひいて云つた。

「あなた、ちよつと、あの人の聲誰かに似てると思はない？」

出ていかうとした外山はしばらく立ち停つて花島の聲を聞いてゐたが、急に眞暗な中で黙つたまま里枝の腕をねぢ上げた。――

里枝は外山が今も瀧子をくれと自分に云つた冗談も、花島にともすると心を奪はれ勝ちな自分への腹いせの現れだと思つた。それを思ふと彼女は瀧子と花島の顔を見くらべながら、嫁捜しにばかり熱心にならうとする外山の胸を一層刺すやうに云つた。

「花島さんのあの恰好。どうしてあんなに似てるのかしら。不思議ね全く。」

「それぢや、花島の嫁になるさ。」

「ならうかしら、あたし。」

「ぢや、俺がひとつ、仲人になつてやらうか。」

「さうね。したらまだあたしだつて、これで若返らないとも限らないわよ。」

全く里枝はふざけながら外山にそんなことを云つてゐるものの、花島の動きを眺めてゐると良人の若い時代の呼吸までが手にとるやうに身邊に感じられて、ああ、あの恰好だ、あれと同じだと、良人との仲の良かった當時の生活の空氣が、眼の前にありありと現れたかのやうにぼんやりとするのだつた。

しかし、この里枝の中に起つてゐる氣持は外山にもこのとき同様に起つてゐた。そのため外

山はさきから里枝と肩を並べて歩きながらも、およそその里枝の氣持は分つてゐたのである。彼は里枝が友人の毛利の妻だつたときからひそかに彼女を愛してゐた。しかし、外山は毛利の家庭の亂れることを心配して、もう生涯このまま自分の意志を捨ててしまひ、相手の里枝にさへも氣附かれないやうに機智と諧謔とで表面を濁しながら獨身を續けて來たのだつた。それが毛利が死に、いよいよ年來の希望のままに里枝と瀧子の生活の心配までしなければならなくなつて、二人を引きとらうとすると、今度は外山の養母が承知をしなくなつて來た。今まで何よりも健康に注意をし、心ひそかに友人の毛利よりも長生きをしなければならぬと日々體操までかかさずして來たのに、それが毛利が死んで漸く時が來たと思ふと、次ぎには外山は母の死を待たねばならなくなつたのだ。

外山は里枝と別居をしてこれまで忍耐に忍耐を重ねて養母を奉つて來たが、そのうちに里枝の娘の瀧子が、丁度外山が最初に里枝を見たときと同じ美しさをもつて、意外な早さで成長して來た。外山は瀧子のお襷おたすの頃から彼女を見てゐるので、初めは特別に瀧子の成長には氣附かなかつた。けれども、瀧子がいつの間にか女學校を出て、花島が瀧子の周圍をまはり始めたのを見ると、外山には急に瀧子の美しさが目立つて來た。

外山は里枝が瀧子と並んで坐つてゐるのをふと見ると、四十を過ぎた里枝はもう女のやうには見えなかつた。今まであれほど自分をひきつけて生涯を棒にふるしてしまつた女が、これな

のかと、ときどきは暗澹とすることがあるにはあつたが、しかし、若い時代に里枝の身につけてゐた華やかな空氣と同じ色彩をもつて咲き出して來た瀧子を見ると、これだけは毛利の掌中のものでなく自分のままになるのだと、今までの忍耐もなんとなく報はれて來たかのやうな氣持が自然にして來るのであつた。しかし、さうかといつて里枝がいつも傍にゐる間は、外山は瀧子の身の上には直接手の延ばしやうがなかつた。彼は折があれば花鳥を瀧子からひき離さうと待ち構へる氣組も出て來てゐるのだが、さて引き離してしまつてから瀧子が母の主人と同様な自分と直ぐ結婚する氣になるものとは思へなかつた。むしろそれは花鳥を好きな里枝と花鳥とを近づけておく方が、どちらかといふと瀧子が今より一層自分へ近づく可能性をもつて來ると思つた。それに外山が眞面目に瀧子に心を動かし始めた動機は、ただ瀧子が里枝の若かつた時代の美しさと殆んど同じ美しさを持つて來たことのためばかりではない。長い外山の獨身に心配を重ねて來た外山の母が、ふとある日、瀧子が外山の家から歸つた後で、あの娘とならお前はいつ結婚してもよいと口を割つてしまつたからだつた。このときから、外山は今までひそかに荷厄介（かつかい）な敵だとはばかり思つてゐた母親が、不意に強力な味方のやうに思はれて來たのである。實際外山が瀧子と結婚するためには、個人の力でどんなに里枝と瀧子とを説き伏せようと努力したところで、外山の養母のその一言に勝る（まさ）ほど強い力をもつて二人を動かす他の理由は絶對になかつた。ただ外山の一番の心がくべきことは、それを里枝に云ひ出す時機である。

それまで外山はじりじりと冗談にからんで、今から里枝の心をもみほぐしておかねばならぬのだつた。しかし、この外山の新しい希望は、全く彼にとつて生涯の大事業と同様にたしかに難事なことであつた。

\* 「母」昭和七年（全集七）

## 芭蕉の生家

芭蕉のものをときどき讀んでは見るが、あまり知つてゐる方ではない。小説を誓いてゐると、あの境地は一大敵國で、狐や狸のゐさうな氣持がする。伊賀の上野の中學にゐるとき、母が芭蕉の住んだ蓑虫庵を借りる契約まで一度してたうとう借りなかつたが、私は蓑虫庵へはよく行つた。水原氏が私に芭蕉のことを書けと云はれたことは、氏の義弟の由良哲次氏から、芭蕉の生家について私がよく知つてゐることを聞かれたからであらうと思ふ。由良氏は中學のとき一年上の先輩である。私は中學時代には、芭蕉のことについては誰にも話さなかつたつもりであるが、どうして由良氏が知られたものであらうか。

小學校時代私は母の實家のある伊賀の柘植で育つた。小字を野村といふが、川をへだてて灰野と云ふ字がある。この灰野で芭蕉は生れた。私は母からときどき灰野へ使ひにやらされたが、行くときは松尾宇八といふ家であつた。宇八の先に久八といふ人がゐて、宇八の隣家の藪の中に住んでゐた。これが芭蕉の生家であるが、宇八や久八の家と、私の家とはどのやうな關係にあるのか私には長い間分らなかつた。それといふのは私は六つときまで東京に育つて、七つになつて初めて母と一緒に柘植へ歸つたために、小字の違つた灰野のことなど興味もなく、聞かうもしなかつた。私は十一のときからまた學校を變つて、近江の大津へ行つたので、さらに灰野の宇八や久八の家については、中學の卒業間際までなんら知るところがなかつた。しかし、母の母は松尾はなと云つて宇八の姉であることは、いつともなく臚ろげに知つてゐたので、文學が頭に入り始めると同時に、母に灰野のことをあれこれと訊ねてみた。ところが、不思議なことに母は芭蕉の生家で佑天上人も生れたのだと云ふ。佑天上人は子供のときは馬鹿で、誰も相手にしなかつた。ところが、犬の血を飲むと馬鹿が癒るといふので、犬の血を飲まされるのと、たちまちそれから賢くなつて下總の國へ行つたといふ。私は佑天上人と芭蕉との關係については、その後調べたこともなくいまだにそのままに捨ててあるが、これも灰野の家へ行けば明瞭になるであらうと思ふ。しかし、私はこんなことには一向興味がないので、よほどの機會がなければ調べる氣も起らない。地方の人の一説によると、佑天上人と芭蕉とは同じ人だとい



ふ説もあるが、これは怪しい。私の母の實家の野村の家は、先祖が伊豫の宇和島から来て初めて野村といふ村を造つたと母は話したが、芭蕉の先祖の地もたしか伊豫の宇和島であつたと思ふ。野村から一里ほど離れた湯舟といふ山中の村には、平宗清（？）の墓があるが、これも芭蕉の先祖ではなからうか。柘植の灰野の傍に城址があつて、先年死んだ國民黨の代議士の福地錢吉氏の先祖の、福地伊豫守はこの城主であつたと錢吉氏の長男宗彦君が後年私に話したことがある。してみると柘植の一角は伊豫からの流れと見ても良い。芭蕉は福地伊豫守の家臣とある本と、藤堂の家臣とある本と二つ見たことがあるが、藤堂と福地伊豫守との關係はどんなになつてゐたものか、今のところ私にはよく分らぬ。そのうち一度灰野へ行つてよく調べてみたいと思ふが、もう三十年も歸らないので記憶も薄らいでゐる。幼いとき私は福地伊豫守の城跡へよく遊びに行つたが、その荒れ果てた草の中に古井戸が一つあつて、中を覗くと羊齒や苔の生えてゐる間から、骨の露出した番傘がいつも水の上に浮いてゐた。井戸の前に句碑があつて、古池や蛙飛び込む水の音と書いてあるので、この井戸の中には蛙がそんなにゐるのかと思つたのを覚えてゐる。子供たちはみなこの城跡のことを、芭蕉さん芭蕉さんと呼ぶ習慣であつたが、芭蕉さんとは何のことだかさつぱり私には分らなかつた。私は芭蕉さんつてなんだと、訊くとその村の子供も誰もなんとも答へなかつた。

＊「芭蕉と灰野」昭和十年七月號『馬酔木』

## 控へ目な感想(二)

### 地 點

われわれは今日より二十年の後の新しさを考案することは、容易であるばかりではなく、平凡である。われわれにとつては、一年後の新しさこそ、必要であり、困難である。試みに飛び上つて見るが良い。落ちる所は、彼の飛び上つた所である。しかし、飛び上つたその地點と雖も、これまた彼が飛び上つてゐる時間の中を、動いてゐるのだ。さて、そこで足もとは——この足もとを洞察すること自體が、困難の中の困難である。

### 能 動 精 神

われわれは自身の作物が絶えず蹴飛ばされつつあることを知る以上に、彼の足より早く、自

身の足で自身の作物を蹴飛ばさねばならぬ。

### 自虐の難

いかなる大文豪と雖も、蹴飛ばさうと思へば、易々たることである。だが、彼が彼自身の作物を蹴飛ばすことの難事さにいたつては、譬へば人がいかに進歩を妨害したがる悪癖を有つかを知ることによつてでも、明瞭である。

### 虚無

われわれは進歩を妨害する無数の點である。しかし、われわれは同時に進歩を助ける無数の存在でさへ有り得る。足もとは、この二つの力の發育場に他ならない。保守と急進。われわれはこのいづれをも持ちながら、いづれにも荷擔せざるを得ない心境に彷徨する。しかし、もし彼がこのいづれにも勢力を附加することを拒むなら、彼は虚無を指差すのだ。だが、虚無とは？ 虚無とは一切の運動を否定する幻想である。勿論、人口に膾炙する性欲さへも。

## 虚無主義者

虚無主義者とは、嘘つきの別名に他ならぬ。もし彼に存在の理由がありとすれば、人は自殺の可能性を有つと云ふことを證明するにあるだけだ。

## 意識の穴

芥川龍之介はわれわれの意識の上に、穴を開けた。われわれはこの穴の周囲を廻りながら、彼の穴の深さを覗き込んだ。しかし、われわれは何を見たか。私は自分の口の開いてゐたのに氣附いただけだ。穴の傍で——次に私は笑ひ出した。

## 敗北

何故にわれわれは笑はねばならなかつたか。われわれは敗けたからだ。

## 氣取り

生前、芥川龍之介を悪罵したものは、常に云つた。

「なんと云ふ氣取り屋だ。」と。

しかし、氣取らずして生き得られた者は、狂人以外に曾てあつたか。

### 見えざる敵

生活とは氣取りである。自殺は氣取りを征服した瞬間に於て始まるのだ。藝術家は何人と雖も絶えず見えざる敵と鬭争し續けてゐるにちがひない。見えざる敵とは、自殺である。氣取りとは自殺に對する反抗である。

### 埋没された主觀

いかにもし彼が自身に對して客觀的にならうとも、埋没された彼の主觀はほのかな匂ひとなつて氣取りの上に現れずにはをらぬであらう。なぜなら、氣取りとは、彼の主觀の客觀化されたものに他ならない。氣取りとは、藝術である。優れた藝術にして、氣取りのなきもの、即ち、スタイルのなき藝術はあつたであらうか。

\* 「控へ目な感想」昭和四年（全集十）

## 控へ目な感想 (三)

### 行き詰りについて

もしも賢明なれば、人間は絶えず行き詰りつつある。殊に作家に於てをや。もし自身が行き詰つてゐないと感じるものがあれば、そのものは元の古巢へ歸つてゐるにちがひない。そこで、初めて彼らは彼らの古巢へ歸り得ない道を、邪道と云ふ。

### 邪道について

道なき所に道ありや否や。この質問に對して噴飯を感じ得ないものがありとすれば、その者は池を見て本道と思ふ徒輩に相違ない。だが、偉大なものは、邪道を本道たらしめる勇氣を持つ。われわれは、枯れ果てて茫々數千里の野になつてゐる黄河の邪道が、五百年毎に本道に變

化する事實を見るではないか。自己の歩める道のみを本道と信する者は、何より先づ休息するが良し。

### 泥沼について

われわれは泥沼に落ち込んだ時、いかなる方法をもつて抜け上るかと思ふことは、われ人にも考へておかねばならぬことである。その方法は常に唯一つだ。暴れてはいけない。ちつとしてゐることだ。すると、泥もまた悪くないと思つて抜け上ることが出来るにちがひない。だが、作家たるものは一度ならず二度までも泥沼に落ちるべき必要があると云へば、笑ふ者は幾人あるであらうか。勿論、泥沼とは、退屈である。

### 退屈について

もしその者が賢明なら、人間は必ず退屈する。だが、人間は退屈してゐるときほど豪いとき、またとないのだ。彼の心は傲然としてゐる。これはスコラ哲學では決してない。行爲の哲學を尊重すること、敢てフィヒテを俟たずとも良し。だが、われわれは、退屈のなした偉大な

人類の行爲について恩惠を感じるとも、その不明を羞ぢる必要は斷じてない。

この退屈を賞讀し得る襟度きんどの所有者を、われわれは樂天家と呼ぶ。樂天家は眞に客觀的なるもの。

### 沈滞について

私は文壇がただ勃興して來たプロレタリア文學に眩惑を感じてゐるにすぎないと思ふだけだ。だが、このプロレタリア文學は、曾て文學論を決定したるためしが一度もない。もし決定したとしても、絶えず結論を變更させる習慣を養育した。然も變更する度毎に、その結論は益々狭隘あゐになりつつある。この現象はルネッサンス前期に於けるストイックの如き峻嚴さを以つて、その作家を虐待する方法のみを案出した。これで活動出來得ると確信するものは滅亡するより仕方がない。

\* 「控へ目な感想」昭和三年（全集十）



## 心の住家

涼しさといふと思ひ出すことは多い。私は海濱よりも湖の岸に涼しさを感じる。それも風のある水面よりも風のない水面に映る燈火の、ちつと動かすにゐるところ、誰の姿か殆んど影さへ見えすただ人聲だけ、「暑い。」と吐息を洩す波止場の石あたりに涼しさがある。夕餉は器物の上の濡れた葉の生き生きとしてゐるとき、浴衣の糊の堅く背中 of 皮膚に刺さるとき、塵埃を拭きとつた足の裏にまだ墨表のみしりみしりと放れがたなく鳴るときどき、世のいはゆる俗しい月見草の名も忘れてぼんやりと河原の花を眺めるとき、——夏はすべて物の名など忘れてこそ楽しいのであるが、殊に友人知人や家の者と連れ立つて歩くときにも、それらの人々の顔を見ぬやうにふらりとし、ときには解けた帯の結ぶのも忘れて思はぬときに胸を出すなど、馬鹿馬鹿しいことの涼しく思はれるのは凡そ夏の面目であらう。宵の口に空巢を狙つて忍び込む賊の姿もなんとなくとぼけて賊らしくなく、怪談のとりとめなき冷たさに團扇を使つて涼しがるなど、夏は思ひもかけぬところに情趣を求めたがるものである。

あまりに暑い日には私は少年の頃の涼しかった記憶を呼び起して慰める癖がある。總て追憶といふものは涼しげなものであるが、早や忘れかけた納涼の思ひ出といふものほど天國に近いものはない。殊に花火や釣りや山遊びの活潑な追憶に倦きて了つた後の、かの徐ろに浮んで來る靜かな情景、譬へば提燈の灯の下の蓮の葉や、泉水の石に冠さる苔のあたりに細々と蚊遣りの煙のなびくなど、また時として疎簾すだれの房にとまつた蛾がの風と一緒にゆらめくあたり、人もなぐただ桐の柱目の正しい琴の胴のぼんやりと横たはつてゐる部屋や、夏瘦せにすらりとした姿のふと門の折戸に動くときや、打水の濕つた庭で蟬の聲の遠のいてゆく夕暮れ、佛を迎へる篝火の揺らめきながら燃え上るとき、私は私達の國の古い優雅な習慣をこの上もなく喜ぶ。去年はひと夏どこへも行かずに暮してみた。暑さを避けて遠くへ逃げた友人達からの音信の数々も私にはなんの誘惑にもならなかつたのを思ひ出す。夏は暑さ故の夏である。日頃住むおのれの家の暑さも知らず秋を迎へるのは、愚な者のすることぞと思つて反そつてゐた。まことに、おのれの住家の暑さも知らずに暮すものは、おのれに心の住家もないのである。

## 勞働の記録

私は朝はぼんやりとする。何かの本に三月生れのもは、朝の數時間は孤獨でゐなければいけないと云ふことが書いてあつた。その通りである。私は朝誰かに訪問されると、その日はもう何も出来ない。朝の數時間に浸入するべき事柄の總てに私の頭は浸入を續ける。午後になると私はこの浸入から解放されてぐつたりとする。かう云ふときには私は訪問者の聞き手となるだけだ。二十五六までは私は氣候やその日の天候のために氣色の變るやうなことはなかつた。しかし、此の頃は天候が身體の細部に互つて影響する。してみると、天候は三十を過ぎた人間の運命を支配して行くと思つてもいい。私は頼まれると、一應頼まれたものは引き受ける。が、殆んどそれを實行することが出来ないで不義理をかける。こんなことはあまり前にはなかつた。が、天候が身體に影響し始めてからは、殊にそれがひどくなつた。私は頼まれたものは一應その人の親切さに對しても、引き受けるべきだと思つてゐる。が、引き受けた原稿は引き受けたが故に必ず書くべきだと思つてゐない。なぜかと云へば、書けないときに書かすと云ふこと

はその執筆者を殺すことだ。執筆者を殺してまでも原稿をとると云ふことは、最早やその人の最初の親切さを利慾に變化させて了つてゐる。引き受けて書かないでゐると、多くの場合、後で品格下劣な雑誌は匿名で悪戯いんぎずをする。しかし、さう云ふ雑誌は必ず臙腫雑誌に限つてゐる。しかし、それとは反對に、氣質の高邁な記者に逢ふと、縦へ書けなくて不義理をかけても、必ずいつか氣に入つたものの書けたときこちらから送らねばすまなくなる。かう云ふ意味でもいい原稿の集まつてゐる雑誌には、必ずどこかに清朗な人格者がひそんでゐるにちがひないのだ。人格者のゐない所に、いい雑誌の生れる筈はない。私は或る雑誌から頼まれ、然も毎月三度ほど足を運ばせ、一年ほど書けないことがあつた。その記者を見ると、どうかして無理にでも書かうとしたくなるのだが、これほどまでにされて、無理をしてまで下らない原稿を出すと云ふことは、その人に對して失禮でもあり心苦しくさへなつて來るので、ますます私は書けなくなり、たうとう一年間原稿を出さなかつた。しかし、一年の後、その年で書いたものの中、一番氣に入つたものが出來たとき、早速私から持つて行つたことがある。私はそれで長い間の負債を拂つたやうな氣になつた。或る人になると、「どんなものでもいいから。」と云ふが、どんなものでも良いなら、何もわざわざ天候まで見はからつて書かなくても良い。こちらとしては、若い癖にどんなものでもそのまま抛り出すと云ふやうな傲慢な心掛けには、なかなかなれるものではない。實際、一つのセンチンスにうつかり二つの「て」切れが続いても、誰でも作家は

後で皮を斬られたやうな痛さを感じるものである。記者の苦心も分らぬではないが、それは向うの苦心でこちらの苦心ではない。こちらの苦心が向うの苦心に引き摺られたら、金ではとり返しのつかない不快さが後に残る。私は小説を書くときは締切り一週間前に出来上つてゐないと出す氣がしない。出来上つたときは自分の作に對する客觀性が少しもないので、人の批評を聞いた時すぐぐらぐらする。が、書き上げてから一週間眼の届かぬ押入れへ入れておき一週間その作について盡く忘れ、それから取り出して読み始めると、漸く缺點が見えて来る。しかし、その時にはもう書き直しが出来ないほど締切りが迫つてゐる。結局、てにをは位を訂正して出すやうな始末になり、一週間の忍耐がなんの役にも立たなくなるが、その一週間の後押入れから出して効かに讀んでゐるとき、偶然誰か訪問者があつたりして家の者に聲をかけられる。すると、今迄讀んでゐた作に對する客觀性が中斷される。もう駄目だ。再びもとの客觀性を取り返す迄には又更に一週間かからねばならぬ。然し、かう云ふやうな事をしてゐるといつ迄もきりがない。が、そのきりのないことをきりのない迄遣りたくてならぬ。もし悠々とさう云ふことをしてゐられれば、私はさも子供のやうに幸せになるのだらうと思ふ。が、生活がある。金が必要だ。だから我々は生活の方が藝術より大切だと、自分に意見し始める癖もふと出るのだが、そんな意見がそれ程大切なものであるならば、私はこんな生活なんかはしたくない。ここに理論と感情がプロレタリア藝術のやうに滅裂を來す。もしも生活に重きを置くか、藝術に重

きを置くか、そのどちらかに定めてかかれれば運命もそれと一緒に定つて了ふ。だが、私は自分の運命を定めたくはない。このたつた一度よりない人生の上へ、そのやうに簡単に自分の運命を乗せたくはないとしてみれば、生活と藝術とを兩足に履いて、跛を引きながら歩くより仕方がない。この跛を引き摺つて歩くりズムの音階から、濁つたり澄んだりしながら作品が生れて行く。その間に天候と雑誌記者が踊つてゐる。譬へば、今迄私の坐つてゐたこの部屋の空間は汗の出るほど暑かつた。が、突然雷電が閃き、雨が沛然として降つて來た。すると、私は噓をかしてゐた間、全く暑さを忘れてゐた。が噓をして涼しさを感じると、この涼しさだけなりと感じてゐたいと思ふ。試みに見給へ。この文章は必ずここから調子が變つて行くに違ひない。調子が變ればそこから私の運命を變化して行つてゐるのに違ひない。かう云ふとき、私はいつも風の威力を感じる。風は實に意志を變化させる上にこの上もなく力を持つてゐるものだ。私はそはそはとしてゐる。風がいつの間にか雨を含んで吹き込んで來たからだ。私は風が嫌ひだ。それ故に、平和を愛する素質が十分にあるとも云へる。が、(かう云ふ平和を愛する心を確かめてゐるときに、今、雨の中を、例の雑誌記者が駈け込んで來た。) 私は應接室へ出て行つた。彼は率直で勇敢で若々しく善良だ。彼は私の詰らぬ一篇の小説をとる爲に、これで三ヶ月前から六度目の足を運んでくれた。それにまだ私は一日に一枚づつで漸く五枚より書いてない。彼

の事を思ふと私は先日から机の前へ坐り込むのだが、どうしても頭は蒸氣のために働かないのだ。六度目の彼の足數に對しても私は書きなぐりたくはない。彼は正宗白鳥氏の小説が到頭駄目になつたから參つたと云ふ。正宗氏のやうな優れた作家が私と一緒に出てゐれば、私は少少詰らぬものを書いてもあるが、さう云ふ安心の出来る作者が脱れると、又こちらには書けない時であるだけに困つて了ふのが常である。が、書けない時と來た日には、どうしても書けるものではない。私は家の中を歩き廻る。用もないのに、ふと氣が附くと便所の中へ這入つてゐる。おや、こんな所へ何をしに來たのかなと思つて又出て來る。と、今度は格子に頭を叩きつけ乍ら、「うーん、うーん。」と云ふ聲を出してゐる。然しかう云ふことを書いてな  
んになるのか。これは只勞働の記録に過ぎない。

\* 「書けない原稿」昭和二年（全集十）

## 野原

私の家の近くに一萬三千坪のスロープがある。そこは一年中雑草が繁つてゐて中にまだらな松や杉や椎の木がほとんど同じ高さに生えてゐる。私は仕事や來客の疲れから逃げてくるのはここに限つてゐるといつても良いほど、一日に二度は眞似なりともその草の中へ這入らなければ氣が落ちつかぬほどになつてしまつてゐるところであるが、それほど親しい所であるに拘らず、さてそこを思ひ浮べて書かうとするともう私には書くことが何もない。奇怪なことにその野原に關する私の記憶がないといつてもよいほどなのだ。これも理由をいろいろ分析すれば出來ないこともないと思ふのだが、いまはもうその氣力はない。ただあんまり親しい場所や人物といふものについては容易に書き得ないといふ作者の頭腦がなんとなく面白く、深く考へさせる機構を幾段となく持ち含んで靜まり返つてゐるといふことを、ここから看取して貰ひさへすれば願ひは足りる。とにかく、常日頃にゐる場所やともゐる人物といふものは、どういふ平凡なものでも無氣味なものだ。もつとも平凡ほど無氣味なものはないと私はいつも思ひ、度



度書いても來てゐるが、ことに人物よりも場所の平凡さほどこちらを樂々と落し入れるものはない。靜物の祕密といふものは畫家にとつては實に恐るべきものでその作者を狂人にさへ導いて行くにちがひないと思はせる神祕な濕氣を持つてゐる。神祕といふ言葉はメカニズムの機略以外のものをいふけれども、つまりは靜物そのものの別名である。靜物は動ではなくて靜なのだから、こちらが眼前のものは動いてゐないと思ふことで、一番そのときが人をして考へてゐるといふ状態にあらしめてゐるにちがひない。としてみれば、靜物こそ人を不斷に殺しつつあるものといつてもよく、しかも、人はこのものに何人といへども恐れを感じないのだからひとたまりもないのである。

實は私は私の家の傍の野原を描寫しようと思つて筆をとつたのであるが、考へてみるとその野原を書き出しては、そこを中心にした數年間の記憶が一時に溢れ出して來さうで、うつかり緒をひつぱり出してはたいへんだと思ふ用心が、知らず識らずに記憶を皆無と同様なやうにしておいてくれてゐるのに氣がついた。いつでも身を滅ぼすやうな大それた企てを頭の一部分が計畫してゐるのを知ると、他の一部はちやんと安全に守護してゐてくれるのだからブルーストのやうになつては生命の緒をひつぱり出したのと同様で、もうああなれば人間もおしまひなの

であらう。たとへば火を消してしまつた闇の中でも思ひにふけつてみると良い。闇といふものはもつとも明瞭な静物であるといふことを感じるであらう。闇につかれたら最後、早く人間は眠らなければ生命が危いのである。しかし、晝日中に太陽の方を向いて眠れるものもときどき見受けることがあるが、ことに私の家の横のその野原の雑草の中では必ず浮浪人が三四人眠つてゐるけれども、あれなどは身體の内部の頭腦の中でわれわれが眼で闇を見るやうに暗澹として何事も考へてゐないのちがひない。考へないといふことも畢竟は闇と同じく、眠りにつかなければならぬ何か自然の企てがあるのであらう。あれにも静物を見るときと同じ神祕なものがひそんでゐるのであらう。

しかし、かういふ風に考へて來ると、ふと私は考へといふものに出鱈目といふものはないやうに思へて來る。間違つてゐるとか間違つてゐないとか、そんなことは考へるものにとつては、その考へてゐる時間の間はさして重大なことではない。考へたといふこと、そのことの眞實だといふことの方がたしかに今の私の場合には大切なことである。字の間違ひなどいふことも讀者が勝手に直す方が正しいのである。誤字などといふものは絶対にありはしない。しかし、かうなり始めると私はまた何を書いてもかまはなくなるのであるが、ここに整理を與へなければならぬと思ふ。けれども、私が野原を書くためにはその整理について書く方が大切だと思ひ始めた結果がこのやうになつたのだから、一日に二度づつ四年の間ぶらつきつづけたこの野原に

ついでのリアリズムとは、私にとつてこれ以外に仕方がない。これは心のすさんだときの隨筆である。

\* 「野原」昭和八年（全集十）

## ジイドの轉向

私はジイドが轉向して以來、彼の作物を讀む楽しみが薄れて來たことを告白する。私は彼の轉向の理由を尤もと思ふ。彼の誠實を疑はぬ。しかし、それはあまりに、明白なことばかりだ。しかも、まだ私は彼が自身の富を投げ出した通信には接しない。それにも拘らず、彼は文化の擁護の議長になつてゐるのである。これで文化の擁護が勤まるものなら、轉向するなど云ふことに、どんな困難が要ると云ふのか。しかし、ここにジイドの苦しみがあるのであらう。私はまたも彼のその苦しみを信用しなければならなくなつたのだ。フランス文化といふものは、今は、實はこんなところに價値があるのだ。

\* 「覺書」昭和十一年

## 眞理の短縮

私はヴァレリーの作物に接すると、自身の言葉の的確さになんの恐怖も感じてゐない、彼自身の平凡さを感じる。この不世出の天才のこの平凡さは、恰も肉體の平凡さの如きものだ。人間生れて死ぬ、と云つてゐるにすぎぬ面白くもない哲理が、どんなに巧妙に云はれようとも、眞理を短縮することほど人間にとつてあぢきないものはない。私は彼のものを讀む度に、まあ、今度はどんなに上手いことを云つてゐるか一つ讀んで見ませう、と思ふだけになつて來た。私は驚きさへも感じるのをやめてしまつた。曾ては前に、私は彼に仰天し、歎息し、文筆を擲たうとさへ覺悟し、彼のもののみ讀みたいだけ、せつせとフランス語を勉強しつづけたのであつたが、今は私の狂熱は醒めてしまつた。彼には、さう云ふものが確かにあるのだ。私がヴァレリーの作物を讀む度に、私の感官と理智とを信用する習慣さへあつたのである。

\* 「覺書」昭和十一年（全集十）

渡歐直前に『文學界』に發表したもの。

## 灘にゐたころ

大正九年十年のころ私は西灘<sup>（西灘）</sup>で暮したことがある。姉がそこにゐたので、夏になるとそこへ歸る癖があつた。歸るといつもその邊りを散歩するのが私の楽しみの一つであつた。どこともあてどもなく歩いてゐると、ふと關西學院の前へ出たりした事があつたが、その頃は家が殆んど灘にはなく、大きな酒倉ばかりが目についた。倉と倉との間から、外國船の巨大な腹がよく見えた。荷馬車が絶えず埃をあげた街道に通つてゐて、馬糞<sup>（馬糞）</sup>の實に多い町だつたと憶えてゐる。その癖ふと迷ひ込んだその邊りの路地には、思ひがけない花園があつたり、そこで西洋人の少女達の群れ遊んでゐるのを、日光に照らされた花壇の隙間から覗いて見てゐた事などもある。學院の中へはまだ一度も入つた事はないが、外から見て美しい學校だといつも思つた。今でも私達の友人は關西へ行くと、どこに憧れるかと云へば神戸に憧れるのが常であるが、文化的な市街の消え入らうとする灘の邊りの風情は餘り誰も知つてゐない。その頃私は半生の中で一番絶望期にゐた頃の事として、常にうつらうつらと惱み通した。埃を立てた馬糞の街の邊りを物憂

げに歩いてゐても、山から海へかけて段丘へさしかかると、時として私の希望は燃え立ち始めたものであつた。私は人中へ入つて行くのはその頃心苦しくなるのが常であつたが、灘から外れて東へ東へと人家のない路を歩いて行くと、思ひがけなく大きな川があつたり、大木に名の知れない白い花が眞盛りに咲き盛つてゐたり、季節外れの椿の花の咲いてゐるのに出遇ふと、思ひもかけず憂鬱さを取り拂はれて立ち停つたものである。私はまた學院の前後で、いつも路を迷ふに定つてゐたが、今もあるであらうがガードの下の路などは、路を正すその時の唯一のポイントでもあつた。その頃その邊りで學院の生徒によく出遇ふ事があつた。そのときいつも一體この生徒はどのやうな事で悩んでゐるのであらうと思つたりしたものである。まだ文學に目鼻もつかぬ青年期のある時期には、誰も一度は通らねばならぬあの憂鬱さはなんとも手のつけやうのないものであるが、この學院の生徒の顔色をその頃見てゐると、やはり悩みは自分と同じやうなものであらうかとひそかに顔を覗いたものである。私は時には上筒井の阪急電車から降りて来る客達の顔を眺めつくして立つてゐたり、元町へ不意に出て、新しく入つて来た輸入品の裝飾物を眺め廻つて楽しんだり、その街にある大きな本屋の棚の前をぐるぐると廻つて見たり、名の分らぬ坂路を夏の強い日光に照らされながらせつせと上つて行つたりしたが、その坂の向うは何の町かも分らないので、坂の途中でひき返して來たり、これは自分も身體が餘程弱つてゐるなと思つたり、今もさうであるやうに坂を上る時に起る心理がその時も同じや

うに起つて來た。しかし、それでも聚落館じゅうらくくわんの前の賑やかな俗悪な通りの中へまぎれ込むと心はのんびりとなり、心が怪しく臆れ出したのを憶えてゐる。かういふ時は思ひ起せば一番楽しいものであるけれども、なんのたよりもなく生きてゐるそのころにあつては、都會の賑やかな通りや坂路といふものは、一層その夜になつて寢床に這入つた青年の心を引きかきむしつてやまないものである。とにかく私の西灘時代は一般の文學の抒情時代が早や終りを告げかけてゐたころとて、私に限らず惱みは暗澹として日没に向つたものの心の状態がつづいてゐた。

\* 「灘にゐたころ」昭和十年（？）（全集十）

## 琵琶湖

思ひ出といふものは、誰しも一番夏の思ひ出が多いであらうと思ふ。私は二十歳前後には夏になると、近江おんみかの天津に歸つた。殊に小學校時代には家が天津の湖の岸邊にあつたので、琵琶湖の夏の景色は腦中から去り難い。今も東海道を汽車で通る度に、天津の街へさしかかると、

ひとりでも胸がわくわくとして、窓からのぞく顔に微笑が自然と浮かんで来る。こんなひそかな喜びといふものは、誰にもあると見えて、ある夏のこと、私の二十一二のころ大津から東京へ行くときに、二十二三の美しい婦人が私の前の席に乗つたことがあつた。私は東京近く来るまで、その婦人と一言も言葉<sup>まことば</sup>を交へなければ、顔も見合はしたこともなく坐つて一夜を明したが、大森まで汽車が來かかつたとき、突然その婦人は私に、「あそこに見えるあの家にあたしをりますの。」と言いつて笑つた。私は返事も出來ずに窓から指差された家を見たきりで、黙つてそのまま別れてしまつたが、それとは違つてまたもう一度、それに似寄つた目にあつた。これも私の二十三の夏のことで、九州へ行つたときであるが、汽車が熊本へ這入り、球磨川<sup>くまがは</sup>の急流に沿つて澤山のトンネルを抜けては出、抜けては出てゐる最中である。私の前に老人の男が一人高い身をかいて横になつてゐた。そのときには、私たちの車内に私と老人とただ二人きりで、他には誰もゐなかつたが、汽車が斷崖にさしかかつてしばらくたつてから、河をへだてた對岸の絶壁の中腹に、一軒ぼつりと家が見えた。すると、その老人は急にむくりと起き上ると私の顔を見ず、につこり笑ひながらその家を指差して、「あれはわしの女房の里や。」と言いつて、またころりと寢てしまつた。

これらの話は些細なことながら、いつまでも忘れずに、生涯微笑ましい記憶となつて、何か書かうとするときや、世間話をするときなどに、第一番に浮き上つて來るものであるが、この



老人の心理や前の婦人の氣持に似た喜ばしさは、東海道では大津へ來かかると、私も傍にゐる見知らぬ人にでも、ここは私の小さいときにゐたところだと、思はずいひたくて堪らぬ氣持ちに誘惑される。大津の美しさは、たまに大津へ行つたものでも感じるものであらうか。去年初めて關西へ連れて來た私の家内は、京都大阪奈良と諸所を歩いてから大津へ來ると、一番關西で好きな所は大津だと私に洩した。家内と大津へ行つたときには早春であつたが、夏の大津の美しさは、またはるかに早春とは違つてゐる。「唐崎の松は花より臘にて」といふ芭蕉ばせきの句は、非常な駄作だといふ俳人達の意見が多いが、膳所ぜんじょや石場あたりから、始終對岸の唐崎の松を見つけてゐる者でなければ、この句の美しさは分り難いと思ふ。

夏前になると今年はどこへ行くかといふ質問を毎年受ける。しかし、私は田舎の夏よりも都會の夏の方が好きである。一夏を都會で過すと、その一年を物足らなく誰も思ふらしいが、私はさうではない。夏の美しさや楽しさは、晝よりも夜であるから、田舎にゐては、夜が來ると早くから寝なければならぬので、夏の過ぎることばかりが待ち遠しい。しかし、都會にゐるともう秋が來るのかと、過ぎ行く夏が惜しまれる。殊に私は夏が一番に仕事が出来るので、旅をしては一年の働く時機を見失ふ。人は一年の終りになると、それぞれ自分の好きな來年の季節を待つものだが、私はなんとなく夏を待つ。夏は過ぎ去つた楽しい過去に火が點いたやうで、去年の夏も今年の夏も區別がなくなり、少年の日が幻のやうに浮き上つて來るのである。舟に

燈籠をかがけ、湖の上を對岸の唐崎まで渡つて行く夜の景色は、私の生活を築いてゐる記憶の中では、非常に重要な記憶である。ひどく苦痛なことに惱まされてゐるときに、何か楽しいこととはなにかと、いろいろ思ひ浮べる想像の中で、何が中心をなして展開していくかと考へると、私にとつては不思議に夜の湖の上を渡つて行つた少年の日の單純な記憶である。これはどういふ理由かよくは分らないが、油のやうにゆるやかに揺れる暗い波の上に、黙々と映じてゐる街の灯の遠ざかる美しさや、冷えた湖を渡る涼風に、瓜や茄子を流しながら、遠く比叡の山腹に光つてゐる燈火をめぐけて、幾艘もの燈籠舟のさざめき渡る夜の祭の樂しさは、暗夜行路ともいふべき人の世の運命を、漠然と感じる象徴の樂しさなのであらう。象徴といふものは、過去の記憶の中で一番に強い整理力を持つてゐる場面から感じるものだが、してみると、私には琵琶湖を渡る祭がそれなのである。このときには、小さな汽船の欄干の上に、鈴のやうに下つた色とりどりの提燈の影から、汗ばんでならぶ顔の群が、いつばいの笑顔の群となり、幾艘ものそれらの汽船の、追ひつ追はれつするたびに、近づく欄干はどよめき立つて、舟ばた目がけて茄子や瓜を投げつけ合ふ。船が唐崎まで着くと、人々はそこで降りて、今はなくなつた老松の枝の下を繞り歩いてから、また汽船に乗つて歸つて来る。日は忘れたが、なんでもそれは盆の日ではなからうか。大津の北端に尾花川といふ所がある。ここは野菜の産地で、畑から這ひ下りた大きな南瓜が、蔓をつけたまま湖の波の上に浮いてゐた。この馴れた南瓜は、どういふも

のか夏になると、必ず私の頭に浮んで来る。尾花川の街へ入る所に疎水の河口がある。ここから運河が山に入るまでの兩側は、積殻かたがらが連なつてゐるので、秋になると、黄色な質みが匂ひを強く放はなつて私たちを喜ばせた。運河の山に入る上は三井寺であるが、ここの境内一帯は、また椎の實で溢れたものだ。去年私は久しぶりに行つてみたが、このあたりだけは、むかしも今も變つてゐない。明治初年の空氣のまだそのままに残つてゐる市街は、恐らく關西では大津であり、大津のうちでは疎水そすいの附近だけであらう。

私の友人の永井龍男君は江戸つ子で三十近くまで東京から外へ出たこととてない人であるが、この人が初めて關西へ來て、奈良京都大阪と廻つたことがあつた。常人以上に勘のよく利く永井君のことなので、私は彼が歸つてから、關西の印象を話すのを楽しみにして待つてゐると、歸つて來て云ふには、自分は關西を諸々方々廻つてみたけれども、人の云ふほどにはどこにも感心出來なかつたが、ただ一ヶ所近江の坂本といふ所が好きであつたといふ。坂本のどこが好きかと訊きねると、日枝神社の境内けいだいにかかつてゐる石の橋だ。あれにはまことに感心したといふので、それでは大津へ行つたかと訊くと、そこへは行かなかつたといふ。坂本で感心をするなら大津の疎水から三井寺みいじへ行くべきであると思ふ。私は云つたのだが、奥の院の夏の土の色の美しさと静けさは、あまり人々の知らないことだと思ふ。あそこの土の色の美しさには、むかしの都の色が残つてゐる。すべて一度前に、極度に繁榮した土地には、どことなく人の足で踏み馴ら

された脂肪のやうな、なごやかな色が漂つてゐるものだが、私の見た土地では、神奈川の金澤とか鎌倉とかには、衰へ切つてしまつてゐるとはいへ、幕府のあつた殷盛な表情が、石垣や樹の切株や、道路の平坦な自然さに今も明瞭に現れてゐる。東北では松島瑞巖寺、それから岩手の平泉。これらはみな大津の奥の院の土の色と似たところがある。この奥の院をなほ奥深くどこまでも行くと、京都へ脱ける間道のあるのは、ほとんど土地の人さへ知らないことだが、ことをほじくれば、一層珍しいさまざまところがあるに相違ないと私は思つてゐる。私はその道を通つたことがあるが、道の兩側は、ほとんど貝塚ばかりと思へる山々の重複であつた。

青年時代に讀んだ田山花袋の紀行文の中に、琵琶湖の色は年々歳々死んで行くやうに見えるが、あれはたしかに死につつあるのに相違ない、といふやうなことが書いてあつたのを覚えてゐる。私はそれを讀んで、さすが文人の眼は光つてゐると、その當時感服したことがあつた。

今も琵琶湖の傍を汽車で通る度毎に、花袋の言葉を思ひ出して、一層その感を深くするのだが、私にもこの湖は見る度に、沼のやうにだんだん生色をなくしていくのを感じる。大津の街は湖に遠ざかるに従つて賑やかになつてゐるが、あれを見ると湖の空氣といふものは、そこに住む人々の心から活氣を奪ふのであらう。近江商人といふものは、自國では繁榮せず、他國へ出て成功するのが特長であるのもいろいろな原因もあるであらうが、一つは濕氣を帶んだ湖の空氣に、身も心も膽汁質に仕上げられ、怒りを感じせず、隱忍自重の風が自然と積み上つて來てゐる。

るためかもしれぬ。この觀察は勿論滑稽なところがあるが、絶えず飽和してゐる氣壓の中に住つてゐる住民の心理は、乾燥した空氣の中にある住民よりも、忍耐心の強くなることは事實である。

いつたい膽汁質といふものは、膽汁質それ自身では成功はし難く、他人の禪まがで相撲をとつて初めて役に立ち易いもので、腹黒とか陰險とかいはれるのも、自然と他を利用するやうに出来上つてゐるからである。私は去年大津の街を歩いてゐて、ぶくぶく膨れてゐる人の多いのに、今さら驚いたのであるが、大津地方の人は、物事にあまり感動を現さない。むしろ他人には冷淡なところがあるやうに思ふのは、私だけではないだらう。

\* 「琵琶湖」昭和十年（全集十）

## ハンガリア行

パリの大罷業は、パリ始まつて以來の、最初の出来事である。この罷業は、マロニエの花が

散り、アカシヤの花が雨に浮き流れて、街路の敷石にたまるころから、急激に進行した。朝眼を醒まし、何が最初に聞えて来るかと、枕に頭をつけたまま、うとうととしてゐると、フロン・ポビュール（人民戦線）と叫ぶ聲が、いつの朝でも、先づ聞えた。

大通りを歩いてゐても、各國の外人たちは買ひ物をすることも出来ず、鐵の網目の降りた飾窓を覗き歩いてゐるだけだ。罷業をしないものは、お寺と警官だけになつてしまつた。

罷業が一段落をつけ、店の戸の開き始めた六月半ばになつて、私はパリを一人發つた。アルザスからドイツのミュンヘンへ入り、チロルからウイン、ブダペストと延びて、ダニユーブ河の河岸のホテルへ着いたときには、ハンガリアの曠野は、眞紅の葵の花盛りだ。ヨーロッパの中で、一番に美しい都會は、パリとブダペストといはれてゐる。ハンガリアの都、ブダペストは、街も自然も人も美しい。しかも、市中の河岸半里の間に百二十の自然温泉が、高温の湯を噴き上げてゐる。この海のない國は、温泉の中に機械製の波を起し、磯に打ち上げる波頭を想像しつゝ抜き手を切つて喜び勇んでゐる。

官廳や役所は朝の九時に早やひける。街の人々は朝から温泉に浸り、カフェーや踊り場は満員だ。カフェーといつても、街路樹の緑の下に、數町に亙る壯大なものが、いたる所に人を湛へて群れてゐる。その中の一つに、ジャバンといふのが、市中目抜き場所にある。

日が暮れて夕月がダニユーブの上にかかると、ジプシイの一團がハンガリアの歌を弾く。筋

骨の飾りを胸につけ、袖とスカートが空色の、胴の繋つた赤い服に、赤い長靴を履いた娘たちの、ハンガリアの踊りは、月の出のころからはじまり出す。蒙古に奪はれ、トルコに負け、オーストリアに属したこの國の悲しみは、踊る足さきから蹴られていく。十九世紀のロマンチズムの地を拂つたヨーロッパに、まだ一抹の抒情を残してゐるのは、ここだけだ。

ある夜、私はダニューブ河の岸で、一人ベンチにもたれてゐた。折から月が丘の上のぼりひたひたと満ちて來た水の上に、月光のゆらめき遠くかすみ渡つてゐるときだ。どこからともなく、太い低音の連続する笛の音が聞えて來た。その切々たる哀調は、馬破れ、鎧切れた敗將の、曠野の夜營空しく月を仰ぐがごとくである。後で人に訊ねると、そのタローガッタの吹奏者は、ハンガリア第一の名手との事であつた。

去る前日、ローマ町と呼ぶ郊外へ行つてみた。ここには、地中に埋れた二千年前の大都會が發掘されつつある。二萬人ほども入れ得る圓形の大劇場や、市場や、浴場、その他の床には細いモザイクの模様が描かれてゐる。並んだ石棺には、ベルシア模様の中に、ラテン語の碑文があり、水道の設備、浴場の排水路、燧爐の大きさから察すると、この都の文化は、その昔ギリシアやローマに劣らなかつた繁榮を示したものにちがひない。しかも、この都の廣さは、どこまで續くか今なほ知れずとの事である。

\* 「歐洲の旅」昭和十一年八月（東京日日新聞）巴里からの通信。

## イタリー行

イタリーへ入つたのは、六月の下旬である。アルプスの峻峰を飛行機で飛び越えてベニスへ出る。

十七世紀のパリの都市國家の設計は、各國の都市の眞似するところとなつてから、どこ都會も同様である。ただひとりベニスだけは、ビザンチンの影響をそのまま、十二世紀の姿を残してゐる。

——かういふ歴史家の説はともかく、ベニスは一見不思議な街だ。水中に大理石の宮殿を建て、屈曲した廊下を、深い水だと思へば間違ひはない。土なく樹なく草もなく、水と石との間を、黒塗りの胴に、白銀の船首優雅なゴンドラが、今はモーターに客を奪はれ、波間に浮き流されて漂つてゐる。

百間の石の廣場を前に、サンマルコの寺院は、林立した尖塔に金色の輪を重ね、鳩を密集させてゐる。堂塔の上高く、二つの鐘が鳴り渡ると、石に木靈し、水に響き、街はさながら樂器



である。うす竹色の水と空の晴れ静まつた日、私はサンマルコの前で、鳩を集めてみた。鳩は私の頭から、肩から兩腕まで、鈴成りにとまり、ぎしぎし骨の音をさせつつ、兩手の玉蜀黍の實を食べる。街中狭く、動けば水に突き衝るこの街では、鳩と遊ぶより仕方もない。

夜の美しさを楽しみたいと、水邊をさ迷ひ歩いたが、黒いゴンドラは、灯の消えた建物の石壁の間で、ごとごと鳴つてゐるだけだ。

私はふと、石橋の階段の上に立ちつつ、この街の子供の事を考へた。この街の子供は、欄干もない底の見えぬ岸の、つるつる滑る石の上ばかりで遊んでゐる。それも漸く歩き始めた幼年だ。この危険な状態をそのまま、幾百年も續けて來たベニスは、定めし多くの犠牲を拂つて、金錢を貯へたことだらう。ベニスの商人、史上有名な貯蓄の才は、あながちシャイロックのみではあるまい。サンマルコの鐘の音の美しさも、旅情を慰める助けとはならず、私には養の河原の歌となつて悲しげに殷々と響くのである。

雨中、ベニスを發つてフロウレンスへ行く。車中で日本人が二人私のコンパートメントへ這入つて來た。この中の一人は私に、自分はフロウレンスへ行くのだがこの汽車で良いかと、ドイツ語で訊ねる。咄嗟のこととて、宜しいと、どういふものだか、私も英語で答へた。旅行中、しばらく日本語を使はないので、しきりに話したいのだが向うも話さず、こちらも話さず、汽車はポロウニヤの野を走つて行く。いつの間にか雨上り、沿線日光強く、鉛筆を造るビーノの

樹とオリーブが、丘陵いたる所に直立して、漸くイタリアー風景濃厚になつて来る。

繪畫と彫刻の街、フロウレンスは、幾度か人々の筆をつくしたところである。今また私も、この街へ這入つて来たのであらうか。

近代の世界に、幸福と不幸を與へた最初の街——ルネッサンスはここから起り、パリへ移行し、再びこの地へ這入つて来て以來、フロウレンスは一變した。

ヨーロッパのどの街も、イタリアーのルネッサンスと、パリのルネッサンスのへだたりを知らなければ、理解は出来ぬといはれるごとく、私もこのフロウレンスへ来て見て、パリの發達が初めて明瞭になるのを感じた。照明機といふものは、歩き廻つてゐるうちに、どこからか度が合はされて来るものだ。

フロウレンスの街は、丘陵に包まれた盆地である。中央を流れるアルノ河は、橋も堤もセーヌ河に似てゐる。思ふに十七世紀のパリは、今のフロウレンスそのままと見ても良いだらう。私は周圍の山々へ登つてみて、ダビンチの畫の背景となつてゐる、山野のフロウレンスの丘陵が、多く取材とされてゐるのを感じた。段階をなしてゐる丘の道路には、油を塗つたやうな、濃綠色のオリーブの葉蔭から、物珍しげに、藤花が下がつてゐる。ゆるやかな遠山の流れが、日の射してゐる溫和な野に下り、再び丘陵となる頂には、どこにも古い寺院の壁が見える。長い筆のやうに直立したピーノの樹は、丘々の皺を廻つて連なり、浮雲うきぐもの高く天空に動かぬ楯で、

終日地上の祈りをしてゐるやうだ。

私は丘を下り、赤塗りの馬車に乗つて街を廻り、アルノの河岸へ出てみた。そここの街路には目立つて美を増すフロウレンスの婦人たちが、人體に似た肌滑らかなマルモの幹の間を、通りすぎる風景を眺めつつ、私はダンテの探し求めた婦人を想像した。ピアトリイチェやモナリザは、この街にはどこにでもゐるやうだ。

通るところ、博物館と寺院が競ひ建ち、そのどれもが名畫を滿たして鎮まり返つてゐる。私は名畫に飽き飽きして、ふと覗く石庭の草の中に、人知れず咲いてゐる眞白な夾竹桃の花に、思はず旅の淋しさの慰められるのを感じた。

フロウレンスには三日滞在してミラノへ發つ。ミラノは大都會であるが、樹木少く、足をとどめさせない都會である。街の景觀にも個性が感じられず、靴の中で足の痛むのを、パリまで保つてあらうかと、足先を撫でつつ、スキスの國境の方へ近づくと、この沿線には朽ちはてた街が谷間に潛み、古城も岩間で腐りかかり、僅に二、三羽餌を拾ふ鶏のゐるのを眺めつつ、山岳の中に汽車が入る。ここまで来ると、牧水の歌が漸く口へのぼつて来る。

幾山河越え去り行かば寂しさの 果てなん國ぞ今日も旅行く

\* 「歐洲の旅」

## スキス行

山岳の美は、ドイツとオーストリアの國境、ミッテンワルドから、チロルへかけて第一と思つたが、シンブロンを越え、スキスに這入り、モントリオまで來ると、上には上があるものと、ただ茫然と山々を眺めるばかりである。日本にゐたとき眼にしたスキスの風景は、すべてモントリオの風景だ。雪を冠つたモンブランの峻嶺が、レマン湖に映り、シロンの古城を取り包んだ清澄な湖面は、幾度か寫眞で見たのを記憶する。

しかし、今、眼前にこの風景に接するとき、寫眞は、たうていその實景を映さずと思つた。夏も冷々として、一波も立てぬ水面、深い谷間の底邊となり、すつくとそこに直立した山貌の嚴しさは、拭き磨かれた、壯大な機械を見るかのやうだ。その庭で、二人の娘がテニスをしてゐる。白い球が靜かに木靈を繰り返す。見てゐて、世にこれほど贅を極めた遊びはあるまいと思ふ。傍にシロンの古城が立つてゐる。私は少年のときから、幸福といふものを夢想する度に、スキスの湖邊が頭に浮び、シロンの城の水邊が、偶像となつて現れたものである。

今私は、昔日の幸福の一端の中に浸入し得たものは、白いボールの音である。瞬間、たしかに私は幸福を見たと思つた。このかすめ去つた感覺の一片こそ、永遠に通じるただ一條の道にちがひない。地上の變化無限といへども、モントリオの風景の肅然たる靜止こそ、絶頂を極めた森々乎とした靜止である。山頂の茜ほのかに染まつた雪の高さを、眼で追ひつつ、ローザンヌに來る。ホテルの觀臺から見る湖上には月がのぼつてゐる。月といふものは、いつ見ても同じである。日本の秋草あきぐさにのぼる月の美しさが、身に沁み渡り早く日本に歸りたいと、郷愁をぞろに起つて窓を閉める。夏の終りの出羽の山々、越後の山が、稻の中から浮き上つてゐる風景が、何物にも代へ難く懐しい。

日本に歸るには、先づパリへと、翌日ジュネーヴまで戻る。ここは琵琶湖の入海の部分を、公園にしたと同じである。モントリオの風光を見た眼には、さらに何の感興も起らない。ただホテルの應接の各國に勝つたところは、さすがにスキスだと感心しただけだ。翌日雷雨の中をパリへ歸る。罷業は跡方もなく鎮まつて、街々は近づいて來た巴里祭の準備に賑やかだ。これがすめば、私はベルリンへ發ち、日本の夏の終りに間に合ひたいと、今は心急ぐばかりである。私にとつては日本ほど楽しいところはなひ。



# 八月

## 蠅

一

眞夏の宿場は空虚であつた。ただ眼の大きな一疋の蠅だけは、薄暗い厩の隅の蜘蛛の網にひつかかると、後肢あしで網を跳ねつつ暫くぶらぶらと揺れてゐた。と、豆のやうにぼたりと落ちた。さうして、馬糞の重みに斜めに突き立つてゐる藁の端から、裸體にされた馬の背中まで這ひ上つた。

二

馬は一條の枯草を奥齒にひつ掛けたまま猫背ねこせの老いた馭者の姿を搜してゐる。

馱者は宿場の横の饅頭屋の店頭で、将棋を三番さして負け通した。

「なに。文句を云ふな。もう一番ぢや。」

すると廂を脱れた日の光は、彼の腰から、圓い荷物のやうな猫背の上へ乗りかかつて来た。

### 三

宿場の空虚な場庭へ一人の農婦が駆けつけた。彼女はこの朝早く、街に務めてゐる息子から危篤の電報を受けとつた。それから露に濕つた三里の山路を駆け續けた。

「馬車はまだかのう？」

彼女は馱者部屋を覗いて呼んだが返事がない。

「馬車はまだかのう？」

歪んだ畳の下には湯呑が一つ轉がつてゐて、中から酒色の番茶がひとり靜かに流れてゐた。農婦はうろうろと場庭を廻ると、饅頭屋の横からまた呼んだ。

「馬車はまだかのう？」

「先刻出ましたぞ。」

答へたのはその家の主婦である。

「出たかのう。馬車はもう出ましたかのう。いつ出ましたな。もうちつと早く來ると良かつ



たのぢやがもう出ぬぢやるか？」

農婦は性急な泣き聲でさう云ふ中に、早や泣き出した。が、涙も拭かず、往還の中央に突き立つてゐてから、街の方へまたすたと歩き始めた。

「二番が出るぞ。」

猫背の馱者は將棋盤を見詰めたまま農婦に云つた。農婦は歩みを停めると、くるりと向き返つてその淡い眉毛を吊り上げた。

「出るのか。直ぐ出るのか。悴が死にかけてをるのぢやが、間に合はせておくれかの？」

「桂馬と來たな。」

「まあまあ嬉しや。街までどれ程かかるぢやろ。いつ出しておくれるのう。」

「二番が出るわい。」と馱者はぼんと歩を打つた。

「出ますかな。街まで三時間もかかりますかいな。三時間はたつぷりかかりますやろ。悴が死にかけてゐますのぢやが、間に合はせておくれかのう？」

#### 四

野末の陽炎の中から、種蓮華を叩く音が聞えて來る。若者と娘は宿場の方へ急いで行つた。娘は若者の肩の荷物へ手をかけた。

「持たう。」

「なアに。」

「重たからうが。」

若者は黙つていかにも軽々さうな容子を見せた。が、額から流れる汗は鹽辛しほからかつた。

「馬車はもう出たかしら。」娘は呟つぶやいた。

若者は荷物の下から、眼を細めて太陽を眺めると、

「一寸暑うなつたな、まだぢやらう。」

「誰ぞもう追ひかけて來てゐるね。」

若者は黙つてゐた。

「お母アが泣いてゐるわ。きつと。」

「馬車屋はもう直ぐそこぢや。」

二人は黙つて了つた。牛の鳴き聲がした。

「知れたらどうしよう。」と娘は云ふと一寸泣きさうな顔をした。

種蓮華を叩く音だけが、幽すずかに足音のやうに迫つて來る。

娘は後ろを向いて見て、それから若者の肩の重荷おもたにまた手をかけた。

「私が持たう。もう肩が癒つたえ。」

若者は矢張り黙つてどしどし歩き續けた。が、突然  
「知れたら又逃げるだけぢや。」と呟いた。

## 五

宿場の場庭へ、母親に手を曳かれた男の子が指を銜へて這入つて來た。

「お母ア、馬鹿。」

「ああ、馬鹿。」男の子は母親から手を振り切ると、厩の方へ駈けて來た。さうして二間程離れた場庭の中から馬を見ながら、「こりヤツ、こりヤツ。」と叫んで片足で地を打つた。

馬は首を擡げて耳を立てた。男の子は馬の眞似をして首を上げたが、耳が動かかなかつた。で、ただ矢鱈に馬の前で顔を擧めると、再び「こりヤツ、こりヤツ。」と叫んで地を打つた。

馬は槽の手蔓に口をひつ掛けながら、又その中へ顔を隠して馬草を食つた。

「お母ア、馬鹿。」

「ああ、馬鹿。」

## 六

「あつと、待てよ。これは悴の下駄を買ふのを忘れたぞ。あ奴は西瓜が好きぢや。西瓜を買

ふと、俺もあ奴も好きぢやで兩得ぢや。」

田舎紳士は宿場へ着いた。彼は四十三になる。三十三年貧困と戦ひ續けた効あつて、昨夜漸く春蠶の仲買ひで八百圓を手に入れた。今彼の胸は未來の畫策のために詰つてゐる。けれども、昨夜錢湯へ行つたとき、八百圓の札束を鞆に入れて洗ひ場まで持つて這入つて、笑はれた記憶については忘れてゐた。

農婦は場末の床几から立ち上ると、彼の傍へよつて來た。

「馬車はいつ出るのでござんせうな。悴が死にかかつてゐますので、早く行かんと死に目に逢へまいと思ひましてな。」

「そりやいかん。」

「もう出るのでござんしよな。もう出るつて、さつき云はしやつたがの。」

「さアて、何してをるやろな。」

若者と娘は場庭の中へ入つて來た。農婦はまた二人の傍へ近寄つた。

「馬車に乗りなさるのかな。馬車は出ませんぞな。」

「出ませんか？」と若者は訊き返した。

「出ませんの？」と娘は云つた。

「もう二時間も待つてますのやが、出ませんぞな。街まで三時間かかりますやろ。もう何時

になつてゐますかな。九時になつてゐますかな、街へ着くと正午になりますやろか。」

「そりや正午や。」と田舎紳士は横から云つた。農婦はくりりと彼の方をまた向いて、

「正午になりますかいな。それまでにや死にますやろな。正午になりますかいな。」

と云ふ中にまた泣き出した。が、直ぐ饅頭屋の店頭へ駈けて行つた。

「まだかのう。馬車はまだなかなか出ぬぢやろか？」

猫背の馱者は將棋盤を枕にして仰向きになつたまま、糞の子を洗つてゐる饅頭屋の主婦の方へ頭を向けた。

「饅頭はまだ蒸さらんかいの？」

## 七

馬車は何時になつたら出るのであらう。宿場に集まつた人々の汗は乾いた。併し、馬車は何時になつたら出るのであらう。これは誰も知らない。だが、もし知り得ることの出来るものがあつたとすれば、それは饅頭屋の竈かまどの中で、漸く脹れ始めた饅頭であつた。なぜかと云へば、この宿場の猫背の馱者は、まだその日、誰も手をつけない蒸し立ての饅頭に初手をつけること云ふことが、それほど潔癖から長い月日の間獨身で暮さねばならなかつたと云ふ、その日その日の、最高の慰めとなつてゐたのであつたから。

## 八

宿場の時計が十時を打つた。饅頭屋の籠は湯氣を立てて鳴り出した。

ザク、ザク、ザク。猫背の馭者は馬草を切つた。馬は猫背の横で、水を十分飲み溜めた。

## 九

馬は馬車の車體に結ばれた。農婦は眞先に車體の中へ乗り込むと、街の方を見續けた。

「乗つとくれやア。」と猫背は云つた。

五人の乗客は、傾く踏み段だに氣をつけて農婦の傍へ乗り始めた。

猫背の馭者は、饅頭屋の簀の子の上で、綿わたのやうに脹らんでゐる饅頭を腹掛けの中へ押し込むと、馭者臺の上にその背を曲げた。喇叭らふが鳴つた。鞭が鳴つた。

眼の大きなかの一匹の蠅は馬の腰の餘肉あまじしの匂ひの中から飛び立つた。さうして車體の屋根の上にとまり直ると、今さきに、漸く蜘蛛の網からその生命をとり戻した身體を休めて馬車と一緒に揺れて行つた。

馬車は炎天の下を走り通した。さうして並木をぬけ、長く續いた小豆畑あづきの横を通り、亞麻畑あまと桑の間を揺れつつ森の中へ割り込むと、緑色の森は、漸く溜つた馬の額ひたいの汗に映つて逆さま

に揺らめいた。

十

馬車の中では、田舎紳士の饒舌が、早くも人々を五年以来の知己にした。しかし、男の子はひとり車體の柱を握つて、その生々とした眼で野の中を見続けた。

「お母ア、梨梨。」

「ああ、梨梨。」

馭者臺では鞭が動き停つた。農婦は田舎紳士の帯の鎖に眼をつけた。

「もう幾時ですかいな。十二時は過ぎましたかいな。街へ着くと正午過ぎになりますやろな。」  
馭者臺では喇叭が鳴らなくなつた。さうして、腹掛けの饒頭を、今や盡く胃の腑の中へ落し込んで了つた馭者は、一層猫背を張らせて居眠り出した。その居眠りは、馬車の上から、かの眼の大きい蠅が押し黙つた數段の梨畑を眺め、眞夏の太陽の光を受けて眞赤に映えた赤土の斷崖を仰ぎ、突然に現はれた激流を見下ろして、さうして、馬車が高い崖路の高低でかたかたときしみ出す音を聞いてまだ續いた。併し、乗客の中で、その馭者の居眠りを知つてゐた者は、僅かにただ蠅一疋であるらしかつた。蠅は車體の屋根の上から、馭者の垂れ下つた半白の頭に飛び移り、それから、濡れた馬の背中に留つて汗を舐めた。

馬車は崖の頂上へさしかかった。馬は前方に現れた眼匿しの中の路に従つて柔順に曲り始めた。しかし、そのとき、彼は自分の胴と、車體の幅とを考へることが出来なかつた。一つの車輪が路から外れた。突然、馬は車體に引かれて突き立つた。瞬間、蠅は飛び上つた。と、車體と一緒に崖の下へ墜落して行く放埒な馬の腹が眼についた。さうして、人馬の悲鳴が高く發せられると、河原の上では、押し重なつた人と馬と板片との塊りが、沈黙したまま動かなかつた。が、眼の大きな蠅は、今や完全に休まつたその羽根に力を籠めて、ただひとり、悠々と青空の中を飛んでいつた。

\* 「蠅」大正十二年（全集六）

## 日 盛

眞夏の日中だのに襦袢を着て、その上からまだ毛糸の肩掛けを首に巻いた男がふらふら汽車の中へ這入つて來た。顔は青ざめ、ひよろけながら空席を見つけると、どつと横に倒れた。後



からついて来た妻女が氷囊を男の額にあてて、黙つて周囲の客を眺めてゐる。あれはもう助からぬと私は思った。私は良人の死に顔を見たときに泣く妻女の姿をふと頭に浮べたが、急いでもみ消すやうに横を見た。もう私は考へたくはない。私は考へることからせめて一週間遁れたいと思つて一人早く都會を逃げて来たのだが、後から遅れて子供たちが私の後を追つて來ることになつてゐる。私は九ヶ月間つづけて來た仕事を昨夜し終へたばかりなので、何か大過を犯した後のやうな、なんとも取り返しのつかぬことをした裏鉢氣味もあつたが、まだ人々に知られてゐないといふ餘裕ある現狀であつたから、なほ考へたくはないのである。それに疲勞も極限にまでいつてゐるのだ。

\* 「標名」昭和十年（全集九）

九ヶ月間續けて來た仕事といふのは長篇小説『紋章』のこと。（前出）

## 機 械

その夜私たち三人は仕事場でそのまま車座になつて十二時過ぎまで飲み續けたのだが、眼が醒めると三人の中の屋敷が重クロム酸アンモニアの残つた溶液を水と間違へて土瓶の口から飲んで死んでゐたのである。私は彼をこの家へ送つた製作所の者達が云ふやうに輕部が屋敷を殺したのだとは今でも思はない。勿論私が屋敷の飲んだ重クロム酸アンモニアを使用するべきグリニール引きの部分にその日も働いてゐたとは云へ、彼に酒を飲ましたのが私でない以上は私よりも一應輕部の方がより多く疑はれるのは當然であるが、それにしても輕部が故意に酒を飲ましてまで屋敷を殺さうなどと深い謀<sup>たく</sup>みの起らうほど前から私たちは酒を飲みたくなつてゐたのではないのである。酒を飲みたくなつたときより私が重クロム酸アンモニアを造つておいた時間の方が前なのだから疑ひ得られると私なものにも拘らず、それが輕部が疑はれたと云ふのも輕部の先づひと目で誰からも暴力を好むことを見破られる<sup>たぐ</sup>遅しい相貌から來てゐるのであらう。しかし、私とても勿論輕部が全然屋敷を殺したのではないと斷言するのではない。私の

知り得られる程度のことは彼が屋敷を殺したのではないと云ひ得られるほどのことであるより仕方がないのだ。もともと輕部は屋敷が暗室へ忍び込んだのを見てゐるからは、彼を殺害する以外に祕密を知らぬ方法はないと一度は私のやうに思つたであらうから。さうして私が屋敷を殺害するのなら酒を飲ましておいてその上重クロム酸アンモニアを飲ますより仕方がないと思つたことさへあることから考へても、彼もそのやうに一度は思つたにちがひないであらうから。だが、酒に酔つてゐたのは私と屋敷だけではなくて輕部とても同様に酔つてゐたのだから彼がその劇薬を屋敷に飲まさうなどとしたのではないであらう。よしとへ日頃考へてゐたことが無意識に酔ひの中に働いて彼が屋敷に重クロム酸アンモニアを飲ましたとするならそれなら或ひは屋敷にそれを飲ましたのは同様な理由によつて私かもしれないのだ。いや、全く私とて彼を殺さなかつたとどうして斷言することが出来るであらう。輕部より誰よりもいつも一番屋敷を恐れたものは私ではなかつたか。日夜彼のゐる限り彼の暗室へ忍び込むのを一番注意して眺めてゐたのは私ではなかつたか。いやそれより私の發見しつある蒼鉛さうだんと珪酸けいさんジルコニウムの化合物に關する方程式を盗まれたと思ひ込みいつも一番激しく屋敷を怨んでゐたのは私ではなかつたか。さうだ。もしかすると屋敷を殺害したのは私かもしれないのだ。私は重クロム酸アンモニアの置き場を一番良く心得てゐたのである。私は酔ひの廻らぬまでは屋敷が明日からどこへいつてどんなことをするのか彼の自由になつてからの行動ばかりが氣になつてならな

つたのである。しかも彼を生かしておいて損をするのは輕部よりも私ではなかつたか。いや、もう私の頭もいつの間にか主人の頭のやうに早や鹽化鐵に侵ひんされて了つてゐるのではなからうか。私はもう私が分らなくなつて來た。私はただ近づいて來る機械の鋭い先尖がじりじり私を狙つてゐるのを感じるだけだ。誰かもう私に代つて私を裁きいてくれ。私が何をして來たかそんなことを私に聞いたつて私の知つてゐよう筈がないのだから。

\* 「機械」昭和五年（全集七）

## 博士

ある夏も終りに近づいてゐる日のことであつた。私はいつものやうに附近の錢湯せんたうへいつた。浴場の中には晝間であるにかかはらず、入浴者は澤山あつた。すると、それらの人々に混つて、外科醫の田島氏とまた逢つた。私は氏を見るといつものやうに、「加羅木博士はどうしてゐられますか。お達者ですか。」と、不用意にも二つの問ひを同時に重ねて訊ねてみた。

「ええ、お達者です。お逢ひになりませんか？」

と田島氏はまた向うから直ぐ私に質問を返して來た。私は田島氏の云ふことが、「まだあなたは加羅木氏と逢つたことがないのか。」と訊かれたやうに思つたので、

「ええ、まだです。」と答へた。

田島氏は一寸、訝しげな顔をして黙つて私を眺めてから、

「ここにゐられるんですが、まだ御存知ないんですか。」

と云ひ直すと、あたりをきよるきよる見廻した。

「ここに？」

私はそんな大物がこの中にひそんでゐたのかと、今まで何も知らずに湯舟につかつてゐた自分の迂濶さに身を張つたが、ごたごたしてゐる周囲の人々を見廻して見ても、ぶつぶつした裸體ばかりでどれがどれだか分らう筈もなく、ただぼんやりしてゐると、田島氏は「あの方です。」と云つて、流し板に腰かけながら細長くかかつてゐる柱鏡に向つて、悠々と剃刀を顎にあててゐる、でつぶりと太つた薄黒い坊主頭の人を指差した。

田島氏が指差して近よらうとしたとき、坊主頭のその裸體は、もう向うを向きながらも、鏡の中から私を前から見てゐたらしく、ゆつくりと立ち上ると、紹介もまだされないのに、一寸私に會釋らしいものをしてから、

「君、僕んところへ行かう。すぐそこだから。」と云つてばかりと刺刀を折つた。

私はもう一度浴槽へ浸らうと思つてゐたのだが、すぐそのまま加羅木氏と一緒に着物を着て、田島氏も待たずに外へ出た。

「こんな所にお宅があるんですか。」

私がさう訊くのに対して、

「すぐそこだ。田島のところにゐるんだが、君、いつか田島のところへ来たさうですね。」と加羅木氏は云つて、「君、何が好きです。ああ、さうか、鰻か。」

と云ふと、そのまますぐに傍にあつた鰻屋へ顔をつき込んで二人前注文した。私が鰻が好きなことは、ときどき文學雜誌に書かれたことがあつたので、氏はそんな細かいことまでも覚えておいてくれたのかと、私は一層このとき加羅木氏に感謝せずにはをれなかつた。

「田島さんのところには、もうよほど長くゐられるんですか。」と私は訊ねた。

「さう、ずつとゐますよ。今、あそこの顧問をしてゐるのですね。あの醫者は腕は器用ですよ。僕の弟子の中では、技術はまア一番だ。」

二人が外科醫院の中へ這入つて二階へ上ると、加羅木氏は私の傍へ數冊の本をかかへ込んで来た。

「君、これは全部君の本ばかりですよ。もうこれ以外にはないですか。どうも君のものを讀

むのが楽しみでね。」

私は自分の本は手元に持つてゐないので、そんなにあるものかと今さらのやうに積まれた本の分量を計つてみた。

「それは私のものぢや全部です。」

私は前から自分の著書が一番に嫌ひで、他家で自分のものを見ると、殆んどいつの場合でもさうであるが、その場から一刻も早く逃げ出さうと心が絶えず逃げ支度をするのに定つてゐた。しかし、このときはどうしたとか、そんな氣配が少しも自分の氣持の中に起つて來ないのが不思議であつた。私はいろいろにこのときの自分を後からも考へたのであるが、これは結局、相手の博士が完全に私を馬鹿にしてゐたからではないかと思ふ。いつたいに、人は對面してゐる場合、尊敬されてゐるよりも自然な輕蔑をどこかでせられてゐる方が、なんとなく身の動きが大きくなつて、心は長閑に落ちつくものだが、私も確かにこのときは何事をされようとも、樂しくのびのびと自由になつた。これは恐らく私だけの經驗ではないであらう。

\* 「博士」昭和九年（全集九）

小説の中のモデルがこのやうにはつきりしてゐるのは珍らしい。加羅木博士といふのは後に自殺した羽太銳治博士のことである。

ステッキ

朝早く宿を出ようとするステッキが見つからない。宿の女中に尋ねると、今朝出發した客は誰もないから間もなく誰か持つて戻るであらうとの答へなので、そのまま女中に荷物を持たせてケーブルへと急ぐ。ケーブルの乗り場で、女中に話しかけた婦人がある。見るとその傍にゐた婦人の息子らしい青年が私のステッキを持つてゐた。孤獨な旅の空で、自分の愛用品を見ず知らずの他人の手の中で發見するのは、一種特別な感じである。いよいよ發車になつて車内に乗るとその青年も乗り込んで來て、運悪くまたも私の前の席に腰を降ろした。彼は私のステッキを前に突き出すやうにして兩手を支へながら、母親と幸福さうに絶えず笑つて話してゐた。今もし私がそれを私の物だと云つたなら、母親と息子との旅の幸福は臺無しだ。だが、私にとつてはそれは長年どこへ行くにも持つていつたステッキである。私は眼をだんだんその方に向けることが出来なくなつた。しかし、見る度に私の手垢で擦れ光つてゐる柄の雁首が、こちらを向いて取り戻してくれと哀願してやまない。車が上に上にと動き出しても、青年の掌の下か



ら悲鳴が聞える。「まア、辛抱して、行つてやれ。」と私は云ふ。しかし、こんなときでも涙といふものはなんとなく出かかるものだ。

\* 「榛名」(前出)

## 榛名

山頂へ着いた。自動車でまた高原の中を行く。私のステッキを持った青年とは別々の車になつた。しかし、やがて湖が鮮明な色で草の中から現れた。車から降りると私一人日歸りの皆と別れて森を通り、ただ一軒よりない宿屋へ行つた。農家とどこも變らぬ宿屋だが、湖の岸まで芝生が一町もなだらかに下つてゐる。縁側に坐つて湖を出ると、すでに山頂にゐるために榛名富士と云つても對岸の小山にすぎない。湖は人家を數軒湖岸に散在させた周圍一里の圓形である。動くものとは見ると、ただ雲の團塊だんかいが徐々に湖面の上を移行してゐるだけである。音はと耳をたてると、朝から窓にもたれて縫物をしてゐる宿の女中の、ほつとかすかに洩らした吐息とよ

だけだ。もう早や私は死に接したやうなものだ。

\* 「榛名」

## 湖畔の女（二）

若い女が茶を持つて私の傍に來た。色は白く眼は大きくて美しい。髪も豊かで襟もとに品位があり、言葉も云はず笑顔も見せない。黙つて來てまた黙つて去つていく。——森の中から乗馬の青年が靜かに湖を見降ろしながら通つていつた。木の枝をへし折る音。四肢をときどき慄はして眠つてゐる犬。腹を干した岸のボート。ぼつりと一つ芝生の上に見えるキャンブ。森の中に生えてゐる丈長い蘆。白い樹間を絡まりながら流れる煙。淡紅色に塊つた花魁草おいらんさきの花の一群。絶えず水甕へ落ちる水の音。——私は身體の中から都會の濁りが空中へ流れ出す疲れをぐつたりと感じていつた。希望はもうここでは何ももの起らない。私はただ眠るばかりだ。

## 湖畔の女 (三)

湖の向うに見える小舎は氷屋ひやでございますよ。湖の番人がゐるのです、と女は私の質問に答へて云つた。私は湖面に一つ浮んでゐる白い箱を指差してまた尋ねた。あれは燈籠流しの残り物です。もう一週間も早くいらつしやれば御覧になれましたのにと云ふ。燈籠流しの夜には湖面へ五百ばかりの燈籠を浮べる。それが風の間に間に湖いつばいに漂たなひ流れて沈んでいく。——私は女の唇から露はれる齒の美しさを眺めながら、この婦人の山上の望みは何かと尋ねたかつた。聲は細々としてゐて抑揚は何もない。——突如湖面に落ちる雨の波紋。ほの暗い森の中から一聲唸りを上げたと見る間に、眠るがやうに沈んでいくモーターの音。飛び立つ小鳥の足もとから木の葉に亡あり落ちる粗い水滴。微風に揺れる少女の髪。石の上を蹴る蟋蟀こせむし。連ねた番傘を廻しつ草の中を下る娘たち。抜き手を切つて雨中を泳ぐ一人の若者。——

## 湖畔の女 (三)

女は私の部屋へ来て故郷の話や去つて行つた客の話をするやうになつた。彼女は廿歳だがまだ東京を見たことがなかつた。彼女の兄は小學校を一番で出て飛行隊に這入つてゐるが、休みになつて妹に逢ひに来るのが何よりの楽しみであつた。兄は彼女に料理屋にはどんなことがあらうとも住み込むなと云つたのに、それに宿屋へ這入つた自分を見て、なんと云つて悲しむことかと女は云ふ。厚い鮮やかな色の耳が福々しく、下膨れの落ちついた頬に笑窪わくが洩れる。彼女は坐つた縁側の粗い木目もくもの上を飛ぶ蠅を目で追ひながら、母が繼母であるから家へは歸れないのでここにゐるものの、東京へはいつか出たいのだが出ても女の落ち行く先は定つてゐるから、出世もなかなか覺束なく思ふといふ。——湖の上からは、遠方のボートの上で歌つてゐる少女の聲が間近く聞えて来る。湖面を飛び渡る白い蝶。方向を變へて流れる煙。草の間できらめき光る鎌の刃。長く尾を曳いて鳴き交す鳥の囀り。吠えるやうに山峽を登つて来る一臺の自動車。絶えずこちらに向つて押しよせて来る波紋。かの白い一匹の蝶々は、まだいつまでも山

と云はず森と云はず雲と云はず、ひらひら不安な姿で縦横無盡に活潑に暴れつづけてゐる。ふと見ると、高い梢の白い花が日光を受けて明るく輝いたと思ふ間に、忽ち日に陰つてまたさびれる。厨くしやの方から料理する庖丁の音が水音に混つて聞えて来る。

\* 「榛名」

## 花魁草の花の中

花魁草の花の中に蹲しゃがみながら、暮れかかつていく湖を眺めてゐる私の傍に、女は廊下を降りて来て立つた。しかし、私にはもう女の姿も大きな山脈も、眼の前に垂れ下つた淡紅色の花瓣に流れた微細な水脈すゐみやくも、大山の比較がかき消えて、かすかに呼吸してゐる自分の胸もとの襟のゆるやかに動くのが眼につくだけだ。白く細つそりした雄蕊や、入り組んだ雌蕊の集合した花のその向うでは、今や日没の光線に金色に輝いた湖面が鎮まり返つて傾き始めた。キヤムプの草の上で焚火をしてゐる若者の歌ふ青春の唄が、透明な空気を揺り動かして流れて来る。花

の中に首をさし入れてゐる私の顔の周圍は、ほの明るく火を入れたやうに色めき立ち、草笛の音のやうにうす甘く眠つてゐる官能を激しく呼び醒して少年の日をめくる。折から撥ね上る水面の魚。齒をむいて駆け昇つて來る童兒。やがて、最後の光線とともに萬目すべてびたりと音を消した。動くものは何物もなく、眼界一人の人物とてゐない。ただ手折つて來た花が縁側の上に萎れて影を映してゐるばかり。

\* 「榛名」

## 死地を求めぬ心理

翌日になると、また風景は昨日とどこも變らなかつた。朝からあたりは森閑としてゐて、鴨居にぶらぶら下つてゐる簑蟲を眺めたり、少女の髪の毛の白い割れ目が草の中を登つて來るのや、木の切株のかかつてゐる桶の底が何回となく眼にいたり、いつ見ても寝をべつてゐて少しも動かないと思つてゐた犬が、見る度に方角の全く違つたところで、いつも同じ恰好で寝てゐた

りしてゐることなどに気がつくだけだ。さうして物音といつては、どこかできどき低く陰氣にほそぼそと呟く聲と、首を少し廻してみても、もう襟もとで擦れるじりじりした髪の毛の音が聞えるだけで、東屋の椅子の上で頭に手拭を戴せた老人が、起きてゐるのか寝てゐるのか分からぬくつついたやうな表情で、いつまでも動かずにちつとしてゐるのが、欠呻を大きくするたびに思はずこちらにも釣り込まれて欠呻をする。私はもう湖面を見るのは飽き飽きしてふと跨ぐ水溜りに映つてゐる雲の色に立ち停るまでになつて來た。しかし、私はなほ半日もつづけて庭の上を這ひ廻つてゐる蟻や、妙に大きく見え出した蛙を眺めたりしてゐるうちに、つひには言葉を云ふ氣がすつかりなくなつて、女に一口物を頼むに何事か一大事件を報告するやうな羞恥を感じるやうになり始めて來るのであつた。私は胸を押しつけて來る退屈な苦しさにも、もう興奮を求めて歩き廻らざるを得なかつた。私は裏へ廻ると、日のささぬ軒下のじめじめした青黴に眺め入つたり、金網から覗いてゐる淡紅色の兎の耳の中の奇妙ないぼいぼに見入つたり、空を切つて大きく張り渡つた蜘蛛の巢の巧緻な形に驚いたり、水甕の底深く沈んでゐる鯉の見事な悠々たる鱗の端正さに、我を忘れる樂しさを感じようとした。私は今にして隣室の男の女中をからかひ續けた心理や、世の終末をこの地に定めた青年たちの心理がだんだん眞近に響いて來るのを感じて來た。かういふときには、ふと山中の腰かけ小舎の中で客に茶を出す一人の女の顔に塗られた鈍重な白粉が、ひどく山野の自然に對して憤りを感じた反抗のやうに、際立つ

て愉しく尖銳に見えて来る。

\* 「標名」

## 花 花

しかし、再び私は思ひがけない興奮に接することが出来始めた。私は湖の岸を廻つてゐる道を左の方へ歩いていつた。この道は道とはいへ長らく人が通らぬ爲に、幅一間半もあるにもかかはらず、荒れはてて茫茫とした草原に見えてゐたのである。進むにしたがつて、すぐ真下に迫つてゐる湖が、身を没する覆盆子の垣や茅や葡萄の蔓の爲に全く見えない。山面を遠くから雲のやうに白く棚曳き降りて来た獨活の花の大群生が湖面にまで崩雪れ込んでゐる裾を、黄白の野菊や萩、肉色の虎杖の花、女郎花と、それに混じた淡紫の一群の花の、うるひ、菊、龍膽、とりかぶと、みやまをだまき、しきんからまつ、——道はだんだん丈なす花のトンネルに變つて来る。花の底で波がかすかにごぼりごぼりと音を立てる。覆盆子の棘に片袖が觸れる度に、



爆<sup>はじ</sup>け切つた實がぼろぼろとこぼれ落ちる。絶えず唸りながら花から花へと駆けめぐつてゐる蜂の群が、都會の中央で擦れ違ふ自動車<sup>自動車</sup>の爆音のやうに喧騒を極めて来て、むせ返つて来る花の強烈な匂ひにふらふら眩暈<sup>めまい</sup>を感じ出す。進む鼻の前で、空中に浮き上つたままびたりと停止してゐる蜻蛉。花を蹴つて足もとから飛び立つ鳥の群。びしりと脛を叩くおぼこの固い紐の花。無数の小蜂を舞ひ込めて襲ふ花の匂ひの隙間から、突如として閃<sup>ひらめ</sup>くやうに旋回して来る熊蜂の鋭い風。腐つた電柱の頂まで這ひ上つてゐる蔓草の白い花。

\* 「様名」

## 休息の静けさ

私は急いで花叢<sup>はなむら</sup>を抜けると湖の見える水小屋の傍で休息した。花叢の中のあまりな喧騒<sup>けんそう</sup>に私はもう疲労を感じた。谷底の花の中を通る旅人がガスにあてられ、一人も無事に歸つたものない今もなほある奥羽の山の話<sup>話</sup>を私は思ひ起しながら、私も早や官能に異常な鈍<sup>鈍</sup>さを感じて

首の周圍や顔の皮膚を幾回も摩擦するのであつた。私は日に日に都會に集まつてゐる敏感な人間が、肉體に備へられた自身の完全な防音器のために、却つて一層聾のやうになり始め、その逆に鈍感な肉體が不完全な防音器官の障害で一層物音に敏感になつてゐる近頃の變異な徴候を、今こそ身に滲み渡る休息の静けさの中から新鮮に感じて來た。

\* 「榛名」

## 流水の感想

その日の午後私は霧の中を山を降りて目的の温泉場へ着いた。すると、忽ちそこは、休暇を利用して都會から集まつて來た子供づれの客がどつた返してゐて、やうやく私は裏向きの日のささぬ一部屋へ押し込められた。私の部屋の隣室の主人は、もう頭の禿げ上つたどこかの役所の課長らしい年配で、同じ年恰好の子供を五六人もつれてゐたが、どの子供も父親にぶら下るやうにして、絶えず「父うちやん父うちやん。」で父を放さない。さうして、いざ寝るとなる

と、また子供らはあちらからもこちらからも、父を呼び合ひながら疲らせる。最後にたうとう父親も弱り果てたらしく、「もう一寸父うちやんを休ませてくれよ。父うちやんだつてもう疲れたよ。」と云つて降参した。ところが夜中になつて、一人の子供が息づまるやうな異様な咳の發作を起して咳き始めた。と、その部屋の子供らは、あちらからもこちらからも、同様な發作を起して咳き出した。やつと寢ついた父親は子供らの枕から枕へと渡り歩いてまた咳の鎮まるまで介抱した。さうして翌日になると、再び子供らは元氣よく父親を引つ張り廻つたが、その父親が子供たちと外から部屋へ歸つて來て、ほつと休息しながら川を眺め降りして云ふのは、「あの流れてゐる水は皆違ふんだらうが、いつ見ても同じやうに流れてゐるね。奇妙なものだな。」といふのだつた。これが疲れ果てた課長のたまの休暇の唯一の感想である。私は貴重な言葉として隣室で紙にすぐ書きつけた。もう間もなく年中風邪の傳染し合ひをして咳いてゐる私の子供も二人、私を追つかけてここへ來るのである。私の休まるのもそれまでだ。

\* 「榛名」

## 名勝

新八景の投票を見るのはこの頃朝毎の楽しみである。その土地は知らなくとも、その土地の名勝を見ると、ほぼ感じが分るものだ。土地の名勝と云ふものは、誰がつけたとも分らず、自然に生れて来たものが多いのも、また一つの興味の原因だ。土地から生れて来た名は多くの場合象徴的で、この象徴性を調べてみれば案外文學的な藝術法則を發見するかも知れない。花巻、赤目、長瀨、伊香保、華嚴それぞれその名勝から風や濕度や陰影や風貌まで感じられる。花巻と云ふ名は駘蕩としてゐて然も實に盛んで衰亡を知らずと云つた感じがする。勢力的だ。赤目と云ふ名は天才的で奇矯であり、鋭く粗骨でどことなく壓し切れぬ光がある。瀨八丁と云ふ名はローマ字で書く方が感じが出る。見事な沈澱性を示してゐてやや恐怖をさへ響かせ、秀抜な理論のやうな冷たい感觸を流し、近づき難く物凄しい。天成の美貌とも云ふべき靜々とした暗さを感じるが、長瀨となると、どうも瀨八丁より名前が幾分悠長で、リズムに制約された美しさがなく、ローマ字で書けば寧ろ野蠻な響きが勝つ。是は多分、瀨八丁と云ふ優れた名前と比較

をさせたがる性格を持つた名稱であるが故でもあらう。伊香保と云ふと、あまりに有名すぎて不快であるが、名妓のやうに涼しさうだ。華嚴と云へばこれもあまりに有名すぎて面白くもないが、しかし、この名ほど自然の壯麗さを感じさせる名前はな。室戸岬むろとすまと云へば風景よりも量を感じる。特に取り立てて優れた何ものも感じないが、しかし、それでゐてどことなく逸し去られぬ何かがある。平凡で然も古いが、神代の向うから生れて來たとも云ふべき高古な新しさが蕭々と聞えて來る。富士五湖、これは名前ではない。それ故に損をしてゐるやうで得してゐるが、名前だとするとあまりに馬鹿馬鹿しくて一流たるには羞恥を感すべき名稱だ。湖水としては、宍道湖しつじこと云ふ名前が良い。河は木曾川。平原は兎和野うわの、袋田ふくろいは瀧の名としては何の面目も感じない。山岳では御嶽みづたけ。いみじくもつけたる哉と云ひたき名。まさに華嚴と匹敵すべく壯麗で、その國土の民族から、かかる名前が生れたと思へば、われわれ民族の感覺がいかに象徴的に優れてゐたかと云ふことを證明するに足る。山そのものは知らないが、名前だけは確かに華嚴とともに國寶たるもの。賞すべし。富士と云ふ名も悪くはないが、山の感じが少しもしない。多分これは、人々は山だと思つてゐないのに違ひない。富士も不二も、雲や雪を感ずるだけで、幅もなければ高さもなく、深さもなければ古さもない。しかし、新しさと形だけは確かにある。簡素で鮮かで澄明ちやうめいで、氣品があつて善良だ。しかし、何よりも淑やかしよくさがあまりに勝つてゐる。が、雲や雪や姿のみを特に出さうとした名勝であると思へば、この名前も富士の

如く秀拔玲瓏たるものが充分である。

\* 「名稱について」昭和三年（全集十）

## 言葉

上海にゐるときもさうであつたが、言葉の互に通じない人間が一つのテーブルに向き合つてゐると視線を合せるのが不快になる。向うもこちら同様に内部の複雑な心理を廻轉させてゐるのにも拘らず、それが殆んど通じ合はないのだから、そんな不用な肉體が眼前で、こちらの視野を妨げてゐると云ふことは、腹が立つて來るのである。もしさう云ふ一人が、「君を愛する。」と云ふことを云ひ合つたなら、馬鹿を云ひなさいと思ひながらも、もうそれで自分は嫌はれてゐないことは確かだと思つて、どちらもちつとしてゐることが出来るのだから、「愛」と云ふ言葉は不思議なものだ。つまり「愛」と云ふのは身體と云ふ存在がそこにゐてもかまはないといふことを、赦したり赦されたりすることにちがひなく、「在り」も「愛」も似てゐるばかり

ではない。アイヌ語でも「あい」といふと「在り」といふ意味である。「あいぬ」といふ言葉も「人間」といふ意味である。言葉の通じ合ふ人間を見てゐて、特にこれが人間と云ふものかと、そんな考へを滅多に起して考へはしないが、言葉の通じ合はないものとちつと一時間も二時間も向ひ合つてゐると、これが同じ人間だのにと、日頃感じもしない人間といふ言葉の概念を、一層はつきり噛みしめて考へ直すやうになるものだ。われわれの祖先が、猪や鹿や鶴を捕へに山野へ出て、思はぬときに見知らぬ人が向うの限界へ現れた場合に、先づあれは鹿ではない人間だと思つたのであらう、さう云ふところから、人間と云ふ言葉も起つて來たのちがひないので、私たちも言葉の通じぬ外人とちつと向き合つてゐるときほど、われわれの祖先の感じた感覺を激しく呼び醒さますしてみてゐるときはなにかがひない。

\* 「旅」昭和六年（全集十）

## 旅

初めての土地へ旅行して楽しみなことは、自分の想像してゐたその土地の幻想と、實物のそ

の土地の風物とがどの程度にちがつてゐるかを感じることである。そのやうな感じ方は、意識的にしてゐるものではなく、勿論知らず識らずに誰でもしてゐるものであるが、しかし、氣をつけて自身の幻想と實物との相違に面白さを感じようとしなければ、あんまり激しく思惑がはづれた場合失望をするから損である。

或る知らない土地へ初めていつて、ふとまだ食べたことのない美味な食物に食べあつたりすると、これは確かに日本一だとうつかり思つて話をしてゐるうちに、そんなことを誰だかどこかで書いてゐたと云はれたりすると、さうか、それでは自分だけの出鱈目の感じ方ではなく、矢張りさう感じたものもあつたかと思つて、むしろ日本一だと云つた自分を賞讃したくなるときがある。

一 昨年の春、山形縣の鶴岡へいつて、ふと食べた鯛があまり美味だつたので、これは確かに日本一の鯛だと冗談に云ふと、田山花袋さんもそんなことを云つてゐられましたといふ。

京城へ行つたとき、朝鮮ホテルの典雅さに打たれて、これは確かに日本一だといふと、いえ、これは誰でも東洋一だと仰有いますと云ふ。しかし、建物や鯛などどこにでもあるものならともかくも、その土地で一番良いものなら、その土地以外にないものが多いのだから、日本一のものを探せば旅の行くさきさきに、いくらでもあるわけだ。

自分の想像と實地の差の激しかつたのは、矢張り内地の旅行先ではなく、上海やハルビンで



あつた。ハルビンといふ街はロシアと支那との雜居街で、裏を返せばどこまでも面白からうとわれわれに思はせる魅力を持つてゐる。自殺者の多いのを見ると、生活してゐれば興味のなくなるどころであらうが、しかし、街としての状態そのものにはなかなか想像を許さぬ面白さがある。大連から長春までの日本人に、君は内地へ歸りたいかと尋ねると、歸りたくないと言ふものの方が多かつたが、ハルビンまで来ると、皆早く歸りたいと云つてゐた。多分、日本の言葉の波は北は長春あたりでその力を弱めてゐるのであらう。

\* 「旅」

## 戦争と平和

上海にゐたときのこと。私はその時まだ時間の來ない映畫會館のホールの階段に立つてゐた。私を包んで各國人の言語の渦が私を中心に巻き上つては笑聲の中へ吸ひ込まれる。それらの言

葉は前後左右のそれぞれのグループから煙のやうに立ち昇つては最早や再びとは歸つて來ないのだが、その殆んど言葉の意味の通じ合はぬ一團の密集した肉體の發する音を、私はその時手帳へ書き連ねておいた。それは勿論同時に起つた言葉ではなく、私の動く鉛筆の尖端へまくれ込んで來たものに過ぎないが、その奇怪な無機物の群生とも言ふ可き音響の高低と強弱は恐らく相場市場に於ける物價の高低とも等しい確實な聯立をもつて絶えず人々の運命を決定しつつあつたにちがひなく、然もそれぞれのグループはそれぞれの言葉のために縛られながら親しみ合ひ苦しめ合ふ。さうして彼らを縛る言葉の輪は漸次に他の異つた言葉の輪を侵害し合ひつつ更に一つの大きな輪を造り、いつの時代にか共通の一つの輪となつて力を紛失するのであらう。さて映畫の時間になつて群集は暮に向ふ。彼らの共通の言葉は言葉がないと云ふことだ。そこで彼らは無言のままに共同の生活を行ひ始め、恰もそれが共通の言葉に縛られた群集そのものごとく共通の幻想のために個性を奪はれて巨大な夢を見ていくのだ。これは一種の睡眠である。さてこれが異國の聲を立てる映畫となると最早や映畫は睡眠を與へない。再びわれわれは畫面の生活と争ひながら眺めねばならない。それは陶醉ではなくて闘争である。鑑賞ではなくて勉強である。畫面の中の人物がこのやうにも自分に分らぬ言葉を用ひるのかと思ふと、われわれを同化せしめるべき筈の藝術が逆にわれわれを突き放すのだ。しかし、突き放されることによつて再びわれわれは異なる國から常にもとめようとする美しさを求め出す。即ち同化出來

得るものよりも同化出來得ざるものを慕<sup>よ</sup>ひ出す。この感情を分析すれば恐らく戦争の本質的素質にまで考察を續けるべきであらうが、それはともかく私にとつて自國の言葉と思考とについて一番興味深く記憶に残つてゐるのは、トルストイの『戦争と平和』の中の一人物についてである。その人物は夜、床の中に這入つてから、自身がロシア人であるにも拘らず、一度ロシア語でその日一日中のことを考へて後再びフランス語でそのことを考へた、と云ふ描寫のあることだ。この描寫は心理描寫の深さとしては、『戦争と平和』全篇の中もつとも深い描寫だと私は思つてゐる。一人の人間が深夜ひとり靜かに物思ひに耽るとき、彼の思考するに用ひる言葉は、その思考する前にはそれは言葉ではないに違ひないのだが、しかし、それをいよいよ考へに移すときには言葉になるのであらうかどうかと云ふことはともかくとしても、その考へを自國語ではなくフランス語で考へさしてみたと云ふトルストイの心理學者としての鋭さに感服するのである。小説家と云ふものはそこまで深く人間の無意識と意識との繋ぎ目をも常に見詰めてゐなければならぬと、私はそのとき以來思つてゐる。さうでなければ、それは作家でもなんでもない、ただそれは書いてゐると言ふにすぎないのではないか。

## 富ノ澤麟太郎

彼は私とは同じクラスであつたが初め私は少しも彼を知らなかつた。私の組には常に一室に二百人近くもゐたからだ。或る日、學年試験の休みの時間、多くの者は次の試験のノートを讀み耽つてゐた。しかし、彼だけはバツトを燦らしながら窓から外を眺めてゐた。その時私は彼の相貌をつくづくと見た。するとなんと驚くべき貌ではないか。見れば見るほど私の視線はひきつけられ、心が軽やかに踊り出し、私の眼から不可思議な涙が流れて來た。さう云ふことはあり得べきであらうか。私には分らない。しかし、なんと心の美しい顔だらう。たださう思つて驚いてゐるうちに私はささやかなある憂鬱に打たれ出した。あまりにも美しき心情を現した風貌なるが故に、どことなく清愁せいしゅうで影のやうに哀訴を保ち、遠くの晴れ渡つた空のやうに世放れのした憂鬱さが私に涙を感じさせたのにちがひない。私は彼がなんと云ふ名であるのかそれさへも知らなかつた。だが、私は彼のやうに氣高く哀れな顔を見たことがなかつただけは確かだと思つた。私は次の日彼の下宿を訪ねた。私は滅多に自分から友人や人々を訪問したことは

なかつた。その頃私は外へさへ出歩いたこととなく、學校でも人々と言葉を交へたことさへ殆んどなかつたにも拘らず、彼の場合だけは彼の下宿へ突然に訪問した。私は人々から無口だと云はれてゐた。だが、彼との場合に於ては、殊に彼を初めて尋ねたそのとき私はいきなり立て續けに私ばかりが二三時間喋舌よべり續けたのを記憶してゐる。彼はその間何一言として云はなかつた。すると突然彼は立ち上つた。すると彼は押入れを開けた。ごそごそ何かを捜たづめてゐてから私の前へ黙つて新聞の切り抜きを一枚出した。見るとそれは私が前に『時事』で短篇募集の際當選した「踊見」であつた。私は「踊見」を匿名で出したのだ。それにどうしてその作が私のであると云ふことを知つてゐたのか。何故私の作だけを切り抜いて仕舞つてあつたのか、彼は私の「踊見」がそれほど好きであつたのか。

「俺はその作が嫌ひなんだ。」と私は云つた。私は彼と初めての對談であるにも拘らずそのやうに投げやりな言葉で話してゐた。

「君は好きなんかね？」私は彼に訊ねた。

「嫌ひだ。」と彼は一言云つた。

私はますます彼が好きになつた。だが、それほど嫌ひなものをなぜ今迄仕舞つてあつたか。私は彼を好きでならなかつたごとく、彼もいかに私に好意を持つてゐてくれたかと云ふ證明に誰がならないと云ふだらう。その日、私と彼とはもう放れがたないものになつて了つた。

それから長い月日である。七八年もなるだらう。だが、私は彼とは一分間の争ひもしたことがなかつた。いかに彼の愛は深かつたか。いかに彼は私が最初に彼の風貌から感じたごとく、その彼の精神から氣高き様々なるものを感じたか。彼の作品と彼の風貌と精神と、これほど一致したものはないだらう。

今、私は彼の残していつた様々な原稿を日々読んでゐる。私の知らなかつた數多くの作品を。それらのどの一篇として彼の優れた氣高き精神と感情と爽々しき憂鬱との溢れてゐないものはない。殊に殆んど私の讀んだどれもが驚くべくも死の暗示となつてクライマックスを叩いてゐる。彼は異常な感覺を常にこれほど死に對して敏感に働かせてゐたとは私も今迄氣附かなかつた。若くして、死に對する恐るべき神祕な詮索を絶えず怠らなかつた彼はかく若くして死んで了つた。享年二十七歳。

\* 「富ノ澤麟太郎」大正十四年（全集十）

「踊見」は「父」と改題されてゐる。前出。

## 下界のこと

先日、大連まで飛行機でいつて、下界を見て来た。今度私の書きたいと思ふものは下界のことで、飛行機とは關係はないのだが、天空のことを書くよりも、下界のことを書く方が遙かに私には難しい。天空にゐると欲望が起らぬが、下界に降りるともう私は食べたくなる。それだけでも私には欲望の起る下界の方が、矢つ張り楽しいやうに思へて来た。なんといつても、地の上でなければ、とさう思つた私の心が、なんとなくその地の上の最も特徴である平凡といふことを好むやうになつて來てゐるので、自然に筆も平凡なことを選んで進んでいくのではなからうかと思つてゐる。しかし、まだなんともそのへんのことにはつきり私にも分らない。どうなることやら、先づ何より私は暫くこつこつとやつてみようと思つてゐる。

\* 「作者の言葉」昭和五年（全集十）

『東京日日』『大阪毎日』の夕刊に「寝園」を連載する際の吉例の作者の言葉である。

## 震 災

地震があると等しく、直ちにかう云ふ地震があつても良いとか悪いとか直ぐに云はれた。あつていいとは云ひたい人があつても云はぬがよい。この災厄に遭つた人々に災難だと思つてあきらめるが良いと云ふのは陳腐である。彼らは心に受けた恐怖に對して報酬を待つてゐる。生涯を通じてこれが希有な災厄であつたそれだけに、何物かに報酬を求めねばゐられないのだ。彼らは彼ら自身の恐怖を物語るとき、追想と共に生涯誇らかになるであらう。

東京附近に住んでゐたものなら、かう云ふ地震がいづれ近々來るにちがひないとは、誰しも豫想してゐたことと思はれる。しかし人々は不思議にその災厄の豫想については一様にぼんやりとしてゐた。地震に遭つて初めて、かう云ふ地震はもう必ず來るに定つてゐると思つてゐたと云ひ出した。それが皆盡く偽りならぬ心から云ひ出したそれほども、この地震の來ると云ふことが、ぼんやりとしながらも尙且つ明瞭に感じられた。それにも拘らず、なぜこの災害をこれほど大きくして了つたか。それは一口の平凡な言葉で云ひ切ることが出来る。「人間はあま



り功利的であつたが故に、人々は大聲を發して警告し合ふ暇を忘れてゐた。」と。もし人々にしてその暇を有つてゐたものがあつたとすれば、損をするのは同時にそのものであるのを忘れなかつた。その暇に、地震は地下で着々と豫感を報じながらその週期を満してゐた。一度週期が満ちると同時に、人々は、恰も次の週期に満足を與へんとするかのごとく、直ちに再びその上に來るべき災害の豫約を建設し始めた。さうして、彼らは互に次の恐怖時代を云ふとき、一様に彼らの口から流れる言葉は定つてゐた。「なに、我々は最早やそのときは死んでゐる。」と。我らの民族の永久に繰り返して行く言葉は、この恐るべき功利の言葉に相違ない。さうして、この言葉が新鮮な力をもつて繰り返されるにしたがつて、かく災害を大ならしめた科學と、自然の闘ひは益々猛烈になるであらう。吾々を負すものは地震ではない。それは功利から産れた文化である。我々の敵は國外にはない。恐るべき敵は本能寺に潛んでゐる。

\* 「地震」大正十二年（全集十）

## 捨子（二）

眞夏はいよいよ聲をひそめて漫歩するなり

緑の褥、露の影

ああ、はるかにはるかに遠く彼は産女の胸に昇り來る。

## 漫畫

八月十四、五日、この兩日はアルチユウル・ランボウといふ世にも不可思議な少年のことばかりが頭に浮んで來る。暇があると、寝ころんで彼の書いた「日曜日」といふ漫畫ばかりを眺めてゐるのである。ああ、またかと思つて投げ出すのだが、もうこれで幾回手に取り上げて見たことであらう。畫面では村の教會へ行くいろいろな人間を、パイプを銜へた人間が鼻の先で

小馬鹿にして家鴨と一緒に見てゐるところであるが、人間を描いて虚無を表現するためには、かういふ風にもつとも崇高な人間の心理を輕蔑してしまつてゐる滑稽な漫畫でなければ、恐らくは描き得る方法は他にないのであらう。漫畫といふものは、世の人事關係に於ける一番に高い行ひや、深い心理を輕蔑してしまつたときにおいて初めて最高の高さに達するものである。もつとも不真面目な筆法を用ひなければ、もつとも真面目な精神が表現出來ないといふ漫畫のこの特種な機構については、われわれの考へて興味深いことが多くあると思ふ。

「學書(二)」昭和九年(全集十)

## 批評と鑑賞

批評と鑑賞との間に横はる明瞭な限界といふものはない。人々によつて鑑賞を批評の優位に置くものと批評を鑑賞の上位に置くものとあるのは、二つの言葉のある以上仕方ないこととして、私たちの考へ得られるかぎりでは、この批評と鑑賞との限界の規定ほど困難な問題はさう澤山あるものではないと思はれる。しかし、批評といふ概念には對象についての享受をした

後における人々の言葉の行動、ひいては實踐つまり倫理を含んでゐることに何人といへども異論のあらう筈はなく、鑑賞との相違もしたがつてこの一點に先づもつとも激しい差のあるものと見なければならぬ。勿論、批評にも種々あつて充分な享受さへもせず、すぐさま言葉の實踐にとりかかる批評もあり、満ち足りた享受の後の充實した鑑賞にまで到着してからの批評もある以上、優れた批評と充實した鑑賞とはどこでどのやうな限界が生じるかはあくまでも明瞭ではないが、それにしてもやはり批評には批評するもののおのれの姿を出さなければならぬ。言葉の行動が必要である。つまり批評は行動と同時に哲學とならなければならぬ。行動を考へなくして近代の哲學は考へられないのと同じく行動を考へずして批評を考へることは先づ出來ない。しかし、鑑賞はさうではない。おのれの立場とともにおのれの姿を行動や實踐にまで持ち上げなくとも良い。哲學や倫理は鑑賞には不必要である。しかし、鑑賞には倫理や哲學は必要ではなくとも、批評に於ける場合とははるかに峻嚴に技術への享受と檢閲とを要する。この場合にはおのれを持つてはならない。そこではほとんど科學と等しい實證的な精神を持つて出來得る限りおのれを空しくしなければならぬ。これを短く幾分奇警な云ひ方をするならば、鑑賞は自然科學であり批評は哲學であるといふべきであらう。自然科學と哲學との相違は因果を考へる場合に先づ最初おのれの立場を採るか採らないかにある。これをもう一層比較を接近せしめていへば、實體哲學と自然哲學の相違ともいふべきであらうか。

しかし、批評の中に於て重大な要素となりまた鑑賞の中に於ても重要な概念となる享受といふこと、これを考へずして批評もなければ鑑賞もあるとは思へない。享受とは対象を掘り下げその中に擴まらうとする心であつて見れば、鑑賞とはどこでどのやうに違ひ、批評とはどこでどのやうに異なるかはこれまた一層困難な解釋をとらねばならぬ。これがその中の一つである批評と享受の相違にしてからが、なみ尋常の仕方では明瞭になるものとは思へないのに、かてて加へてなほ一層不分明な享受と鑑賞との相違となると、さういふ色別をし得られる言葉が果してわれわれの言葉の世界にあるかないか疑はしくなるばかりである。しかしながら、批評と享受とは違ひ、享受と鑑賞とは違ふ以上はそれらの言葉の限界もたしかにあるにちがひないのであるから、ある以上はそのままに捨てておけるわけのものでもないであらう。

享受と批評との違ひは享受が対象を掘り下げ深まらうとするのに對して、批評は深まりよりも擴がりに向つて鋭くなりそのことに意味を探さうとするところにあると云はねばならぬ。もつともここにおいても充分な限界はなく、ただ対象の深まりや擴まりの限度や度合によつて判別するより差別の方法のないことは、いままで一般に考へられたことであるけれども、享受と鑑賞とは同じくどちらも対象にたいして深まらうとするばかりで、批評のやうに対象以外にまで擴まらうとする意志はないのだから、その差は極めて僅少なものと云はねばならない。しかし、鑑賞とは享受がおのれを空しくして対象に浸透しようとするのに對して、どちらかといへ

ば浸透した享受を土臺として再びおのれに立ち返つて対象以外に擴まらうとする働きとどこも違はないとはいへ、なほそれでも鑑賞は批評の場合におけるがやうには、おのれを強く主張しようとするのではない。鑑賞はあくまでも鑑賞にすぎない。それは対象の技術を中心としてその技術者の内部にまで深まり、點檢し、その技術者のみが到達することの出來ぬ一點である客觀的な最後の効果を趣味ごみちみしなければならぬ。さうして、鑑賞がなほ充分な鑑賞の意味を持つべきためには、鑑賞者は対象となる技術の用ひつくされた時間と同じ時間を費さうと努力し、同じ苦しみと喜びさへも共感しようとならなければならぬ。つまり、鑑賞は批評のやうに知性が中心とはならず愛が中心となるのである。これを云ひかへると鑑賞と批評との限界は愛を持つたか持たぬかの相違にあると云つても過言ではないのである。

勿論、批評といへども愛を中心とした批評もあるにはあらう。けれどもそれはやはり批評といふべきものではなくしてどちらかといへば鑑賞といふべきものに屬すること、たとへば本文批評のごときものがそれである。ヴァレリーもいふごとく早い話が批評とは人々にかういふものを読むなといひ、またこれを讀めといふことにすぎないのである。そのときには技術者の技術などは第二第三であり、対象への愛情などは押し殺して發言すべき必要がある。この意味からいへばむしろ批評は愛情の代りに義務を中心としなければならぬといはるべきが正しいであらう。

したがつて鑑賞と批評の限界は愛情と義務との相違にあると見られなければならない。さうして、このときにもなほ批評は外的なものであり社會的なものであるに反して、鑑賞はあくまで内的なものであり個人的なものであり、この二つを倫理にまで照らし合せて位置づけをしようとするれば、も早やここからは社會と個人に對するその人々の解釋のいかがかはつて變化してゆかねばならぬこと云ふまでもなし。

しかしながら社會といひ個人といつても、またこの二つの概念ほど甚だしく外貌の差を持ちながらよく見ると、どちらがどうか見分けがたいものはないのである。だが、社會と個人ともつとも激しい差の生ずるときは、自己が一人その場にゐるかゐないかるときに生ずるにはちがひないごとく、批評と鑑賞との概念にもつとも激しく差の生ずるときも、自己が言葉をいふか黙つてゐるかの差に初めて生ずると斷言さへしても良いほどである。哲學と自然科學の限界もつまりはそこにあるのではないであらうか。もしかういふ云ひ方が通用しないなら、鑑賞の一番特徴をなす絶對歸入（絶対歸入）の誠實な行の哲學と、批評の行動的な實踐を主とする表象哲學とに於けるがごとき、二つの靜と動との差ともいふべきであらう。だが、これらの靜と動との限界に關する内面的な倫理關係といふものは、冒頭にのべたごとく嚴密に云へば有り得るとは私に思はれない。

\* 「覺書（五）」（活動と歸入の限界から）昭和八年（全集十）

## 嘉村磯多氏のこと

一昨年の夏、中村武羅夫といふ名刺を持つた人が私の家へ來た。徳田秋聲氏後援の色紙を受けとり來たのである。上へあがつてもらふことにしてテーブルに向ひ合ふと、まだ私の知らない人だつたが、これは寫真で見覚えのある嘉村磯多氏であるとすぐ分つた。私は向うが自分の名を用ひずに來たのであるから、こちらから訊き出すのも本人が困ることもあらうと思はれたので、私は黙つて色紙の集まりの状況などを訊いてゐた。すると、氏の話は色紙から文學のことになり、いろいろと私の方が質問を受ける立場に廻されてしまつた。そのうちに氏は、まことに申遅れてすまないが、自分は嘉村と申すものでと、私に今まで黙つてゐたことを詫びて、『機械』といふ私の本を一冊欲しいと云つた。私は自分の本を人から請はれるとき、今までに喜びを感じたことが一度もなかつたが、このときは殊に氣がすすまず、元氣なく署名した。嘉村磯多氏は私のものなど好んでゐてくれる筈がないからである。しかし、私は氏の作品の愛讀者で、氏の作や隨筆が雑誌に出るとすぐ買ひ求めて讀んでゐた。聞けば私より一つ上とのこと



である。

私は嘉村氏とあつたことは、その後もう一度あつた。それは氏の『途上』といふ限定版が出たときで、そのときは夜遅く私の家へ來られた。氏は前のときのやうに、來ると板の間へべたりと坐り、三度ほどお辭儀をつづけさまにするので、これに優る禮儀の仕方など出來得られるとも思はず、私も仕方なく却つて突き立つてゐなければならぬ羽目になつた。

\* 「嘉村礒多氏のこと」昭和九年（全集十）

『作品』一月號「嘉村礒多追悼號」に執筆したものである。

## 巴里から歸つて (一)

フランスへ出發前、中島健藏氏から同氏譯のラミエルを貰つたので、向うでゆつくりフランスと引きくらべて読んでみようと思ひ、これだけ持つていつたのに、それも讀まずに持つて歸つて來た。今になつてこれを読むと、パリからノルマンディへ行く道の書き出しなど、ルーアンへ私の行つた道と同じである。

何事も打算といふ理由なくしては、風景さへも造らないパリ人を、この本で容赦なくやつつけてあるのは、本人のスタンダールが、グルノーブル人だといふ考へがなくとも、攻撃せらるべき価値がある。

\*

しかし、この「攻撃せらるべき価値」ほど、またわれわれ外人にとつて考へさせられる問題はない。パリはすべての外人から攻撃せらるべき標的なのである。しかも、いかなる者がいかに攻撃しようとも、何者もこのやうになり、このやうになつてこそ、おのれを知るぞと、黙々と蹴返して来る。

\*

世界の才能ある人物が、一度は攻めのぼつて、故國へ落ちて来る度に、姿の全く變つてしまふところ。婦人が美貌を誇つて出て行く度に、それがなんの價值にもならぬことを悟つて歸國するところ。このやうな所では、男が完全に女を輕蔑し、女が全く男を馬鹿にし盡した結果が、戀愛になつていく。これは最も新しい近代戀愛の形相であらう。いつたい、かういふ男女の形に對して、どんな批判が役立つであらうか。芝居は人生よりも、はるかに高尚なものだといふ言葉は、眞實である。

フランス首相のレオン・ブルムは、スタンダール論を書き、小説を書いてゐた若い日の記事が、『パリ・ソワアル』に出てゐたことがあつたが、小説は馬鹿者が書くものとの日本の通念も、ここでは馬鹿者なればこそ、生活に役立つところである。私は文學がこの國ほど生活を指導し、一般がそれによつて生活を潤澤ならしめてゐる所を、まだ見たことがない。それなればこそ、俗化しない者でかつて偉大なものがあつたかといふ、ジイドの言葉も出るのである。しかし、いかなる者も、必ず行き詰まるときがある。このとき、それぞれ人は自己に返り、青年に戻る。

六十、七十から語學を始め、十六、七の少年を對等に尊敬し、獨立獨行、齡を眼中に入れざるフランス人の態度の基礎は、自身の年齢から青春を常に發見する努力にあらうと思ふ。私がパリ滞在中に、最も羨ましく感じたことは、この國の老人の美しさと豪さであつた。個人主義の徹底は、男子をこのやうにするものかと、私は常に老人の觀察に注意を向けたが、老人を老人らしくする日本人の修養は人生を幸福ならしめる修養とは、最早やならないことを知るにいたつた。私も十六の少年を念頭に描いて、再び勉強をし直さうと思ひ、若くして大人になる練習などせぬことこそ、近代的修養の第一であると氣附いたのも、フランスのお蔭であらう。青年論どころではない。何が大人か、誰も語らない。

\* 「巴里から歸つて」昭和十一年九月（東京日日新聞）

## 巴里から歸つて (二)

私は失望の巴里といふ題で、『文藝春秋』へ通信したことがある。あの通信はパリの日本人間に問題を起し、日本にゐる友人達に心配をさせたが、實はあの題は私が書いたのではない。私はパリに失望したどころか、得るところが多かつたのである。いつか前に、ベルリンにゐる日本人で、ベルリンの料理は不味くて困ると書いたところが、日本から澤山の投書が来て、お前にベルリンの料理の味が分るかと、さんさんな攻撃を受けたといふ。日本の内地にも、かつて外國に渡つた人々の間には、それぞれ聖地を守護する精神があつて、互に異國を心の故郷と思つて生活してゐる人々が、いまだに多い。

\*

パリを守る人と、ベルリンを守る人と、ロンドンを守る人との熱心な争ひは、しばしば外國

で見る光景であるが、中でも一番強烈なのはベルリン黨である。正宗白鳥氏がモスコウへ降りて、日本人に案内され、見るところを罵倒しつつ歩くので、そんなに不快なら、早くモスコウから出て行かれたら良いでせうとすすめたとき、案内した人が話したことがある。この案内の役目の人は、特にモスコウを好んでゐたのでなかつたが、長くその地にゐると、自然にその土地に愛着を感じることに、誰しも變らぬのであらう。しかし、西條八十氏や藤原義江氏などと、外國で逢つたときには、この兩氏は「なんといつても、日本が一番いいですね、早く歸りたい。」と同じことを口にされたので、長く異國を憶れてゐる人々も、われわれと同様かと思つたが、十年以上も外國で暮してゐる人々は、一度日本へ洋行して來なければ、馬鹿になつてねと、われわれ新參の者にいふ。かういふ人々の顔を見てゐると、若いのか年寄りなのか分らない。年齢といふものは、生れた國を基本として成長してゐるものだと、ふと氣附くのであるが、若年で異國へ渡つたものと、年若い海外に移つたものとは、その土地に對する成長力がひどく違ふ。つまり激しくいふなら、若人の方が老人よりもその土地に對して早く老人になるのである。私などはまだ若者といふべき方であるが、それでも異國にゐると、ひどく青年からかけ離れた自分を感じて、何事にも退屈した。

\*

なんの目的もなく海外を渡るものは、見たいものを見てしまふと、後にはやり場のない退屈

だけが残つて来る。朝眼を醒して、さて今日はどこへ行かうかなと考へるのが、主婦が晝の食事を何にしようかと迷ふ日々の苦勞のやうであつた。それに私の一番困つたことは建物が高くて空が見えず、頭から押しつけて来る石の壁が、どこへ行つても打ちつづいてゐる事である。山野の荒涼とした風景よりも、垂直になつた石壁の蕭條たる様の方が、人間に鬼畜の心を養ふものだ。物を眺めるささやかな愛情よりも、一にも二にも行動する心ばかりが先立つて来るのである。

悪にも行動、善にも行動、これが石壁の中の心理なら日本の低徊觀望は、草木風月の中の心理であらう。東洋趣味といふものは、私は東洋人から脱けることは、絶対にないと思ふ。このごろは、東洋趣味を輕蔑する風潮が、やうやく日本に旺ちやうけんになつて來たやうだが、東西兩様の一致に進む理想も、セルの着物のやうに安手な物とならねばよいと思ふ。

### 巴里から歸つて (三)

ベルリンやパリのことを悪しざまに書けば、いろいろ攻撃を受ける不便は、ロシアに入れば、一層激しいであらうと思ふ。パリの日本人で、一番パリのために盡した伴野商店の主人は、レヂオン・ドヌウルをフランス政府から貰つてゐるほどの人であるが、東京に歸つたとき、フランスの放送をして、ふと話がフランス人の悪い部分に觸れたことがある。すると、パリへ歸つたとき、早速呼び出しを受け、非常な叱責の後、フランスの勳章も取り上げられたさうだが、實感をそのまま話すにしても、自國のこのみならず、今はさまざまな苦勞がいたのである。なんとなく徳川時代の封建の氣苦勞が、夢にも思はなかつた所に擴がつてゐるのを知つて、一時は自由主義の全盛を誇つたヨーロッパも、このやうになつたのかと、感慨を深くしたことがしばしばであつた。

\*

ベルリンにゐる時、政治の話だけはしないでくれ、外人といへどもすぐ連れて行かれて殺される恐れがあるからと、人々に注意を受けたが、モスコウに入れば、寫眞も寫すことが禁ぜられ、手も足もがれたのと同様な不自由を少からず感じさせられた。人を見れば、右翼か左翼かどちらかだと判する觀念が、濃厚に全世界にはびこつてゐるのである。人間自由に物を見る觀念など、どこにもないといふ考へは、今は世の通念となつてしまつた。スペインの争亂など、その觀念の争闘であることは、今は誰でも知つてゐることだが、それにしても旅行者は、なん

らかの意味でスパイと見られ得る可能性が、新しく生じて来たのであるから、この封建思想の錯誤には、何人もまき込まれずにはをられない。かひ潜る度に、新しい繩の捕手に追ひかけられる近代人は、拱手傍觀の態度で日を送ることなど、今は夢である。

\*

そこへいくと、日本はまだ自然な、一つの態度が赦されて残つてゐる。つまり、「おけらの唄」といふ、自分を捨てて、他を刺し殺し、總てを無にする奇怪な道場が丹波の山奥の修驗場のやうに、呼吸をつづけてゐるのである。ここへ光線をあてると、野蠻人が文化人か分らぬ様な顔が、どちらを向いてゐるのでもなく、あぐらをかいて、えへらえへらと笑つてゐる。

\*

私はウラルを越えてシベリアへ入つて来たとき、幾千里となく續いた原野を見ると、過ぎて来たヨーロッパの智的文化が、ロマンチックな儂ない城に見えてならなかつたが、人間努力の結果を、無にする物の見方は、われわれからは抜けぬと見える。

\*

ヨーロッパ人の文筆の士の争ひは、敵の絶對の急所は避けて突かぬ、が日本人のは、相手のどうしやうもない急所でなければ突かぬのである。豚のやうに急所のなくなるのを本懐とする風習は常にわれわれから遠ざからうとしない。しかし、今は、急所を持たぬものなど、どこに



もゐない。「おけらの唄」の榮えるのは、福德圓滿を祈る吉相である。

\* 「おけらの唄」といふのは『東京日日新聞』が昭和十一年九月から學藝欄へ新設した匿名評論欄の  
名。



## あとがき

收載中小説で完全な一篇であるところのものは左の七つ。

父、街の底、赤い色、幸福の撒布、蠅、頭ならびに腹、草の中。

原稿用紙二十枚内外といふ條件での短篇小説は以上で著者の全部といつていくらゐるである。これらは何れも二十代に於て書かれた。

私はこの集を編むに際して、差支へのない限り短篇はなるべく一篇全體をそのまま収録したいと念じた。短篇の或る一部を切り取ることは、全體を無意味にするばかりか、時には作者の意圖に逆行するやうな形にすらなりかねないと考へたからである。しかし、實際問題として一篇丸ごと収めるといふことは、この讀本の編纂上の約束に悖る。一題五頁以上に互るものは可及的に避けられたいといふ發行所側の希望であつた。五頁以内では二十枚の小説も纏つては這入らないのである。しかし十頁程度で完全に這入るものを除けるのは惜しく、それは入れて貰つた。勿論私の無理である。前の七篇がこれに當る。その他の作品は殆ど大部分五六十枚の短篇からその一部を抜いたものである。このことと前の言葉とは矛盾があり、そ

れは私も承知してゐる。私は實は作品は長篇からつと多く抜ける心算であつた。ところが、取りかかつて見るとそれは大變な仕事であつた。「寢園」、「雅歌」、「花花」、「時計」、「紋章」、「天使」、「盛裝」、「家族會議」とこれだけのものを一應讀み返してみなければならぬ。枚數にして三千枚以上の量である。兎に角讀み返し始めた。ところが横光氏の長篇小説といふものがまた開卷忽ち心理描寫の蜘蛛の巢だ。焦りながら何處を切り取らうかと思つてゐる心がもうこの巢にひつかかつて身じろぎ出來なくなる形であつた。空しい徹夜を二三次續けた後私は遂に方針を變へざるを得なかつたのである。そして結果は、作品よりも寧ろ評論隨筆の類をより多く抽いた形になつた。この引き出し方にも整理を缺いてゐるところが恐らくあるであらう。しかし滅多矢鱈と抜いて差しこんだものでだけはない。ただ、この讀本に必ずしも採録しななくてもよかつたのが二篇這入つてゐる。「百貨店點描」と「芭蕉の生家」と題して入れたものがそれである。前者は編輯中に、全集に洩れてゐるといふ東京編輯部の西村管一氏の注意で、同氏所藏の掲載誌を借用し、後者はやはり全集にうっかり漏れてしまつてゐたことに氣がついてこの讀本に收めたのである。散佚を恐れたが故の所業である。

「渡歐日記」は雜誌に發表されたものは之を全部收載した。このために作品の頁は可成り減少するの餘儀なきに至つたが、これは信ずるところあつて敢て斯くしたものである。

一ヶ月の期間に二千頁を讀み返し、七百枚の書き抜きをやつたことは随分無暴であり、この無暴が形に

現はれずにはるまいことを考へると空恐ろしい限りであるが、この仕事は私に多くの教へを垂れてくれた  
ありがたい仕事であつた。もとよりこの編纂をするのに私が適任者であるなどとは全く思へないが、命じ  
て頂いた横光氏の深い厚意は肝に銘じて忘れられまい。この次の秋冬の巻をもし幸ひにして再び私が編纂  
するの光榮を得るならば、これをこそより完全な横光利一文學讀本たらしむべきを今は祈るのである。

一九三七年二月下旬

石 塚 友 二